

高崎城遺跡24

独立行政法人国立病院機構

高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う発掘調査

高崎陸軍病院・高崎城二ノ丸南堀・和田城・古墳時代滑石玉作工房址



2017

高崎市教育委員会

独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター

株式会社 測研（文化財研究室）

例 言

1. 本書は、群馬県高崎市高松町 36 番地に所在する『高崎城遺跡 24』発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う事前の発掘調査である。
- 発掘調査から整理作業報告書作成に至る経費は事業者である独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターに負担していただいた。
3. 発掘調査は、平成 28 年 11 月 15 日～平成 29 年 2 月 21 日、整理作業は、平成 29 年 2 月 22 日～平成 29 年 8 月 31 日まで株式会社 測研が実施した。
また、出土遺物が当初の予定された遺物量を大きく超えたため、遺物の復元をはじめ各種工程に影響を与え、報告書刊行が平成 29 年 12 月 20 日までとする期間延長を行った。
4. 発掘調査及び整理等作業は、高崎市教育委員会の指導・監理の下に、事業者と委託契約を締結した株式会社 測研が実施した。
5. 発掘調査は株式会社測研の大塚昌彦が調査員を務めた。
6. 自然科学分析・石材同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
7. 航空写真は、加藤空撮が行った。
8. 本書の作成は次のとおりである。

遺構写真は大塚が、遺物写真は石井克己が行った。

遺構測量は株式会社 測研の削田博之・小栗宗一が行った。

遺物整理作業は石井なみ枝・黒田紀子が行った。

デジタルトレースは石井なみ枝・黒田紀子・関智賀子が行った。

執筆は第 6 章滑石等玉作工房址の原稿は石井克己が、それ以外を大塚昌彦が行った。

編集は大塚昌彦が行った。

9. 出土遺物及び図面・写真はすべて高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査から報告書作成にあたり、下記の関係機関・関係各位からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。(敬称略・順不同)

高崎市教育委員会 独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター 山下工業株式会社
川端建材有限会社 加藤空撮 パリノ・サーヴェイ株式会社 関西合成樹脂工業株式会社
秋本太郎 石井克己 石守 晃 大西雅広 大塚美恵子 黒田 晃 清水 豊 高橋 敦
矢島 浩 矢島博文 田村 孝 大工原 豊 角田真也 中村 茂 中村 武 中村博樹
増田 修 新里 康 松本智成 女屋和志雄 田口一郎 三浦京子 三浦茂三郎 井上智仁
石岡智武 高林真人 恋河内昭彦 坂本和俊

凡 例

1. 本書で使用した座標はすべて世界測地系である。挿図中における北方位（N）は座標北を示す。
 2. 遺構図の縮尺は、各図に明示している。
 3. 遺構断面の水準値は海拔を示す。
 4. 遺物実測図の縮尺は、各図に明示している。
 5. 国土地理院発行 2万5千分の1地形図（高崎・前橋・下室田・富岡）を使用
 6. 高崎城周辺 昭和 24 年米軍撮影空中写真は国土地理院 所有 米軍撮影 昭和 24 年（1949）1月 5 日 整理番号 USA コース番号 R511- No 2 写真番号 44 をデータ購入して使用。
-

目 次

例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 発掘調査と遺跡の概要	I
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と環境	1
第3節 高崎城内の発掘調査	4
第2章 近現代 高崎陸軍病院の遺構と遺物	7
第1節 高崎陸軍病院	7
第2節 二ノ丸南堀調査結果	12
第3章 近世 高崎城の遺構と遺物	89
第1節 調査地の歴史	89
第2節 高崎城二ノ丸南堀・南三ノ丸	92
第4章 中世 和田城の遺構と遺物	108
第5章 平安・奈良・古墳・弥生・縄文時代の遺構と遺物	115
第6章 滑石等玉作工房址	139
第7章 自然科学分析（珪藻分析）	172
第8章 まとめ	177
参考文献	183
写真図版	185
発掘調査報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第39図 井実測図	49
第2図 高崎城遺跡発掘調査位置図	3	第40図 井蓋実測図	51
第3図 明治18年高崎地図	7	第41図 茶碗・鉢実測図	53
第4図 高崎衛戍 歩兵第十五連隊管轄図 (明治23年以降)	8	第42図 鉢及び皿実測図	55
第5図 高崎陸軍病院拡大平面図	8	第43図 蓋物及びその他陶磁器実測図	56
第6図 歩兵第十五聯隊之真景圖 高崎 喜久屋	8	第44図 洋食器実測図	58
第7図 歩兵第十五連隊平面図(年不詳)	9	第45図 兵營内酒保関連及び周辺店舗名入り	
第8図 高崎陸軍病院拡大平面図(年不詳)	9	食器実測図	59
第9図 高崎陸軍病院(昭和6年)	9	第46図 歯ブラシ実測図(1)	66
第10図 歩兵第十五聯隊平面図(昭和9年)	9	第47図 歯ブラシ実測図(2)	67
第11図 高崎陸軍病院	10	第48図 電気関係機器製品道具実測図	68
第12図 昭和24年高崎陸軍病院(国立高崎病院)	10	第49図 煉瓦刻印拓影図(1)	70
第13図 昭和24年高崎陸軍病院(国立高崎病院)拡大	10	第50図 煉瓦刻印拓影図(2)	71
第14図 遺跡全体図	12	第51図 煉瓦刻印拓影図(3)	72
第15図 明治期以降の南堀利用状況図	13	第52図 石製スレート瓦実測図	73
第16図 東石実測図及び東石設置	14	第53図 陸軍エンボス入り菜瓶	74
第17図 南堀悪路改修面	15	第54図 間部氏当代高崎絵図(福井県 萬慶寺蔵)	
第18図 金属製食器	17	宝永7年～享保2年(1710～1717)	90
第19図 高崎陸軍病院給食食器実測図(1)	19	第55図 御城内絵図(延享年中の頃土方氏「高崎街づくり変遷図史」より転載)(1744～1747)	90
第20図 高崎陸軍病院給食食器実測図(2)	20	第56図 年次不詳 高崎御城之図(1779年以降)	91
第21図 高崎陸軍病院給食食器実測図(3)	21	第57図 「高崎城絵図」より転載(安政3年)(1856)	91
第22図 高崎陸軍病院給食食器実測図(4)	22	第58図 近世全体図	91
第23図 高崎陸軍病院給食食器実測図(5)	23	第59図 ニノ丸南堀全体図	93
第24図 高崎陸軍病院給食食器実測図(6)	24	第60図 南中門外堀障子の図(櫻井家文書No.53)	94
第25図 高崎陸軍病院陶器口ゴー覧(1/1)	26	第61図 南中門外御堀障子舛穂相模所絵図	
第26図 ベーカライト給食食器実測図	28	(同文書No.81)	94
第27図 陸軍食器実測図	30	第62図 堀障子の図(櫻井家文書No.57)	94
第28図 高崎陸軍病院の名入湯呑茶碗統制食器 実測図	31	第63図 近世金属製品実測図	96
第29図 統制番号付き食器(1)	32	第64図 近世磁器実測図	96
第30図 統制番号付き食器(2)	33	第65図 近世陶磁器実測図	97
第31図 特殊遺物実測図(1)	36	第66図 近世瓦A群実測図(1)	100
第32図 特殊遺物実測図(2)	38	第67図 近世瓦A群実測図(2)	101
第33図 湯呑茶碗蓋・小鉢蓋実測図	41	第68図 近世瓦A群実測図(3)	102
第34図 湯呑茶碗実測図(1)	43	第69図 近世瓦B群実測図(1)	103
第35図 湯呑茶碗実測図(2)	44	第70図 近世瓦B群実測図(2)	104
第36図 土瓶・急須及び蓋実測図	46	第71図 近世瓦B群実測図(3)	105
第37図 酒器(盃・徳利)実測図	48	第72図 近世瓦B群実測図(4)	106
第38図 火鉢実測図	48	第73図 中世和田城関係遺構全体図	108
	48	第74図 1号溝平面図及び土層断面図	110

第75図 中世土壤群平面及び断面実測図・ 出土遺物実測図	111	第111図 南地点 板状品の破片・白玉(滑石)	147
第76図 1~3号井戸平面図及び断面図	112	第112図 南地点 白玉(滑石)	148
第77図 1・3号井戸溝出土遺物実測図	113	第113図 南地点 白玉(滑石)	149
第78図 板碑実測図	114	第114図 北地点 剥片・工具痕を残す切断品・ 縦長板状品・不定形加工品(片岩系)	151
第79図 古墳~平安時代の遺構全体図	116	第115図 北地点 白玉製作(片岩系)	152
第80図 1・7~9号住居全体図	116	第116図 北地点 管玉製作工程・劍形品(片岩系)、 板状品・管玉・勾玉(碧玉)、	
第81図 1・7~9号住居実測図	117	板状品(変質流紋岩)	153
第82図 1号住居出土遺物実測図	117	第117図 北地点 原石及び荒削・切断品(滑石)	154
第83図 7・8・9号住居出土遺物実測図	118	第118図 北地点 荒削及び切断品・縦長板上品・ 板状品(滑石)	155
第84図 2~6号住居周辺全体図	119	第119図 北地点 平玉及び有孔円板・劍形品・ 不明の模造品(滑石)	156
第85図 2号住居・貯蔵穴実測図	120	第120図 北地点 白玉(滑石)	157
第86図 2号住居出土遺物実測図	120	第121図 石製模造品・玉類製作工程模式図(1)	159
第87図 3号住居・貯蔵穴実測図	121	第122図 石製模造品・玉類製作工程模式図(2)	160
第88図 3号住居出土遺物実測図	122		
第89図 4号住居・貯蔵穴実測図	123		
第90図 5号住居・貯蔵穴・土坑実測図	123		
第91図 6号住居・貯蔵穴実測	124		
第92図 4・5・6号住居出土遺物実測図	125		
第93図 5号住居出土遺物実測図・組み合わせ 土器模式図	126	表 目 次	
第94図 2号溝実測図	127	第1表 高崎城遺跡発掘調査一覧	4
第95図 土坑実測図	127	第2表 高崎城遺跡発掘調査報告書一覧	6
第96図 ピット実測図・出土遺物実測図	127	第3表 統制番号付き陶磁器一覧	34
第97図 奈良・平安時代遺構外出土遺物実測図	129	第4表 近現代陶器器観察表	61
第98図 古代瓦実測図	130	第5表 陶ブラシ観察表	67
第99図 古墳時代遺構外出土遺物実測図(1)	131	第6表 煉瓦一覧表	73
第100図 古墳時代遺構外出土遺物実測図(2)	133	第7表 耐火煉瓦一覧表	73
第101図 古墳時代遺構外出土遺物実測図(3)	133	第8表 ガラス製品観察表	83
第102図 銅鏡実測図	133	第9表 近世磁器・陶器遺物観察表	98
第103図 錫文土器・石器実測図	135	第10表 近代瓦A群遺物観察表	107
第104図 南地点 原石(片岩系)	140	第11表 近世瓦B群遺物観察表	107
第105図 南地点 原石(片岩系)	141	第12表 中世遺物観察表	114
第106図 南地点 荒削・切断等の破片(片岩系)	142	第13表 奈良・平安時代遺物観察表	136
第107図 南地点 紡錘車・勾玉・円及び有孔円板・ 劍形品・白玉(片岩系)	143	第14表 古代瓦観察表	136
第108図 南地点 荒削・切断破片・纺錘車・ 平玉・子持勾玉(滑石)	144	第15表 古墳時代遺物観察表	137
第109図 南地点 勾玉・円及び有孔円板・ 劍形品(滑石)	145	第16表 遺構外埴輪観察表	138
第110図 南地点 形状不明の模造品・板状品の破片 (滑石)	146	第17表 遺構外古式土師器観察表	138
		第18表 南地点 玉作り遺物観察表	161
		第19表 北地点 玉作り遺物観察表	167

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経緯

開発事業者の独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターから、高崎市教育委員会に開発予定地が埋蔵文化財包蔵地に該当しているのか照会があった。

高崎市教育委員会文化財保護課では、今回の予定地が『高崎城遺跡』内であるとともに、中世『和田城』や弥生時代から平安時代に至る集落遺跡が重複する周知の埋蔵文化財包蔵地であるため、開発者側に埋蔵文化財保護との調整が必要な旨を回答した。

その後、両者による協議で文化財保護法上の手続きを終めた。埋蔵文化財保護について開発者側との協議を行う。文化財保護法第93条第1項の規定による届出に対する回答で発掘調査が必要であると指示を出した。

事業者の独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターに対して平成26年8月21日付けで発掘調査が必要な旨を通知し、事前協議を実施した。

事業者から早期に発掘調査を実施してほしいとの要望があり、平成23年1月15日に施行された「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」(以下「要綱」)に基づき群馬県登録民間発掘調査組織に民間委託が決定した。

平成28年11月に委託先が株式会社測研に決定したとの高崎市教育委員会から連絡を受けた。

これを受けて平成28年11月4日付けで、事業主である独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターと受託者の株式会社測研、高崎市教育委員会教育長の三者間で「要綱」に基づき「独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う高崎城遺跡24発掘調査業務の取り扱いに関する協定書」を締結した。

この協定書に基づき平成28年11月4日付けで事業者である独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターと株式会社測研の二者で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が締結された。

発掘調査は平成28年11月12日から開始、平成29年2月末日までを予定してはじめられた。

報告書作成は、平成29年8月31日で実施することとなった。

なお、遺物量の多さから報告書作成は、平成29年12月20日までに延期されることになった。

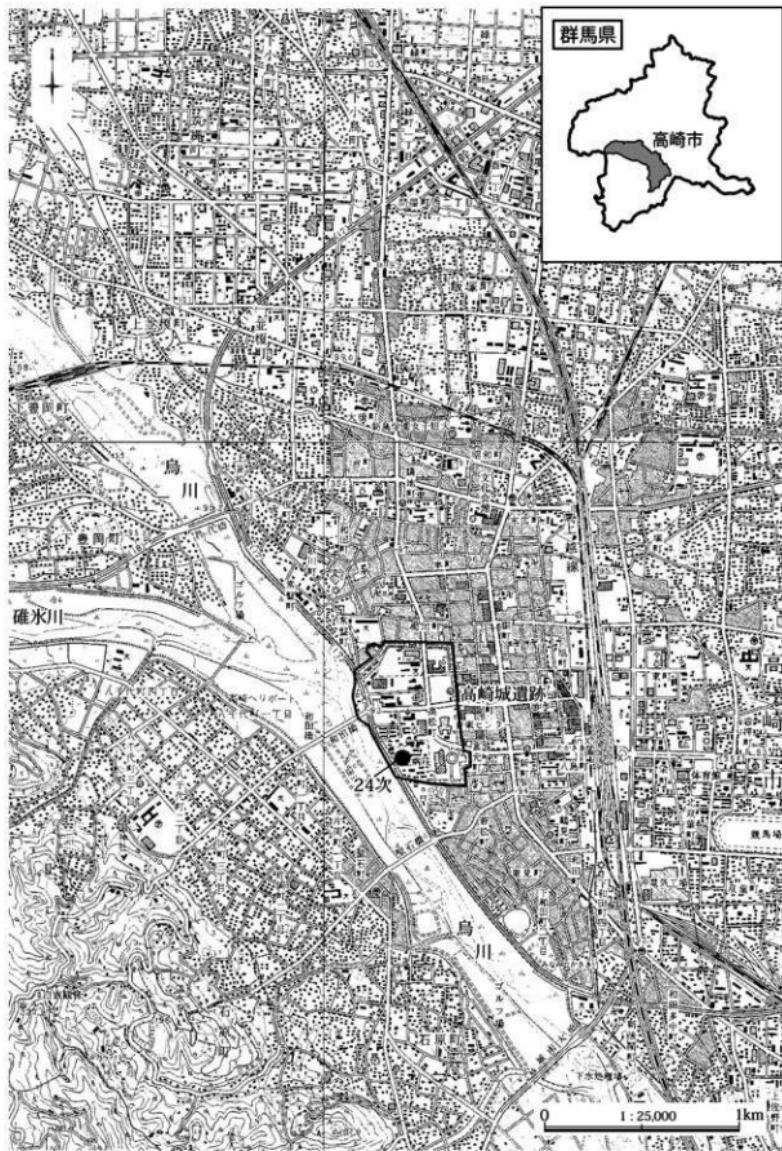
第2節 遺跡の立地と環境

高崎市の地形は榛名山南東麓に広がる火山山麓扇状地（相馬ヶ原扇状地）と、それに続く前橋台地からなっている。

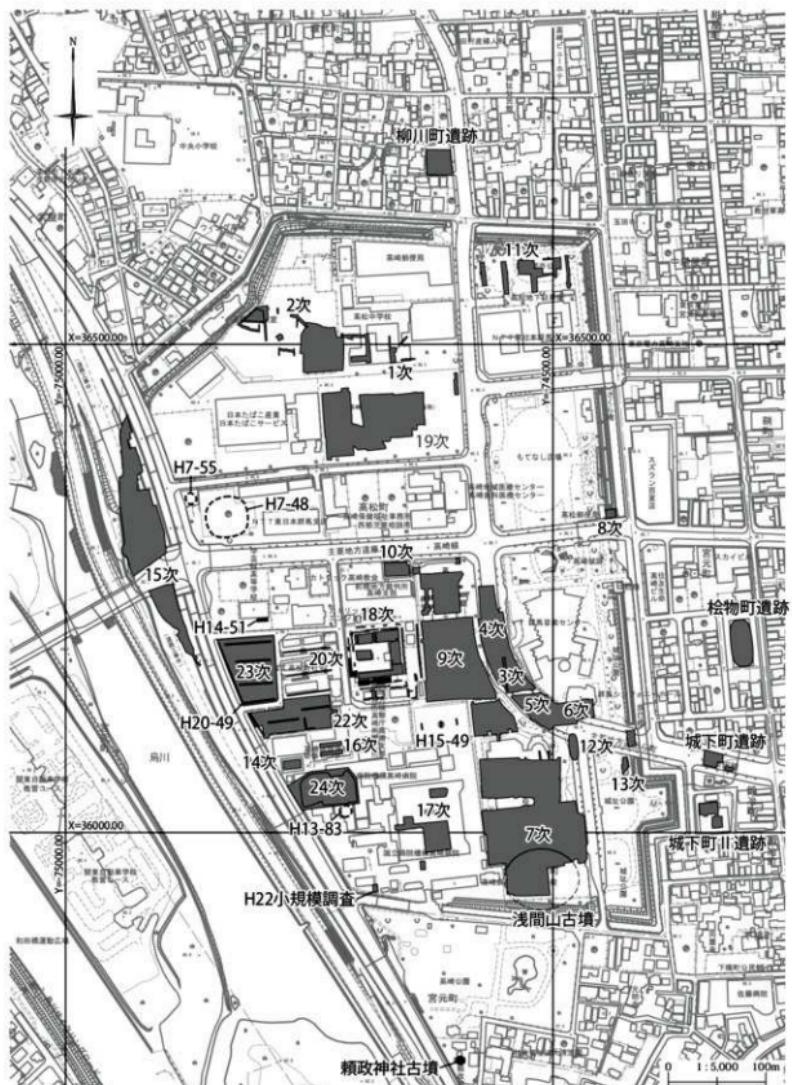
烏川から井野川までは井野川低地帯が続き、低地帯西側の地層を見ると前橋泥流堆積物上に砂層や泥炭層が堆積している。この堆積物の上には、高崎泥流（約1.1万年前）と呼ばれる堆積物が認められ、「高崎台地」と呼称されている。

高崎城遺跡は高崎市域の中心部にあり、榛名山麓に源を発する烏川と碓氷川の合流する左岸台地上に立地する。その台地西端辺は、河川による浸食が進み、高松町（和田橋付近）では、比高差約8mの崖が形成され、その東西幅約400mの微高地となっている。

現在調査地の西隣接地は、この台地縁辺部を国道17号が走っている。開発に伴って高崎城遺跡は、多くの発掘調査が行われこの地域の原始・古代から中世・近世に至る多くの歴史の解明がされている。



第1図 遺跡位置図



2500分の1『高崎市都市計画基本図』を50%縮小し、これまでの調査区を合成した図である。調査区の座標が不明なものなどがあるため、8・11・12次調査、及び松物町遺跡・柳川町遺跡試掘調査・小調査についてはおおむねの位置を示している。
凡例:H13の「H」は平成の略。続く数字は、当該年度の試掘確認調査番号で、市内遺跡発掘調査報告に掲載された情報に一致する。

第2図 高崎城遺跡発掘調査位置図

第3節 高崎城内の発掘調査について

高崎城内の遺跡発掘調査は、昭和60・61年の高松中学校校舎建設・同校庭築造に伴う事前発掘調査により、初めて実施され、二ノ丸堀の一部を検出した。

それを皮切りに、昭和63年～平成2年に3次～5次調査として都市計画道路高崎駅西口線築造3次調査は、赤坂中門前面付近の土橋および櫻廊塀を検出。4次調査は、坪ノ枡形堀、藩主居館跡地点を調査。5次調査は、三ノ丸部分で御作事方関連の建物の可能性がある大型礎石建物を検出。東門付近で三ノ丸土塁の調査。

その後、公共施設建設の事前発掘調査として昭和63年から平成5年まで毎年群馬シンフォニーホール・高崎市役所新庁舎・高松郵便局・高崎シティギャラリー・前橋地方家庭裁判所高崎支部・市営高松地下駐車場など8か所の調査を順次行い、高崎歩兵十五連隊建物・追手門北脇・梅ノ木郭堀などの調査実績をあげている。

平成8年から国立高崎病院関連の（当時）の建て替え・新築に伴う発掘調査が始まり、平成8年は14次調査、平成15年は16次調査、平成17年は17次調査、平成26年は22次調査、平成28年・29年の国立病院機構高崎総合医療センター関連病棟増設に伴う事前発掘調査を「高崎城遺跡24」として実施する。調査内容としては、二ノ丸堀・三ノ丸南区（興禪寺・威徳寺）西郭堀・十五連隊関連遺構が検出されている。

平成20年からは高崎法務総合庁舎・高崎総合保健センター・高崎市立中央図書館・前橋地方検察庁高崎法務総合庁舎・創価学会会館建設など平成27年までほぼ毎年調査が実施されている。調査内容は本丸堀・二ノ丸堀・櫻郭堀・西郭堀・梅ノ木埋門南堀・十五連隊などの遺構が検出されている。

このように24次調査に至るまで、これまでに多くの調査が実施されており、高崎城遺跡の全容解明に多くの発掘調査データが蓄積されている。

第1表 高崎城遺跡発掘調査一覧

調査	調査年	調査原因	概要	文献
1次	昭和60年	高松中学校校舎建設	二ノ丸堀の一部を検出。堀の上幅20m、その埋土は、堀の内側から黄褐色土と褐色土とが互層をなし、土塁を崩して内側から埋めたことを推察。	1
2次	昭和61年	高松中学校校庭築造	赤坂中門前面付近の土橋および櫻廊塀を検出。土橋は地山掘削ではなく、石製暗渠を埋設して土橋としていた。櫻廊塀西端は烏川へと貫通していた。	2
3次	昭和63年	都市計画道路高崎駅西口線築造	二ノ丸坪ノ枡形と三ノ丸の一部を調査。坪ノ枡形堀の位置を確認。弥生中期の環濠のほか近世までの遺構を検出。	3
4次	昭和63年 平成元年	都市計画道路高崎駅西口線築造	坪ノ枡形堀を完掘。藩主居館跡地点を調査。	3
5次	平成元年 ～2年	都市計画道路高崎駅西口線築造	三ノ丸部分で御作事方関連の建物の可能性がある大型礎石建物を検出。東門付近で三ノ丸土塁の調査。また、三ノ丸部分で弥生中期後半の方形周溝墓を検出。	3
6次	平成元年	群馬シンフォニーホール建設	5次調査の大型建物の一部を検出。土坑から近世後期の陶磁器が大量に出土。	4

調査	調査年	調査原因	概要	文献
7次	平成2年	高崎市役所新庁舎建設	弥生中期後半の環濠および浅間山古墳周溝を検出。古代および中世、高崎城闇連の遺構、十五連隊建物を検出。	5
8次	平成2年	高松郵便局建替	追手門北脇部分の調査。石組の側溝を検出。	6
9次	平成3年	高崎市役所新庁舎 (高崎シティギャラリー)建設	弥生中期後半の環濠および古代、中世の遺構を検出。二ノ丸堀、梅ノ木廊塀を検出。二ノ丸堀の一部で障子塀を確認。そのほか十五連隊建物を検出。	5
10次	平成3年	前橋地方家庭裁判所 高崎支部構内建物増築	梅ノ木郭部分の調査。近世の土塁直下と思われ、中世和田城および馬上宿に関連すると思われる石積土坑、池状遺構、井戸等を検出。	7
11次	昭和63年	市営高松地下駐車場・ 友好姉妹都市公園建設	浅間B軽石下水田および柱穴内に礎板を持つ大型建物を検出。幕末頃の藩主級住居に付随する建物の可能性。鍋島藩窯の花籠文裏白五寸皿が出土。調査次番号が無かったので後年追加。	8
12次	平成5年	都市計画道路高松若松線改築	弥生中期後半の環濠および近世の遺構を検出。大河内家の家紋が入った陶器塊を出土。	9
13次	平成5年	城址公園公衆便所建設	中世の水路、土坑を検出。土坑からは五輪塔、板碑、青磁碗が出土し、墓杭の可能性もある。近世の遺構も検出。	9
14次	平成8年	国立高崎病院(当時) 研修棟建設	古墳時代滑石製品の未製品および剥片、原石が1,000点以上出土。二ノ丸堀の一部(南端付近)を検出。	10
15次	平成14年	国道17号(高松立体) 改築	西郭部分周辺の調査。絵図に記載された東西方向の堀のほか、本丸堀とこれ以前の堀を検出。また和田城櫓台と考えられた部分が、16世紀末(高崎城築造期?)の盛土であると確認。	11
16次	平成15年	国立高崎病院(当時) 仮説病棟建設	二ノ丸堀?を検出。3棟の掘立柱建物を検出。	12
17次	平成17年	国立病院機構高崎総合 医療センター建設	三ノ丸部分(興禅寺・威德寺付近)の調査。中近世の遺構を検出。遺物は弥生および平安時代が中心。	13
18次	平成20年 ~21年	高崎法務総合庁舎建設	十五連隊第三兵舎の基礎を検出。	14
19次	平成20年 ~21年	高崎市総合保健センタ ー・高崎市立中央 図書館建設	本丸堀・二ノ丸堀・桜郭の堀・井戸・溝・土坑等を検出。大河内家の家紋入り鬼瓦出土。古墳時代石田川式の土器・埴輪が出土。中世の溝・井戸・土坑から土器の出土。	15
20次	平成23年	前橋地方検察庁高崎 法務総合庁舎建替	15連隊第三兵舎の基礎を検出。古代の鬼瓦出土。	16
21次	平成24年	前橋地家裁高崎支 部庁舎耐震改修工事	梅ノ木郭埋門の南堀及び南岸の一部を検出。幕末～明治初期の陶磁器出土。	17
22次	平成26年	国立病院機構高崎 総合医療センター 看護学校建設	西郭堀・二ノ丸外堀を検出。古代の軒丸瓦を出土。中世、和田城の堀・井戸・溝・土坑から土器の出土。十五連隊の建物の基礎を検出。	18
23次	平成27年	創価学会会館建設	歩兵第十五連隊煉瓦造り火薬庫2基・道・水路・石垣・土塁を検出。近世高崎城新発見の堀割、中世和田城堀割を検出。輸宝墨書き土器・古代布目瓦多数出土。	19
24次	平成28年 ~29年	国立病院機構高崎 総合医療センター	高崎陸軍病院。高崎城二ノ丸南堀。和田城薬研堀。平安～古墳時代集落。古墳時代滑石等玉作工房址。	20 本書

第2表 高崎城遺跡発掘調査報告書一覧

	文責	発行	遺跡名・調査報告書	調査主体	調査
1	高崎市教育委員会	1986	『高崎城跡』 仮称・高松中学校建設に伴う発掘調査の略報	高崎市教育委員会	1次
2	久保泰博	1988	『高崎城遺跡Ⅱ 梶郭並びに三ノ丸北西部』 高崎市文化財調査報告書第81集	高崎市教育委員会	2次
3	久保泰博・高橋淳 田 村 孝・山田史仁	1990	『高崎城遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 埠／枱形遺跡・堀／枱形及び三ノ丸 遺跡・東門及び三ノ丸遺跡』 都市計画道路高崎駅西口線建設 に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概報 高崎市文化財調査報告書第107集	高崎市教育委員会	3次 4次 5次
4	高橋 淳・山田史仁	1990	『高崎城VI 三ノ丸遺跡』 群馬シンドフォニーホール建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査 概報 高崎市文化財調査報告書第104	高崎市教育委員会	6次
5	中村 茂	1994	『高崎城VII・IX 高崎城三ノ丸遺跡』 -高崎市役所新庁舎建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査- 高崎市文化財調査報告書第129集	高崎市教育委員会	7次 9次
6	高崎市教育委員会	1992	『高崎城VIII(追手門)遺跡』 高崎市文化財調査報告書第121集	高崎市教育委員会	8次
7	黒沢元夫	1993	『高崎城X 高崎城梅ノ木郭遺跡』 前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎増築事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報	高崎市遺跡調査会	10次
8	横倉興一・星野守弘	1989	『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書』 高崎市文化財調査報告書第93集	高崎市教育委員会	11次
9	中村 茂・神戸 勲	1994	『高崎城XII・XIII 三ノ丸遺跡』『高崎市内遺跡埋蔵 文化財緊急発掘調査報告書』 高崎市文化財調査報告書第131集	高崎市教育委員会	12次 13次
10	折原洋一	1997	『高崎城XIV遺跡』 高崎市遺跡調査会文化財調査報告書第57集	高崎市遺跡調査会	14次
11	大西雅広	2006	『一般国道17号(高松立体)改築工事に伴う埋蔵文化財 調査報告書 高崎城XV遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第369集	群馬県埋蔵文化財 調査事業団	15次
12	黒田 晃	2003	『高崎城XVI遺跡』 高崎市文化財調査報告書第193集	高崎市教育委員会	16次
13	黒田 晃	2006	『高崎城XVII遺跡』 高崎市文化財調査報告書第206集	高崎市教育委員会	17次
14	秋本太郎他	2011	『高崎城遺跡18』 高崎市文化財報告書第279集	高崎市教育委員会	18次
15	黒田 晃	2010	『高崎城遺跡19』 高崎市文化財報告書第259集	高崎市教育委員会	19次
16	清水 豊・飯塚光生	2013	『高崎城遺跡20』 高崎市文化財報告書第312集	高崎市教育委員会	20次
17	閔 晴彦	2013	『高崎城遺跡21』 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査報告書第574集	(公財)群馬県埋蔵 文化財調査事業団	21次
18	飯塚光生・清水豊	2015	『高崎城遺跡22』 高崎市文化財報告書第344集	高崎市教育委員会	22次
19	大塚昌彦・高林真人	2016	『高崎城遺跡23』 高崎市文化財報告書第354集	株式会社 テクニカルアーツ	23次
20	大塚昌彦	2017	『高崎城遺跡24』 高崎市文化財報告書第390集	株式会社 テクニカルアーツ	24次

第2章 近現代 高崎陸軍病院関連の遺構と遺物

第1節 高崎陸軍病院

明治4年（1871）の廢藩置県で10月に旧高崎城は群馬県の県庁所在地となるが、その後兵部省の管轄となり、県庁は前橋に移ることとなる。明治6年（1873）には「東京鎮台高崎分営」が設置された。明治17年（1884）5月には歩兵第十五連隊が創設された。

高崎陸軍病院は「高崎陸軍病院歴史」の資料が現存しており、明治6年からの資料がある。

病院が最初に設置された当時は「高崎分営重病室」と呼ばれ、「高崎衛戌病院」と改称されるようになったのは、明治21年5月である。明治27・28年の日清戦争際「高崎陸軍病院予備病院」名称変更になる。

また、昭和11年には「高崎陸軍病院」と名称変更されている。

昭和20年8月の敗戦により、12月1日高崎陸軍病院は一時的に軍事保護院管理下の「保護院高崎病院」を経て同月5日、厚生省医療局の管轄に属する「国立高崎病院」となった。

高崎陸軍病院は、高崎城の二ノ丸南堀の南側、南三ノ丸西端に位置している。

高崎陸軍病院は、多くの絵図により様々な土地利用がされていた様子がわかっているので絵図の年代に沿って「国立高崎病院」「保護院高崎病院」「高崎陸軍病院」「高崎陸軍病院予備病院」「高崎衛戌病院」「高崎分営重病室」など地図の入手可能なもので紹介してみたい。

①明治18年（1885）高崎地区（20000分の1）の地形図　陸軍迅速測図「高崎街づくり変遷図史」（第3図）高崎城内に高崎分営と書かれている。

南西部に位置する高崎衛戌病院は二棟の建物が上下で描かれている。病院は東西に長い病棟が一棟存在し中央が南北に飛び出している。南側の建物は、小さく薬室と考えられる。

②年代不詳 歩兵第十五連隊管略図『高崎市史研究13』（中村2001）参照。原図を当社においてト雷斯原図を作成したものである。

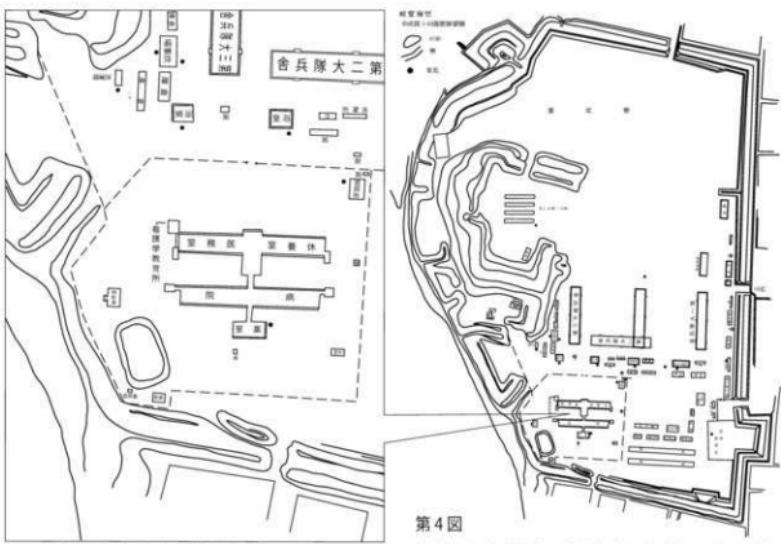
「高崎衛戌歩兵第十五連隊管略図」この図面は（年不詳）であるが、第二大隊兵舎が明治二十二年まで東西方向に建っていたものを南北方向に変更する内容があり、この図は明治二十三年以降の図と考える

東西に長い建物が南北に並列し、さらにその南側にも小さな建物がある。北棟の東は休養室、西は医務室、中棟は病院と書かれている。さらに南棟は薬室、北棟の西端には看護學教育所が設けられている。また、庖厨所・傳染室・屍室・燐蒸室など各種施設がある。

明治十八年から二十二年までに東西に長い病院



第3図 明治18年高崎地図

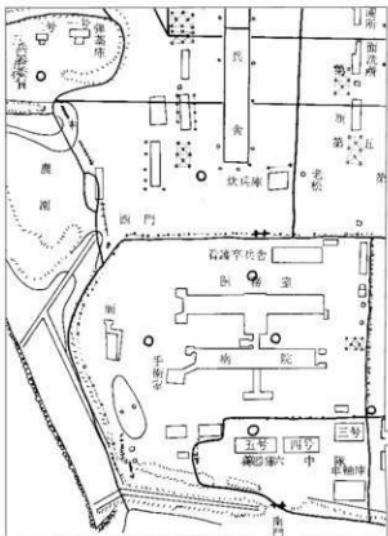


第5図 高崎陸軍病院拡大平面図

高崎衛戍 步兵第十五連隊管略図（明治 23 年以降）



第6図 歩兵第十五聯隊之眞景図 高崎 喜久屋（原図 大塚昌彦 所有）



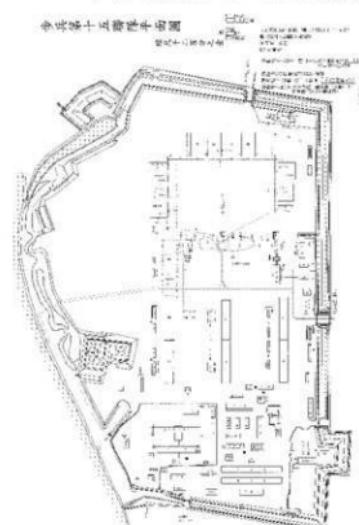
第8図 高崎陸軍病院拡大平面図（年不詳）



第7図 歩兵第十五連隊平面図（年不詳）
（『高崎城遺跡III・IV・V』より転載）



第9図 高崎陸軍病院（昭和6年）

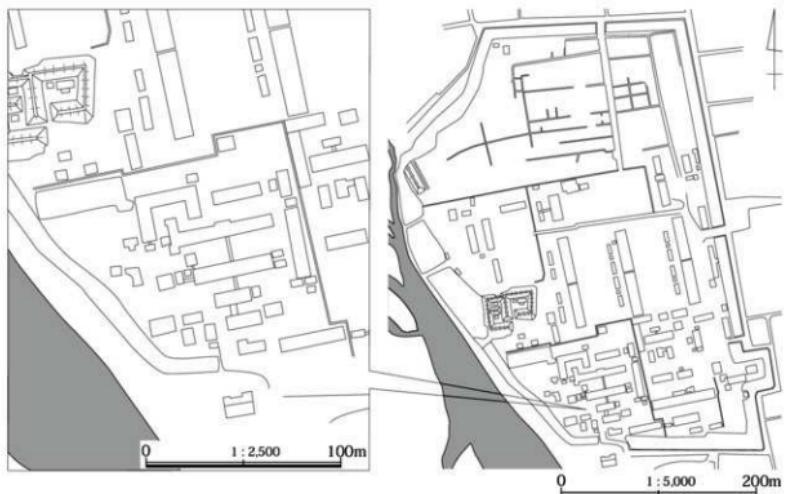


第10図 歩兵第十五連隊平面図（昭和9年）

『高崎城XV遺跡』より転載



第11図 高崎陸軍病院（「新編高崎市史補遺資料編近代現代」 転載）



第12・13図 昭和24年高崎陸軍病院（国立高崎病院）米軍撮影空中写真からトレイス図作製

棟が1棟増築されている。

③明治33年(1900)「歩兵第十五聯隊真景図(銅版画)」(高崎 喜久屋発行)(第6図)には、衛成病院と植字され、東西に長い三棟の平屋が中央で渡り廊下で繋がれ上から見て建物が「王」字のように病院施設が描かれている。その他六棟平屋が描かれている。北側と南側には垣根があり、北側に病院入口が設けられている。東側は植栽で区切られているが、2か所に出入り可能な所がある。北東部に寄棟の炊事小屋がある。西側には平屋3棟が南北方向にあり、南から寄棟屋根、寄棟屋根、切妻屋根と平屋が単独で存在している。3棟とも窓が3か所設けられ、同等規模の建物と考えられる。南棟の西南には2階建てと思われる建物が1棟がある。また、特徴的な方形の建物で二階が1階より小さな方形の建物で宝珠屋根で中央に避雷針のようなものが立てられている。

高崎城西出入口部には切妻屋根の平屋射的庫が堀に対して直角に建てられ脇には守衛室が設けられている。三次元の情報なのでかなり細かな内容を読み取ることが出来る。

※明治40年の測図では高崎城内は歩兵營と書かれ柵で囲われた中に「工」字状の建物表記がある。

その場所の北端にこの地図ではじめて病院記号が描かれている。

(この地図記号は旧陸軍の衛生隊のしるしを記号にしたものである。)

※大正5年高崎市街全図「高崎街づくり変遷図史」城内は空白である。

※大正13年高崎市全図(1/5000)「高崎街づくり変遷図史」城内は空白である。

明治末から昭和初頭の資料が確認されていない。

④年不詳 歩兵十五連隊平面図『高崎城遺跡Ⅲ・IV・V』より転載(第9・10図)

昭和9年の高崎陸軍病院の平面図と病院施設の変化はあまりないが、西ノ丸の火薬庫3基の配置が異なっており、本図の方が古い図面と考える。

また、全体図には兵営内の酒保(出店)の位置が描かれている。現あら町にある「大村そば店」が酒保として出店したのは、大正4年であったと店主の話がある。調査で同店の器が複数出土している。

⑤昭和6年高崎市全図(1/12500)「高崎街づくり変遷図史」(第7図)では、高崎城内に歩兵第十五聯隊兵營と書かれ、堀で囲われた中に平面形が「工」字の建物配置が描かれている。

⑥昭和9年歩兵第十五連隊平面図(縮尺千二百分之壹)『高崎城XV遺跡』(第8図)では、東西方向の建物が3棟で中央で3棟が連結している。北棟は管理所及び病室となっている。中棟は病室。南棟は事務室薬局となっている。北東には浴室炊事棟、北棟の北側には兵舎、中棟の西側には手術室、西側の外れには伝染病室が設けられている。これらは柵で囲われ、北壁中央1か所に出入口が設けられている。

⑦高崎陸軍病院 昭和11年~20年 高崎陸軍病院院内配置図(第11図)

この配置図により、病院内の具体的な配置が詳細に記載されている。東西方向の長い建物が3棟並列する基本的な構造は変わっておらず、第七病棟まで増え、渡り廊下により各病棟に行き来できる構造になっている。「新編高崎市史補遺資料編近代現代」より転載したものである。

⑧昭和24年 高崎陸軍病院改め国立高崎病院建物配置図(5000分の1)。(第12・13図)

この図面は、昭和24年に米軍による日本全体のコース撮りによる写真撮影をしたものを現在は国土地理院が管理しており、高崎城の入った写真を国土地理院からデータを購入し、写真から建物部分をデジタルトレースしたものである。(写真図版1参照)

※「高崎陸軍病院」は昭和20年8月の終戦により、12月1日から高崎陸軍病院は一時的に軍事

保護院管理下の「保護院高崎病院」を経て同月5日、厚生省医療局の管轄に属する「国立高崎病院」となった。

第2節 二ノ丸南堀調査結果

二ノ丸南堀（第15図）

調査地の二ノ丸南堀は、東側に拡幅しているようであり、拡幅した堀底を道として使っている。

路面は西から北東に向かって約8°の角度で斜面となっている。

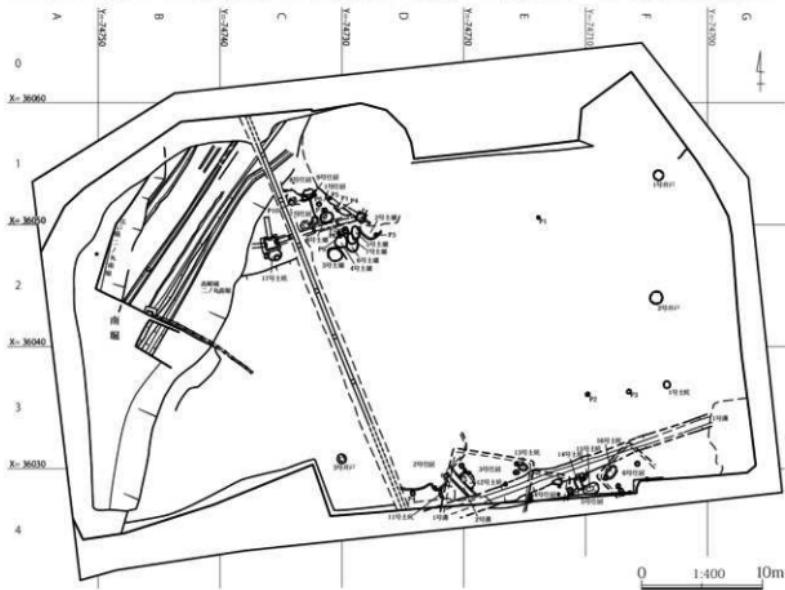
轍跡が4~5条認められる。轍個所で条件は変わっているが、西から南幅80cm、北幅50cm、長さ8.2m、西から2番目は長さが2.5m、幅50cm、中央の轍は長さ16.5m、幅50cm、中央に沿って不鮮明な轍がある。東側の轍は、左側確認は11.4mで右側は19mで幅は80cmである。轍底面は平らであるが、深さは10~15cmである。

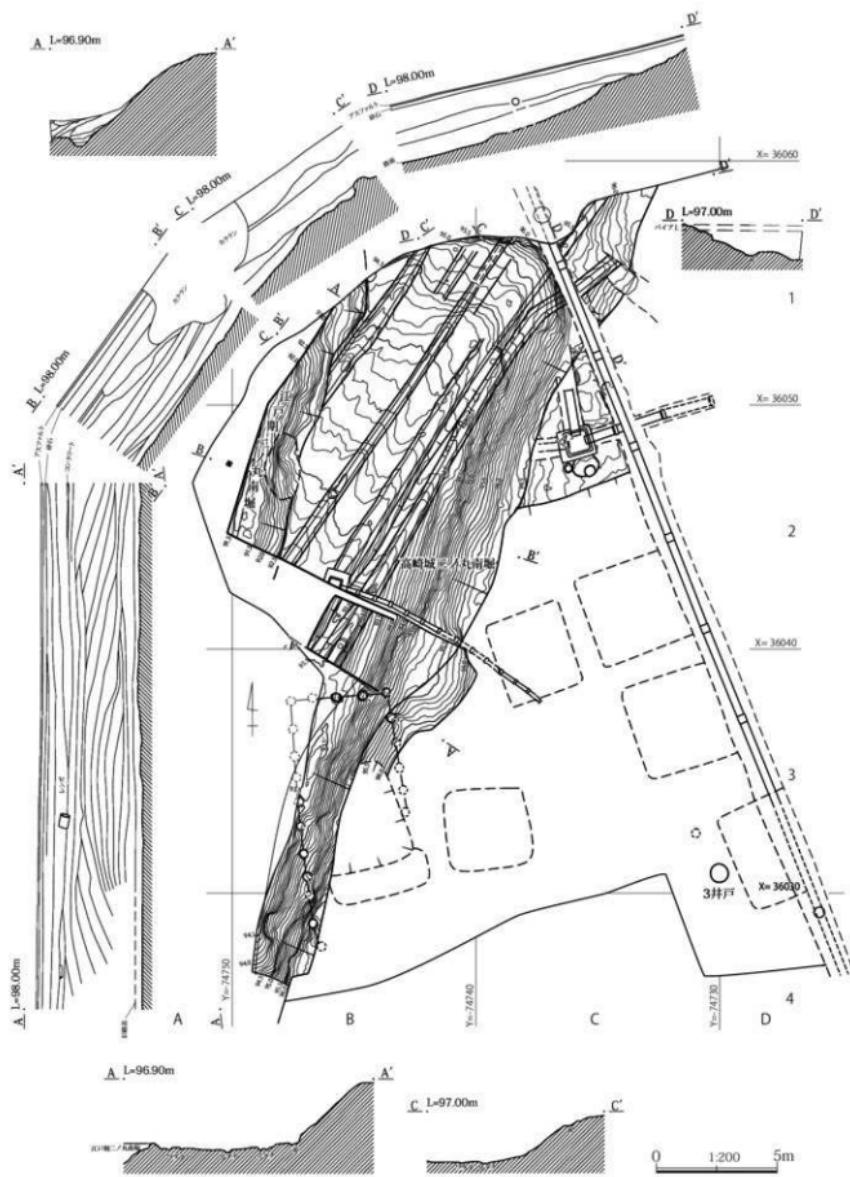
確認できた轍は、この地点での走行方向が、堀東側壁面と並行でほぼN-35°-Eである。

この轍は、歩兵十五連隊の軍用車などのタイヤで出来たものと考えられる。轍は深く掘れている状況であり、悪路改修の為、轍には礫や瓦を詰めたりして、応急的改修処置が行われている。

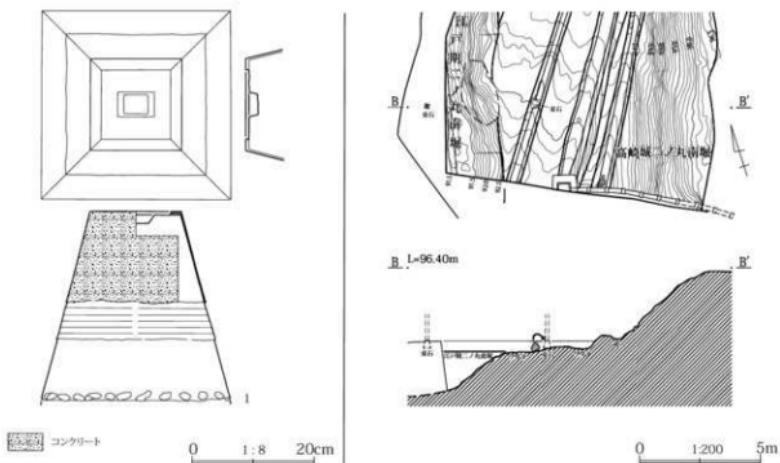
二ノ丸南堀は、南側に向うに従い東側に曲がっていくようである。

なお、堀東壁は調査地中央で3mの深さで南側行くに従い深くなっている。壁の角度は40°で立ち上がる。堀壁下については、人が1人通る上幅50cm、下幅30cmの道遺構が存在している。確認できたのは20m強で16.5mは直線であるが、北側は5mは東側に22°屈曲している。人道と堀下路面との





第15図 明治期以降の南堀利用状況図



第16図 束石実測図及び束石設置

間に土手が築かれている。土手上と路面との高低差は70cmであるが、南側の未調査地では更に高低差があると考えられる。

この悪路改修については、第15・17図のように平面面において路面が認められた。轍面から約10～20cm上面で砾、瓦などで全体を敷き詰めている。

また、この路面の約15～20cm上面にも路面が確認できた。ただし、この路面については、断面での確認である。

束基礎（第16図）

二ノ丸南堀でコンクリートの束基礎が2か所で検出されている。

1つは、設置した状態でみつかり、1つは南側に倒された状況で発見された。

2つの位置関係は南堀内に幅5mの間隔を取り、第16図のように設置されていた。南堀に対して直交する形で束石を2つ並べてゲート状の扉施設を作っていたと思われる。

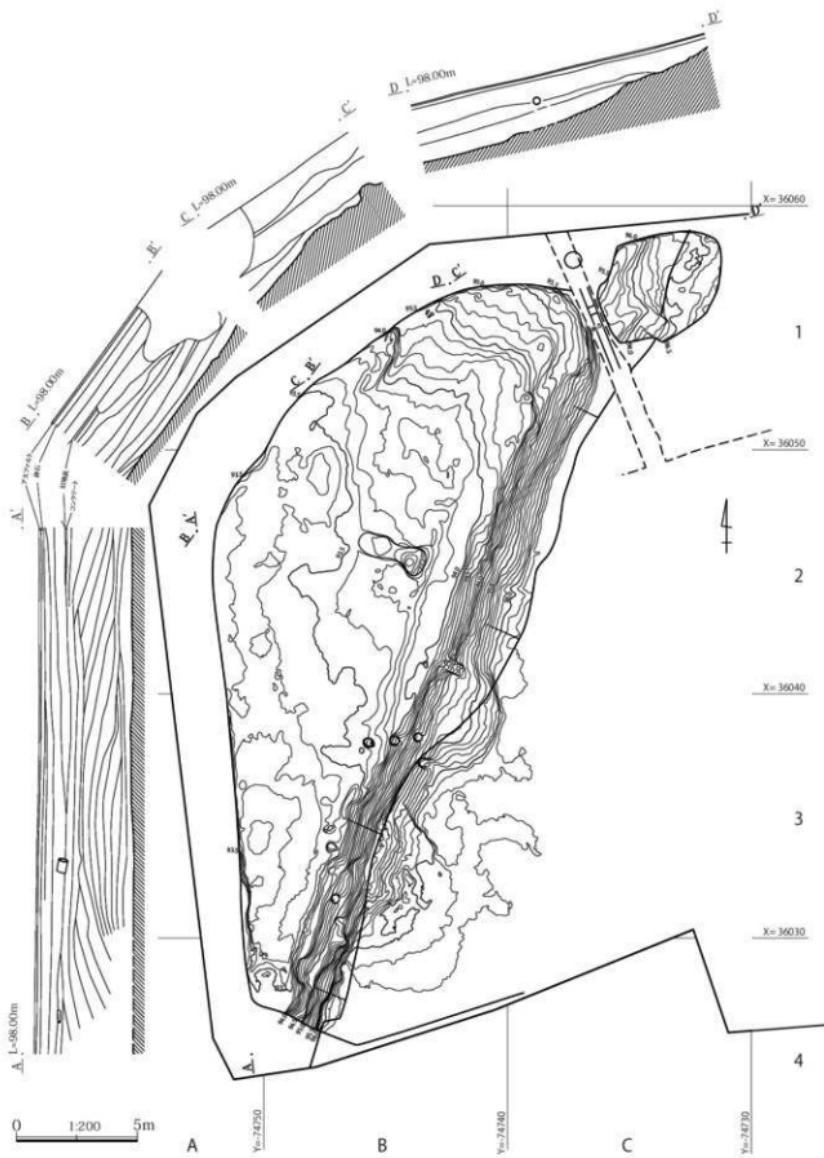
この束はコンクリートの束をベースにしたその上にモルタルで上面の縁取りと上面から15cmの表面をきれいに化粧した状況である。

この15cmは地上に出した状態で、その下部は土に埋めて設置している。

コンクリートの量は少なく小石が表面に露出しており、中間高では水平に板目が付けられている。台形になる木枠を作ってコンクリートを流し込んでいることがわかる。コンクリートが貴重品で量を少なくした為、仕上がりは雑である。

明治33年の歩兵十五聯隊真景の銅版画（第6図）には南堀の堀に直行する建物（射的庫）と、守衛門番の施設が認められる。門使用時期は、明治から昭和初め頃と幅を持たせて考えたい。

その後全体的に40cm程嵩上げしているが、その路面を最後の道としての機能は無くし、病院関係施設を増築を繰り返している。



第17図 南堀悪路改修面

この時期は戦争中であり、傷病者が大幅に増なっている。そのために病棟を 7 号病棟まで増築している。

この二ノ丸南堀は、増築時に埋められたと考えることが出来る。

出土遺物

二ノ丸南堀の最西端のこの堀を埋めたのは、高崎陸軍病院の時期と考えられる。堀の埋め土は、焼却灰を主体に土壌の土、瓦・石などと陶磁器類、ガラス瓶類などからなっている。

今回ここで出土した資料は高崎陸軍病院で使っていた給食食器、軍人・医師・看護師・入院患者（軍人）の使用したもののが中心である。歩兵第十五連隊の兵営エリアでもあり、軍事的な資料の出土もあった。また、兵営内に出店していた酒保の陶磁器も出土している。

給食食器

高崎陸軍病院は、軍人・医師・看護師・病院事務・給食販い・清掃・入院患者（軍人）など、多くの人が給食を利用していたと考えられる。

当初は金属食器（アルマイド製食器）（第 18 図）を給食食器としていたが、戦争突入で金属資源の不足に陥り、金属食器を供出することになる。

（※昭和 13 年から政府は鉄鋼配給規則を制定、昭和 14 年 1 月以降は、マンホールの蓋・ベンチ・鉄橋・灰皿・火鉢等の鉄製品回収が官公署（役所・職場や 愛国・国防両婦人会や女子青年団の手で実施された。昭和 16 年 8 月 30 日には国家総動員法に基づく金属類回収令を公布、同年 9 月 1 日施行され、官公署・職場・家庭の区別なく根こそぎ回収へと進んだ。）

金属食器（第 18 図）

金属食器は原形を留めない 3 点が潰れた状況で出土した。金属類回収を免れた一群である。

これらの金属食器はアルマイド製で給食食器として病院で使われていたものと考えられる。

1 は椀である。部分的に凹みを幾つも持ち、潰れている。復元すると口径 12.4cm、高さ 5.2cm、底径 7.8cm である。重量は 46 g である。

2 はコップである。横方向からの力で潰れている。復元すると口径 7.6cm、高さ 8.2cm、底径 6.2cm である。重量は 20g である。

3 は深皿である。口縁が外に開き口唇が他数裂けている。復元すると口径 16.4cm、高さ 3.6cm、底径 12.0cm である。重量は 62 g である。

戦時中金属の供出をすり抜けた資料と考える。国民食器、統制食器の以前のものである。

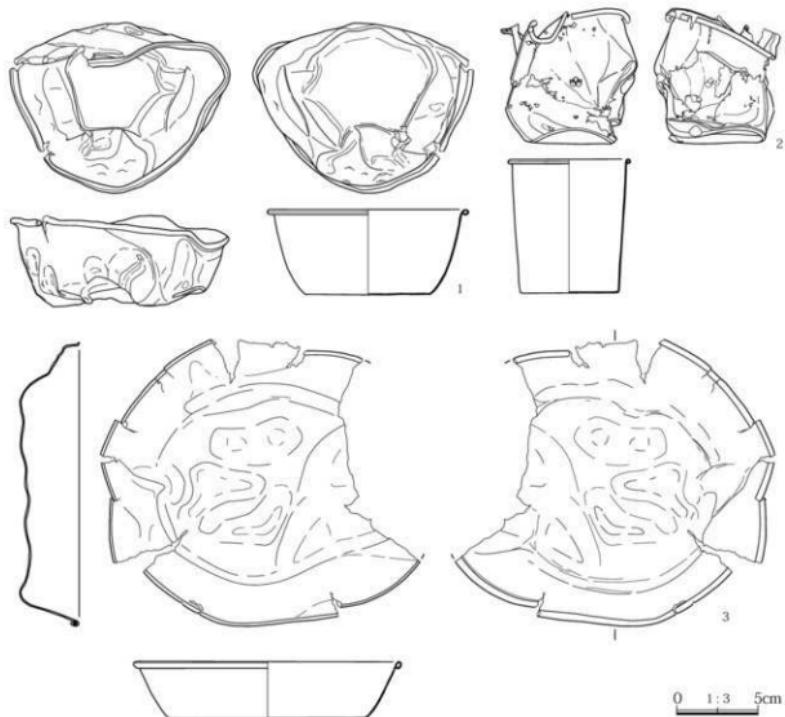
3 点とも一枚の金属板をプレス加工して作られている。口縁部は折れ曲がり丸く仕上げ強度を持たせている。

統制食器（第 19 ~ 24・27 ~ 30 図）

この時期、軍事統制下の統制食器（国民食器）が磁器で作られることになる。給食というシステムが、滞ることが無いように食器が調達できたところで、金属食器が回収されたと考えられる。

ここでいう統制食器は、白磁器の口縁部に緑色 2 本線（二重輪線）を入れた器である。

ただし、病院・学校・工場・会社など多くの集団生活者を持つところの給食食器には口縁部二重線の他、社章等のロゴを緑色で付けていた。



第18図 金属製食器

高崎陸軍病院の給食食器には、このロゴマークが付けられた食器が大量に出土している。会社で言う社章である。

今回、出土した多くの給食食器に同じロゴが付けられており、このロゴが高崎陸軍病院の病院章であることが明らかになった。

戦後70年を過ぎて、高崎陸軍病院に病院章があったことも忘れられていたのである。

※国民生活用品調査資料・集団用食器について

都市及び工場地帯に於ては、保健経済、能率、その他の諸點から見た栄養改善施設として集団炊事がすでに実施され、その効果を挙げている。

都市の学校、工場、商店、銀行、会社、病院などのような集団生活者への栄養改善は共同炊事の実行により、容易に解決し得るものである。殊に戦時下食料物資の不足する際、学童、一般市民、工場労務者の體位向上、炊事の能率促進及び経済、労力調整等々、共同炊事が集団地帯に對して如何に重要性を帶びた事業である。栄養が直接生産力に及ぼす影響の如何に効果的なものかと言う事が判るのである。「工芸ニュース」10巻7号より一部引用。

統制食器の中で給食食器として確認できた器種は、丼（熊川形・楕形）・丼蓋・皿・小皿・湯呑茶碗・鉢の出土があった。

丼（第19・20図）

丼の形は2種あり、口縁が外に広がる熊川（こもがい）形（第19図）と通常の楕形（第20図）がある。熊川形丼（第19図）は口縁に緑色二重圈線が施され、大きさは、平均口径が15.6cm、底径6.4cm、器形7.4cmである。違いは病院章のロゴの色・形・大きさの違いがある。

1～4のロゴは、濃い緑色で大きさは大形で直径3.1cm、歯車の歯形が浅いものである。

5・6のロゴは、薄い緑色で大きさは小形で直径1.8cm、歯車の歯形が深いものである。

7～15のロゴは、オレンジ色で大きさは中形で直径2.2cm、歯車の歯形が深いものである。

16～21のロゴは、オレンジ色で大きさは小形で直径1.75cm、歯車の歯形が深いものである他、中央の円形に一条円形が加わっている。

22・23はロゴ部分が欠損している。

楕形丼（第20図）は口縁には緑色二重圈線が施されている。

丼の形は高さの高いものと低いものの2種に分けられる。ロゴ（色・大きさ・形）で大きく4区分できる。

1～6は、大きさが口径15.6cm、底径6cm、器高6.4cmである。ロゴは濃い緑色で大きさは大形で直径2.9cmで歯車は歯形が浅いものである。顔料が薄かったかスタンプが柔らかい素材を使ったものか形が滲んだようになっている。

7～12は、大きさが口径15.6cm、底径7.2cm、器高8cmである。顔料は濃い緑であるが、二重圈線が太く、ロゴは中形で直径2cmで歯車は歯形が深いものである。二重線とロゴの顔料は所々剥がれ落ちており、焼きが良くない。

13・14は、大きさが口径15.6cmであり、ロゴはオレンジ色で大きさは、中形で直径2.2cmである。

15～21は、大きさは15.6cm、底径6.6cm、器高6.6cmである。ロゴはオレンジ色で大きさは小形で直径1.75cm、歯車の歯形が深いものである他、中央の円形に一条円形が加わっている。

22～26はロゴ部分を欠損している。

丼蓋（第21図）

丼蓋の口縁には緑色二重圈線が施されている。

統制食器の資料には丼には蓋無しとあるが、高崎陸軍病院では丼にロゴ付き蓋が出土している。病院ということで衛生面を重視した可能性がある。

丼蓋は形状とロゴの形態・色により分けられる。

1～3のロゴは濃い緑色で大きさは大形で直径3.1cm、歯車の歯形が浅いものである。

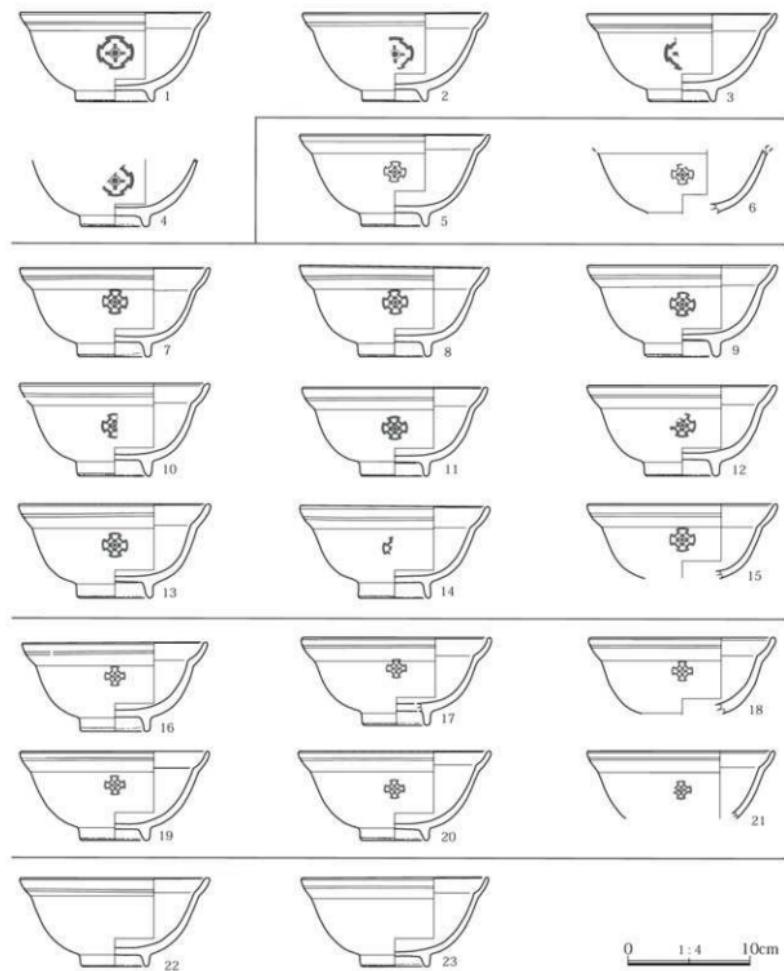
5・6のロゴは薄い緑色で大きさは小形で直径1.9cm、歯車の歯形が深いものである。

7～18のロゴはオレンジ色で大きさは中形で直径2.2cm歯車の歯形が深いものである。

19～32まではロゴを欠損しているが残存状況が良いものである。

19・20は他の蓋より厚めで重いもので緑色二重圈線がほとんど剥がれ落ちている。

29は線が細く緑色が薄い二重圈線で口唇部に近い位置に描かれている。

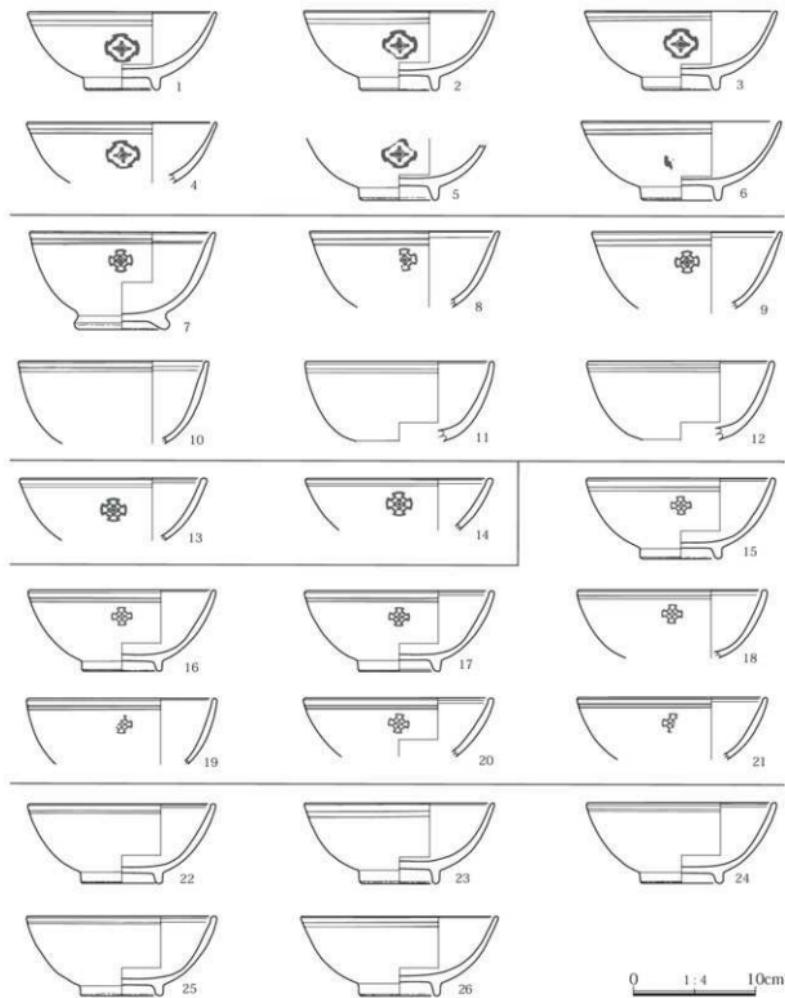


第19図 高崎陸軍病院給食食器実測図（1）

30は少しだけ青みがかる釉が掛かっている。

31は二重線の位置が唯一腰部に描かれており、器の厚みもあり、口縁は他のものよりぼってりしている。

32は摘内部に赤色の付着物があり、文字が書かれていた可能性がある。

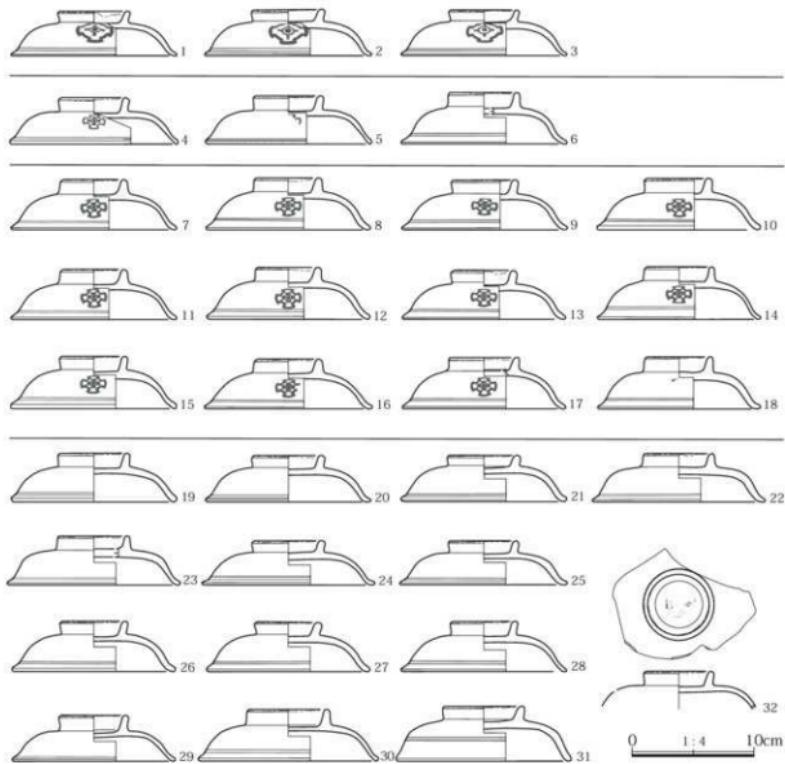


第20図 高崎陸軍病院給食食器実測図（2）

大皿（第22図）

1～3は青色の顔料で口唇部に2重線と見込み1条の3状の線が描かれている皿である。

1～3の大きさは直径20.6cm、底径11.2cm、器高1.8cmである。1・2は底部に平行な2条の細い棱線を持ち、3は3条の細い棱線を持つ2種類がある。



第21図 高崎陸軍病院給食食器実測図（3）

1は貫入がほとんど認められない。2・3は両方とも細かな貫入のひび割れが全面にある。

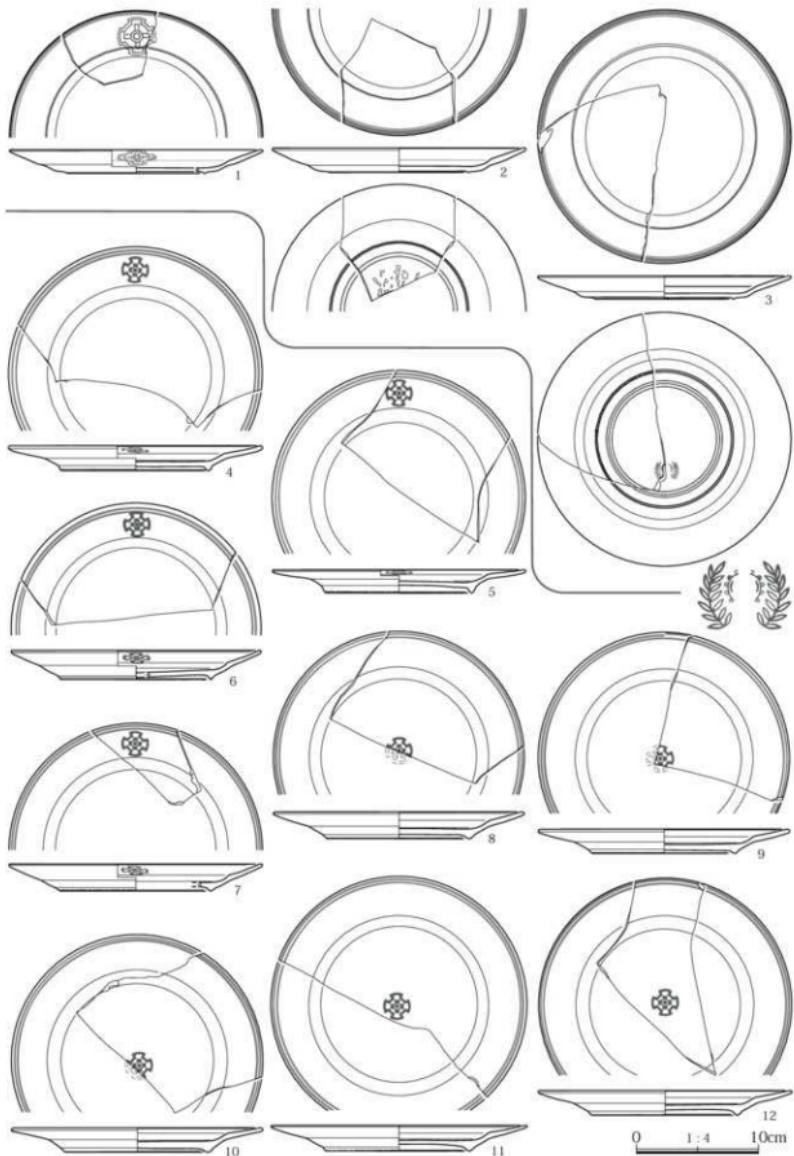
1は通常の皿の口縁部に大きなロゴを青色の顔料でスタンプしている。

高崎陸軍病院ロゴは直径3.1cmで線描による文様で線間を塗り潰すようなことはしていない。また、文様の形状はオレンジ色の完成したロゴとは異なっており、外側の4角歯車の歯部が短く、中心の円と十字形はかなり大きく描かれている。ロゴの中で一番古いタイプと考える。

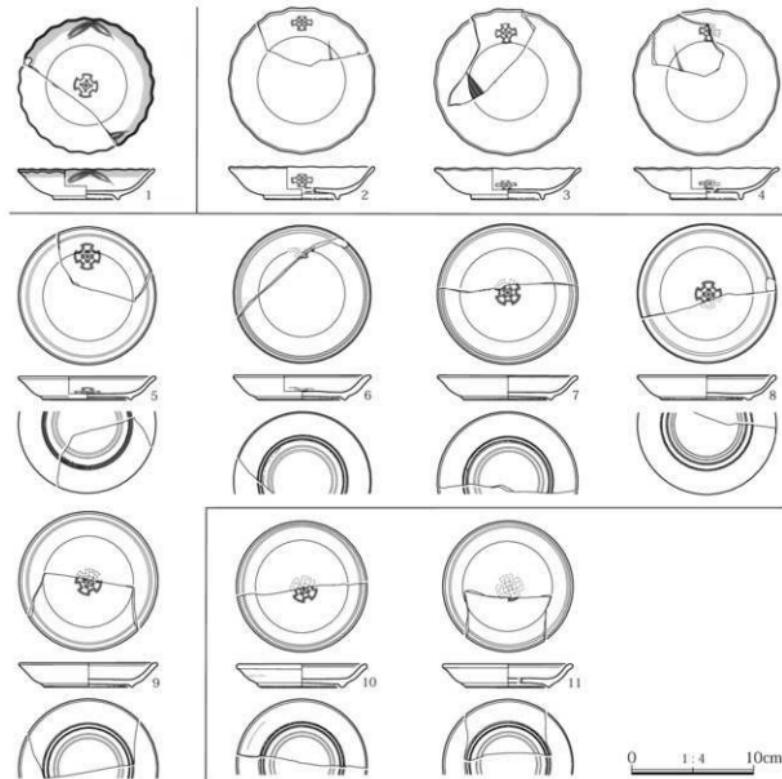
2はロゴ部分は欠損している。裏面底部に黒色で名前が書かれているようだが確定していない。

3はロゴ部分は欠損している。裏側底部には緑色の裏印があるが丸く開く月桂樹の葉と歯車状の模様が描かれているが欠損している。

4～12は口縁に緑色二重輪線を描いている。4～7のオレンジ色のロゴを口縁部にもつものと、8～12の見込み中心にオレンジ色のロゴを持つものに分けられる。ロゴの大きさは直径2.2cmと同じである。



第22図 高崎陸軍病院給食食器実測図(4)



第23図 高崎陸軍病院給食器実測図（5）

小皿（第23図）

菊花皿と丸皿の2種類がある。菊花皿は4点確認された。

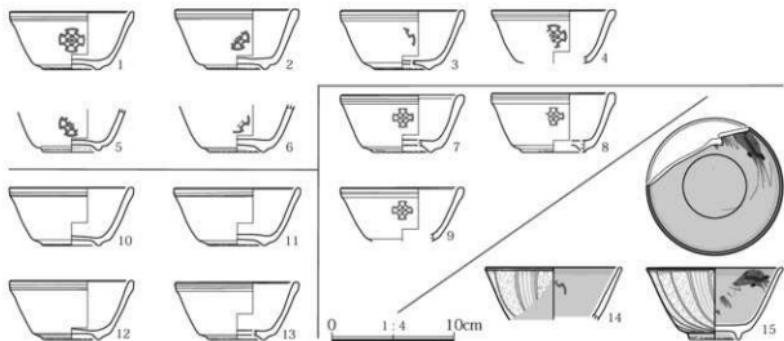
1は青絵付で文様は双葉が2か所、口縁に薄い空色を掛けている。皿の大きさは、口径12cm、底径6.2cm、器高2.6cmである。見込み中央に小型の病院章を付けているがすべて剥がれ落ちている。色は痕跡がなく不明であるがロゴの形状から古い様相が見られ、その時期に剥がれているのは緑色であることから本資料も緑色の可能性が高いと考えたい。ロゴの大きさは、直径2cmである。

2は口縁部の削り加工が粗雑な白磁である。

菊花皿は3種類あり、3・4は磁器で薄い緑色が含まれる釉薬である。

ロゴの色は2が赤色であるのに対して3・4はオレンジ色である。

規格は直径が12cmと同じであるが器高は1・3が2.6cmであるのに対して2が2.8cmと若干高い。また、2は見込み底径は直径7cmであるが、3・4は見込み底径は直径6.4cmと小さい。第42図6～8の皿は同じ絵柄の菊皿でロゴ部分が欠損したものと考える。



第24図 高崎陸軍病院給食食器実測図（6）

丸皿は実測できたのは7点である。6・7・9の3点は底部に静止系切りの痕跡がみられ、同一製作者の作である。8は釉薬が厚く掛かっているため観察できなかったものである。

5・6はロゴが身込み底から側辺部に施文されている。オレンジ色で直径は2.1cm、歯車は歯形が深いものである。

7～9はのロゴはオレンジ色で直径2.2cmでロゴの位置は見込み中央である。

10・11は他の小皿より若干小振りで口径10.8cm、底径11.6cm、器高2cmである。2点は同一作であり、口縁部には明瞭な稜をもっている。ロゴはオレンジ色で見込み中央で直径2.2cmで押されている。

最低3種類が存在している。これは発注を行った回数と思われる。

小鉢（第24図）

1～13は口縁部に緑色二重圈線を施した小鉢である。

これらの平均的な大きさは口径10.2cm、底径4.8cm、器高4.8cmである。

高崎陸軍病院のロゴは外体部に付けてある。1～6のロゴはオレンジ色の中形で直径2.2cmのものである。7～9のロゴはオレンジ色の小形で直径1.75cmのものである。歯車の歯形が深いものである他、中央の円形に一条円形が加わっている。

この磁器製の小鉢は、高崎陸軍病院のロゴが緑色で内面に付けられている。14・15は同一器種の別個体である。外側は斜めに区切られた20区画の中を平行線・亀甲文・鱗文・花文など5種類を1単位として全体を4単位で構成している。

14・15これらの食器は士官などの位の高い人の食器と考えられる。14は小破片であるが、一般食器に緑色のロゴが付けられている。

15は内面に海老の絵が大きく描かれ、ロゴは欠損している。

※統制食器の同一器種の二重圈線は、二重線の位置、二重線の太さ・間隔、二重線の色などについては、顔料の色の明らかな違い、剥落しているか否か、引くラインの位置などが変化として認められる。しかし、二重線の太さと間隔は同じ器の中でも異なっているため、生産者の違いとして認めることが出来ない。人の違いや人の体調など様々なことが考えられる。

高崎陸軍病院給食器のロゴについて（第25図）

ロゴについては様々なもののが存在することがわかった。1つはロゴの大きさの違い（大・中・小）。1つは印の形で歯車の歯形が浅い・深いものがある。1つは印の色の違い（緑・黄緑・オレンジ色）。1つは印の押す位置が器種によって異なっている。椀類は体部、椀蓋体部、皿は見込み中央と口縁部、小皿も見込み中央と口縁部、小鉢は体部と見込みにスタンプしている。

高崎陸軍病院の病院章は、病院章の大きさ・色・形で年代的編年が検討できる。

ロゴは第25図のとおり、器種とロゴ種類を認めることが出来た。

①一番古く考えられるのは、皿で青色3重線のもので底部には緑色の月桂樹の柄をモチーフにしたロゴが存在している。ロゴが半分以上欠損しているため、製造者の特定は出来ていない。第22図1の青色の病院章（以下ロゴという）は皿口縁部に歯車の歯は浅く、模様は線描で線と線の間を塗り潰していないものである。ロゴの規格は直径3.1cmである。このロゴは焼きがあまかったのか釉薬がすべて剥がれてしまっている。

②次に皿の第19図1、皿蓋の第21図1は、先資料の平行沈線内を緑色に塗り潰した模様に変更している。規格は直径3.1cmと同じものである。

③次に第20図1は②の規格より若干小さいもので、直径2.8cmロゴのスタンプはべったりとした文様が滲むものである。

④本来、二重輪線のは緑色であり、病院章も緑色が基本である。なお、病院章の图案が完成度をあげたのは、中型、小型のロゴスタンプで緑色顔料で用いた皿・丼・皿蓋・小皿である。文様内の「十文字」の幅は細く、大形スタンプをの形を踏襲している。

⑤続いて赤・オレンジ色のロゴが主流となっている。小型のロゴは赤・オレンジ色で小皿・丼2種・小鉢と4器種に全く同じスタンプが残されている。規格は直径1.75cmで、④の十文字の幅は狭く、中央○の外側に細い○線が图案に追加されている。

⑥統いて6器種すべてに赤・オレンジ色の直径2.2cmの同一規格であるロゴが普及している。

ただし、ロゴの特徴から同じ陶芸店舗に発注したことがわかる例として、丼第19図1、皿蓋第21図1のロゴは同じであり、丼と皿蓋を組で発注したと考えられる。

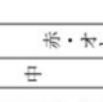
また、小型ロゴは小皿の絵付き菊花皿、丼の小形ロゴ、小鉢の小型ロゴは中央の円が一本独立した、特徴的な型であり、同一店に発注したものと考えられる。

最終的には6器種全器種に同一スタンプが押されていることから、同一店に発注したものと考える。

丼の第20図1のロゴは、スタンプが繊細さを欠き緑色のロゴは角が崩れたもので同じ陶芸店で発注し焼かれたものと考える。

①～⑥まで各々ロゴの特徴があり、発注時にラフ画を渡し、陶器店側によりロゴを作成し、各器に押したものと考えられる。

一般的な、白磁に緑二本線の集団給食器に高崎陸軍病院の病院章をつけたものとは異なり、色物絵付き食器に高崎陸軍病院ロゴが付いたものが幾つか存在している。（第22-1・23-1～4・24-14・15）これらの資料の性格には2種類ある。1つは青色の市販の洋皿に青色のロゴを押して二度焼きした資料である。これは金属製給食器が供出されて、ロゴを付けて焼いた緊急処置的な資料と考える。一つは絵皿の小鉢・小皿に緑色の同じロゴが付されたものが各1点存在した。もう一つは陸軍の位の高い士官以上の人達の食器は、一般の兵隊とは全く異なった食器を持っていた可能性がある。

大色	大Ⅲ (第22図)	小Ⅲ (第23図)	井(熊川形) (第19図)	井(柳形) (第20図)	丼器 (第21図)	小鉢 (第24図)
青						
緑						
中						
小						
						
						
						
						
						
					<img alt="Stamp 169: Circular pattern with a central circle and four radiating lines." data-bbox="655 1015 755 1085	

ペークライト食器（第26図）

この食器は、「万年通宝」の刻印が型に押してあり、昭和24年（1949）に「日本化学高圧株式会社」を引き継いだ、現在の関西合成樹脂工業株式会社（所在地兵庫県姫路市）の製品であることを確認した。

この会社は、大正14年（1925）神戸にて創業。昭和4年に兵庫県姫路市に移転し現在に至る。

フェノール樹脂を自社にて製造し、そのフェノール成形材料にてプラスチック製食器を製造、「萬年漆器」の商標を持つ会社である。

同じ形の丂や蓋であっても厚みや形で2形式存在している。のことから病院側から2回以上、また、12の仕分け皿がいつからかは不明であるが3回以上の発注があったと思われる。

同社に発注・受注履歴が残っていれば正確な資料を呼び起せる可能性があるため、問い合わせしたが古い資料は残っていないとの回答があった。

2・3・8の丂蓋、汁椀蓋の3点には「国高病」の3字が左から右に線刻されている。のことからもエンボス加工のマークが病院の病院章であることが判明した。

統制食器に描かれた高崎陸軍病院のロゴが、戦後の国立高崎病院の給食食器に引き継がれ、使用されていることは、戦後72年間で忘れられた内容であった。今回の発掘調査で明らかにされた高崎陸軍病院・国立高崎病院に関わる遺物群としても大きな発見であると言える。

1は丂、2～5は丂蓋、6・7は汁椀、8・9は椀蓋、10は小皿、11は皿、12は仕切り皿である。

1は外側面中央にロゴ：エンボス加工がみられる。

2～5は丂蓋で2～4は器肉が厚いタイプ、5は器肉が薄いタイプである。2～5は1の丂の蓋としていたと考えられる。摘み部の中央にロゴをエンボス加工している。

6・7は汁椀である。6はロゴを体部に、7はロゴを底部にエンボス加工している。6・7は口径が12.1cmと同じであるが、7の方が器高及び内容量が若干多いようである。

8・9は椀蓋であり、6・7の汁椀の蓋と考える。

10は小皿である。見込み中央にロゴのエンボス加工が施されている。

11は大皿である。見込み底中央にロゴのエンボス加工が施されている。

12は仕切り皿で、通称「国立型」と言われる製品である。国立病院用として製作されたものである。3つの区画に分かれており、特に汁物が交じり合わないように考えられている。現在に至るまで同じ金型で製品を作っている普及品である。

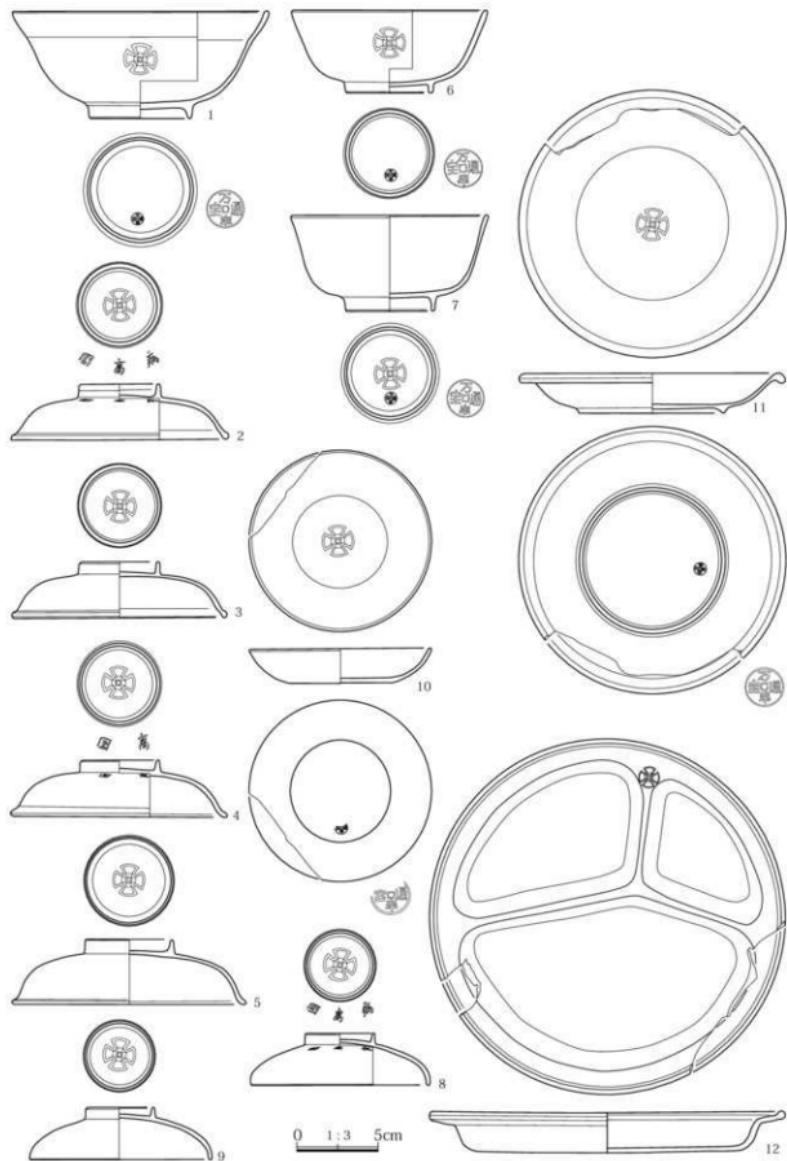
「万年通宝」のエンボスは丂・椀・皿（大小）の底部に刻印されている。刻印は直径8mmの古銭の形をしたもので底部の高台側に寄った位置で万を中央側、年を高台側にして刻印されている。

これら食器はすべて「うるみ色」という色合いである。

「万年通宝」の刻印も器種によって書体が異なっており、刻印も複数存在している。「刻印の金型は確かに複数存在している」と関西合成樹脂工業株式会社から御教示いただいている。

なお、「国高病」は国立高崎病院の略称で刻書したものである。国立高崎病院と改称されたのは昭和20年12月5日であり、この刻書されたのはこの日以降の日程であることは明白である。

国立高崎病院と刻書されているが、ロゴのエンボス加工は高崎陸軍病院であり、その食器をそのまま使用していたと考える。また、クリーム色の樹脂食器の出土もあったため、その後はロゴなしの食器に変更したと考えられる。



第26図 ベークライト給食食器実測図

陸軍食器（第27図）

陸軍食器は磁器で本遺跡では、3種類の器（深皿・飯茶碗・汁碗）が出土している。すべての器内側に☆マークが青色で付けられている。☆の大きさは、2.1cmで、☆の位置は口唇部から平均1cm下側が頂部となっている。

この食器群はすべて裏印に、底部ほぼ中央に四角枠に囲われた「名陶」のスタンプが押されている。名陶は「名古屋製陶所」である。

創業は明治44年（1911）に帝国製陶所として誕生、その後名古屋の資本が入り名古屋製陶所と名称が変更された。大規模で近代的な焼成窯を導入したが、戦争の影響により苦境に立たされ名古屋製陶の鳴海工場は昭和18年（1943）に住友金属工業に買収され軍需工場となる。戦後は「鳴海製陶株式会社」として今に至っている。

陸軍の☆印は白と青色が交互に5か所あるが、十五連隊の☆印は5か所の内2か所だけは左右の順序を異にしたところがあり、頂部の左半が白なのが上と右上、右半が白なのが残り3か所である。

1～4は深皿である。器の大きさは、口径は18cm、器高4.4cm、底径13cmである。

5～12は飯茶碗である。器の大きさは、口径は11.6cm、器高6.8cm、底径10.4cmである。

13～18は汁碗である。器の大きさは、口径は12.4cm、器高7.2cm、底径8.2cmである。

この中で唯一底部に筆茶色で「芳」と描かれている。

高崎陸軍病院湯呑茶碗（第28図）

1～19は磁器の湯呑茶碗である。

1は外側に☆印があるのが陸軍食器である。この☆印は白色と青色が交互になったスタンプを押ししたもので、第27図の陸軍食器の☆の模様・大きさ・星の位置とは異なっている。☆の大きさは2.8cmである。

2～10は「高崎陸軍病院」と筆により、手書きで縦書きされている。2～6は「高崎陸軍病院」のみの絵付けである。

7～10は「高崎陸軍病院」と縦書きされた左側に「兵舎」と縦書きされている。

11は「陸軍御用」と縦書きされている。その右側にも何か書かれているが、不明である。

12は「准士官」と右から左に横書きされている。

13・14は「來賓用」と縦書きされている。

15は「清水」と縦書きされており、個人の名前と思われる。

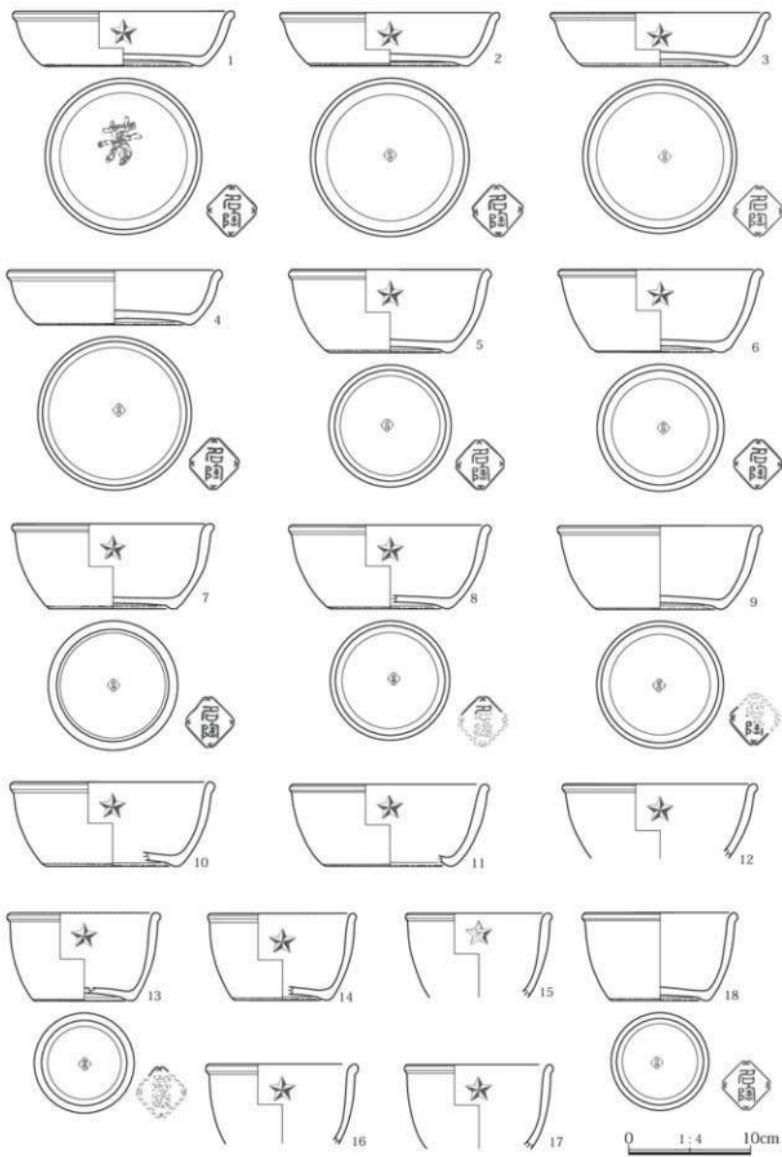
16は青色で「海老」の絵が描かれている。

17・18は緑色の二重圈線が施されている。

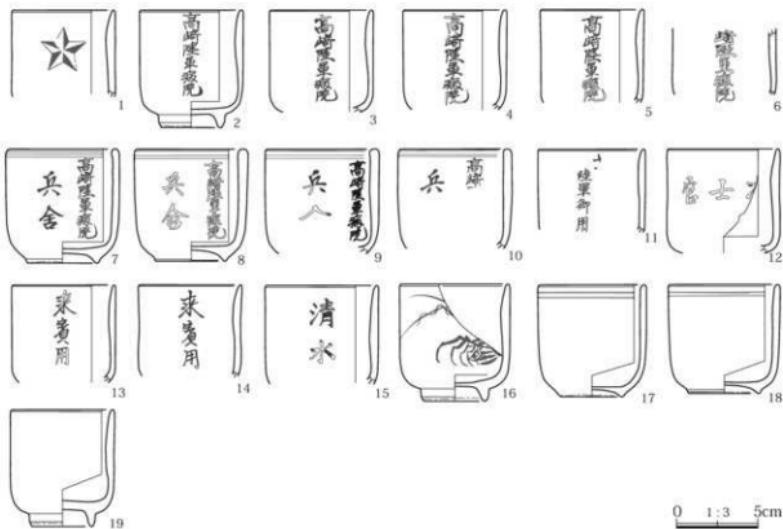
19は白磁で絵付けされていない。

湯呑茶碗の規格は2種類あり、1～6、11～16、19の13点は口縁部が薄く作られている。7～10、17・18の6点は「緑色二重圈線」の一群は口唇部が厚く、底部も削り出し高台である。規格は、口径9cm、底径5.8cm、器高9.2cmである。

2・16・19は付け高台も付け高台である。規格は口径8.4cm、底径5cm、器高9.6cmと2種類で小さく、全体に薄く軽量である。



第27図 陸軍食器実測図



第28図 高崎陸軍病院の名入湯呑茶碗統制食器実測図

統制番号付き食器（第29・30図）

太平洋戦争の戦況の悪化に伴い、資源節約のため多くの企業が生産停止や生産量の制限を受けた。陶磁器業界も影響を受け、燃料節約のため各地区的窯元が何社かに統合され、生産する陶磁器の種類なども制限されていた。この時期のほとんどの作品が簡素な文様になっている。

また、製品に記されていた窯元の銘は禁止され、生産地の漢字1字と番号化した文字が使用されるようになり、これが統制番号である。

統制番号は、昭和16年（1941）から付けられるようになり、戦後もしばらく番号入りのものが作られていた。

統制食器として紹介した緑色二重圈線食器は、統制番号の付いていないものであった。

ここでは統制番号が付けられた食器を紹介する。

緑色二重圈線食器の中でも統制番号の付けられた食器が存在する。

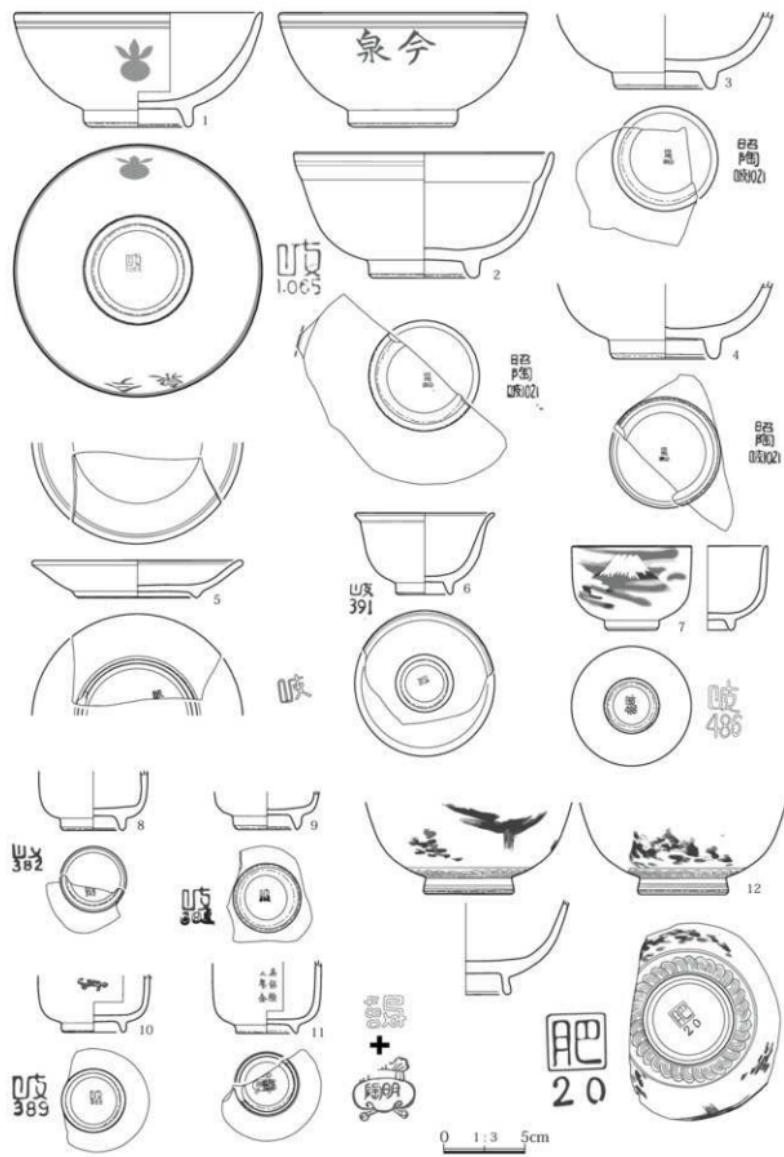
1は緑色二重圈線井完成品で緑色の社章「羽根突きの羽」形が付いているのと「今泉」個人の名前が描かれている。唯一完成品で大きさは、口径15.2cm、底径6.4cm、器高7.0cm、重量は490gである。底部に緑色の顔料で「岐 1065」と押されている。

2～4は熊川形井で底部に青色で「昭制岐 1021」と押されている。

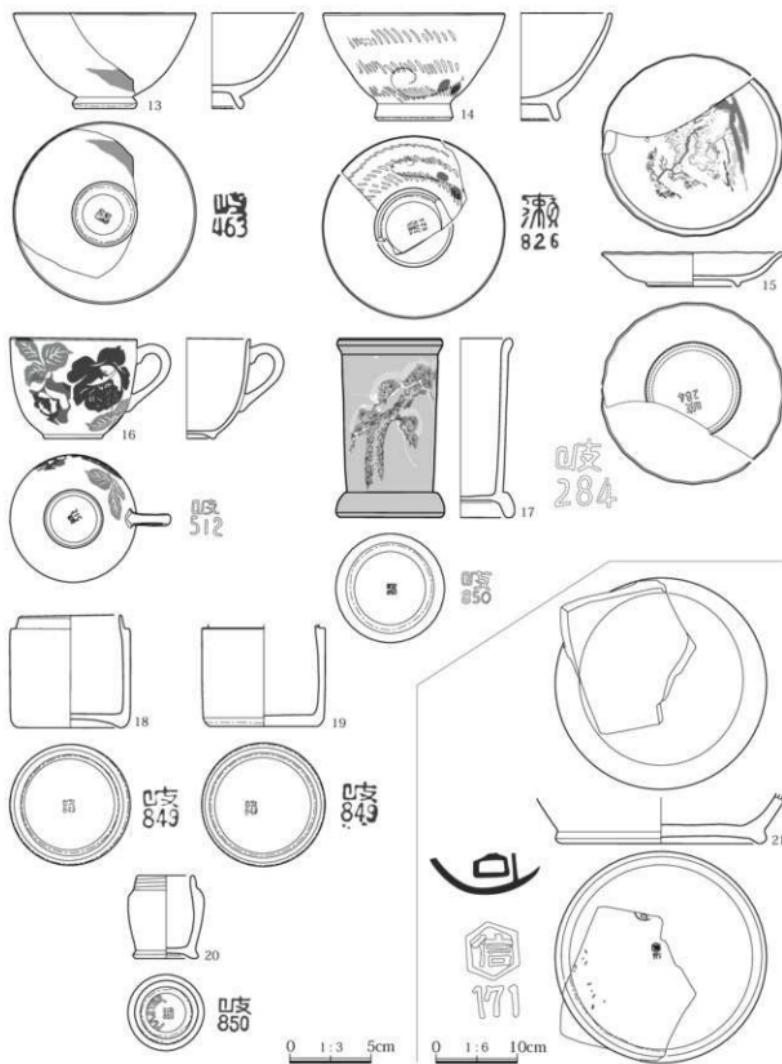
5は小皿で緑色二重圈線で底部に「岐」の陰刻があり、下部の数字は欠損している。なお、小皿群の中で唯一底面に二重稜線がないものである。

6～11は湯呑茶碗である。6は緑色二重圈線で出土の例がない形のもので、口径8.6cm、底径3.5cm、器高4.9cmである。底部に緑色顔料で「岐 391」と押されている。

7は富士山柄の絵付けで当時大変人気のあった絵柄という。底部に「岐 486」と陰刻がある。



第29図 統制番号付き食器（1）



第30図 統制番号付き食器（2）

8～11は筒形の湯呑茶碗の下部片で口縁部は欠損している。

8・9は底部に緑色の顔料で「岐 382」押されている。

10は側面に青色の絵付けがあるが、文様は不明である。底部に緑色で「岐 389」と押されている。

第3表 統制番号付き陶磁器一覧

編號	番号	種別	器種	法寸 寸(厘米) 高さ			裏印	目印種類	器の色	登録者名	成形、整形の特徴など	現存状態	
				横幅	直径	厚さ							
2900	1	磁器	井筒 梶田	15.2	6.4	7.0	岐1065	スタンプ	緑	柳田町	内面:緑色刷毛絞り下部で赤い網目。マーク1(丸)	ほぼ完形	
2900	2	磁器	井筒 梶田	—	6.4	8.2	岐1021	スタンプ	緑	柳田町	外側:緑色刷毛絞り上部と「足立」の文字。 内面:緑色刷毛絞り下部で赤い網目。	1/3	
2900	3	磁器	井筒 梶田	—	6.4	14.0	岐1021	スタンプ	緑	柳田町	内面:緑色刷毛絞り下部で赤い網目。	底部欠け	
2900	4	磁器	井筒 梶田	—	6.4	14.0	岐1021	スタンプ	緑	柳田町	内面:緑色刷毛絞り下部で赤い網目。	底部欠け	
2900	5	磁器	小田	12.8	7.3	2.3	岐	緑	柳田	—	外側:緑色刷毛絞り下部で赤い網目。	1/3	
2900	6	磁器	山口茶碗	8.6	3.5	4.0	岐301	スタンプ	緑	柳田町	外側:緑色刷毛絞り下部で赤い網目。	1/2	
2900	7	磁器	山口茶碗	7.4	3.3	5.2	岐486	緑	柳田	柳田	赤茶	外側:赤茶上山	完形
2900	8	磁器	山口茶碗	—	3.8	3.0	岐382	スタンプ	緑	高山	吉川木子一郎	内面:青無文	底部
2900	9	磁器	山口茶碗	—	3.8	12.0	岐382	スタンプ	緑	高山	吉川木子一郎	内面:青無文	底部欠け
2900	10	磁器	山口茶碗	—	3.9	3.0	岐389	スタンプ	緑	高山	柳田平一	外側:赤茶色絞り下部あり 内面:青色絞り	1/2
2900	11	磁器	山口茶碗	—	3.6	14.0	岐480	押印	緑	柳田町	山口 喬郎男	外側全体赤絞り山口で「無易保険・人年金」	1/5
2900	12	磁器	井筒	—	5.6	15.0	岐20	スタンプ	黒	柳田	肥前燒	外道 井筒 刷毛絞り 柳田町	1/3
3000	13	磁器	飯茶碗	11.4	3.8	5.8	岐463	スタンプ	緑	岐山	柳田松太郎	外道 飯茶碗刷毛絞り 岐山町	1/3
3000	14	磁器	飯茶碗	11.1	4.8	6.0	岐257	スタンプ	青	岐山	柳田松太郎	外道飯茶碗刷毛絞り下部あり 岐山町	1/5
3000	15	磁器	洋食器	11.1	5.8	2.3	岐284	緑	柳田	伊藤 博	外道洋食器刷毛絞り 岐山町	3/4	
3000	16	磁器	把付カップ	7.8	3.7	6.2	岐512	開	柳田	岐山 中山殿次	外道洋食器 岐山町	完形	
3000	17	磁器	蓋立	6.3	6.5	11.0	岐850	緑	柳田	下石野 安藤桂	外道把付蓋立 岐山町	ほぼ完形	
3000	18	磁器	蓋付瓶	6.2	6.6	6.8	岐849	スタンプ	緑	下石野	林 太郎	内面青無文 下石野町	1/3
3000	19	磁器	蓋付瓶	6.2	6.6	6.8	岐849	スタンプ	緑	下石野	林 太郎	内面青無文 下石野町	1/3
3000	20	磁器	化粧瓶	3.6	3.6	9.2	岐850	スタンプ	緑	下石野	安藤桂	蓋大根 岐山町	1/3
3000	21	陶器	鉢	—	28.1	12.0	岐171	緑	柳田	近藤徳	外道色絞り 岐山町	底部黒色スタンプ 岐山町	欠損

11は側面に縦書き二行で「〇易保険 〇人年金」と赤色の顔料で押されている。底部には、赤色で「袋」の中に「明陶」としまわれている。その下に「岐 480」と陽刻されている。

12は井戸部に松の絵、下部に二重線を引き高台を付けた括れまで鱗状のスタンプが連続している。高台にも二重線を施している。底部には、同一顔料で「□内に肥 20」が押されている。

13・14は飯茶碗である。

13は側面に緑色の文様がある。底部に緑色の顔料で「岐 463」と押されている。

14は側面に横位三段の連続刺突文が一周している。さらにその上絵でひげを茶色、丸い実を赤茶で描いている。底部には青色で「瀬 826」と押されている。

15は菊皿である。青色で口縁部に1条の線と見込みに「松・岩・小屋・岸・川か」描かれている。底面には「岐 284」と陽刻されている。

16は洋食器のコーヒーカップの完形品である。側面には赤茶のバラの花を2輪、緑色で葉を左上、右下にスタンプしている。口唇部にも赤茶の1条の線を描き底部に「岐 512」と陽刻されている。

17は箸立の完形品である。底部に「岐 850」と陰刻されている。

18・19は磁器で作られた蓋付瓶である。蓋はない。内面は白磁だが、外部は薄い黄緑色をした釉薬が掛かっている。底部には緑色の顔料で「岐 849」押されている。

20は化粧瓶で底に「MASTER」のエンボスと緑顔料で「岐 850」が押されている。口縁部はスクリューポートとなっている。

21は鉢で底部に「六角形内に信」その下に「171」と印刻がある。

また、黒インクによる丸型スタンプも押されている。底部豊付きにも丁寧に釉掛けしている。見込みに自然釉が点々と掛かっている。

特殊遺物（第31・32図）

セルロイド製のカード（第31図1～7）

全部で7枚発見されている。出土位置は二ノ丸南堀で焼却灰の中から同一場所で発見された。赤色が1枚、青色が6枚発見された。

短冊形のものが5枚、方形のものが2枚である。

1～5は、短冊で縦7.1cm、横3.6cmである。1～4は青色で、5は赤色である。

国名前が縦方向メインにあり、1・2は「伊太利」の上に「防共親日」、3は「満州國」の上に「防共親日」、4は「新支那」の上に「防共親日」と字は白字である。

5は字を短冊の長軸に合わせて横使いで「ソ聯」の上に「共産主義」と黒字で印刷がされている。青色カードと赤色カードの違いは、青色は右から左に読むものであるのに対して、赤色「共産主義ソ聯」だけが左から右に読むもので、青色カードは縦使いで赤色カードは横使いである。

6・7の方形のものは2枚とも青色で「日軍」の上に「防共」と印刷されている。大きさは3.6cm角で、形は隅丸方形で厚さは0.1mmである。

その他、共産主義のソ連だけが赤色カードというのは、一目でわかる状態を作っている。

これらのカードはすべて裏側にのりが付けられたシールとして使用されており、剥されて同一地点に一括廃棄されたものである。

銃弾（第31図8・9）

旧日本軍のライフル銃の銃弾が2点出土している。

2点とも高崎城二ノ丸南堀の調査中の出土である。

1は銅製の銃弾で縦3.2cm、横0.65cm、重量9.6gである。緑錆に覆われた先端は丸く尖り、基部は穴が開いて内部に白い物質が充填してある。基部はやや押されており、梢円形に変形している。

2は銅製の銃弾で縦3.2cm、横0.65cm、重量9.2gである。緑錆に覆われた先端は丸く尖り、基部は穴が開いて内部に白い物質が充填してある。

万年筆（第31図10）

1本確認された。キャップの鉄製のフックは欠損している。

キャップあり長さ12.7cm、キャップなしペン本体長さ11cm、握り部径1.2cm、重量8.7gである。ペン先には、[Newest/W arrantd/Iridium/pen]と4段に刻まれている。ペン先の長さは2.1cm、幅0.7cmである。軸の長さは9.0cmで、軸部は10角形を呈し、2条の平行沈線から端部は、2.2cmで尖っている。

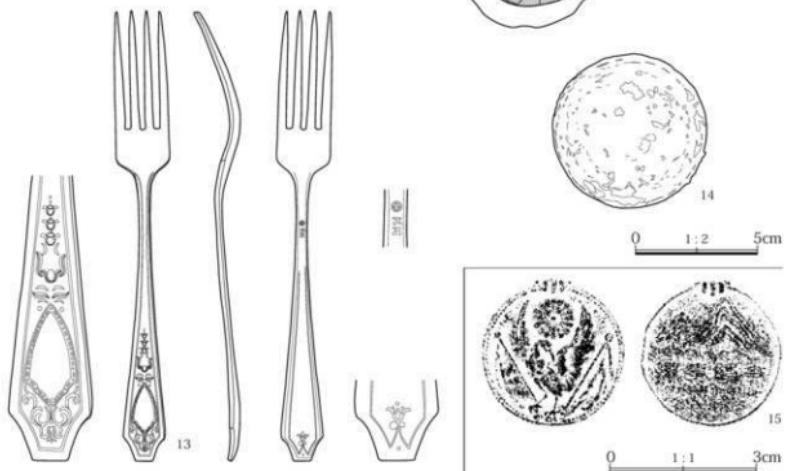
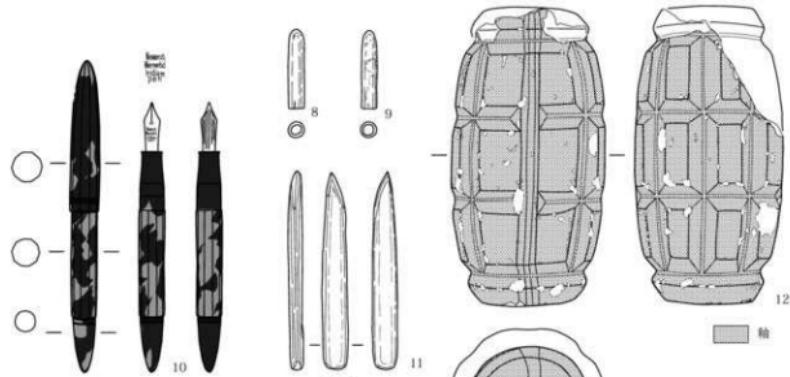
キャップ長さ6.1cm、キャップ径1.3cm、十角柱で端部は尖っており、合わせ部は2条の沈線が巡る。キャップの内側の合わせ部は0.6cm、その奥に0.6cmのネジきり部が存在する。

色調素材は、黒を主体にベッ甲色でセルロイド製と考える。製作技法としてベッ甲柄のセルロイドを巻き付けて加工している。

今回調査の出土品としてインク瓶が多く出土していることから、これらの万年筆で字を書いていたことが理解できる。

籠（第31図11）

先端は尖らせ、基部は丸く仕上げている。縦8.1cm、横1cm、厚さ0.6cmである。素材は骨製。



第31図 特殊遺物実測図(1)

投擲練習用陶製手榴弾（第31図12）

本品は、爆発させる戦闘用の手榴弾ではなく、手榴弾の形をした投擲練習用の模擬弾である。

完形品ではなく、片側の端部を一部欠損している。残存長は、12.1cm（復元長12.2cm）、直径6.0cm（端部径3.6cm、最大幅6.6cm）、重さ472.7gである。

造りは上の型と下の型に粘土を詰め、合わせにより造られている。合わせ部分は溢れた粘土をヘラ等により整形している。両端を厚さ1.5cmの円盤状に造り、残り円筒部は3等分に縦に区画し、横向きに8等分に区画し、短冊区画を24としている。色調は赤橙色である。陶土は白黄色であり、表面は着色したものと考える。

なお、「高崎城遺跡VII・IX」では手榴弾そのものが7点、実際に発掘調査されている。（p6）本品と形状については両端が突出している点など似ている。

フォーク（第31図13）

大きさは縦18.5cm、横2.2cm、厚さ2mmである。

このフォークは、持ち手には盾のマークに花・植物等の文様が入れられている。裏面端部に花、括れ部には「〇の中に十・K M」の刻印が施されている。

鉄球（第31図14）

大きさは直径6.3cm、重さ1.037.5gの鉄の塊である。

従軍記章（第31図15）

日本が参戦した戦役・事変に関わった人物へこれを顕彰するために日本国から贈られる記章である。支那事変従軍記章 昭和14年7月勅令496号制定、昭和21年3月29日勅令177号を以て廃止。

デザインは日名子実三。支那事変に従軍した軍人に与えられたものである。昭和14年。

これは直径2.9cm、厚さ2mm、重さ15.3gである。メダル上部で鳥の足状の爪部で折れており、リボン及び飾り金具等は欠損している。

表面は菊花御紋章と八咫烏・軍旗・軍艦旗、瑞雲および光の図が翼を広げた形で描かれ、翼の中に16弁の菊の御紋章を配している。

裏面に山・雲・および波の図「支那事変」と刻む。

鉗（第32図16・17）

貝製の鉗2点である。16の大きさは、直径1.15cm・厚さ0.3cm、重さ0.4gである。中央4穴。

17の大きさは、直径1.3cm・厚さ0.3cm、重さ0.4gである。中央2穴。

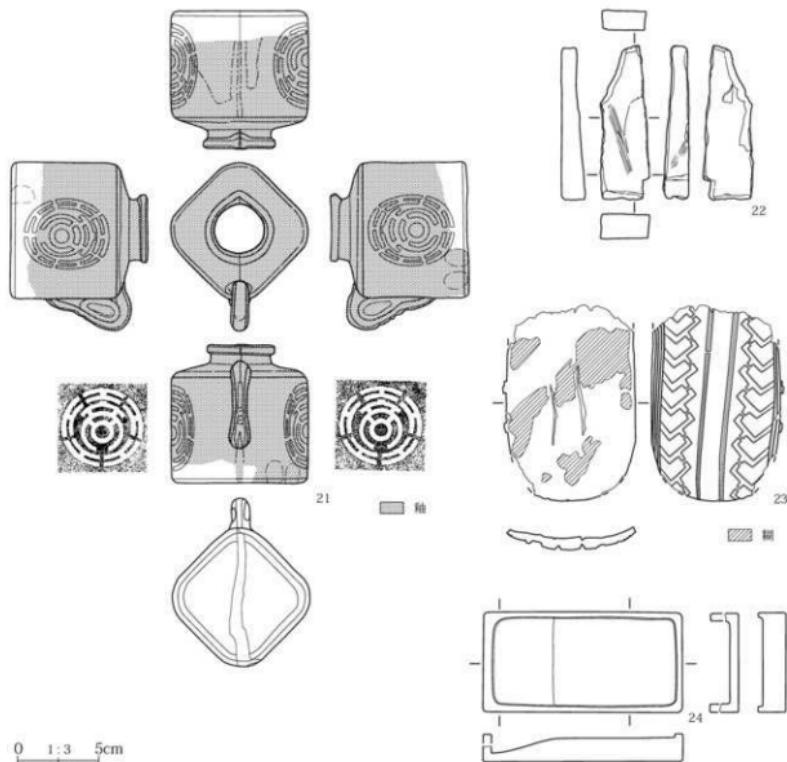
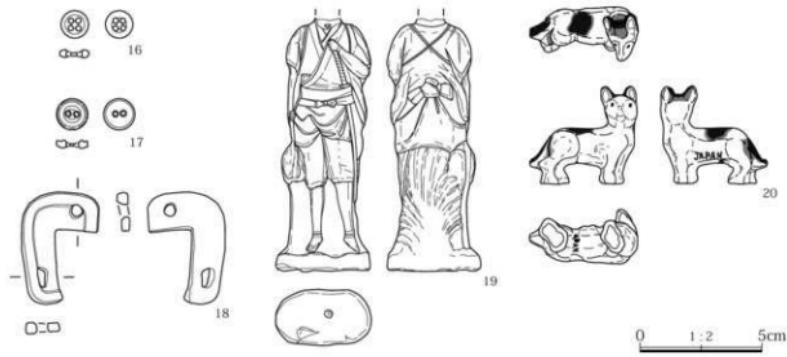
銅製品（第32図18）

18のL字形銅製品は長さ3.4cm、幅3.2cm、厚さ0.45cm、重さ23.7gの銅板で形状はL字状で両端に孔が穿たれている。

人形（第32図19・20）

19は任侠人の人形で首が欠損している。残存高は10.4cm、幅4.5cm、厚み1.8cm、台高0.8cm、幅4.8cm、奥行き2.3cm、重さは7.6gである。着物の裾・袖をたくし上げ、襷掛けし、腰帯左脇に刀を差し、右手に袋を下げた人形である。全体に黄色の塗料が付着している。台の中央に3mmの孔が、首の折れた力所にも3mmの穴があり、中は中空仕上げの磁器人形である。

20は磁器犬の完形品である。腹部に「J」が抜けた「A P A N」と茶色で印判され袖掛けされて焼かれている。また、左腹部に「J A P A N」と印刻され、透明釉がそこを埋めて不鮮明となっている。



第32図 特殊遺物実測図(2)

全体に白毛で頭・腰・尻部分の3か所に黒毛のブチ犬である。大きさは、高さ4cm・背中高2.3cm、幅1.6cm、長さ4.5cm、重さは10.4gである。中は空洞である。

お茶容器（第32図21）

このお茶用陶器は、左右半分ずつの型作りで貼り合わせている。合わせ部分のはみ出し部分はきれいに削り取られている。

素焼きで色調は白橙色である。高さは8.5cm、一辺が7.2cmの方形柱で、角部に耳状の把手が付いている。口縁部は方形柱を絞って円形の口縁が設けられている。口径は4.2cmで角部に注ぎ口が付いている。左右の角部には高崎飛行場のロゴと考えられるエンブレムが付けられている。

文様は直径5cmの円形に飛行機を陽刻で5機配し、中央に径3.5cmの中に高の字を印刻で図案化している。縦4.8cm、横5.1cmで縦に比べて横方向が3mmほど長い。

素焼きされた器の上に薄茶の釉薬を薄く掛けている。底部腰部に指の痕が3本あり、3本指でつかんで逆さにした器を釉薬に付け込んだものと考える。ただし、この器は釉薬が完全に焼けていない失敗品に近いものである。

※高崎飛行場

高崎城の烏川挟んだ西対岸に乗附練兵場があり、この地の一部が高崎（乗附）飛行場となっていた。

関連する遺物として中島飛行機の湯呑茶碗蓋（第33図1）に統制食器として会社の社章が印刷されおり、中島の「中」の字に飛行機を廻りに3機を配しているロゴがある。

これと同様に高崎の「高」の字に飛行機を廻りに5機を配した印刻が左右2か所にエンボス加工している。のことからお茶容器は、高崎飛行場に関係した品物である可能性が高いと考える。

※高崎飛行場についての歴史（高崎市史参考）

明治41年（1908）に十五連隊は片岡村乗附に射撃場を持っていたが、公園に接する作業地と交換に市から乗附に練兵場用地を取得、射爆場と一体化した。

明治43年（1910）には、片岡村農民から練兵場用地12haを買収し、乗附練兵場を完成させた。

大正5年（1916）には、片岡村城山付近に約9haの土地を得て、城山射爆場とした。

昭和7年（1932）高崎商工会議所議員総会にて、「高崎に飛行場を設置し、定期航空路も開設したい」という要望が可決された。

軍部に対して飛行機の払い下げ交渉、飛行場の設置、パイロットの養成などを図るために「航空普及会」を組織し、広く市民有志に賛同と協力を求める。

昭和8年（1933）飛行場設置調査委員会が組織される。発足式は高崎商工会議所で行われ、会長に土谷全次高崎市長となる。練兵場の一部を借り受け、滑走路の造成、格納庫も建設された。

同年11月14日高崎号初飛行を行う。

練兵場の位置は昭和6年（1931）の高崎市全図に練兵場が描かれている。

昭和15年（1940）「群馬県立高崎中学校」が当飛行場を滑空場として使用したという記録を最後として、昭和20年（1945）終戦を迎える。

このお茶容器は、高崎飛行場に関わる要所へで行われた会議・総会・委員会・イベント等の時、お弁当と一緒に配られたお茶容器であったと考えられる。

高崎（乗附）飛行場のロゴが存在したとすれば、高崎飛行場の遺物としては、唯一の遺物かもしれない。

砥石（第32図24）

砥石で大きさは縦9.6cm、横3.1cm、厚さ0.8cmである。

麻裏草履（第32図23）

草履の表は麻を編んだものに庵タイヤが縫い付けてある。草の編んだものはすべてなくなり、タイヤの裏側は接着剤が付着していて斜め45度に1mm毎の筋が認められる。先端半分が欠損。大きさは縦12cm、横8cm、厚さ0.4cmである。

硯（第32図24）

大きさは縦12.2cm、横6.1cm、厚さ1.6cmである。海側の縁部が欠損している。

湯呑茶碗蓋（第33図）

湯呑茶碗蓋は、22点出土している。

1～9は青一色の絵付けの蓋である。

1は口縁に青色の一重圓線を入れ、摘み部下にも青色の一重線を入れている。表面に「中」を中心としたロゴが青色で描かれている。このロゴは「中島飛行機」の社章であり、中央に中島の中を置きその周りに3基の飛行機を丸く円形に表現している。

「中島飛行機」は「富士重工業株式会社」を経て「株式会社SUBARU」として存続している。

2は薄い色のスタンプを押した後に濃い青色で手書きにより絵付けをしている。

3は印判で幾何学的な花模様を描いている。

4は二重圓線と摘みを囲う様に円形を8点同一間隔で配置して花柄にしている。

5は木製の車輪状の文様に描いている。

6・7は吹墨で絵付けされ、6は葉・7は雲と空を描いている。

8は手描で山・松などを描いている。

9は放射状の成形を残し、その後3条の同心圓文を施している。

10は鉄軸で「一味○○」と筆書きされている。

11～21までは2色以上の彩色を施している。

11は山ぶどうの葉と実を描いている。

12は南天の葉と赤い実、摘み部上部に赤の圓線を描いている。

13は青と赤茶色の2色で達磨を青で腹を赤茶で描いている。

14は白の花びらと朱色で中央の雌蕊、褐色の葉を描いている。

15は灰色とピンク色を筆先で点描している。摘み部上部に○、縁に金彩で圓線がある。

16は格子目模様を銀色と赤茶色でスタンプ押ししている。

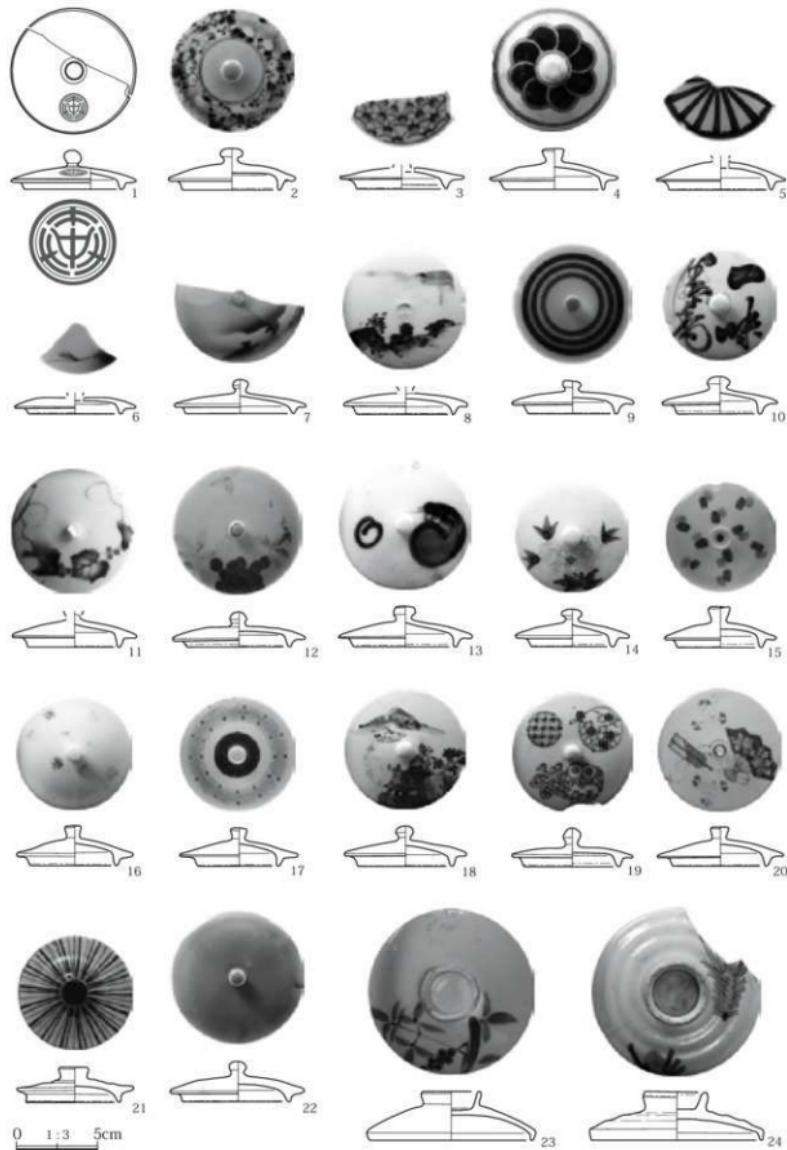
17は空色地に花柄を銀色で連続、摘み部下に赤地に鱗状の文様を金色スタンプで連続させている。

18～20は文様の違いかあるが同じ色合いのものである。

18は風景画で山・舟・川・家・松・柿が緑・黒・茶・赤茶色で描いている。

19は円形の文様を基調にしたもので黒の七宝つなぎ・赤の花枝・緑の葉文と黄色の実、緑の五三の桐文がある。

20は閉じた扇子と開いた扇子・花が赤・黄・緑・白・金・黄緑色で描かれている。



第33図 湯呑茶碗蓋・小鉢蓋実測図

21は十草文様で放射状にオレンジ・青・灰色を細線で彩色している。唯一陶器で釉薬に貫入が認められる。

22は文様は無く、内外面を薄緑で施釉している。

小鉢蓋（第33図）

23・24は小鉢蓋である。

23は南天の実を赤茶で葉を空色・枝を茶色で描いている。

24は松の葉と松ぼっくりを2個描いている。

湯呑茶碗（第34・35図）

湯呑は3種類の形がある。一番多いのは楕形（第34図）、次に筒形（第35図1～14）半筒形（第35図15）である。

楕形（第34図）は、70%強の出土である。

1～6は青絵に赤茶色の2色で描かれた一群であり、1は百合の花、2は薔薇、3・4は達磨、5は南天、6は竹と千両を正面に描いている。達磨だけは裏面に円が描かれている。

7・8青絵に赤茶色・藤色の3色で描いている。

7は藤の花が書かれ、8は不明である。

9～15は深緑を主として、赤茶の2色で描かれた一群である。

9は山水画、10・11は竹・千両、12は菊、13は松に丹頂鶴、14は薔薇を描いている。

15は深緑と赤茶に藤色を加えた3色の絵柄で松の枝を意味していると思うが、文様が不明である。

16は梅の枝を黒色で、梅の花をピンク色で赤茶色を梅花つぼみで3色で描いている。

17～20は青絵にピンク色の2色で枝部を緑・茶で表現している一群である。

17は蘭、18は梅・竹、19は楓の葉と種子、20は梅が描かれている。

21は薄い緑色を主にして八手の葉を二枚茶色で描いている。

22～24は青絵付けによる一群である。

22は扇面に萩と菱形文を描き、菊を周辺に配している。

23は2種類の花と葉をすべて手書きしている。他の湯呑と比べて背が低い。

24は松葉を亀甲柄に連続させ梅花5輪を配している。底部に「舟山」が縦に書かれている。

25～32は九谷焼である。底部に赤色の九谷印が押してある。25は正面に達磨大師と蚊、裏面に分銅形の中に敷島、「結果自然成 京月」が描かれこれと同じ絵柄のものが第37図12にもある。禪宗の初祖菩提達磨大師が慧可に伝えた伝法偈の中の一偈と伝えられている。「正しい目的に向かって日々たゆまぬ努力を続ける人には、必ずそれ相応の結果が現れる。その結果はまるで季節が遙れば自然に果実が熟するように人間の思惑や計らいを離れていく。」という意味の禪語である。

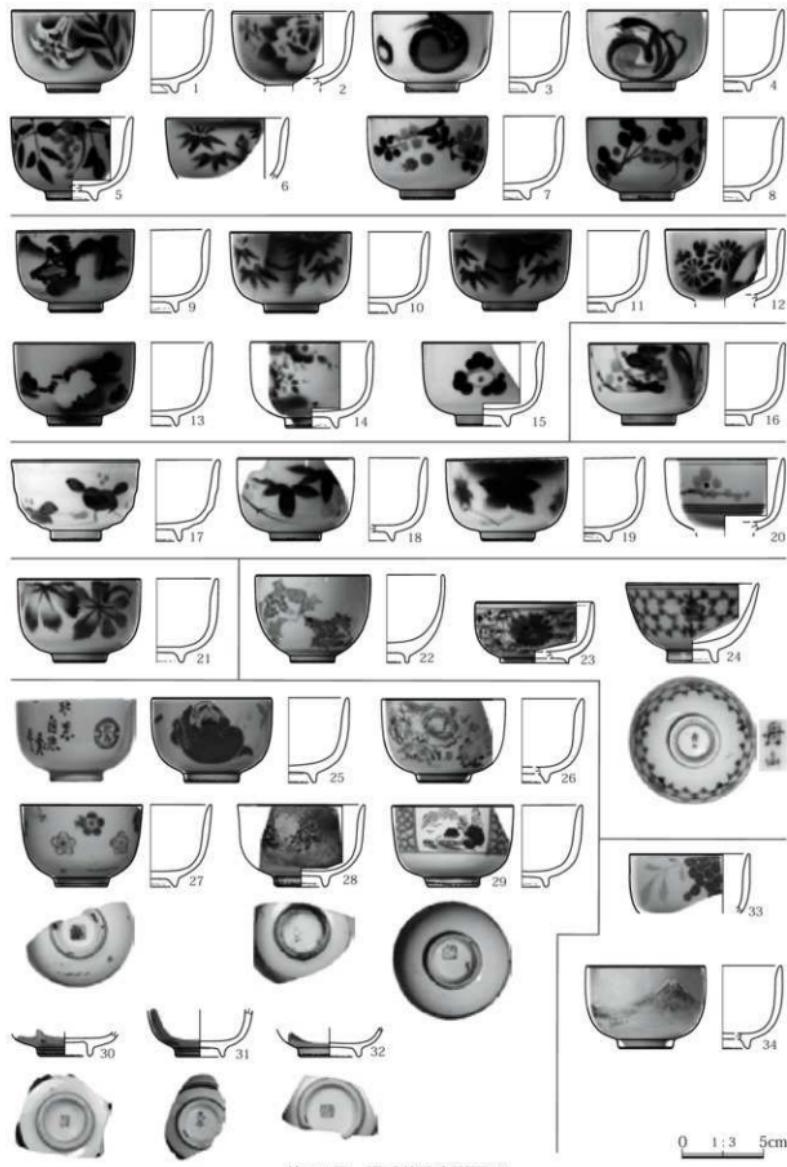
26は牡丹と菊を描いている。

27は梅の花を上段を紅梅、下段を白梅で描いている。

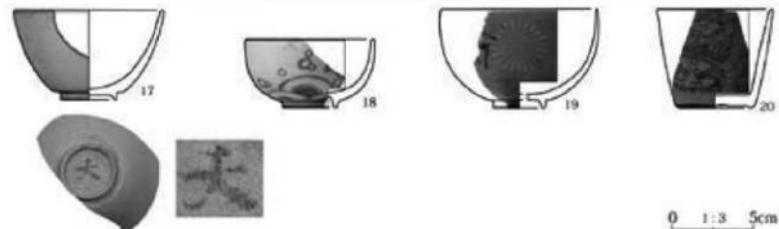
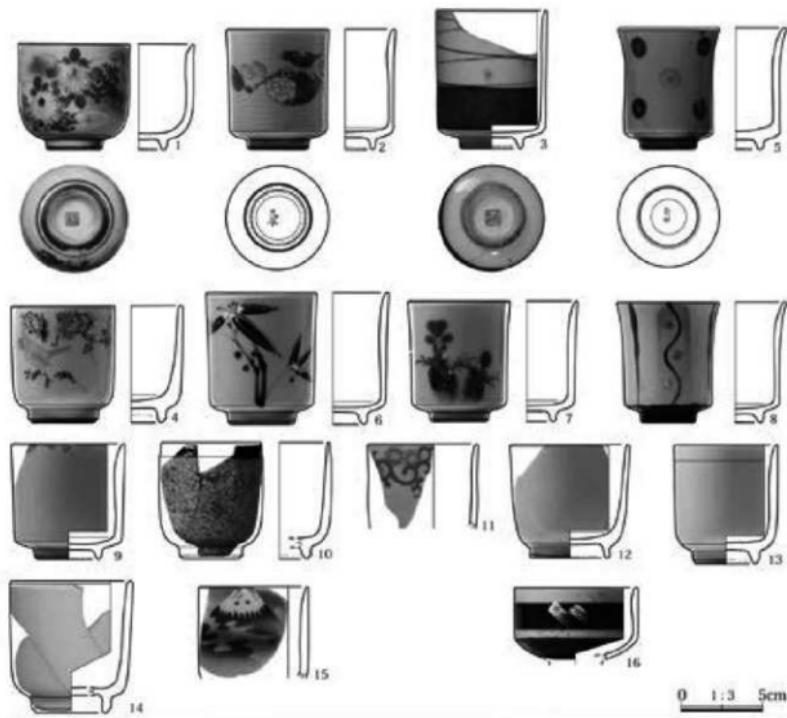
28は茶色を下地に紅白の菊と緑の葉を描いている。底部に赤色縱書きで「九谷」の文字がある。

29は体部に松枝の幾何学模様と山水・家・舟・岩・木などの風景絵を3単位で描いている。底部に「□の中に九谷」の赤印がある。

30～32は底部片で30は「加賀九谷」、31は「九谷」と縦に、32は「□の中に九谷」の赤印がある。



第34図 湯呑茶碗実測図(1)



第35図 湯呑茶碗実測図(2)

33・34は九谷印は確認できないものの九谷の可能性がある。33は南天、34は薄い黄色の彩色に富士山の山頂に雪が被った絵に左側には松林が描かれている。

筒形(第35図)は、湯呑茶碗の中で22%である。

1～4は九谷焼である。1～3は底部に赤で「九谷」印がある。

1は正面に菊の花を2輪と萩、裏面に1輪を他の花と盛り合わせた状況が描かれている。

2は表面に縦・横の格子模様があり、粗い布を押さえた状況で薄い空色釉掛けで袋に軍配、小判が

描かれている。

3は腰部に縁帯を設け、その上半に細い黒線と金線を螺旋状に逆方向で描いている。

4は梅花に鳥が止まっているところを描いている。鳥は銀色で描いている。

5は有田焼である。16弁の菊花文を金色の縁取りで赤・白・黒で12点描いている。底部に赤で「有田」と縦に書いている。

6・7・9は薄い黄緑色の釉薬を掛けている。その後に6は万両、7はクロッカスを描いている。

8は灰色の釉薬を掛けた後、茶色の縱線、垂下する蛇行線にピンク・緑・黄色の点模様を3単位で施文している。腰から底部は茶黒色で施釉されている。

9は無文である。

10は表面に灰色のザラザラした黒色粒を混ぜた物を吹き付け☆マークを挟み「記念」文字を隆帯で表し、金飾りし、下に「歩二〇」と金文字を書いている。口縁は黒帯に菊花などを金飾りしている。陸軍、歩兵二十連隊に関係する記念湯呑茶碗と考える。

11は黄色の釉薬を掛けた後、菊と唐草文を金地で描かれている。

12～14は白い磁器で無文である。

15は富士山に雪が降って雲が周囲に被った構図であり、富士山画はこの時期非常に好まれていた。

16は半筒形で腰下は茶色、薄い空色を主に縁の幅広横線に白と金色点を配している。

17～19は陶器茶碗である。

17は透明釉をかけている。底部に墨書で「天」と書かれている。

18は茶色と黒色で青海波文様を描いている。透明釉をかけているが細かな貫入が認められる。底部に文字があるが破損していて判読できない。

19は灰色の施釉し、花の絵を白色で花火のように描いている。

20はそば猪口で青色の印判で点描の雲に鶴が描かれている。

土瓶（第36図）

土瓶は同じ種類のものが4～5個体存在しているが一番条件の良いものを紹介する。

1・2は組み合わせ品である。この土瓶は現在も作られている普及品であり、通称「魚絵土瓶」という。この土瓶は、給食にお茶を配るために使用されたものと考える。

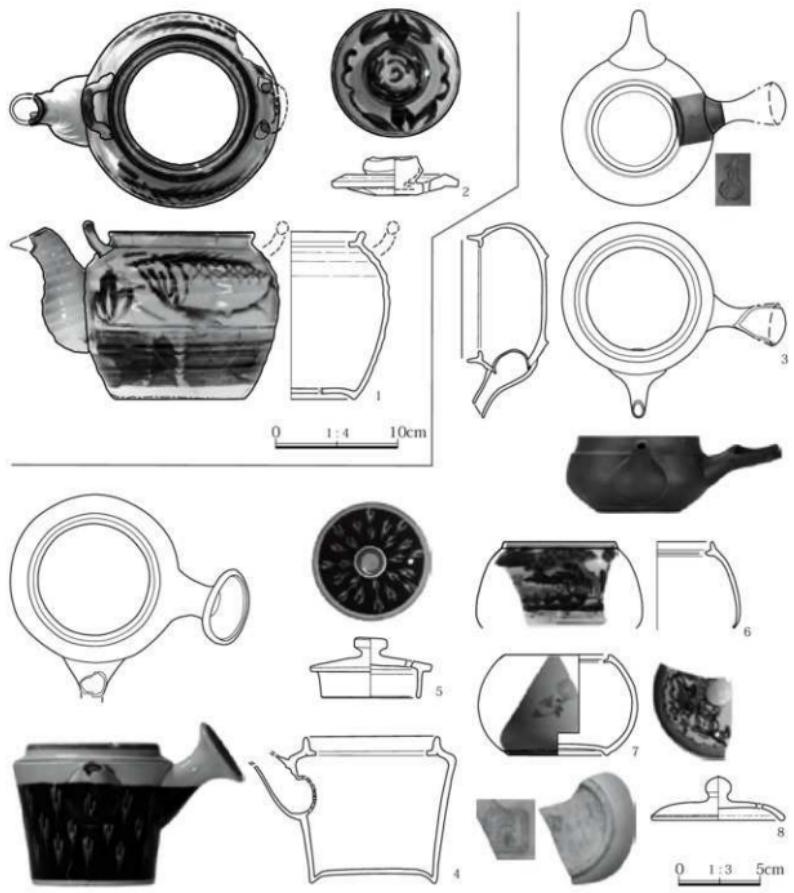
急須・蓋（第36図）

急須は本体が4点、蓋が2点である。

3は三重県四日市の焼き物「萬古焼」である。紫泥の急須で把手の下側に陰刻で「瓢箪形に光」の刻印がある。

4・5の急須・蓋の揃いのものは本品だけである。4は注ぎ口を欠いているがそれ以外は完形品である。口縁は二重圓線で、肩部から下と底から5mm上までを藍色で施釉した後に尖った工具により藍色の釉薬を上から下方向に4本1単位で白い矢状に搔き取っている。5の蓋は完形品で内側に「白山」と陰刻の丸印がある。摘みには二重圓線が、4ヶ1単位の白い矢が中央の摘みに向かって8単位で文様構成されている。同じく体部にも4ヶ1単位の矢が下に向かって12単位で付けられている。

6は急須本体で把手・注ぎ口は欠損している。体部に柵付きの入母屋の屋根を持つ3棟の建物、松・



第36図 土瓶・急須及び蓋実測図

林・岩などが描かれている。すべて手描きである。体部の厚みは1mmと極めて薄く仕上げられている。

7は急須本体で、正面に菊の花を灰色・黄色、葉を茶色で描いている。底部に「□額に東海」と縦に配する緑色のロゴが押されている。

8は蓋で摘みを残し、手描きで花等を描いている。一か所直径3mmの孔が穿ってある。

酒器（盃・徳利）（第37図）

盃（第37図）

盃は磁器で筒形と椀形の2種類がある。

筒形は1～3の3点で、ほぼ同一規格口径3.8cm、底径2.8cm、高さ4cmである。

1は「銘酒群鶴ゲンカク」(安中市「十一屋」)、2は「清酒東錦アズマニシキ」(宇都宮市「外池莊五郎商店」)、3は「銘酒源氏」の青顔料でスタンプしている。これらは酒蔵会社からの宣伝用試供品である。

3の銘酒は右から左に書かれている。3のみは溶接に関係する仕事に使われたのか全体に鉄の付着物がある。

4～9は楕形である。

4は若干口唇が開く器形で、青色により横方向の一筆書きが一周させている。

5は無文である。

6は大きな盃であるが、酒用の盃ではなく、仏具的な品物の可能性もある。口唇部・腰部・底部に赤の線が施され、体部には2輪の菊花を赤・金・黄色、赤・青・黄色で両側には葉を緑のスタンプでさらに外側には赤色の雲形スタンプを押している。

7は外形腰部で8角形で角落としを行く16角形となっているが、口縁・付け高台は円形である。文様は菊花と五七の桐文を交互に並べ上下に唐草文を並べている。

8は無文である。底部に「○の中にハ」の陰刻が押されている。

9は陶器で内面白の施釉、外面は灰色の施釉に白の「×とへ」の幾何学文を手描きで施している。

徳利（第37図）

10～12は徳利である。

10は頸部と胴部に青顔料で二重線亀甲柄を描き、その亀甲柄内に菊花を配置している。頸の亀甲は3段、胴の亀甲柄は6段で2羽の丹頂鶴が描かれている。灰釉を掛けている。内面はロクロ水引成形の痕跡が明瞭に認められる。内面上半は工具を使っている。

11は薄い緑色の施釉がある無文のものである。

12は九谷焼で正面に「達磨大師と蚊と松明」が描かれている。背面に「結果自然成 玉年」赤色で「□の中に九谷」と描かれている。湯呑茶碗にも同じ図柄（第34図25）のものがある。

11は7mm、12は5mm上げ底になっている。

火鉢（第38図）

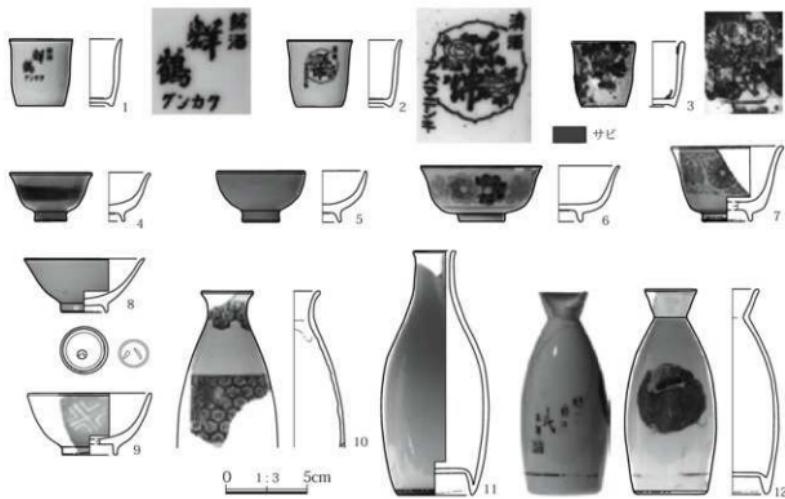
火鉢は2点である。

1は丸火鉢で、口径30.4cm、底径23.6cm、胴幅33.0cm、高さ23.5cmである。口縁は幅3.3cm、内側に幅3.4cmで折れて垂れて、鉢の断面形は胴中央が丸く張る太鼓型である。

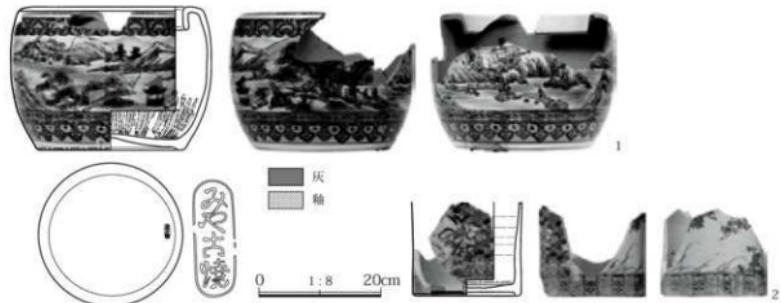
口唇部・口縁部と腰下部に幾何学的印判が施されている。胴部は山水画（山・水・松・家・複数の人・橋など）を全側面に描いている。内面の腰から見込みにかけて自然釉が玉垂れが多く認められる。

底部に縦7.3cm、横1.9cmを測る「みや古焼」と小判型の陰刻がある。

2は筒形のもので口縁は欠損している。底部から3.4cm幅に幾何学的文様の印判を施している。胴部は楓の木を中心にして菊の花他一花が描かれている。底径16.7cm、胴幅18cm、残存高15.3cmで底部を削り出し高台で7mm位が上底となっている。



第37図 酒器(盃・徳利)実測図



第38図 火鉢実測図

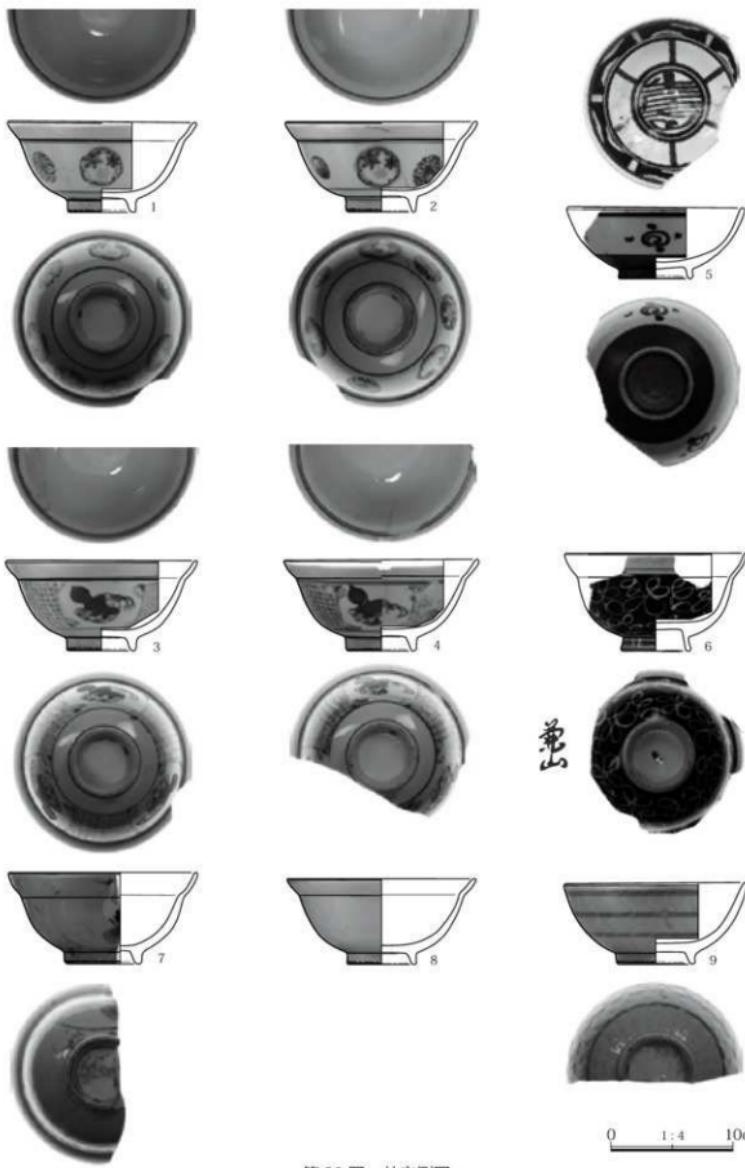
井(第39図)

1～4・6～8は熊川形の井である。5・9は楕円形の井である。

1・2は九谷焼で同一文様である。赤線4本の中央に丸い文様を7点あり、青丸は3点で雪輪の中には雪の結晶を3個水色の丸く描く、赤丸は2点あり、中央に菊3枚の葉、唐草文を描いている。緑丸は雪輪で2点あり、一方は赤丸と同じ大きさで中央に赤花に三又葉を9葉放射状に、もう一つは小円になり、長細い葉と赤い花を描いている。これは、「冬」を表していると考えられる。

3・4は九谷焼で同一文様である。赤線4本の中央に「赤色瓢箪柄に桜模様、緑の紐」を3単位で配し、その間を赤色で「雷文」と「○に◆の七宝つなぎ」を縦に配している。

5は楕円形で青色で絵付けされている。内面中央に○区画を3重にして内円に「寿」を中央円に6区画に割る線、外円内に6区画の松枝葉を2ヶづつ配している。外面の下半・底部は鉄軸、



第39図 井実測図

外面胴上部は渦巻の上下左右に点を配するものが3か所ある。

6は体部全体に青色の顔料を塗った後に先端の尖った工具によりクルクル文で袖葉を描き取っている。底部に「兼山」と縦書きされている。口縁下・底部・高台部に圈線を描いている。

7は「松の木」に「頭が赤色、体を白、羽先端・目を黒、嘴・足を赤色の丹頂鶴」を描いている。

8は無文である。

9は楕形の丼である。外面に縦の波線を放射状に細かな横線を型作りし、青・茶色線をセットで3本平行に描いている。

丼蓋（第40図）

1～9は丼蓋である。

1は第39図1・2の丼の胴部文様構成と同じ丸い文様が7ヶ存在している。摘内部には赤色で「二重の□枠内に山治」の印がある。内面には赤色で1本線が描かれている。

2は赤色の12弁の花が5か所に配され、その間に唐草文を赤色・緑色で充填されている。内面口縁部に2本の平行線がある。

3・4は九谷焼で同一文様である。第39図3・4と同じ構成である。赤線4本の中央に「赤色瓢箪柄にピンク色の桜模様、緑の縄」を3単位で配し、その間を赤色で「雷文」を縦に「○に❖の七宝つなぎ」を縦に配している。摘内部には赤色の「□の中に山治」の印がある。

5は赤・黒色で「海老」頭部分が残されている。

6は赤・黒色4重線の中間に「花と動物」の絵がある。内面は二重点線間を「梅花・梅実」を四角を基調とし他文様で充填している。摘内部には赤色の「□の中に斎清」の印がある。

7は金線間に四弁の花を金色で楕円形を白色で十字に区切る文様白の七宝つなぎの中に4弁の花を金で描くものを全体に充填している。摘内部には「赤色の□の中に山侯」の印がある。

8は「翁の能面」と「2冊の本」が描かれている。本は開かれていて謡曲の「高砂」の一節が書かれている絵柄である。

9は青色で山水画で「松・低木・岩・家」が描かれている。内面口縁は「雷文を一周」させている。

飯茶碗、鉢（第41図）

1～10は飯茶碗である。

1は青色一色による風景画である。富士山の山裾が広がっており、山頂には雪が被っている。山裾には松林が広がっている。

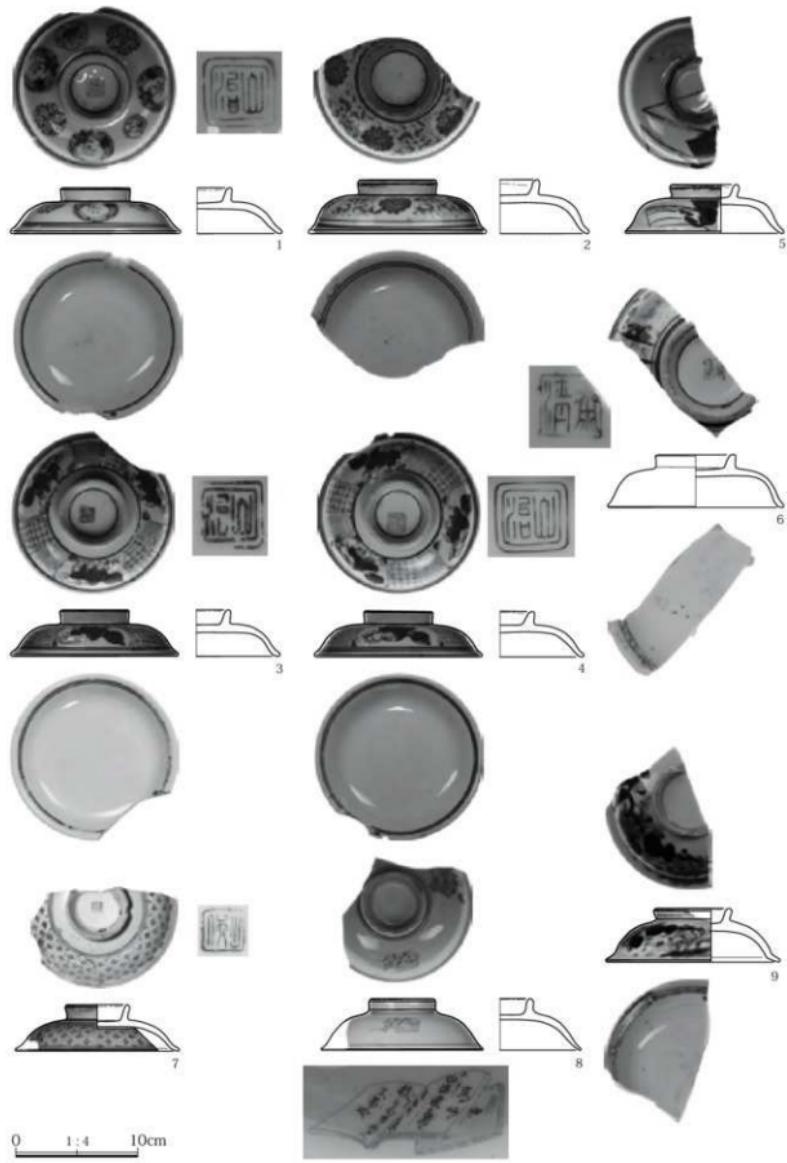
2は横位刻みが三段巡る型作りで松の枝葉を黒色で茶で松にからまる蔓と赤茶で松ぼっくりを描いている。

3は青色一色で家2棟、岩の絶壁、松等が描かれている。底部に青色で「□二重の中に國光」と縦に入れられた印が押されている。

4は青色の山ブドウの葉、赤茶の実、緑色の蔓が描かれている。

5は青色の絵で鳥の頭部分が赤茶色に彩色されていた丹頂鶴であり、周辺には松の枝がある。

6・7は小振りな茶碗で子供用であったと考える。この2つは同一製作と考えられ付け高台の括れ部に赤茶色の4mmの太いラインを入れているのと印判による上絵付けであるのが特徴である。



第 40 図 井蓋実測図

6は「少女とボール2個」が描かれている。

7は桜の木に登った老人が描かれ周辺に花が咲いたもので「花咲爺さん」を題材にしたものと考える。

8は青色1色の印判茶碗である。外面は縦に細かく区割りされ脇部には菱形文が横に連続している。菱形文には「扇面」、「剣菱・渦巻」などが描かれ、それ以外は「花と葉」の他、点々を充填している。内面は花が全体に描かれている。

9は体部に赤色で4本指の龍と雲を描く、底部は赤で「日本列島をが中心の地球の上に鷦とToa Cina」のロゴが押されている。

10は腰部と底部に黒・青の線を平行に施し、口縁から腰部の線までに丹頂鶴が羽ばたいている状況のが上下2段で1段16羽で32羽描かれている。

11～14は小鉢、15は小鉢蓋である。

11は小鉢で蓋が組になる蓋受けの段がある。青色を主体に赤い一輪の花、いろいろな葉が全面に描かれている。葉の一部には金色の葉脈を描いている。底部に赤色で「□の中に福」が白抜きで押されている。

12は5弁の花びらを模した器形から腰部には青色の△文が下から見て正五角形になっている。高台には青色線が2本かれている。内面には波頭部の下に金文字で「寿」「福」が金の○に入っている。寿は黒色、福は赤色である。口唇部には金の1mm線を付けている。口縁部には口唇から3mm下に1mmの青線が巡っている。

13は型押し成形で文様はあじさいの花をモチーフにしている。薄い緑色の釉薬の上に青色を付け釉している。

14は小鉢で、青色で外面は曲線で不定形な区画の中に線を充填している。腰部には流線形とへに3単位で見込み中央には「寿」の字が手書きされている。

15は小鉢蓋で漬ける付け外面に黄緑色の釉薬を施して乾いた後に茶色の顔料で「海老」を描いている。内面は白色釉である。

皿・小皿・鉢（第42図）

1～4・17は印判による

1・2は青色、3・4は緑色の顔料が施されている。

1は口縁が16弁位の輪花状になっている。外面は2枚の鳥の羽を1単位として3単位の構成である。見込みに中央に鋸歯状円形区画に「松・竹・梅」が描かれ、「微塵唐草文」を充填している。

2は見込みに「○区画に5弁の花」を2重に配し、隙間を青海波文で充填している。その周りに八角の△区画を設け「梅花・○に人」を交互に配している。

3・4は緑色を細線（1cm幅に20本）で充填している。

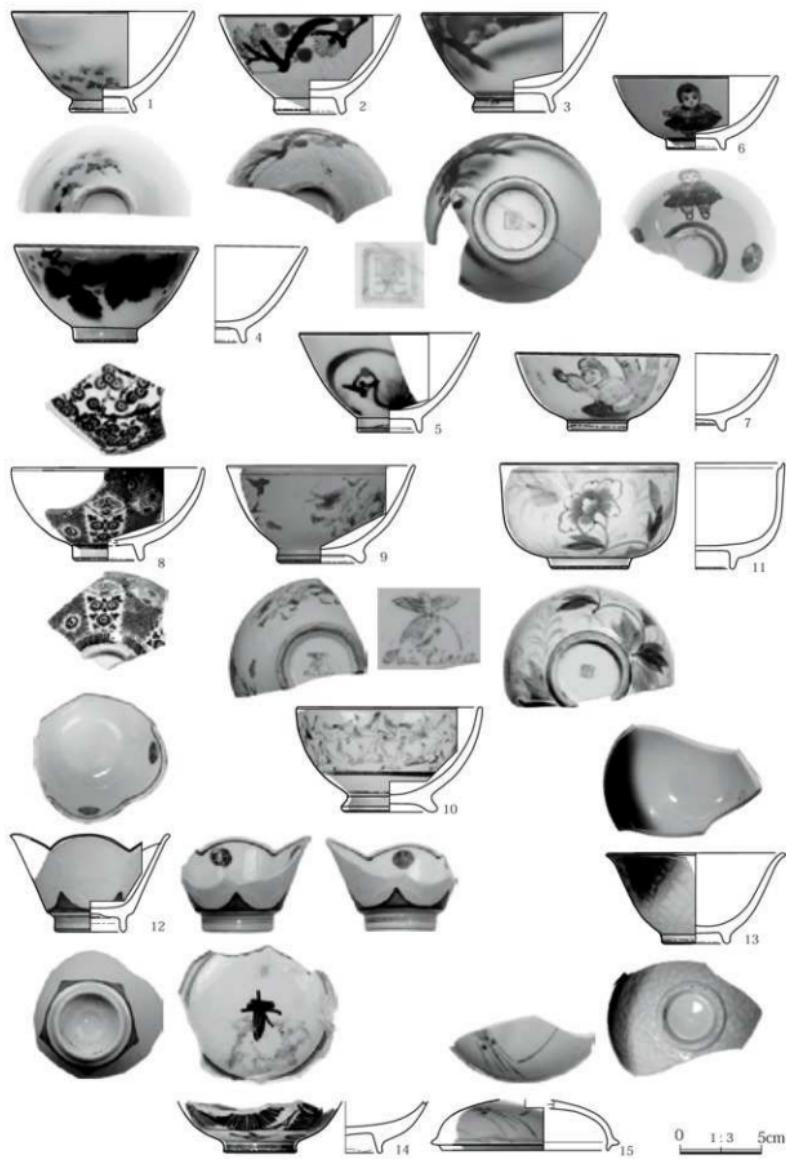
3は見込みに松枝を6本配し、「寿」を3単位構成で間に松を配している。

4は見込みに桔梗の花を配し、その間に草や実で充填している。

5は皿で手書きにより花等を描いている。内面にも花葉を描いている。

6～10は菊花皿で6～8は同一文様で揃いの皿である。

また、第23図3・4の高崎陸軍病院のロゴを持つ皿と同一文様であり、同一の揃い皿と考える。



第41図 飯茶碗、鉢実測図

文様は緑色の笹の葉と赤い実を筆で描いている。

9は線には空色を青色で「七宝つなぎ」弧線、赤色で点を描いている。

10は松の枝・葉・赤茶色の実を描いている。

11・12は頭に赤い模様を持つ「丹頂鶴」を描いている。

12・13は菊花皿でともに半肉彫りの型作りで、12は鶴の羽を1枚1枚描いている。13は木葉を縁に一巡したもので中央に赤い点があるが全体像は不明である。

14は内面に地紋として粗い布の織維を格子に圧痕し「山ぶどう」の線画を型作りし薄茶の釉掛け、山ぶどうの枝葉を茶、葉を緑、実を緑で描いている。

15は陶器の豆皿である。鉄釉で底部に指痕が3点残っている。削り出し高台である。口縁にボタン状貼り付け文が1点ある。

16は十角皿で「2匹の蟹」と「千里横行」の文字が描かれている。現在でも同器は製造されている。

17は豆皿である。青色の印版で見込み中央の区画と縁の立ち上がり部を2種の「格子内に点と蛸唐草文様」を交互に施文している。

18は六角小鉢で外内面に菊の葉の型押しを1か所づつ行い、外面が薄い緑で内面が白の釉掛けし、菊の葉を外面は濃い緑、内面は灰色で施釉している。

蓋物その他陶磁器（第43図）

1・2は組み物である。1は甕蓋である。2は甕である。1・2とも放射状に白色隆帯を垂下させその間を鉄釉で筆書きしている。成形は稜を明瞭に残しており、型作りしている。

3は磁器製丸形重箱の中段である。印判であり、菱形文模様は青色で花模様は緑である。

4・5は陶器製の合子である。4は蓋、5は身である。

6・7は蓋付の瓶である。6は内面に透明釉が外面・底部は釉掛けなしである。7は内面に白色釉、外面・底部は黄緑色の釉薬が施釉されている。

8～10は平口の器である。

8は壺付き以外は施釉している。

9は壺付きと内面中央から見込み部は施釉されていない。

10を口縁は平らに切っている。外面は底部まで、内面は胴部中ほどまでが白色釉を施している。

11は鉢で全面に乳白色の釉が掛かっており、貫入が認められる。

12は素焼の陶器である。内面火受けで荒れている。

13は特殊な葉の形の容器の蓋である。葉に実が付いた型作りのものである。

14は蓋であるが内面と頂部は円形に施釉されていない。

15は内外面を透明釉を掛けているが、口縁の受け部分は施釉されていない。底部を欠損している。

16は漏斗である。先端は斜めにカットされ液切れが良いようになっている。

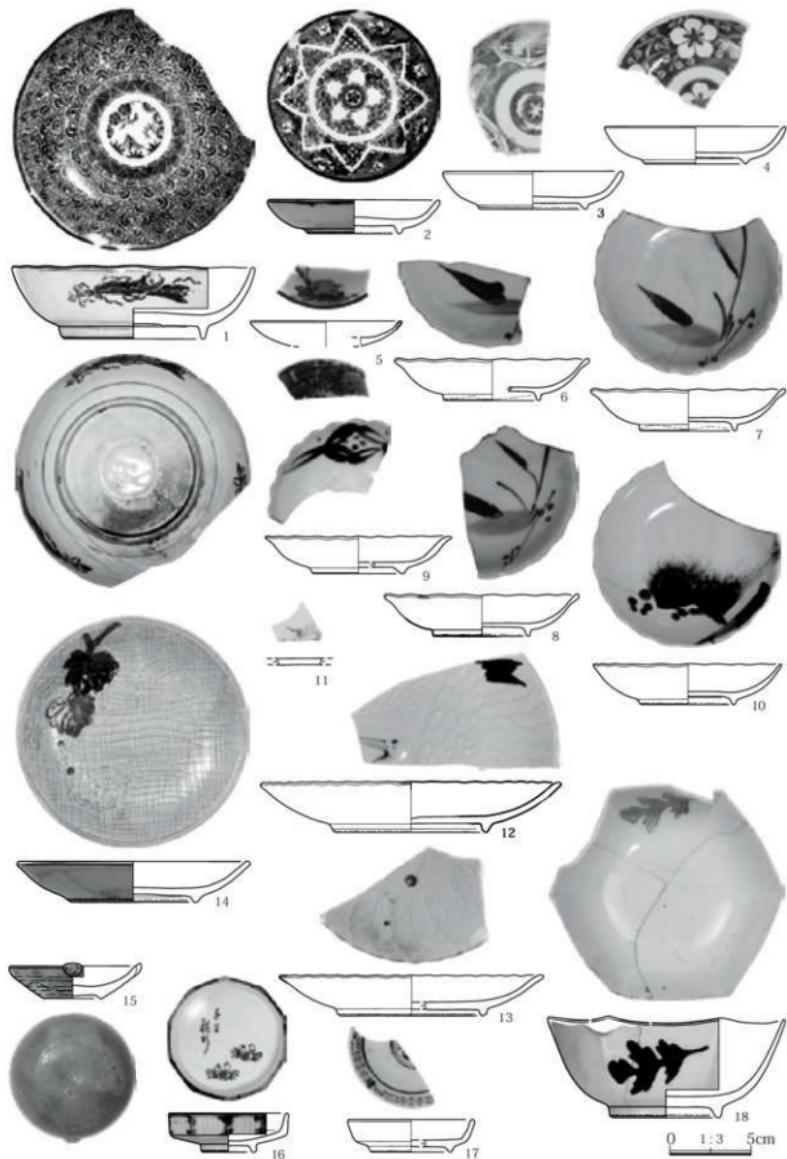
17は灰皿である。平面が四角形で断面がソロバン玉のようである。

18は「開明墨汁」の瓶である。底面に「開の字の周りに瓢箪を5個配する」ロゴがある。

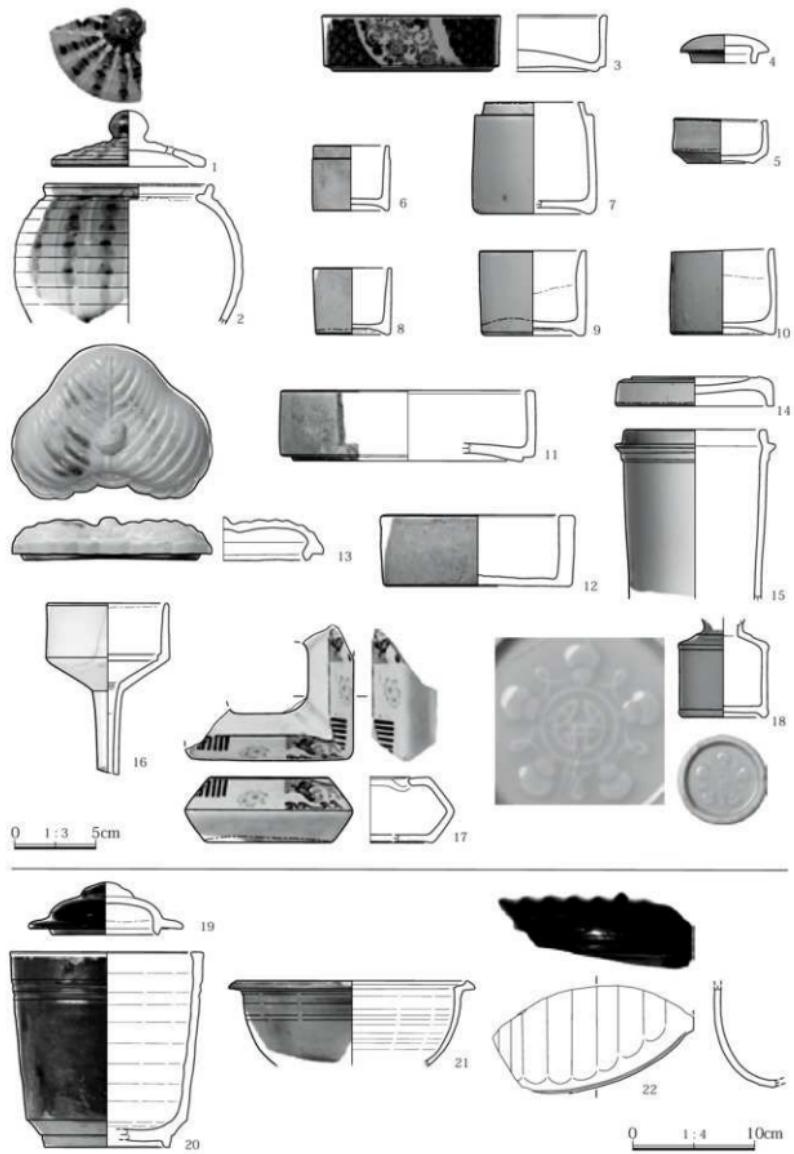
19～22は陶器で全て鉄釉である。

19は甕蓋である。鉄釉を掛けた上に白釉で○文を描いている。内面頂部も鉄釉を掛けている。

20は甕である。ロクロ痕跡を内外面に残し、口縁下に2本の平行沈線を持つ。底部は鉄製工具に



第42図 鉢及び皿実測図



第43図 蓋物及びその他陶磁器実測図

による削り出し高台にしており、外面の高台腰部も成形が行われている。腰の中央に孔を開け植木鉢に転用している。

21は鉢形の植木鉢と考えられる。ロクロ痕跡を内外面に残している。

22は陶器製の湯たんぼである。金属製から陶器製に代わっていることから、軍事統制下の器と考えてもおかしくない。

洋食器（第44図）

1～5は把手付きカップである。

1は肉厚で重量感のあるカップである。底部に緑色で「○の中に蛇」の印がある。

2は把手側は欠損、口唇部に金色の細線が1本ある。ヤマブドウの絵で赤茶色で葉、青色でブドウの実を描いている。底部には緑色で「光洋陶器會○ ☆に K KOYOTOKIKAISSYA」の半円形ロゴがある。

3は口縁部の内外面・把手に空色で彩色し、正面には花がピンク・オレンジ・青で葉を緑で彩色している。

4は陶器である。内外面底部に釉薬があり、底部に緑色で「MEIDO IN JAPAN」のスタンプが押されている。

5は底部に「興亞硬質磁器 KS KOASEITO」の半円形のロゴがある。

6・7はカップのソーサーである。ロゴの会社名は右から左に書かれている。

6は口縁部内面に幅7mmの文様帯を黒色と赤色で印刷している。底部に「東洋硬質磁器 T S NIPON」の赤色の半円形ロゴがある。

7は口縁部内面に幅7mmの文様帯に黒を下地に緑・白・オレンジ色の木葉、黄色・赤茶・ピンクの丸い実が構成文様となり文様帯となっている。底には「東洋陶器會社 OCW TOYOTOKIKAISHA」の緑色の半円形ロゴがある。T O T O 株式会社として現存。(OCWはオリエンタル セラミック ワールドリミテッド略称)

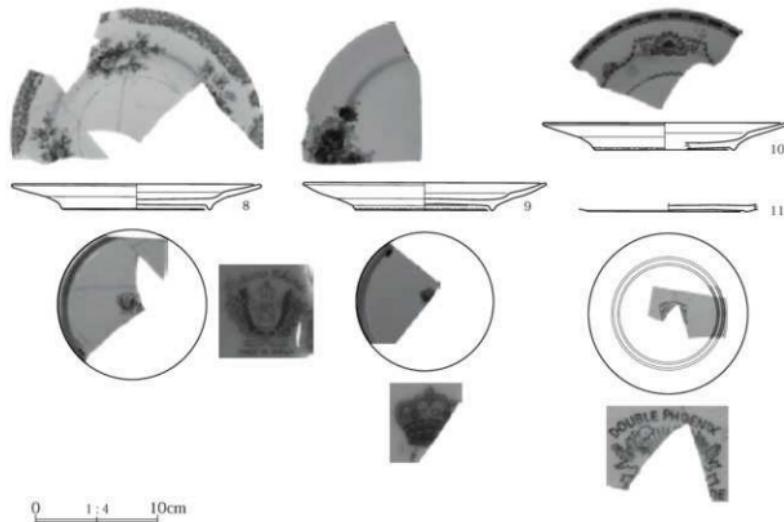
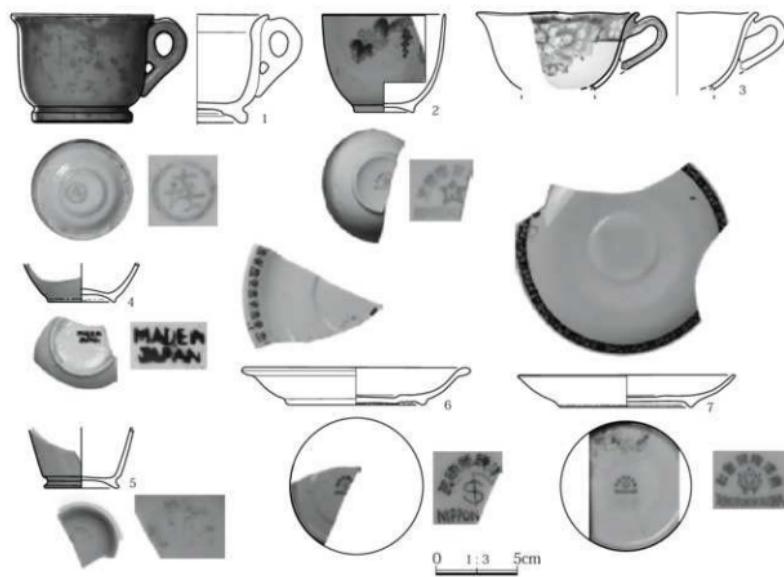
8～11は中皿で、8・10は精巧な文様を皿に印刷している。口唇部には金色のラインが施してある。

8は花柄で中央以外を装飾している。底部には「Mituno China M S MADE IN JAPAN」「中央に王冠・月桂樹・リボン」のロゴがある。

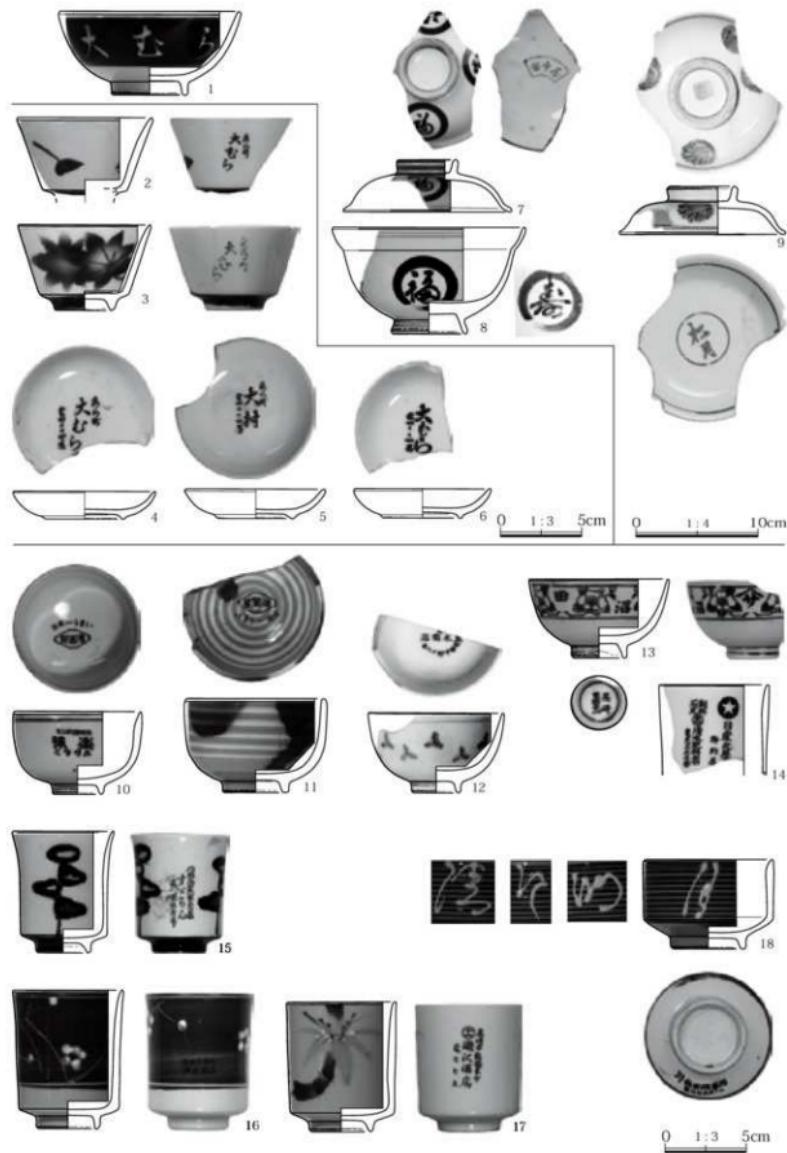
9は口縁部が括れて花形になっている。赤いバラの絵が描かれている。底部に「金色の王冠に BEST CHIN ○」のロゴが印刷されている。

10は内円・外円縁飾りは、幾何学的な文様であるが、その間は黄色くが薄く小花で連続させて文様構成している。

11は底部に「DOUBLE PHOENIX 2羽の不死鳥が向き合う」 緑色のロゴがある。全体に貫入がある。ニッコー株式会社として現存。



第44図 洋食器実測図



第45図 兵営内酒保関連及び周辺店舗名入り食器実測図

兵営内酒保関連及び周辺店舗名入り食器（第45図）

これらの中には兵営地内の酒保（売店）で使用した食器と、粗品等で配った湯呑茶碗などの2種類がある。

1～6の「大村・大むら」は現在もあら町で店を営んでいるところと同一店である。「大正4年(1915)に兵営地内で店を営むため、東京から引越して来た」と店主から聞くことが出来た。1の青に白抜きの「大むら」と書かれた丼は、その当時に窯元に発注したもので、その数量は貨車一両で発注したという。

現在、先の丼は1点だけが完形品で店舗に大事に保管されている。

2・3はそば猪口で「葉」「楓」の絵、青字と赤字の「あら町大むら」が描かれている。

4～6は豆皿（葵味皿）で見込みに「あら町大村 電四〇〇四番」と書体の異なる印刷がある。

7の蓋・8の丼は同一模様で組み物である。「○の中に福」「○の中に寿」を各2点交互に描いている。7の蓋内面には「扇面の中に田中屋」の赤色印がある。

9は「赤・青・緑の花」を金色で縁取り4点を配する。摘内に「二重□の中に山治」の赤印、内面中央に「○の中に松月」の印が押されている。7「田中屋」・9「松月」の丼は、酒保に出店か、出前の店なのか確認がとれなかった。

湯呑茶碗は9点確認された。椀形は10～13である。

10は磁器で外に青色で「世界的調味料 味楽 ミラクル」、見込みに「日本一うまい 新進漬」とある。現在も株式会社新進として営業。

11は陶器で見込みには10と同一標語を印刷している。

12は磁器で外面に青色で花柄の文様を連続させ、見込みに「並木商店」「電話中野十六番」とある。

13は椿の花柄の中に「ヤマサ沼田園」と書かれ、底部には「高崎 電話三九一」とある。あら町で「株式会社沼田園」として現在も営業。

14～17は筒型湯呑である。

14は磁器で青色で「☆日産化學特約店 石灰飼料○内に志 清水肥料店 電児玉三三番」と書かれている。日産化学工業株式会社は昭和12年(1937)12月として改称され、昭和18年4月に「日本鉱業株式会社」と改称している。5年と5ヶ月と時期の特定される内容である。本庄市児玉町に現在も営業。

15は磁器で3本の木が描かれ、背面に赤茶色で「化粧品装粧品の店 すゞらん 高崎南銀座通り」と書かれている。

16は陶器で青地に梅花を描き背面に「藤岡古桜町 港屋綿店」と黒スタンプされている。現在は存在していない。

17は磁器で外面表面に「竹」を描き、同背面に「高崎市飯塚本町 ○に十一 瀧沢酒店 電七七五」と書かれている。現存していない。

18は半筒形湯呑陶器である。外面には茶色をベースに白線を細く渦巻にしている。「清風明月」と描かれている。腰部に青色で「カネシ飯田煙草店 電六七六六ノ二」のスタンプを押している。現存していない。

第4表 近現代陶磁器觀察表

編號	番号	出土位置	釋文: 西漢	法量 単位(1) 単位(1) 順序		施主	地城	色調	説明、成・盛・瓦砾、文様等の特徴			遺存状況	
				1件	2件	3件	4件	5件	6件	7件	8件		
33-22	1	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.13.5	高 2.4	繩目	白: 色	地城: 有者: 中央羽林機械社(1)内蔵體。頭部に標記。羅大作: 7.7	3.9	現存			
33-22	2	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.14.6	高 2.6	繩目	白: 色	地城: 有者: 繩目と丁字形で施す。羅大作: 7.8	3.9	現存			
33-22	3	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.3	高 2.5	繩目	白: 色	地城: 有者: 繩目で何時何令の施る様。羅大作: 6.9	1/4	現存	最短		
33-34	4	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.16.1	高 2.5	繩目	白: 色	地城: 有者: 壁面に 重ねと縞みを施す。常に 8 件の円を施用端で施す。紹和 を施す。羅大作: 7.9	はばた形				
33-35	5	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.16.2	高 2.6	繩目	白: 色	地城: 有者: 鎌状的文様。羅大作: 8.0	1/3	現存	短		
33-36	6	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.7	高 2.6	繩目	白: 色	地城: 有者: 改造でだけて 縞模様。羅大作: 7.5	1/5	現存	最短		
33-38	7	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.16.6	高 2.3	繩目	白: 色	地城: 改造で仕立て。雲・空・雲模様。羅大作: 8.1	1/2	現存			
33-39	8	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.9	高 2.4	繩目	白: 色	地城: 手描き大山と組。羅大作: 7.6	短				
33-39	9	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.4	高 2.3	繩目	白: 色	地城: 3 件の羅文。羅大作: 7.6	はばた形				
33-39	10	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.1	高 2.4	繩目	白: 色	地城: オリジナル跡が残る。鍔縫で「一時」との文字を描く。羅大作: 7.1	はばた形				
33-39	11	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.6	高 2.5	繩目	白: 色	地城: 「南風の翼」と墨を施す。羅大作: 7.8	短				
33-39	12	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.16.2	高 2.3	繩目	白: 色	地城: 「南風の翼」と墨を施す。頭部に赤の標記。羅大作: 8.2	定形				
33-39	13	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.16.2	高 2.5	繩目	白: 色	地城: 耳者に赤色で施す。羅大作: 8.2	定形				
33-39	14	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.0	高 2.3	繩目	白: 色	地城: 白は花と草で赤は匂の標記。頭部で墨を施す。羅大作: 7.0	定形				
33-39	15	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.2	高 2.5	繩目	白: 色	地城: 有者とビックリを先ずで施す。鍔縫上面に 5 線の標記を含む。羅大作: 6.9	一部欠損				
33-39	16	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.3	高 2.5	繩目	白: 色	地城: 縄目と目隠しを赤で施す。鍔縫で「三連」。前大作: 7.2	定形				
33-39	17	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.0	高 2.4	繩目	白: 色	地城: 空・雲・石の模様を施す。鍔縫下に池に金色を色々でステラ ー状の施し運び。羅大作: 7.3	はばた形				
33-39	18	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.8	高 2.5	繩目	白: 色	地城: 有者と云々と施す。前大作: 7.0	定形				
33-39	19	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.9	高 2.4	繩目	白: 色	地城: 内側の標記をしたものの他の黒につけられ。赤の花枝・緑の葉 と白の花。頭部の花を赤・緑・黒・白・赤色で施す。羅大作: 7.4	一部欠損				
33-39	20	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.8	高 2.4	繩目	白: 色	地城: 頭に開いた花と赤い葉子・左耳の花を赤・緑・黒・白・赤色で 施す。羅大作: 7.8	一部欠損				
33-39	21	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.15.9	高 2.2	繩目	白: 色	地城: 内側の標記の左耳をモザイク。耳元で施す。頭部は鉢輪を施す。 羅大作: 7.2。道呂各奏鑄へ改めに實に賢いが認められる。	定形				
33-39	22	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 1.16.5	高 2.5	繩目	白: 色	地城: 有者と赤の標記で施す。頭部で標記。羅大作: 8.3	定形				
33-39	23	ノゾム面	羅印: 小字系	羅印: 0.35.1	高 1.9	3.0	繩目	白: 色	地城: 有者と赤の標記で施す。頭部で標記。羅大作: 10.4	横幅・短			
33-39	24	ノゾム面	羅印: 小字系	羅印: 0.10.5	高 3.0	繩目	白: 色	地城: 手書きと朱色で並べて施す。羅大作: 10.7	一部欠損				
34-1	1	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 3.1	5.1	繩目	白: 色	地城: 縄目。外側: 花と赤で施す。頭部で墨を施す。羅大作: 7.4	定形				
34-2	2	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 4.1	—	4.6	繩目	地城: 外側: 花と赤で施す。頭部で墨を施す。羅大作: 8.3	1/3	現存			
34-3	3	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 3.1	4.9	繩目	白: 色	地城: 外側: 花と赤で施す。頭部で墨を施す。その他の頭部を施す。	定形				
34-3	4	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.2	—	3.2	繩目	地城: 外側: 花と赤で施す。右に白を施す。	2/3	現存			
34-3	5	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 12.0	—	5.1	繩目	地城: 外側: 花と赤で施す。左の縄目を施す。	2/3	現存			
34-3	6	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 6.0	—	13.7	繩目	地城: 外側: 花と赤で施す。右の縄目を施す。	1/4	現存			
34-3	7	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.2	—	3.1	繩目	地城: 外側: 花と赤・白・第三縄目の花を施す。	はばた形				
34-3	8	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.2	—	3.1	繩目	地城: 外側: 花と赤・白・第三縄目の花を施す。	3/5	現存			
34-3	9	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.2	—	3.1	繩目	地城: 外側: 花と赤・白・第三縄目の花を施す。	はばた形				
34-3	10	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.3	—	3.1	繩目	地城: 外側: 深緑色。第 4 線で花と葉を施す。	はばた形				
34-3	11	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.4	—	3.1	繩目	地城: 外側: 有者と赤で施す。頭部で墨を施す。	はばた形				
34-3	12	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.0	—	14.3	繩目	地城: 外側: 有者と赤で施す。頭部で墨を施す。	1/4	現存			
34-3	13	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.5	—	3.1	5.1	地城: 外側: 有者と赤で施す。頭部で墨を施す。	1/2	現存			
34-3	14	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.0	—	3.1	5.1	地城: 外側: 有者と赤で施す。頭部で墨を施す。	1/2	現存			
34-3	15	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.0	—	3.1	5.1	地城: 外側: 有者と赤で施す。頭部で墨を施す。	1/2	現存			
34-3	16	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.0	—	3.1	5.1	地城: 外側: 有者と赤で施す。頭部で墨を施す。	1/2	現存			
34-3	17	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.5	—	2.9	5.0	繩目	地城: 外側: 有者とシルク。第 4 線で花と葉を施す。	定形			
34-3	18	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 12.0	—	12.0	5.1	繩目	地城: 外側: 有者とシルク。第 4 線で花と葉を施す。	1/3	現存		
34-3	19	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.3	—	5.1	繩目	地城: 外側: 有者とシルク。第 4 線で花と葉を施す。	はばた形				
34-3	20	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.2	—	14.4	繩目	地城: 外側: 有者とシルク。第 4 線で花と葉を施す。	1/5	現存			
34-3	21	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.3	—	5.2	繩目	地城: 外側: 有者とシルク。第 4 線で花と葉を施す。	定形				
34-3	22	ノゾム面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 6.9	—	2.7	5.4	繩目	地城: 外側: 有者と赤で施す。頭部で墨を施す。	一部欠損			
34-3	23	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.1	—	4.1	3.8	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。尚古 に 2 件の標記を施す。1 回目で施す。墨は薄く。	1/4	現存		
34-3	24	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 8.1	—	2.9	3.0	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	はばた形			
34-3	25	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.3	—	3.2	5.2	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	1/5	現存		
34-3	26	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.4	—	3.0	5.2	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	1/3	現存		
34-3	27	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.3	—	3.1	5.0	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	1/2	現存		
34-3	28	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.8	—	2.9	5.1	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	1/3	現存		
34-3	29	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	羅印: 7.4	—	3.0	5.0	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	4/5	現存		
34-3	30	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	—	3.0	[1.5]	繩目	地城: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	初期範囲				
34-3	31	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	—	2.8	[3.0]	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	初期範囲				
34-3	32	二ノ丸面	羅印: 道呂各奏鑄	—	3.7	[1.7]	繩目	地城: 外側: 有者と 2 番目の縄目と墨と 1 番の縄目と下顎。	初期範囲				

編番	番号	出土位置	種別：器種	法量(oz 1oz=31.1g) 単位(cm)			地質	地式	色調	器形、成・整型、文様等の特徴	通存状況
				横長	豊富	豊富					
34回	33	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	7.3	—	[3.7]	細密	良好	白：赤鉄	内面焼付：赤とピンクで南天を描く	現存
34回	34	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	(7.2)	(3.1)	5.1	細密	良好	白：赤鉄	内面焼付：赤と薄青色の地に絞り。白・茶色でぼやきの草木山文	1/3 現存
35回	1	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	6.8	32	6.5	細密	良好	白：赤鉄	内面物語：開口部。外面：土。ヒンコ・茶・緑・黄で葉・枝・草木山文	ほぼ完形
35回	2	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	6.2	34	7.4	細密	良好	白：赤鉄	内面物語：開口部。外面：紅・白・緑・黄・金で葉・枝・草木山文。内面：赤と緑で土の文の網目状。底盤：暗赤	一部欠損
35回	3	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	(7.7)	3.5	8.5	細密	良好	白：赤鉄	内面物語：開口部。外面：白の網目状で葉と枝。底盤：赤と金色の輪郭で葉と枝の輪郭を描く	2/3 現存
35回	4	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	6.2	37	7.2	細密	良好	白：赤鉄	内面焼付：外面：黒・白・赤鉄色。頭頂部を墨で	3/4 現存
35回	5	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	6.0	3.1	7.5	細密	良好	白：赤鉄	内面焼付：外面：黒・白・赤鉄色。頭頂部を墨で	ほぼ完形
35回	6	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	6.8	38	8.1	細密	良好	白：赤鉄	内面焼付：外面：黒・白・緑で葉と枝。墨で葉と枝を描く	完成
35回	7	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	(6.1)	32	7.5	細密	良好	白：赤鉄	内面焼付：外面：黒・白・緑で葉と枝。墨で葉と枝を描く	2/4 現存
35回	8	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	6.1	32	7.4	細密	良好	白：赤鉄	内面：赤と黒の輪郭で葉と枝の輪郭を描く。底盤：黒の輪郭で葉と枝	ほぼ完形
35回	9	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	6.8	37	7.1	細密	良好	白：赤鉄	内面：赤と黒の輪郭で葉と枝の輪郭を描く	ほぼ完形
35回	10	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	16.0	34	[7.2]	細密	良好	白：赤鉄	内面：黒と白を入したザザザラした瓦色の泥物が吹付け。白い薄い金の土の文で「ムーク」と表記し、「紀元」の文字をす。その下に「二ノ丸」を全文で表す。「縦掘は黒の地に輪郭等を金色で描く」	1/3 現存
35回	11	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	(6.0)	—	[5.2]	細密	良好	白：赤鉄	内面：赤と黒の輪郭で葉と枝。墨と赤文をオリーブ色で描く	現存
35回	12	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	(7.1)	4.8	7	細密	中手半 良	白	内面：無文	1/2 現存
35回	13	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	6.2	37	7.3	細密	良好	白	内面：無文	ほぼ完形
35回	14	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	(7.5)	43	8.1	細密	良好	白	内面：無文	1/4 完成
35回	15	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	(6.0)	—	[5.6]	細密	良好	白	内面：青色の吹付けで背景の底と裏面を描く	現存
35回	16	二ノ丸南廻	縦掘：面呑形	7.2	—	[4.5]	細密	良好	白：赤鉄	内面：金の点を描く	1/3 現存
35回	17	二ノ丸南廻	陶器：面呑形	(9.0)	34	5.5	細密	良好	RC	内面物語：頭頂部、肩に入り 外面：底盤に「天」の單書	1/3 完成
35回	18	二ノ丸南廻	陶器：面呑形	(7.7)	3.3	4.2	細密	良好	RC	内面物語：頭頂部、肩に入り 外面：無文	2/5 完成
35回	19	二ノ丸南廻	陶器：面呑形	(9.0)	(3.0)	6.1	細密	良好	RC	内面物語：頭頂部、肩に入り 外面：白色で葉を描く菊?	1/3 完成
35回	20	二ノ丸南廻	陶器：面呑形	(7.0)	4.4	5.1	細密	中手不 良	白	内面：青色の田字形の器の形を描く	1/3 完成
36回	1	二ノ丸南廻	陶器：上瓶	11.7	10.6	14.6	細密	良好	RC	底盤大12.6cm 頭頂部16.0cm 内面：焦紅土地	3/4 完成
36回	2	二ノ丸南廻	陶器：土瓶蓋	横4.9	10.4	3.2	細密	良好	RC	5.6cm×5.6cmの瓦れき	完成
36回	3	二ノ丸南廻	縦掘：急須	7.6	5.4	5.0	細密	良好	RC	頭頂部を施釉、肩に入り 外面：底盤に「天」の單書	一部欠損
36回	4	二ノ丸南廻	縦掘：急須	8.1	7.6	9.0	細密	良好	RC	頭頂部を施釉、肩に入り 外面：無文	一部欠損
36回	5	二ノ丸南廻	縦掘：急須	2.0	5.9	3.7	細密	良好	白：赤鉄	頭頂部5.7cm 底盤：2.8cmに1枚の網目状の褐色の接着層と、内面：青色で「天」の單書を刻む	完成
36回	6	二ノ丸南廻	縦掘：急須	6.7	—	[5.3]	細密	良好	白：青	頭頂部10.3cm 把手：11.4cm 壁部の手拭まで繩付の内舟筋の焼成3cm・焼片・柄・耳・茎を刻む	現存
36回	7	二ノ丸南廻	縦掘：急須	6.6	6.0	6.2	細密	良好	白：赤鉄	頭頂部9.8cm 把手：11.4cm 正面：青の花と灰・黄で、葉を茶色で墨で。茎と葉を刻む。内面：「龍頭の小内舟筋」のロゴスマーク	現存
36回	8	二ノ丸南廻	縦掘：急須	横1.6	7.9	2.7	細密	良好	白：青	頭頂部8.2cm 壁部の手拭まで繩付の内舟筋と、内面：青色で「天」の單書を刻む	1/4 完成
37回	1	二ノ丸南廻	縦掘：壺	3.8	2.8	4.1	細密	良好	白：青	内舟筋：青色で「龍頭の小内舟筋」のロゴスマーク	完形
37回	2	二ノ丸南廻	縦掘：壺	3.9	2.7	4.1	細密	良好	白：青	内舟筋：青色で「龍頭の小内舟筋」のロゴスマークを刻む	完形
37回	3	二ノ丸南廻	縦掘：壺	3.7	2.6	4.0	細密	良好	白：青	内舟筋：青色で「龍頭の小内舟筋」のロゴスマークを刻む	完成
37回	4	二ノ丸南廻	縦掘：壺	5.0	1.8	3.0	細密	良好	白：青	内舟筋：青色で「龍頭の小内舟筋」のロゴスマークが一面	ほぼ完形
37回	5	二ノ丸南廻	縦掘：壺	5.3	2.2	3.2	細密	良好	白：青	内舟筋：青色で「龍頭の小内舟筋」のロゴスマーク	ほぼ完形
37回	6	二ノ丸南廻	縦掘：壺	7.3	2.7	3.4	細密	良好	白：赤鉄	内舟筋：赤で葉と枝・葉・底盤に1枚の網目状の褐色の接着層と、内面：青色で葉と枝の輪郭を描く。更にその外側に青色で墨で墨を引く	一部欠損
37回	7	二ノ丸南廻	縦掘：壺	(6.7)	3.0	4.6	細密	良好	白：赤鉄	内舟筋：青色で葉と枝・葉・底盤に1枚の網目状の褐色の接着層と、内面：青色で葉と枝の輪郭を描く。更にその外側に青色で墨を引く	1/4 完成
37回	8	二ノ丸南廻	縦掘：壺	(7.4)	2.8	3.3	細密	良好	白	内舟筋：内面：無文 机油：机油で「天」の單書	2/3 完成
37回	9	二ノ丸南廻	陶器：壺	(7.5)	(3.4)	3.8	内：外：白：青	内舟筋：体部に机油で「天」の單書を刻む	1/5 完成		
37回	10	二ノ丸南廻	縦掘：泡利	(4.0)	—	[9.6]	細密	良好	白：青	最大直径10.2cm 底盤と側面に葉と枝の輪郭を描く。内面：褐色の接着層が内舟筋に沿って「龍頭の小内舟筋」のロゴスマーク	1/5 完成
37回	11	二ノ丸南廻	縦掘：泡利	(2.4)	4.6	15.0	細密	良好	青	最大直径6.7cm 頭頂部：無	一部欠損
37回	12	二ノ丸南廻	縦掘：泡利	3.0	4.2	12.6	細密	良好	白：赤鉄	内舟筋：正面に青・白・青・金で「連獛大廻」(虹)「朝光明」(雲)の模様が頭頂部で描かれており、側面に葉と枝の輪郭を描く	一部欠損
38回	1	二ノ丸南廻	陶器：火鉢	(30.4)	23.6	23.5	細密	良好	白：青	内舟筋：青色で葉と枝の輪郭を描く。内面：青色で葉と枝の輪郭を描く	3/4 完成
38回	2	二ノ丸南廻	陶器：火鉢	—	16.7	[15.3]	細密	良好	白：青	内舟筋：水と火鉢・外面：陶器下に墨状で施釉字模様の印押・頭頂部中央に墨の水と火鉢	1/3 現存

編番	番号	出生位置	種別:器種	法規・標準			出土	地城	色調	断面、成・整型、文様等の特徴		保存状況	
				日本 規格	修正 規格	認高 規格							
42回	3	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	(10.0)	(6.4)	2.3	織部	良好	白:緑	山形、内面・縁に丸みに「乾」(乾引)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/4 現存	
42回	4	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	(11.0)	(6.2)	2.3	織部	良好	白:緑	山形、内面・縁に丸みに「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)を	左上左	1/4 現存	
42回	5	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	(9.2)	—	1.6	織部	良好	白:青	縁に丸みを設けて底面で「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)を	左上左	1/6 現存	
42回	6	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	(12.0)	5.8	2.6	織部	良好	緑	縁部:白緑	内面・縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)を	左上左	1/4 現存
42回	7	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	(12.0)	5.8	2.6	織部	良好	緑	縁部:白緑	内面・縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)を	左上左	4/5 現存
42回	8	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	12.0	5.8	2.6	織部	良好	緑	縁部:白緑	内面・縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)を	左上左	1/3 現存
42回	9	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	(11.2)	(5.6)	2.3	織部	良好	白:緑	縁部:白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/5 現存
42回	10	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	11.5	5.8	2.5	織部	良好	緑	縁部:白緑	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	4/5 現存
42回	11	二ノ丸南堀	磁器:豆皿	—	—	—	織部	良好	白:色緑	縁部:白	内面・縁に丸みに「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	底盤焼片	1/5 現存
42回	12	二ノ丸南堀	磁器:中皿	(18.2)	(9.2)	3.1	織部	良好	緑	縁部:白緑	内面・縁に丸みに「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/5 現存
42回	13	二ノ丸南堀	磁器:中皿	(16.0)	(8.8)	2.5	織部	良好	緑	縁部:白緑	内面・縁に丸みに「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/5 現存
42回	14	二ノ丸南堀	陶器:小皿	14.0	7.7	2.5	織部	良好	オリーブ緑、色:緑	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	完形	
42回	15	二ノ丸南堀	陶器:豆皿	7.8	3.7	2.1	織部	良好	湖緑色	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	完形	
42回	16	二ノ丸南堀	陶器:豆皿	7.3	3.2	2.4	織部	良好	白:色緑	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	完形	
42回	17	二ノ丸南堀	陶器:豆皿	(7.7)	(4.8)	2.0	織部	良好	白:青	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/4 現存	
42回	18	二ノ丸南堀	磁器:六角小皿	14.5	6.6	6.2	織部	良好	縞模様:三色緑	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	一部欠損	
43回	1	二ノ丸南堀	陶器:便器	2.4	(9.0)	3.4	織部	良好	灰	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/4 現存	
43回	2	二ノ丸南堀	陶器:便器	(10.2)	—	8.6	織部	良好	灰	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/3~体部焼片	
43回	3	二ノ丸南堀	磁器:茶箱	10.9	9.5	3.5	織部	やや不 良	白:色緑	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	一部欠損	
43回	4	二ノ丸南堀	陶器:合子蓋	5.4	4.0	1.7	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	完形	
43回	5	二ノ丸南堀	陶器:合子身	5.6	4.0	2.8	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	一部欠損	
43回	6	二ノ丸南堀	陶器:合子脚	4.5	4.6	4.0	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	完形	
43回	7	二ノ丸南堀	磁器:瓶	(6.0)	(6.5)	6.9	織部	良好	オリーブ緑、色:緑	縁部:黒、底:灰、瓶底:オリーブ灰	縁部:黒、底:灰、瓶底:オリーブ灰	1/4 現存	
43回	8	二ノ丸南堀	陶器:合子身	(4.7)	4.4	4.1	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	4/5 現存	
43回	9	二ノ丸南堀	磁器:合子身	6.4	6.0	5.2	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	底盤焼片	
43回	10	二ノ丸南堀	陶器:合子身	6.3	6.1	5.2	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	底盤焼片	
43回	11	二ノ丸南堀	陶器:井	(5.5)	(4.0)	4.3	織部	やや不 良	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/1~底盤焼片	
43回	12	二ノ丸南堀	素物陶器:井	(11.0)	(11.2)	4.4	織部	やや不 良	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/2 現存	
43回	13	二ノ丸南堀	陶器:合子蓋	12.3	10.7	2.7	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	底盤焼片	
43回	14	二ノ丸南堀	陶器:合子身	9.5	10.6	11.8	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	底盤焼片	
43回	15	二ノ丸南堀	陶器:合子身	(8.7)	—	(10.4)	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/1~底盤焼片	
43回	16	二ノ丸南堀	陶器:合子脚	7.3	7.3	10.5	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	一部欠損	
43回	17	二ノ丸南堀	磁器:灰皿	(7.2)	(7.7)	4.0	織部	良好	白:色緑	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	左上左	1/3 現存	
43回	18	二ノ丸南堀	磁器:擦口板	—	50	16.0	織部	良好	緑	「擦口板」:明治時代式陶器、底面:エンボス「擦の内に堅つるをなすらるたの口」	「擦口板」:明治時代式陶器、底面:エンボス「擦の内に堅つるをなすらるたの口」	1/1~擦口板	
43回	19	二ノ丸南堀	陶器:瓶	4.2	8.7	4.3	織部	良好	明治灰	明治灰:12.7:外面:黄緑色を全面に施し白横線で○又は横線で	内面:明治灰:12.7:外面:黄緑色を全面に施し白横線で○又は横線で	完形	
43回	20	二ノ丸南堀	陶器:瓶	15.8	10.2	16.0	織部	良好	明治灰	明治灰:12.7:外面:黄緑色を全面に施し白横線で○又は横線で	内面:明治灰:12.7:外面:黄緑色を全面に施し白横線で○又は横線で	1/3 現存	
43回	21	二ノ丸南堀	陶器:瓶	18.9	—	(7.0)	織部	良好	明治灰	明治灰:12.7:外面:黄緑色を全面に施し白横線で○又は横線で	内面:明治灰:12.7:外面:黄緑色を全面に施し白横線で○又は横線で	1/1~底盤焼片	
43回	22	二ノ丸南堀	陶器:洗	10.5	15.3	15.3	織部	良好	明治灰	明治灰:12.7:外面:黄緑色を全面に施し白横線で○又は横線で	内面:明治灰:12.7:外面:黄緑色を全面に施し白横線で○又は横線で	底盤焼片	
44回	1	二ノ丸南堀	磁器:洋食器	8.7	5.9	6.7	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	一部欠損	
44回	2	二ノ丸南堀	磁器:洋食器 カット	(7.5)	3.1	6.0	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	1/3 現存	
44回	3	二ノ丸南堀	磁器:洋食器 カット	—	—	(4.8)	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	1/3 現存	
44回	4	二ノ丸南堀	陶器:洋食器 カット	—	4.1	(2.4)	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	底盤焼片	
44回	5	二ノ丸南堀	磁器:洋食器 カット	—	(4.4)	13.7	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	底盤焼片	
44回	6	二ノ丸南堀	陶器:ソーサー	(3.3)	(8.3)	2.3	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	1/6 現存	
44回	7	二ノ丸南堀	磁器:洋食器 ソーサー	13.3	8.1	2.0	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	4/5 現存	
44回	8	二ノ丸南堀	磁器:洋食器中皿	20.2	(12.0)	2.1	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	1/2 現存	
44回	9	二ノ丸南堀	磁器:洋食器中皿	(19.0)	(11.0)	2.3	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	1/4 現存	
44回	10	二ノ丸南堀	磁器:洋食器中皿	(19.0)	(10.0)	2.2	織部	良好	白	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	内面:青緑色の「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)で凹みその周縁に「舟」(舟形)	1/5 現存	

歯ブラシ（第46・47図・第5表）

20本が出土している。20本の歯ブラシは、すべて樹脂製である。1~3の3本は軍用と刻印された樹脂製の軍用歯ブラシである。

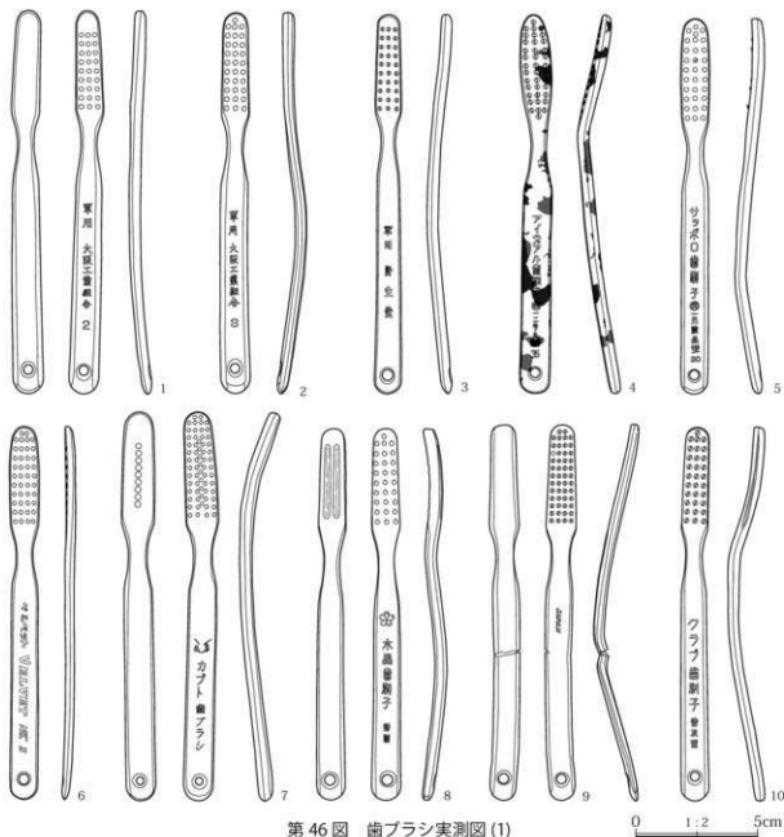
3本の生産工場は大阪工業組合2、大阪工業組合3、資生堂と異なっている。色は黒色・えんじ色・オリーブ色と異なっているがダークな色を使用しているところは共通している。植毛は10・11・10の合計31本である。

歯ブラシに刻印がないものが 18~20 の 3 点で、それ以外は生産に関わる何等かの刻印が入っている。4 はアイデアル歯刷子 公 一二号品 220 工 35、5 はサッポロ歯刷子 公 一五号品 220 工 20、6 はベルベット VELVET № 3、7 は○ カブト歯ブラシ、8 は○ 水晶歯刷子 特製、9 は JAPAN、10 はクラブ歯刷子 普及型、11 は小さくら歯刷子 公 十二号品 110 工、12 は資生堂銀座歯刷子、13 は KABUTO PUREBRISTL STERILIZED、14 は○ イーグル歯刷子、15 は特製、16 は○ コマ！ブラシ 公 一三號品 118 工、17 は仁丹歯ブラシなどがある。

これらの時間的変遷は不明である。

全長は最長で16.35cm、最短は14.10cm、平均は15.7cmである。頭部幅の最大は1.58cm、最小は1.09cm、平均1.23cmである。把柄幅の最大は1.24cm、最小は1.10cm、平均で1.16cmである。

植毛状況であるが、3列のもの 10:11:10 が 7 例、9:10:9 が 1 例、13:14:13 が 1 例、4 列のもの 10:11:11:10 が 2 例、11:12:12:11 が 2 例、12:13:13:12 が 1 例、15:

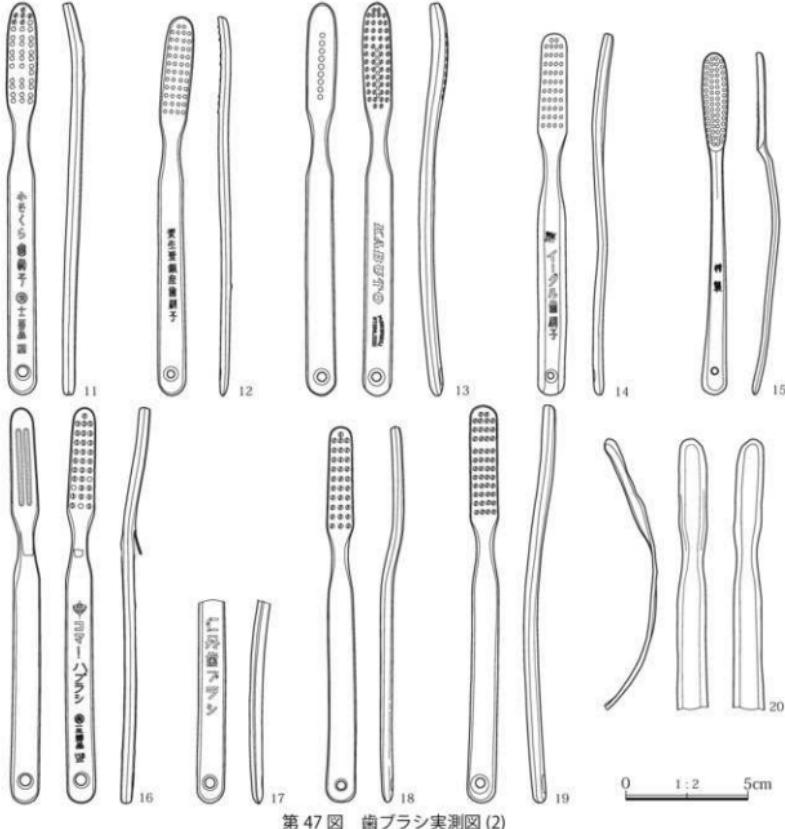


第46図 歯ブラシ実測図(1)

16:16:15が1例、5列のもの13:14:9:14:13が2例、12:14:9:14:12が1例と様々である。

ビニールをフレーム表裏に被服した19・20タイプが2例あり。20はこの被服した緑色ビニールのみの出土である。

「高崎城遺跡XV」で出土したハブラシ61点の素材はすべて骨製であり、今回の資料内容とは異なっている。



第47図 歯ブラシ実測図(2)

第5表 歯ブラシ観察表

編 号	歯 科	歯科精算	種別・基準	法規 単位cm (± 検定上) 適用				色調	新毛本数	判定状況 その他	
				専用	標準	規制	規制				
48-00	1	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.75	1.20	1.20	0.49	0.70	黒	10+11+10	適用 大阪工業会 2
48-00	2	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.70	1.16	1.22	0.48	0.70	スルビ	10+11+10	適用 大阪工業会 3
48-00	3	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.60	1.16	1.12	0.50	0.65	オーラブ	10+11+10	適用 四国支
48-00	4	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.90	1.36	1.24	0.61	0.80	黒等	13+14+9+14+13	アイデア新刷子 32 一二馬店 220 3.35
48-00	5	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.35	1.23	1.13	0.50	0.70	アボリ	10+11+10	マツコ江崎刷子 32 一五马店 220 3.20
48-00	6	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.30	1.27	1.15	0.35	0.71	透明クリーム	10+11+11+10	ハベルベト VIVET %3
48-00	7	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.95	1.36	1.23	0.59	0.80	透明茶	13+14+9+14+13	カブト 歯ブラシ
48-00	8	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	13.25	1.17	1.14	0.51	0.68	緑	9+10+9	マキタ新刷子 特製
48-00	9	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	16.00	1.58	1.13	0.47	0.77	透明カーキ	12+13+13+12	JAPAN
48-00	10	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.35	1.11	1.14	0.48	0.70	アイボリ	10+11+10	クラフ刷子・選免型
47-00	11	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.50	1.30	1.16	0.58	0.69	オレンジ	13+14+13	さくら新刷子 32 一二馬店 110 王
47-00	12	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.50	1.25	1.14	0.46	0.71	透明オーラブ	11+12+12+11	西生堂新刷子
47-00	13	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	16.10	1.23	1.20	0.53	0.70	透明レモン	12+14+9+14+12	KABUTO PUREREST STYLIZED
47-00	14	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	14.85	1.24	1.17	0.40	0.70	透明レモン	10+11+11+10	（イケダ刷子）
47-00	15	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	14.10	1.09	1.10	0.32	0.51	透明茶	15+16+16+15	特製
47-00	16	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	16.30	1.16	1.14	0.50	0.72	クリーム	10+11+10	コヨリ ブラシ 32 一二馬店 118 王
47-00	17	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	8.30	—	1.19	0.53	—	茶	—	（小林）歯ブラシ
47-00	18	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	15.50	1.13	1.15	0.50	0.68	オレンジ	10+11+10	なし
47-00	19	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	16.35	1.18	1.16	0.53	0.75	アイボリ	11+12+12+11	なし
47-00	20	歯士	樹脂製品、歯ブラシ	11.20	1.22	1.20	—	0.88	緑	—	なし

電気関係磁器製品（第48図）

これらは部分的に磁器で作られている。

1は分岐高圧碍子型開閉器、通称「ダルマスイッチ」という碍子で茶釉が施され、エンボスとして「○の中に高」下に長方形の中に「3500. V .30AMP.」と陽印がある。下部から観察すると左右に配線を止める銅製金具がと鉄製ネジ2本で本体と固定している。各々は左右対称で取り付けられている左右に孔があり、そこから内部に配線されていた。大きさは縦12.8cm、横12.5cm、厚さ8.5cmである。

下部の組み物は欠損している。この器種は、昭和初期から昭和30年頃まで普及したものである。

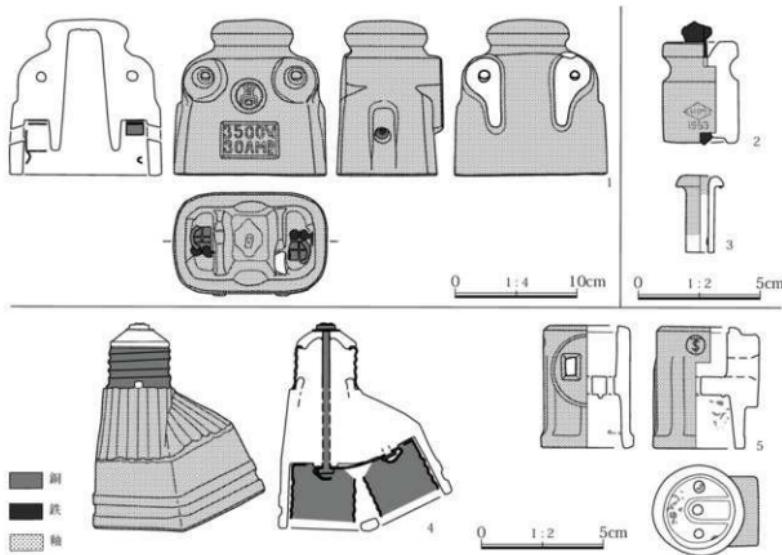
2はノップ碍子で白磁に青色顔料で「菱形枠内にHIM」その下に1953（昭和28年）と印を押ししている。碍子の大きさは、縦4cm、直径3cmで、中心の鉄芯が上下にあるが、上が幅1.2cm、高さ1.3cmの芯が出ており、下部は4mmが残るのみで下部は欠損している。

3は白磁の栓である。径7mmの孔が貫通している。一部に緑青が付着している。

4は電気の電球をネジ込むソケットで2灯式のものである。大きさは縦8.5cm、横7.1cm、幅3.7cmである。中央に銅の心棒があり、♂のネジ込み部と♀のねじ込み部の2穴は銅によりスクリュー状に作られている。磁器と同部品との接合は、銅ネジで止められている。

5は磁器製コンセント付きソケット部品である。下部内面には緑錆の付着があり、銅板が貼られたソケットで電球をネジ入れる1灯式である。大きさは縦5.0、横下部3.8・上部3.5cm、幅4.4cmである。内径は上部で2.5cm、下部で3cmである。左側面上部にエンボス加工で「○の中にT S」がある。

4・5は統制食器と同じ時期に作られた電気器具と考えられる。



第48図 電気関係磁器製品遺物実測図

煉瓦（第49～51図）

本地点における煉瓦の出土は建物及び構造物を破壊した残骸と考えられ、高崎城二ノ丸南堀の調査区西壁断面には煉瓦だけの層が厚さ50～60cm位で、長さ30mの層を成している。

煉瓦はオレンジ色・茶色のもの、いわゆる赤煉瓦と白色の耐火煉瓦の2種類が含まれている。

赤煉瓦（第49図1～15）

赤煉瓦は日本煉瓦製造株式会社のもので、「上敷免製」の刻印がある。

100点以上の形のわかる赤煉瓦の中で、15点が「上敷免製」の刻印のある資料であった。

刻印は、「上敷免製」と全体が綺麗に刻印されているものと片側が強く傾いて押されて文字全体が刻印されていないものに分かれる。

上敷免製の縁取りが「楕円形」と「隅丸長方形」が認められる。

刻印が無い赤煉瓦については、焼き締まっているものが多く認められ、燃焼設定が高く設けられている個所の使用に使われたか建物基礎の見えないところに使われた煉瓦と考えられる。

赤煉瓦の大きさの平均は、縦22.5cm、横10.8cm、厚さ5.8cmである。

煉瓦の刻印については、a 煉瓦製造所の名称、b 製作所の所在地、c 創業年～廃業年、d 当該刻印を使用した年代、e 当該煉瓦使用建造物の名称などがわかる。

今回の「上敷免製」刻印煉瓦は、埼玉県深谷市上敷免にある日本煉瓦製造株式会社のものであり、「上敷免製」はbの製作所の所在地を表している。

耐火煉瓦（第50・51図16～34）

白色煉瓦は耐火煉瓦である。

耐火煉瓦は大きく2種に分けられる。両面ディンプル加工（表裏面に小さな格子圧痕を持つもの）と無地のものに分けられる。

両面ディンプル加工のものは、刻印から「三石耐火煉瓦株式会社」・「S I N A G A W A」の2社である。16～20の三石耐火煉瓦株式会社は、大きさが平均縦21.6cm×横10.5cm×厚さ6.0cm、刻印は煉瓦長軸縦に漢字で陰刻されている。なお耐火温度SK28・SK30と刻印されている。20は同じ三石耐火煉瓦株式会社であるが、両面ディンプル加工が施されていない少し小振りなものである。生産地は「岡山県（備前市）」で創業は明治25年である。

21の「S I N A G A W A」は品川白煉瓦株式会社で横長のアルファベットで刻印、耐火度は刻印されていない。煉瓦中央に直径6cm、深さ2.2cmの窪みが作られている。

両面ディンプル加工は明治から生産されているもので、古い耐火煉瓦のものである。

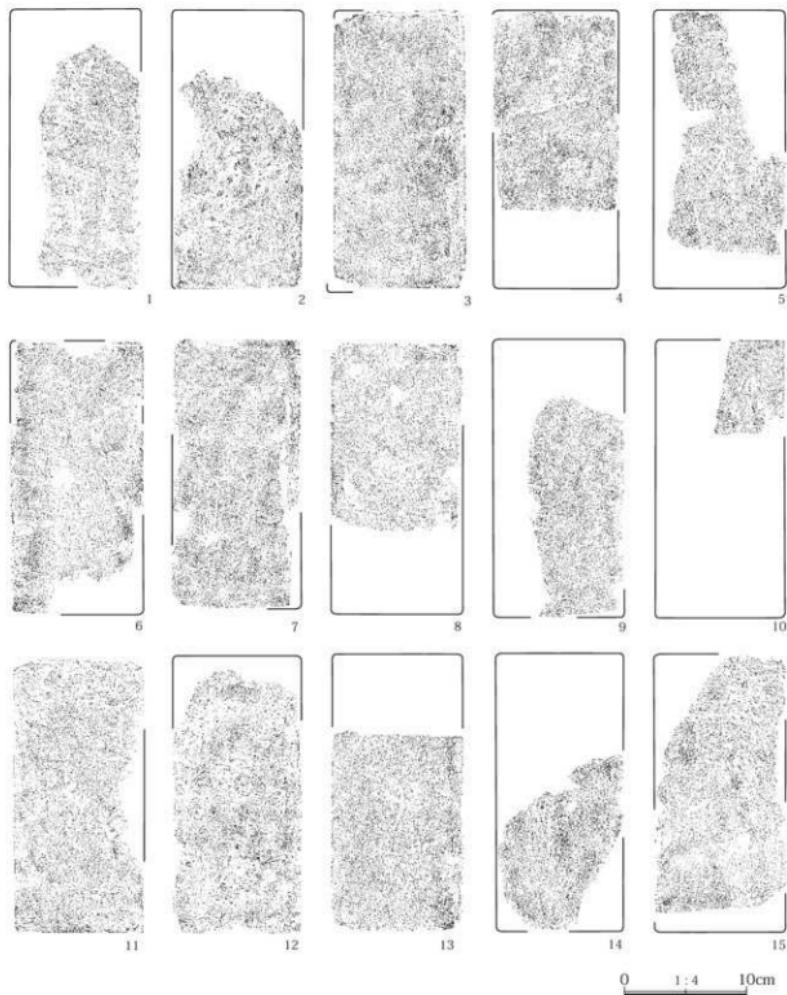
無地（22～34）の耐火煉瓦は、年代が何時かは不明である。

「S Y O W A Y O G Y O U」「M E I J I」「S Y K」「K Y K」「K O B」「N R O」「N T B」「井桁（住友？）」が存在している。

「S Y O W A Y O G Y O U」は昭和窯業で产地は「北海道（江別市）」である。

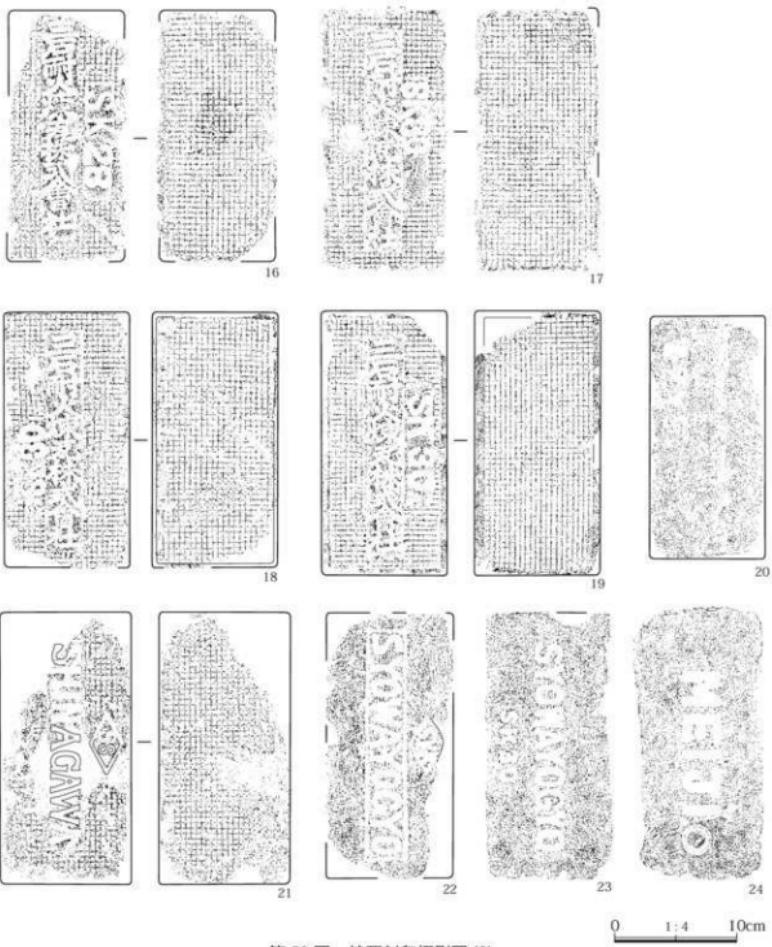
その他、33は五角形の煉瓦で「・・○○. F . B」と刻印がある。また、筒状の縦半分のものをもう一つと合わせて円筒として使用するものである。中心の管は空気を送風するものと考える。

耐火度は、SK28・SK30・SK32・SK34の4種類あるがその多くはSK30である。



第49図 煉瓦刻印拓影図(1)

これは耐火煉瓦の耐久温度は「SK 32：1,350度」「SK 34：1,380度」で、数字が少ないと耐久温度が低いことがわかる。出土煉瓦のほとんどがSK 30が主流で他は少ない。ただし、「SK 28」「SK 30」の耐火温度の数値は検証できなかった。



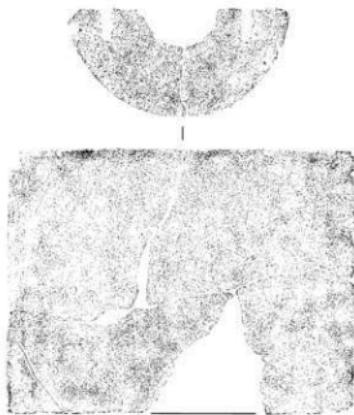
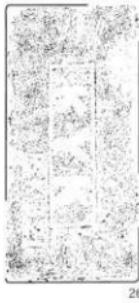
第50図 煉瓦刻印拓影図(2)

石製スレート瓦（第52図）

石製スレート瓦は2点の出土が確認されている。

このスレート瓦は天然の自然石（粘板岩）を厚さ5mmで薄く剥ぎ取ったもので、下端を「U」字状に裏面からの片面加工で魚の鱗状の形状に加工している。

1は大きさが縦13.6cm、横16cm、厚み5mmである。この瓦は、上端が直線的に加工されており、上端中央に1か所、直径5mmの孔が存在している。この孔は釘で固定するものである。また、上端は破損したところを調整して現状縁辺を作り、凹みは破損前の孔であったことが考えられる。



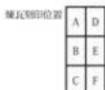
0 1 : 4 10cm

第 51 図 煉瓦刻印拓影図 (3)

第6表 煉瓦一覧表

日本煉瓦製造所：上敷免工場 煉瓦の形状および「上敷免製：他」刻印の形状一覧

番号 番号	煉瓦の大きさ(cm(次細))	焼成	印の種類(次細)				主軸に対して 位置	押し方	現存	備考
			文字	形態	直径:cm	厚さ:cm				
49回 1	(22.5) 10.9	6.0	良好	側免側上	側円形	—	1.6	D 斜	半	2/3
49回 2	(20.0) 10.6	5.5	良好	側免側上	側円形	—	1.7	D 斜	半	2/3
49回 3	23.0	11.0	5.9	良好	側免側上	側円形	—	E 斜	半	ほぼ完形
49回 4	(17.7) 10.7	6.0	良好	側免側上	側円形	—	1.5	E 斜	半	2/3
49回 5	(21.1) 11.1	6.2	良好	側免側上	側円形	—	1.8	B 斜	半	3/4
49回 6	22.4	11.0	5.8	良好	側免側上	側円形	4.4	1.7	B 斜	全
49回 7	22.3	10.7	5.6	良好	側免側上	側円形	4.3	—	B 橫	全
49回 8	(15.7) 11.0	5.7	良好	側免側上	側円形	4.1	1.7	E 橫	全	2/3
49回 9	(20.0) 0.9(2)	5.7	良好	側免側上	側円形	—	1.8	E 橫	全	2/3
49回 10	(8.3) 0.8(2)	5.6	良好	側免側上	側円形	—	1.5	D 橫	全	1/6
49回 11	22.3	10.7	5.9	良好	側免側上	側円形	4.6	1.7	B 斜	全
49回 12	22.6	10.6	5.6	良好	側免側上	側円形	4.1	1.6	E 斜	半
49回 13	(16.9) 10.8	5.7	良好	側免側上	側円形	5.3	—	B 斜	半	2/3 文字不明
49回 14	(15.6) (10.4)	6.0	良好	側免側上	側丸長方形	4.2	1.6	B 橫	全	1/3
49回 15	(22.1) 10.8	5.7	良好	側免側上	側円形	4.2	1.6	A 橫	全	4/5



第7表 耐火煉瓦一覧表

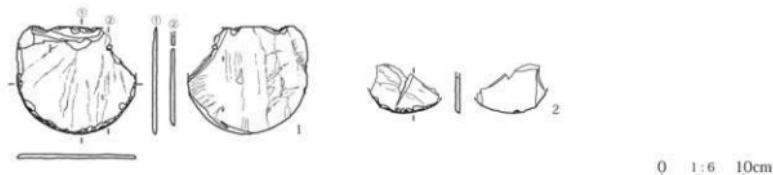
番号 番号	煉瓦の大きさ(cm(次細))	焼成	印		生産会社	残存	備考
			文字	耐火度			
50回 16	(21.4) 10.0	6.3	良好	二石耐火瓦株式会社	S.K.28	二石耐火瓦株式会社	一部欠損 両面ディンプル加工
50回 17	21.7	10.5	6.2	良好	二石耐火瓦株式会社	S.K.30	二石耐火瓦株式会社 ほぼ完形
50回 18	21.6	10.7	6.2	良好	二石耐火瓦株式会社	S.K.30	二石耐火瓦株式会社 一部欠損 両面ディンプル加工
50回 19	21.6	10.5	6.1	良好	二石耐火瓦株式会社	S.K.30	二石耐火瓦株式会社 一部欠損 両面ディンプル加工
50回 20	22.1	10.3	6.6	良好	二石耐火瓦株式会社	S.K.30	二石耐火瓦株式会社 一部欠損
50回 21	22.7	10.7	6.0	良好	○の内にSY SHINAGAWA	品川瓦器株式会社	3/4 両面ディンプル加工
50回 22	22.4	10.9	6.0	良好	○の内にSYK SYOWAYOGO	昭和空窓株式会社	一部欠損 一部欠損
50回 23	22.1	10.6	6.0	良好	SYOWAYOGO	昭和空窓株式会社	ほぼ完形
50回 24	22.8	10.9	6.1	良好	M E I J I ○	昭和空窓株式会社	一部欠損
51回 25	(15.8) 10.6	6.0	良好	SYK	S.K.34	昭和空窓株式会社	3/5
51回 26	23.2	11.5	6.0	良好	特の内に-K-Y-K	S.K.32	ほぼ完形
51回 27	(20.2) 11.5	6.0	良好	特の内にK-Y-K	S.K.34	3/4	
51回 28	(20.0) 10.8	6.0	良好	K-C-B	S.K.32	3/4	
51回 29	22.9	11.1	6.1	良好	N R O	S.K.30	4/5
51回 30	22.5	10.5	6.0	良好	N T-B		完形
51回 31	22.8	10.7	6.0	良好	× 4 ヶ月の月折マークヒヨ	日友グループか	ほぼ完形
51回 32	(17.0) 10.8	5.8	良好	井桁マークヒヨの内に△	日友グループか	2/3	
51回 33	(22.0) (26.0)	(15.7)	良好	特の内にO-O-F-B		?	ホームベース型
51回 34	22.2	18.4	9.1	良好			一部欠損 半円形 内径 5.7cm

固定する孔は2か所である。

2はU字状の先端部破片で厚さ5mmの小破片である。自然石(粘板岩)を厚さ5mmで薄く剥ぎ取つたもので、下端を「U」字状に裏面からの片面加工で魚の鱗状の形状に加工している。

1・2ともU字状の整形は裏面からのみの整形である。

これらの石製スレート瓦は、洋風建築物の屋根に使用されたものと考える。



第52図 石製スレート瓦実測図

ガラス製品（第53図、図版41～50）

ガラス製品としては、ガラス食器と瓶類が出土している。

ガラス食器（図版43：106から111）

ガラス製品としては、ガラス製コップが3点、皿1点、盃1点、吸い口1点の合計6点である。

106は青色透明ガラスにグラインダーにより草花を横方向に切子状の削り模様を描いている。

107・108は底中央にエンボス加工で菱形の中に「SGF」とあり、「東洋ガラス株式会社」の前身となるメーカー「島田硝子製造所」のガラスである。戦前から1950年頃のものである。

107は青色透明で底部に「36」「A」、108は無色透明で底部に「MADE IN JAPAN」「72」とエンボス加工がある。

109は环の脚部片で白ガラスに赤・青ガラスで模様を付け、その上に透明ガラスをかけて仕上げている。

110はピンク色の透明ガラスの皿である。腰部に円形の文様が連続している。

111は介護用品の吸い口である。

ガラス瓶（図版41～50）

ガラス瓶類は、医薬品瓶・靴墨瓶・整髪料瓶・衛生薬品瓶・薬品瓶類・飲料瓶・目薬瓶・医療検査用品・歯磨き粉瓶・文具（墨汁瓶・インク瓶・糊瓶）・食品瓶・美容関連瓶などが検出されている。

医薬品瓶（第53図、図版41～45）

飲み薬瓶・バイアル瓶・点滴瓶・目薬・錠剤瓶などがある。

目盛りが入っている瓶は1～12の12点である。

1・2は「陸軍」のエンボス入り薬瓶が2点検出されている。（第53図）

1は正面に「陸軍」のエンボスが入っている。1の大きさは、縦20.3cm、直径7.7cm、口径3.0cmである。裏面は目盛りが100cc毎に600ccまでの6目盛りがエンボス加工されている。僅かに気泡が混入。口縁の内部に2.3cmの深さまで擦れが顕著に認められることから、蓋はガラス栓であったことがわかる。



第53図 陸軍エンボス入り薬瓶

2は正面に「☆陸軍」のエンボスが入っている。2の大きさは、縦16.1cm、直径7.7cm、口径は3.0cmである。裏面に目盛りが9目盛りあり、3目盛り毎に目盛りが長くなっている。気泡が多く含まれる。

3は腰部に括れがあり、目盛りが上からと下からと読める目盛りがあることから、吊り下げて使用する点滴瓶と考えられる。底に「BPCT A6」エンボス加工。

4は楕円形瓶で両側面に目盛りがある。左9目盛り、右12目盛り、底に「OK」のエンボス加工。

5は底に「NY」、側目に4目盛り、「50・100cc」のエンボス加工。

6は緑色瓶。中央縦ラベル用長方形区画あり、両側面に目盛り「左6目盛り、右9目盛り」エンボス加工。

7は側面に12目盛りがエンボス加工。

8は緑色瓶。底に「C」のエンボス加工。

9は腰部に「桜花のロゴ」「目盛り3・6目盛り」のエンボス加工。

10は底に「...」点が3点、正面に「50目盛り」のエンボス加工。

11は口縁を欠損、目盛りは6目盛りのエンボス加工。

12は目盛りが唯一エンボス加工ではなく、白色印刷している。

バイアル瓶(図版41・42)

大きさでA型・B型・C型・D型とその他の5種類に分けられる。

A型は13～16で規格が高さ5.8cm、口径1.9cm、底径2.8cm、USAのエンボスがあるもの。

底部にTCWCO TYRE 3-USA, TCWCO TYRE III-USAにエンボス加工。

B型は17～25で規格が高さ5.6cm、口径1.9cm、底径3.2cmであるもの。

底部に大、P、O、12、14、16、17、18、20のエンボス加工、エンボス無しもある。

また、17～25の腰部には「への下にト」のエンボス加工がある。

C型は26～42で規格が高さ4.6cm、口径2.0cm、底径2.4cmであるもの。

底部に14◇1、0◇K、0◇1、S7、10、K24、I、K、T7 75、T7 61、T7 52、T7 38、T7 25、T7 23、T7 21、28、I T7のエンボス加工がある。26・28・30の腰部に「への下にト」のエンボス加工がある。

D型は43～53で規格が高さ4.5cm、口径1.9cm、底径2.3cmであるもの。

底部にK16、T84、TK7、K4、T85、T837、K63、K56、6、8、6のエンボス加工がある。

その他バイアル瓶

その他の規格のものとして、54～66がある。54は最小で最大径が1.8cm、器高3.8cmである。65・66は最大で最大径4.1cm、器高7.7cmである。

底部のエンボス加工を見てみると「NMB10、・10、T367、6、11、K2、知15」、エンボス加工無しもある。55、61、62、66は茶色瓶である。63はシール付であるが内容は判読できない。

その他医薬品瓶(図版42～44)

口の形状がスクリュー状のものは67～93、101である。

茶色の瓶が67～80、101である。円柱のものがほとんどであるが、長方形の形状のものは73～76、101の5点である。

67・68は底のエンボス加工に「SANKYO」、67は「6・120」、68は「6・75」、ともに三共製薬(現

第一三共株式会社)の瓶である。

70は底に砂時計のロゴ、71は「AT400KAI」、72は「4059HA K2-1」、73は「山川のロゴ」、74は「H2」、76は「Y18」、77は「Y 18」、78は「5 2DH SANNYOU」、79は「白元」がある。

80はキャップ付きのもので目盛りがある。胴部に印刷された内容は「心臓ホルモン 25ccLacardin ラカルダン (内服液) 製造元三全製薬(株) 東京京橋(片倉ビル)」であり、販売が山之内製薬(株)のものである。

透明の瓶が81~87、89~93である。

円形瓶81~86、89~90である。底のエンボス加工に81は「△内に山之内」のロゴで山之内製薬、82は「ヘト13」、83は「○内に△ 2T」タケダ、85は「◇ 4」、86は「6」、89は「D 4」、90は「Y 2」である。

方形瓶は91・92である。

長方形瓶は87・93で87は底のエンボス加工に「・ O T」93は「1」である。

楕円形瓶は88の1点で緑色の瓶もある。底に「A 7」のエンボス加工がある。

平口瓶であるものは95~100、102~105である。底のエンボス加工は98「△内に山之内 54-25」山之内製薬である。

円形瓶は95・98~100、102~105である。

緑色瓶は96は八角瓶である。

青色瓶は97・103である。97は八角瓶である。

茶色瓶は101・104である。101は長方形瓶である。105は透明瓶で同じ形である。104・105は頸に「わかもと・わかもと」胴に「Wakamoto」底に「11NAGA9」のエンボス加工がある。

94は平口瓶の蓋である。表面に「NEO」のエンボス加工がある。

図版43-112は磁器製の平口の蓋である。表面に「サンハップ」のエンボス加工がある。

図版44-136~147は、薬品瓶である。

136・137・142は緑色、138・143は青色瓶、139・140・144~146は茶色瓶、141は空色、147は乳白色である。

平口瓶は136~139、142~145の8点である。

口形状がスクリューオークは140・141・146・147である。

底部にエンボス加工があるのは、136は「A 7」、137は「A 7」、138は「T1」、139は「B」、140は「5 9 550 SANKYOU」三共製薬、141は「中外製薬のロゴ」、147は中央が括れている長方形であり、底は「モンゴール」のエンボス加工があり、東京甲子社のものである。育毛剤である。

その他の広口瓶(図版44:148~160)

平口瓶は148~157である。瓶の高さは9.5~11.2cm、胴幅は5.9~7.2cmが平均である。153は平均値より小さく胴幅が5.5cm、高さが9.0cm、緑色と器形が一段あり特徴的である。154は同幅は平均であるが、高さ7.0cmと小さい。底面に155は「○内にA」「ハイランス3号」「△内に1 P 1」、156は「4 ◇ 内に N Y」、157は「KC3」のエンボス加工。155は平口で蓋受けがあることからガラス蓋があったと思われる。

スクリューオークは158~160である。158は底面に「20」、159は肩部・腰部にはナーリング加工

底面に「MG26」、160は底面に「3」のエンボス加工である。

瓶の色は無色透明が151・158・159、緑色は148～150・153・155、青色は152・154・156、薄い緑色は157・160である。

148～160は薬品瓶か食品瓶かは不明であるが同様な規格のものを集めてみた。

148～157は平口瓶である。148～150・153・155は緑色瓶である。153は肩部を特徴的に一段持っている。155は口縁がシャープでガラスの蓋が合口と考えられる。底のエンボスは「ハネランス3号 A 1山○」である。

152・154・156は青色瓶である。156は底に「4NY」のエンボスがある。157は底のエンボスは「K. C. 3」158～160はスクリューオーである。

158は底にエンボス「20」、159は底に「MG26」肩・腰部ナーリング加工がある。

目薬瓶(図版45:178～180)

178は緑色平口長方形瓶で一部ガラス棒収納用に抉れている。気泡が多くみられる。

179・180はポンプ式の目薬瓶である。179は青色で正面にエンボスでエンブレムがありシールが貼れるようになっている。裏面には「EYE LOTION ROHTO A41」エンボスがある。ゴムのキャップあり。ロート製薬(ロート製薬株式会社)。

180は緑色で側面に「EYE LOTION」「DAIGAKU」とエンボスがあり、「大学目薬」である。参天堂株式会社(現参天製薬株式会社)。

飲料瓶(図版44・45・46)

飲料瓶は161～164、167～174、181～194である。

161～164は牛乳瓶である。

161は正面エンボスは「東都ミルクプラント全乳 一八〇瓦入」である。(現森永乳業)

162は正面エンボスは「高温殺菌全乳一.八升白石」である。蓋は金具でバネ式となっている栓「機械栓瓶」である。

163は緑色瓶で正面エンボス「守山文化牛乳」である。(現守山乳業株式会社)

164は底のエンボスは「29.8市製 180cc K. T」である。

165・166はフルーツシロップ瓶である。165は正面上面に「薔薇の花」他を「格子目に葉・茎・蕾」を充填するエンボス加工。166は肩部に隆帯が1本巡る。胴部全体に「菱形と星文様」のエンボス加工。ともに正面にラベル用の貼付凹枠がある。

167～169は胴には滑り止めのナーリング加工が施されている米国製ビール瓶である。

167・168は「ケンジソンノイエヌカバニ」、同一規格で、169は胴は同じで高さが小さくなっている。肩部には3本とも「NOT TO BE REFILLED NO DEPOSIT NO RETURN」のエンボス加工。

167の腰部に「GB50」底に「Duraglas 4 0 ◇内に1ロゴ 5.18」、168の腰部に「17」底に「不明ロゴ」、169の腰部に「GB6」底に「6 0と◇内に1のロゴ 51.18 Duraglas 1-way」のエンボス加工。

170・171はウイスキー瓶である。

170はトリスウヰスキーボトル。正面肩部に「Torys」底に「2 ◇ A」のエンボス加工がある。金属キャップには「TORYS WHISKY 王冠ロゴ KOTOBUKIYA LTD」が印刷されている。株式会社寿屋(現サン

トリホールディングス株式会社)。

171は大黒葡萄酒株式会社のオーシャンウィスキーボトルで頸部から上半欠損。底に「DISTILLEDBY DAIKOKU BUDOUSHUC.LTD TOKYO NIPPON 11」、正面に四角のシール貼る個所裏面に△の区画を用意し外面全体にぶどうの実を表した文様のエンボス加工を行っている。(現メルシャン株式会社)

172・174は具体的な内容は不明。172の腰部に「3D.LITER」、174の腰部に「SN・28」のエンボス加工。173はリボンジュースの瓶で上半欠損。正面に「Ribbon Juice NIPPON BREWE」「juice7FLOZ」エンボス加工がある。腰部に青インクで「☆日本麦酒株式会社」が印刷。(現ポッカサッポロフード)

181～185はサイダー瓶(シャンパンサイダー)で大日本麥酒株式会社製である。透明瓶4本は肩に「B N Kのロゴ」、5本は腰部に「大日本麥酒株式会社製造」のエンボス加工がある。底面には181は「☆の中に○」、182は「C 14」、183は「12 8 Y」、184は「11 1」、185は「16 13 Y」のエンボス加工がある。185だけが青色ガラスである。(現アサヒ飲料株式会社)

186はビール瓶で底に「3△N S」、187～194は飲料瓶と考えられる。

188は底に「6」、189は底に「○内にA 3」、190は底に「6 ○内に F 52」、191は底に「Y 4」、192は底に「半円に T のロゴ 31」のエンボス加工がある。

193は寶酒造株式会社のもので肩に「登録 寶 商標 TAKARA」腰に「寶酒造株式会社 正味 600cc 詰」底に「9」がエンボス加工がある。焼酎又は本味醤の瓶と思われる。

194は茶色瓶で底に「！」のエンボス加工。

186は茶色、187は薄い緑、188・189・191～193は青色である。

仁丹瓶(図版45:175～177)

仁丹瓶と考えられる透明瓶を一括する。175は極細瓶で底部が尖っている。

176は小瓶である。177は瓢箪型で厚さ7mmの扁平な瓶である。

靴墨瓶(図版43:13～121)

113～121は靴墨瓶である。9点の内2点の底に「日靴塗聯」と右から左に読むエンボス加工。全て気泡の多いガラスで形状は短筒状である。瓶の色は薄い緑瓶は113・114・121、緑色は115・118・120、無色透明は117・119、小豆色は116である。

整髪料瓶(図版42:123～135)

123～135は整髪料瓶である。123～134はボマード瓶である。

123～125は透明ガラスである。123・124はケンシボマードで正面にラベル貼る個所、それ以外は0.6cmの星形で充填している。123の底は「ナ 20-2」、124は「ナ 17-6」のエンボス加工。

125はうた椿ボマードで正面は「Uta-tubaki」のエンボス加工、その他はナーリング加工である。瀧澤勇昇堂(現株式会社黒ばら本舗)

126～131は白色ガラス瓶である。

126は底面に「JUJU A4」のエンボス加工。寿化学株式会社(現ジュジュ化粧品)

127・128は柳屋ボマードで底に「柳屋ロゴ」のエンボス加工。2点とも正面にラベル貼り凹部枠あり。柳屋(現株式会社柳屋本店)

129・130はメスマボマードで底に「N メスマ」「5 メスマ」のエンボス加工。正面にラベル貼付四枠がある。井田京栄堂(現株式会社メスマ)。

131はケンシボマードである。底に「ケ〇〇」のエンボス加工。

132・133は黒ガラス瓶で正面に四角いラベル用区画がある。134は底部を含めて4条の隆帯が認められる。

134は陶器製の瓶蓋である。表面には青色の顔料で「Menuma」とロゴが描かれている。メスマボマードで製造は井田京栄堂(現株式会社メスマ)である。

135はヘアトニックの茶瓶である。正面に△のシール貼る部があり、底に「SANKYO」の他全体に縦縞がエンボス加工してある。三共株式会社(現第一三共株式会社)

衛生薬品瓶(図版43:122)

122はトイレなどの防臭剤瓶である。濃い緑色の特異な形で底に「ODOLES」、腰部に「三共とSANKYOを○内に十字」になるようにエンボス加工を施している。三共製薬(現第一三共株式会社)。

医療検査用品(図版47:195~205)

試薬瓶・シャーレ・試験管の検査用品である。

195~198は試薬瓶で195の蓋と196の瓶はセットである。この瓶3点は同一規格である。

196・197は無色透明瓶で198は茶瓶である。

199・200はシャーレー蓋である。200は上面縁廻りに「新案特許中峰式」のエンボス加工。

201~205は試験管である。201は試験管状であるが肉厚であり、別物の可能性がある。

202・204は丸底、203・205は平底である。

202・204は口縁が割れているが口唇部をもう一度再生している。

203・205は口縁部が割れている。

練歯磨瓶類(図版46:206~210)

練歯磨瓶は206~210の5点である。ガラス瓶は206~208の3点である。206は濃い緑色で底に「LION」のエンボス加工があり、製品名は潤製ライオン歯磨、ライオン歯磨株式会社(現ライオン株式会社)のものである。

207・208は白色18葉形で底に「△内にF」「△内にE」のエンボス加工がある。中央にラベル貼付横円形枠がある。製品名は仁丹練歯磨で森下仁丹株式会社のものである。

陶器製歯磨の209・210は蓋と身のセットである。蓋には赤色で「ミツワ」のロゴ、「ZEORA ZEORA ZEORA」右から左に「ゼオラ 薬用歯磨」と印刷されている。商品名はゼオラ薬用歯磨、ミツワ石鹼本舗のものである。

文具(図版46:211~224)

文具関連としては、墨汁瓶・インク瓶・糊瓶が確認されている。

211は磁器製の墨汁瓶である。開明墨汁で底に「開を中心に瓢箪と蔓を5つ配置した」ロゴのエンボス加工がある。開明株式会社。

インク瓶は 12 点あり、無色透明品は 212 ~ 214・216・218・223、緑色は 215・217・219 ~ 222 である。

円形筒型は 212 ~ 220 である。

212 は底に「SIMCO」のロゴをエンボス加工。篠崎インキ株式会社。

213 は底に「M 1OZ」のエンボス加工。商品名アテナインキで丸善株式会社。

214 は会社名不明。

215 は底に「PLATINUMINK プラチナ」のエンボス加工。プラチナ万年筆株式会社。

216 は底に「PILOT MADE IN JAPAN 2 oz」、蓋の上部に「Pilot」のロゴをエンボス加工。並木製作所(現パイロットコーポレーション)。

217 は腰部に「NIPPON POPLAR CO.LTD」のエンボス加工。商品名ボプラインクで株式会社日本ボグラ。

218 は内面にインクが付着、当初は薬瓶でインク瓶として再利用している。

219・220 は会社名不明。

221 は八角瓶で底部に「春山」のエンボス加工。

222 は側面は六角形、手形長方形で底に「Sailor ink 2 oz 2」のエンボス加工。商品名セイラーアインキで株式会社セーラー万年筆。

223 は底部に「LLOYDINK ロイドインキ・」のエンボス加工。商品名ロイドインキで会社名「SUZUKI INKCO.」。

特殊遺物で紹介した万年筆(第 31 図 10)がこれらインク瓶から使用していたものと考える。

糊瓶は 224 の 1 点で緑色の気泡の多い瓶で口縁はスクリューポーで口唇部は平らである。底に「ヤマト」と右から左に読む、その下に「糊」とエンボス加工。

調味料瓶(図版 48 : 225 ~ 237)

225 は醤油瓶である。腰部に「キッコーマン キッコーマン」のエンボス加工。

226 はカレー粉瓶である。腰部に「関東カレー工業組合指定機」底に「1」のエンボス加工。

227・228 は円錐台上の塩瓶である。腰部に「☆日本専売公社☆」、底に 227 は「27」、228 は「0」のエンボス加工。228 は赤色の中蓋付きで直径 2mm の孔が 5 か所ある。

229 は正 10 角のリスコショードの胡椒瓶である。底に「リスの絵のロゴ」がある。

230 は変形 10 角の味の素瓶である。底に「AJINOMOTO」のエンボス加工。

231 はマヨネーズ瓶の金属蓋付きで鋸びている。底に「◇の中に Q、◇の中に P」「T.K」のエンボス加工。現キュービー株式会社。

232 はトマトソースの緑瓶で底に「○内に六芒星」のロゴのエンボス加工。(現カゴメ株式会社)

233・234 は八角形で青のり瓶である。233 は底に「カメセ 2」のエンボス加工。

235 はゴマ塩瓶である。側面に「古ま塩」「柳井製」のエンボス加工。緑色気泡ガラス瓶。

236・237 はふりかけの菱形瓶で腰部の「○内に美」、底に 3 ◇ 内に NY のエンボス加工。商品名は「是はうまい」である。丸美屋食品株式会社。

食品瓶(図版48:238~248)

238・239は12角柱の雲丹瓶である。238は正面に「下之関名産雲丹」背面に「下関赤間町あ尼安本店」底に「○録」のエンボス加工がある。239は正面に「名産 雲丹」底に「5」のエンボス加工がある。

240・241は不明瓶としておく。240は6角柱で側面が背骨状の隆帯、底に「◇の中にU №8」のエンボス加工。241は底に「703」のエンボス加工。

242~248は平口の海苔の佃煮瓶である。242は腰部に「江戸むらさき KT」、底に「MMYを重ねたロゴ」をエンボス加工している。現桃屋食品工業のものである。243は先のエンボスの他腰部に「T・K2」底に「606」が追加されている。

244~248は緑色瓶である。

245は腰部に「海苔□内にキ 佃煮」、底に「□内にキ」のロゴ、エンボス加工。

美容関連瓶(図版49・50:249~319)

美容瓶は美容クリーム瓶と美容水瓶の2つに分けられる。

249~307は美容クリーム瓶で色付き瓶・陶磁器のものもある。

249~252は寿化学株式会社(現ジュジュ化粧品)である。249は蓋付き品である。249~251は底に「JUJU」、「K3」「K2」「A」のエンボス加工。252は四角形の器で肩部に「JUJU」のエンボス加工。

253は側面に「斜め格子目内に△△△△ A Q J 2 3 4 9 10」、底に「KNK」のエンボス加工。(現カネボウ化粧品?)

254~258は底に「資生堂のロゴ」がエンボス加工がある。254は流線形状で底に「3」、256は「3 4」、258は「・4」のエンボス加工。株式会社資生堂。

259・260・267は商品名がコールドクリーム、マスター化粧品株式会社尚美堂。259・260は底に「マスターのロゴ」のエンボス加工。260・267は磁器で底に「MASTRA」のアルファベットでエンボス加工。267は中央に緑色の印で岐850の統制番号が打たれている。

268は黒ガラス瓶でロゴやエンボスがないが「マスター化粧品」の可能性がある。

261~266はウテナ薬品工業の瓶で261~265はバニシングクリーム、265はミルククリームである。261~266は底に「ウテナのロゴ」、その他262は「№1」263は「1」、265は「8」のエンボス加工がある。

269は底に「Y」のエンボス加工。商品名ビアスクリームでビアス株式会社製である。

270は唯一ピンク色で底に「A」のエンボス加工。商品名はクラブ美身クリーム、メーカーは中山太陽堂(現クラブコスメチック)。

271・272は商品名レートクレーム、メーカーは平尾賛平商店。石柱文4本がエンボス加工、正面に丸いラベル貼る所がある。272は磁器である。

273は底に「マリオ」のエンボス加工。メーカーはマリオ化粧品本舗。

274は黒色ガラス瓶でリボンスペシャルクリーム。

275は底に「POPULAR」のエンボス加工。

276は正面に青色横書き4段で「PAPILIO LABORA -TOIRE CHIMIQUE」フランス語でアゲハチョウの化学研究室の意味 外形四角形瓶の陶器である。メーカーは伊藤胡蝶園。

277 は底に「トキワ」、279 は「正面に▽▽▽▽」のエンボス加工。

281 ~ 284 は縦長の瓶で 281 は黒ガラス、底に「Arny」のエンボス加工。

282・283 は陶器で 282 は白釉、283 は茶釉である。284 は黒ガラスで肩部に「花=」を各 8 点、「底部から肩部の上方向に 3 重三角を 4 か所区画」しているエンボス加工。

283 はバニシングクリームである。

285 ~ 298 は白色クリーム瓶はメーカー不明である。底に 285 は「T 1」、286 は「T 2」、287 は「A 11」、288 は「A 5」のエンボス加工。この 4 ヶは 249 の「JUJU」の瓶と同じ形状である。

290 は陶器の白釉である。291 は高台を持つ、293 はソロバン玉のように角が張る、298 は正面に細長いラベルを貼る個所があるなど特徴があるが今のところメーカー特定は出来ていない。

299・300 は透明白い小瓶である。

301 ~ 304 は瓶下部に 3 ~ 4 段の帯が巡る一群である。

301 は濃紺瓶で商品名モンココクリーム、メーカーは「モンココ洗粉本舗」。

302 は底に「月美人」のエンボス加工。商品名は月美人クリーム、メーカーは「月の友化粧園」である。

303・304・305 は不明である。305 は平らな瓶で幅 1.6cm の帯が巡るが、帯はなかった。

306 は底に「○内に N を中心に○を上下左右に配すロゴ」のエンボス加工。

307 はクリーム瓶であるが、通常より大瓶であり、塗薬瓶の可能性もある。

308 ~ 319 は美容水瓶は色付き瓶・透明ガラス瓶である。

308 は乳白色の瓶でドルックスという化粧水である。底に「資生堂のロゴ 6」のエンボス加工。

309 は底部に「8 TO」、側面に○を 3 ケ縦に並べたエンボス加工。パールシャルムという化粧水である。310 は不明瓶。311 は化粧水で濃厚化粧水、商品名は「御園 四季能は奈」、メーカーは伊藤胡蝶園である。312 は小瓶で底部に「16」のエンボス加工。

313 ~ 318 は椿油瓶で整髪料に分類するものかもしれないがここでは美容で扱う。

313・314・315 は椿油と考えられるがメーカーは特定できない。

316 は椿油瓶で底部に「八丈 椿 横山」のエンボス加工。八丈島の横山(人名・地名・会社名かは不明)というところで作られていたことがわかる。

317 は椿油瓶で胴下部に「伊豆椿」のエンボス加工。

318 は椿油瓶で正面に「Honto Tsubaki」「意匠登録」のエンボス加工。

319 は吹きガラスで小瓶である。瓶内部の頸部分に紅が付着している。口紅・頬紅などに使用していたものと考える。

第8表 ガラス等製品一覧表

番号	用途	色調	成形	側面	110cm	⑤洋服下商品名	⑥製造会社	⑦縫合 cm	縫合径 cm	縫高 cm	特徴	基準	
国研 42-72	菓品	茶 透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	2.9	3.5	5.3	エンボス 紙面「4 0 5 シロゴ K 2_1」		
国研 42-73	菓品	茶 透明	方巾紙	方巾紙	S	①織品服	②— ③—	2.3	27×3.8	8.0	エンボス 紙面「(シロゴ) 織物に一筆の墨で印字	○	
国研 42-74	菓品	茶 透明	方巾紙	方巾紙	S	①織品服	②— ③—	1.7	28×4.4	5.3	エンボス 紙面「H2」		
国研 42-75	菓品	茶 透明	方巾紙	方巾紙	S	①織品服	②— ③—	1.7	33×2.8	5.0	白袋丁度透明		
国研 42-76	菓品	茶 透明	方巾紙	方巾紙	S	①織品服	②— ③—	1.5	21×3.5	3.8	エンボス 紙面「4-21 K.L.SANKYO」		
国研 42-77	菓品	茶 透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	1.4	2.9	9.6	エンボス 紙面「(シロゴ) 白元は黄朱染料 リンク加工」		
国研 42-78	菓品	茶 透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	1.8	2.7	6.9	エンボス 紙面「5 20 H SANKYO」		
国研 42-79	口用品	茶 透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	1.8	2.3	6.1	エンボス 紙面「白元」	外掛袋内に茶・錠体全面にナーリング加工	
国研 42-80	菓品	茶 透明	円	円	S	①織品服	②— ③カルボン	1.4	2.2	9.2	④織物表面に横まで印字「心臓ルビン」 25cc Lucas-Dickinson(内製袋) 製元: フィルタード社 東京・京橋(片町) 市: ブラックタグ付 19×高 8cm	○	
国研 42-81	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	3.8	4.4	7.0	エンボス 紙面「(シロゴ) 200g(シロゴ) 30-80」	表面ナーリング加工	
国研 42-82	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	3.1	4.0	7.1	エンボス 紙面「A の中にO のロゴ」	○	
国研 42-83	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③販賣紙	3.1	4.1	7.2	エンボス 紙面「2 ○の中央▲のロゴ T」	○	
国研 42-84	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	3.1	3.8	5.6	エンボス 紙面「(シロゴ) 4」		
国研 42-85	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	1.9	2.6	5.5	エンボス 紙面「(シロゴ) A 7」		
国研 42-86	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	2.4	4.7	8.1	エンボス 紙面「(シロゴ)」		
国研 42-87	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	1.8	25×4.1	8.3	エンボス 紙面「O T」		
国研 42-88	菓品	無色透明	楕円	円	S	①織品服	②— ③—	1.7	18×4.3	8.6	エンボス 紙面「(シロゴ) A 7」		
国研 42-89	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	2.1	3.9	10.2	エンボス 紙面「D 4」		
国研 42-90	菓品	無色透明	円	円	S	①織品服	②— ③—	1.7	3.1	6.0	エンボス 紙面「Y 2」		
国研 42-91	菓品	無色透明	方巾	方巾	S	①織品服	②— ③—	2.5	4.0	8.0	円筒状底なし、胴体上にそれぞれ4×3の枚数が並ぶ		
国研 42-92	菓品	無色透明	方巾	方巾	S	①織品服	②— ③—	2.3	3.8×3.8	8.1	円筒状底なし。		
国研 42-93	菓品	無色透明	方巾紙	方巾紙	S	①織品服	②— ③—	1.6	21×20	4.9	エンボス 紙面「1 円筒状底なし」		
国研 42-94	菓品	無色透明	円	円	—	①織品服	②— ③—	2.7	3.3	4.1	エンボス 紙面「N E O」		
国研 42-95	菓品	綠 透明	円	円	平	①織品服	②— ③—	2.4	3.3	6.1	エンボス 紙面「N」		
国研 42-96	菓品	綠 透明	方巾紙	方巾紙	平	①織品服	②— ③—	1.6	19×3.1	6.2	方巾紙底なし		
国研 42-97	菓品	青 透明	方巾紙	方巾紙	平	①織品服	②— ③—	1.6	19×3.1	6.1	方巾紙底なし		
国研 42-98	菓品	青 透明	円	円	平	①織品服	②— ③—	2.4	3.0	5.0	エンボス 紙面「(シロゴ) 4」		
国研 42-99	菓品	青 透明	円	円	平	①織品服	②— ③—	2.5	2.5	5.0	円筒状底なし		
国研 42-100	菓品	青 透明	円	円	平	①織品服	②— ③—	3.1	4.0	8.1	円筒状底なし。		
国研 42-101	菓品	青 透明	方巾紙	方巾紙	平	①織品服	②— ③—	2.5	31×38	15.4	円筒状底なし		
国研 42-102	菓品	青 透明	方巾紙	方巾紙	平	①織品服	②— ③—	2.3	4.4	14.4	エンボス 紙面「3」	表面ナーリング加工	
国研 42-103	菓品	青 透明	円	円	平	①織品服	②— ③—	3.6	5.5	13.4	○		
国研 42-104	菓品	茶 透明	円	円	平	①織品服	②— ③—	3.0	5.0	11.4	エンボス 紙面「(シロゴ) 1」	○	
国研 42-105	菓品	無色透明	円	円	平	①織品服	②— ③—	3.0	5.0	11.4	エンボス 紙面「(シロゴ) 2」	○	
国研 42-106	食器	青 透明	円	円	平	①コップ	②— ③—	6.0	直径 4.6	8.8	脚半 1/4(左)の文様をグリーンマークで囲んで、脚下半下から底面にかけて右方向に 18道カット エンボス 紙面		
国研 42-107	食器	青 透明	円	円	平	①コップ	②— ③—	6.0	直径 4.6	10.2	内面 1/4の一部を斜め方向に 18道カット エンボス 紙面		
国研 42-108	食器	無色透明	円	円	平	①コップ	②— ③—	7.8	直径 4.6	12.0	○内に S G F MADE IN JAPAN 1/4欠刻	○	
国研 42-109	容器	白	ガラス	円	円	平	①杯	②— ③—	—	直径 5.4	9.7	重ねガラス 内面ガラスの上に花文(オレンジ・黄・白) その左に酒井ガラス 制作は白(透かす上)	○
国研 42-110	容器	薄ビニール	円	円	平	①コップ	②— ③—	10.8	直径 5.9	4.1	製造り 2/5 現在		
国研 42-111	容器	薄ビニール	—	—	—	①(シロゴ) 1	②— ③—	3.3	7.5	6.7	透なし 全長 147mm 白陶器用		
国研 42-112	菓品	白	—	—	平	①クリヤー瓶	②— ③—	8.3	8.3	1.2	エンボス 上部「サンハッピ」 内面と日本無施錠 紙面		
国研 42-113	日用品	薄ビニール	—	—	—	①(シロゴ) 1	②— ③—	3.5	3.9	3.5	○		
国研 42-114	日用品	薄ビニール	—	—	—	①(シロゴ) 1	②— ③—	4.5	5.0	4.0	○		
国研 42-115	日用品	薄ビニール	—	—	—	①(シロゴ) 1	②— ③—	5.0	5.5	3.8	エンボス 紙面「1」		
国研 42-116	日用品	白	—	—	—	①(シロゴ) 1	②— ③—	4.9	5.5	3.7	○		
国研 42-117	日用品	無色透明	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③—	5.0	5.5	4.3	エンボス 紙面「(シロゴ)」		
国研 42-118	日用品	緑 透明	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③—	5.0	5.5	4.2	エンボス 紙面「(シロゴ)」		
国研 42-119	日用品	薄ビニール	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③—	4.8	6.1	6.1	エンボス 紙面「6」		
国研 42-120	日用品	薄ビニール	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③—	6.1	6.4	5.1	○		
国研 42-121	日用品	薄ビニール	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③—	5.4	5.9	5.6	譲欠額		
国研 42-122	日用品	緑 透明	不規則印	不規則印	S	③・株式会社	④オレス	—	—	—	エンボス 脚下「○の内に織密度で三共横顔で SANKYO」	○	
国研 42-123	化粧品	無色透明	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③(株)	1.3	35×7.0	11.6	エンボス 脚下「○の内に織密度で三共横顔で SANKYO」	○	
国研 42-124	化粧品	無色透明	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③(株)	—	6.4	4.1	エンボス 紙面「(シロゴ)」		
国研 42-125	化粧品	無色透明	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③(株)	5.5	6.4	4.6	エンボス 紙面「1 7 - 6 - 1」	脚部 1/4の幅で外寸全長 0.6 × 0.6cmの星型 脚部中央ウレタン封締付径 2×4.4	○
国研 42-126	化粧品	無色透明	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③(株)	—	6.4	4.6	エンボス 紙面「1 7 - 6 - 1」	脚部 1/4の幅で外寸全長 0.6 × 0.6cmの星型 脚部中央ウレタン封締付径 2×4.4 (4/4欠屈)	○
国研 42-127	化粧品	白	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③(株)	—	6.4	4.6	1.0(太幅) のエラストマ 右正面面にオーバーライン加工 面面はラベルか紙に貼りあり		
国研 42-128	化粧品	白	円	円	S	①(シロゴ) 1	②— ③(株)	4.9	6.2	4.2	エンボス 紙面「U J U A 4-2 制作中央ラベル貼付時	○	

番号	用途	色調	底形	種別	JISB 日本評議会名古屋製造会社	JISF 日本評議会名古屋製造会社	底径 mm	高さ mm	底面 形状	特徴	規格	
国43-127	化粧品	白	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類マーク(樹脂)	5.1	5.7	4.9	エンボス成形(樹脂ロゴ)・樹脂中ラベル貼付凹印(2.0×2.0) 凹印・底面凹印(1.0×1.0)	○		
国43-128	化粧品	白	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類マーク(樹脂)	5.4	6.0	5.3	エンボス成形(樹脂ロゴ S 1.2)・樹脂中ラベル貼付凹印 (2.0×2.0) 凹印・底面凹印(1.0×1.0)	○		
国43-129	化粧品	白	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類マーク(樹脂) 2種類底面(樹脂)・3種類マスク	6.0	7.5	4.7	エンボス成形(樹脂ロゴ N 1.2)・樹脂中ラベル貼付凹印(2.0×2.0) 樹脂ラベル貼付凹印(2.0×2.0)のキャラクタ	○		
国43-130	化粧品	白	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類マーク(樹脂) 2種類底面(樹脂)・3種類マスク	5.4	6.5	4.4	エンボス成形(樹脂ロゴ N 1.2)・樹脂中ラベル貼付凹印(2.0×2.0) 樹脂ラベル貼付凹印(2.0×2.0)のキャラクタ	○		
国43-131	化粧品	白	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類マーク(樹脂) 2種類底面(樹脂)・3種類マスク	6.0	6.5	4.7	エンボス成形(樹脂ロゴ ?) ? ? ? 樹脂中ラベル貼付凹印(2.4×4.3) 樹脂ラベル貼付凹印(2.4×4.3)のキャラクタ	○		
国43-132	化粧品	黒	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類マーク(樹脂) 2種類底面(樹脂)・3種類マスク	4.9	6.6	3.7		○		
国43-133	化粧品	黒	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類マーク(樹脂) 2種類底面(樹脂)・3種類マスク	4.8	5.8	3.3	樹脂中ラベル貼付凹印(2.0×4.0) 樹脂ラベル貼付凹印(2.0×4.0)のキャラクタ	○		
国43-134	化粧品	白	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類マーク(樹脂) 2種類底面(樹脂)・3種類マスク	6.0	6.0	1.4	上部角削り「M manuel」と焼きされている 右端に折れ目がある	○		
国43-135	化粧品	茶	透明	長方形	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	—	30×6.3	10.3	エンボス成形「SANKYO」正面上部2.8mm の底面凹印(2.0×2.0)の樹脂ロゴ 樹脂底面(2.0×2.0)の樹脂ロゴ 樹脂背面(2.0×2.0)の樹脂ロゴ	○		
国44-136	靴下	黒	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	3.1	7.0	18.6	エンボス成形(樹脂ロゴ A 7.0)	○	
国44-137	靴下	黒	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	3.1	7.0	18.6	エンボス成形(樹脂ロゴ A 7.0)	○	
国44-138	靴下	黒	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	2.8	7.0	18.4	エンボス成形(樹脂ロゴ A 7.0)	○	
国44-139	靴下	黒	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	3.8	7.0	18.4	エンボス成形(樹脂ロゴ A 7.0)	○	
国44-140	靴下	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	2.5	8.2	16.9	エンボス成形(樹脂ロゴ N 5.0 SANKYO) 底面カッティング加工	○	
国44-141	靴下	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	3.0	4.7	16.7	エンボス成形「N 5.0」の樹脂ロゴ「T」	○	
国44-142	靴下	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	4.2	7.7	18.1	エンボス成形・底面丸	○	
国44-143	靴下	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	2.6	6.4	16.0	エンボス成形(樹脂)	○	
国44-144	靴下	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	2.8	7.6	18.4	エンボス成形(樹脂 A 7.6)	○	
国44-145	靴下	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	3.0	7.5	19.1		○	
国44-146	靴下	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	2.3	8.1	17.1		○	
国44-147	靴下	乳白色	長方形	長方形	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	1.5	28×5.8	11.5	エンボス成形「N 5.0」の樹脂モングル	○	規格あり	
国44-148	靴下?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.4	6.1	9.6	エンボス成形「11」	○	
国44-149	靴下?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.4	5.9	9.5		○	
国44-150	靴下?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.4	6.3	10.0		○	
国44-151	靴下?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.2	6.2	10.0		○	
国44-152	靴下?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.3	6.2	10.2		○	
国44-153	靴下?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.3	5.5	9.0		○	
国44-154	靴下?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	6.3	7.0	7.4		○	
国44-155	靴下?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.2	7.2	11.2	エンボス成形「N 5.0」の樹脂「ハイラックス3号」「N 5.0」の 中「P」	○	
国44-156	食缶?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.5	7.1	11.0	エンボス成形「N 5.0」の樹脂「A」の 中「P」	○	
国44-157	食缶?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.9	7.2	11.0	エンボス成形「N 5.0」の樹脂「A」の 中「P」	○	
国44-158	食缶?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.6	6.9	10.2	エンボス成形「120」	○	
国44-159	食缶?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	5.4	6.5	10.0	エンボス成形「120」(樹脂)	○	
国44-160	食缶?	茶	透明	円	円	S シボマーク(樹脂)・2種類モチニック ・2種類底面(樹脂)	6.3	7.6	12.9	エンボス成形「120」	○	
国44-161	食缶	無色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石	2.6	5.4	18.9	エンボス成形・底面(樹脂)「東洋乳業ミルクラント」「全乳一八〇」 (樹脂)	○		
国44-162	食缶	無色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石	2.7	5.4	19.0	エンボス成形・底面(樹脂)「牛乳一八〇」 (樹脂)	○		
国44-163	食缶	無色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石 山口白石乳業(株)山口乳業(株)(W)	2.6	5.5	18.8	エンボス成形・底面(樹脂)「牛乳一八〇」 「山口白石乳業(株)」(樹脂)	○		
国44-164	食缶	無色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石	4.5	5.7	14.0	エンボス成形「N 5.0」の樹脂「牛乳一八〇」 「山口白石乳業(株)」(樹脂)	○		
国44-165	食缶	無色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石	2.7	5.7	21.7	エンボス成形・底面(樹脂)「牛乳の花」 「牛乳の花」(樹脂)	○		
国44-166	食缶	無色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石	2.6	8.0	28.3	エンボス成形・底面(樹脂)「牛乳の花」 「牛乳の花」(樹脂)	○		
国44-167	食缶	茶	透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石 山口白石乳業(株)山口乳業(株)(W)	2.7	6.9	16.0	エンボス成形「NOT TO BE REPLIED NO DEPOSIT NO RETURN」(樹脂)「D unglas 4.0」の樹脂「N 5.0」の 中「P」	○	
国44-168	食缶	茶	透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石 山口白石乳業(株)山口乳業(株)(W)	2.7	6.9	17.0	エンボス成形「NOT TO BE REPLIED NO DEPOSIT NO RETURN」(樹脂)「D unglas 4.0」の樹脂「N 5.0」の 中「P」	○	
国45-169	食缶	茶	透明	円	円	S 日本製ビール瓶 D unglas ヨハネスブルグビール	2.7	7.1	14.8	エンボス成形「2」の樹脂「N 5.0」の 中「P」	○	
国45-170	食缶	茶	透明	不整端形	S クラシカル・ガーリット瓶 トキタウキ・スリースター 三輪式社屋(現:山口セラフ) ヨハネスブルグビール	2.2	16×8.2	15.3	エンボス成形「N 5.0」の樹脂「D LITER」 「D LITER」(樹脂)	○		
国45-171	食缶	無色透明	不整端形	不整端形	S クラシカル・ガーリット瓶 トキタウキ・スリースター 三輪式社屋(現:山口セラフ) ヨハネスブルグビール	—	3.7×8.3	12.9	エンボス成形・底面(樹脂)「D LITER」 「D LITER」(樹脂)	○		
国45-172	食缶	空色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石	2.6	5.8	24.7	エンボス成形(樹脂)「D LITER」	○		
国45-173	食缶	無色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石 山口セラフ・カッパローブ ヒルズ(樹脂)	—	3.6	10.1	エンボス成形「D LITER」 「D LITER」(樹脂)	○		
国45-174	食缶	無色透明	円	円	S 牛乳瓶、茶・山口白石	3.8	5.3	13.3	エンボス成形「N 5.0-SN 28」	○		

番号	用途	色調	形状	細柄	110g	引洋紙不商品名	引製造会社	1kg cm	最大径 cm	高さ cm	特徴	登録
国税 48-225	食品	青 透明	円	円	S	1カーネーション 2コマヨ・御酒 3物産興業会員社(現キッ コマンドー)		1.8	4.6	13.8	エンボス 剥下紙「キッコマン・キッコマン」	
国税 48-226	食品	緑 透明	円	円	平	1カーネーション 2レ 3物産興業会員社		3.9	2.9	13.1	エンボス 剥下紙「東カーネーション組合別称専用」紙顔「J」	○
国税 48-227	食品	無色透明	円	円	S	1カーネーション 2レ 3物産興業会員社		2.5	5.2	8.5	エンボス 剥下紙「國税良品会の印に★山本卓志社長★」 底面「(2)」	
国税 48-228	食品	無色透明	円	円	S	1カーネーション 2レ 3物産興業会員社		2.5	5.2	8.5	エンボス 剥下紙「國税良品会の印に★山本卓志社長★」 底面「(2)」内裏「持て重ねのひがき」	
国税 48-229	食品	無色透明	ト角	ト角	S	1カーネーション 2リスコシヨー 3物産興業会員社		2.0	3.9	7.4	エンボス 瓶底「リスコシヨー」	
国税 48-230	食品	無色透明	扇円	扇円		1カーネーション 2物産の印 3物産興業会員社		1.7×2.9	24×5.0	8.3	エンボス 瓶底「ABINOMOTO」(瓶底から瓶面にかけて被熱 により変形)	
国税 48-231	食品	無色透明	円	円	S	1マリオット 2マリオット 3ソース 3食器工業会員社合 同(ホルターピーイ)		3.7	4.5	7.9	エンボス 瓶底「△の内にQ △の内にT T K」 金型:置き器あり・部欠損・崩多し	
国税 48-232	食品	緑 透明	円	円	平	1カーネーション 2レ 3愛媛トマト秋田式栽培 (既にゴム目)		5.4	6.1	9.9	エンボス 瓶底「△の内に六芒星のロゴ」	○
国税 48-233	食品	緑 透明	円	八角形	平	1カーネーション 2レ 3あおむり 4カセキモ		2.2	6.3	13.6	エンボス 瓶底「カメセ Z」	
国税 48-234	食品	緑 透明	円	八角形	平	1カーネーション 2レ 3あおむり 4カセキモ		2.1	4.6	8.8		
国税 48-235	食品	良形	方舟形	方舟形	平	1カーネーション 2古 3葉面 4細目		2.3	14×5.4	10.0	エンボス 剥面右「古 ま葉面」剥面右「細目製」 底面「被熱の状態状況」(左は変形版)	○
国税 48-236	食品	無色透明	葉面	葉面	S	1カーネーション 2レ 3愛媛トマト秋田式栽培 (既にゴム目)		2.7	17×6.0	11.0	エンボス 剥下紙「△の内に美的ロゴ」底部「△の内にN Y」 瓶底一部欠損	
国税 48-237	食品	無色透明	葉面	葉面	S	1カーネーション 2レ 3愛媛トマト秋田式栽培 (既にゴム目)		2.7	17×6.0	11.0	エンボス 剥下紙「△の内に美的ロゴ」底部「△の内にN Y」 瓶底一部欠損	
国税 48-238	食品	無色透明	円	円	S	1カーネーション 2下に開閉装置 3記念本店		4.2	5.0	10.3	エンボス 剥面中央下「下に開閉装置」剥面背面中央下「下 に記念本店」 並 宮安社長、瓶底「(ア)」瓶底一部欠損	○
国税 48-239	食品	無色透明	円	円	S	1カーネーション 2レ 3本体箱		3.5	4.8	9.2	エンボス 剥面右「(ア)」瓶底「(乙)」 瓶底「(ア)」(左は変形版)	
国税 48-240	食品	無色透明	扇円	扇円	S	1カーネーション 2レ 3本体箱		5.3	6.4×7.7	13.7	エンボス 瓶底「△の内にK」 瓶底「(ア)」(左は変形版)	
国税 48-241	?	透明	円	四角形	S	1カーネーション 2レ 3本体箱		5.9	6.6	11.6	エンボス 瓶底「△の内にK」 瓶底一部欠損「(ア)」	
国税 48-242	食品	透明	円	多角形	平	1カーネーション 2レ 3本体箱		5.1	5.1×8.3	10.0	エンボス 剥面下「(ア)ならきき」K T S、瓶底「MMYを重 視する」	
国税 48-243	食品	透明	円	多角形	平	1カーネーション 2レ 3本体箱		4.3	4.4×8	7.7	エンボス 剥下紙「(ア)ならきき」「T K Z」、瓶底「MMY を重視する」ロゴ「400g」	
国税 48-244	魚介	緑 透明	六角	六角	平	1カーネーション 2レ 3本体箱		5.0	5.0×7.0	10.0		
国税 48-245	食品	緑 透明	円	多角形	平	1カーネーション 2レ 3本体箱		5.3	5.0×7.0	10.0	エンボス 剥面「海舟」△の内にK 瓶底「カクタ」、瓶 底「(ア)内にK」	○
国税 48-246	食品	緑 透明	円	多角形	平	1カーネーション 2レ 3本体箱		5.4	5.1×6.6	8.6	9.9倍山形の複数倍	
国税 48-247	食品	緑 透明	円	多角形	平	1カーネーション 2レ 3本体箱		4.7	4.4×5.6	8.7	外側に3本の複数倍	
国税 48-248	食品	緑 透明	円	多角形	平	1カーネーション 2レ 3本体箱		4.1	4.0×7.3	8.6		
国税 49-249	化粧品	白(透け)	円	円	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		5.0	5.9	4.1	エンボス 瓶底「T U J U 」、「K S」、蓋:エンボス 袋底「K 16・K 23」、剥面中央ラベル横幅約10mm (0.9×4.0)	
国税 49-250	化粧品	白(透け)	円	円	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		5.0	5.9	4.1	エンボス 瓶底「T U J U 」、「K S」、剥面中央ラベル横幅約10mm (0.9×4.0)	
国税 49-251	化粧品	白	円	圓形	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		4.9	5.8	4.0	エンボス 瓶底「T U J U 」、「K S」、剥面中央ラベル横幅約10mm (0.9×4.0)	
国税 49-252	化粧品	白	円	圓形	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		—	—	4.8	エンボス 瓶底「T U J U 」、瓶底「(ア)」△複数ラベル横幅約10mm (0.9×4.0)	
国税 49-253	化粧品	白	円	円	S	1カーネーション 2レ 3SK N K (カネカ化粧品)		3.7	4.6	9.3	エンボス 瓶底「(ア)」△複数ラベル横幅約10mm (0.9×4.0)	
国税 49-254	化粧品	白	圓形	圓形	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		4.6	5.4×6.5	5.2	エンボス 瓶底「資生堂ロゴ」△	
国税 49-255	化粧品	白	圓形	圓形	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		4.2	5.2×5.9	5.0	エンボス 瓶底「資生堂ロゴ」△複数倍	
国税 49-256	化粧品	白	円	円	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		4.9	5.4	3.2	エンボス 瓶底「資生堂ロゴ」△	
国税 49-257	化粧品	白	円	円	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		4.9	5.3	3.2	エンボス 瓶底「資生堂ロゴ」△複数倍	
国税 49-258	化粧品	白	円	円	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		3.8	6.1	4.1	エンボス 瓶底「資生堂ロゴ」△	
国税 49-259	化粧品	白	円	圓形	S	1カーネーション 2レ 3株式会社(現ジッジョ化粧品)		3.5	4.5×50	5.8	エンボス 瓶底「マスター」ロゴ△	
国税 49-260	化粧品	白	円	円	S	1カーネーション 2レ 3マスター化粧品		4.1	5.5	6.2	エンボス 瓶底「マスター」ロゴ△	
国税 49-261	化粧品	白	圓形	圓形	S	1カーネーション 2レ 3ウチナ製工芸		3.5	5.1	6.0	エンボス 瓶底「ウチナロゴ」△	
国税 49-262	化粧品	白	圓形	圓形	S	1カーネーション 2レ 3ウチナ製工芸		3.5	4.5	5.2	エンボス 瓶底「ウチナロゴ」△	
国税 49-263	化粧品	白	圓形	圓形	S	1カーネーション 2レ 3ウチナ製工芸		4.1	5.5	6.5	エンボス 瓶底「ウチナロゴ」△	
国税 49-264	化粧品	白	圓形	圓形	S	1カーネーション 2レ 3ウチナ製工芸		3.6	4.4	5.2	エンボス 瓶底「ウチナロゴ」△	
国税 49-265	化粧品	白(透け)	円	円	S	1カーネーション 2レ 3コルドリーム		5.3	6.1	3.9	エンボス 瓶底「ウチナロゴ」△	
国税 49-266	化粧品	白	円	円	S	1カーネーション 2レ 3ウチナ製工芸		3.5	3.5	4.1	エンボス 瓶底「ウチナロゴ」△	
国税 49-267	化粧品	白	圓形	圓形	S	1カーネーション 2レ 3ウチナ製工芸		3.5	4.6	5.1	エンボス 瓶底「MA STRA」△中央に圓形凹凸850(規制 番号:土岐市下石町 友藤桂) 瓶底	

番号	用途	色調	成形	形状	110g	⑤洋服 ⑥商品名 ⑦製造会社	1kg cm	最大径 cm	高さ cm	特徴	基目
IRBK 49-268	化粧品	黒	円	円	S	①クリーク型、②— ③マスク化粧品株式会社 高更衣から	4.0	4.8	5.6		○
IRBK 49-269	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②マスク ワーム、③マスク株式会社	4.4	5.8	4.5	エンボス底部「Y」、脚部や丸ラベル脚付印(0.1×4.2)付	○
IRBK 49-270	化粧品	ピンク	円	円	S	①クリーク型、②マスク美健 カラム、③マスク	4.0	5.9	4.1	エンボス 底部「A」	○
IRBK 49-271	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②マスクカラム レーム、③マスク平底店	3.8	4.6	4.4	エンボス「タペル耐久用紙(性1.8)」×2、「柱文様」×4	○
IRBK 49-272	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②マスク平底店 レーム、③マスク平底店	4.0	5.4	4.6	エンボス「タペル耐久用紙(性1.8)」×2、「柱文様」×4 鏡面	○
IRBK 49-273	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③マスク品包装	3.5	5.2	3.8	エンボス 底部「マリオ」	○
IRBK 49-274	化粧品	黒	円	円	S	①クリーク型、②ボタンスペ シルクリーム	4.2	4.6	5.7	色は黒だが、透かすと茶色	○
IRBK 49-275	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③POPULAR	4.8	5.6	4.8	エンボス 底部「POPULAR」	○
IRBK 49-276	化粧品	白	方形	方形容	S	①クリーク型、②— ③伊藤謹慎	3.6	4.4	4.9	鏡面 一面に色鉛筆を2段で「PAPILIO LABORA TO 1 XE CHIMIQUE」フランス語でアーハチョウの 化学研究所の場所、外側の角部 鏡面	○
IRBK 49-277	ア リ (透明)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	5.8	6.3	3.7	エンボス 底部「トワツ」	○	
IRBK 49-278	ア リ (透明)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	5.8	6.3	3.9		○	
IRBK 49-279	ア リ (透明)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	6.4	7.2	3.8	エンボス 剣下部「Y-Y-Y-Y」	1/2 基目	
IRBK 49-280	ア リ (透明)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	6.8	7.4	3.0		○	
IRBK 49-281	化粧品 (第1)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.0	4.6	5.1	エンボス 底部「Arienn」	○	
IRBK 49-282	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	3.7	4.6	5.6	底面斜面無地 磨き	○
IRBK 49-283	化粧品	茶	円	円	S	①クリーク型、②パニシング カラム、③株式会社五井	3.9	4.6	5.5	表面底面付地無なし 背面	○
IRBK 49-284	化粧品	黒 (茶)	円	円	S	①クリーク型、②— ③REIKO ?	4.1	4.6	5.5	エンボス「背面に花と各色♪」、柄から上方に向に3束三 角4ヶ所	○
IRBK 49-285	化粧品	ア リ (透明)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.3	5.9	4.2	エンボス 底部「T」、脚部中央やラベル脚付印(1.8×3.1)	○
IRBK 49-286	化粧品	ア リ (透明)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	5.0	5.9	4.2	エンボス 底部「T」、脚部中央やラベル脚付印(0.9×4.1)	○
IRBK 49-287	化粧品	ア リ (透明)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.3	5.9	4.2	エンボス 底部「A」、11	○
IRBK 49-288	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.3	5.8	4.2	エンボス 底部「A」、5」、脚部中央やラベル脚付印(1.8×3.0)	○
IRBK 49-289	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.4	5.8	4.7		○
IRBK 49-290	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	5.1	6.1	5.0	表面	○
IRBK 49-291	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.0	4.6	5.9	脚部中央やラベル脚付印(0.8×3.1)あり 向付け	○
IRBK 49-292	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	3.9	5.6	5.3	表面	○
IRBK 49-293	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	3.6	5.7	4.3	エンボス 底部「A」、脚下部で大きくエラが膨ら	○
IRBK 49-294	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.9	5.5	3.6	エンボス 底部「A」、	○
IRBK 49-295	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.2	4.8	4.4		○
IRBK 49-296	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.9	5.6	4.0		○
IRBK 49-297	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	4.9	5.7	4.0		○
IRBK 49-298	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	5.2	5.8	4.8	脚部中央やラベル脚付印(0.6×4.1)	○
IRBK 49-299	化粧品 (第2)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	3.2	3.6	2.9		○	
IRBK 49-300	化粧品 (第2)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	2.5	3.2	3.7		○	
IRBK 49-301	化粧品 (透明)	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	3.2	5.1	5.8	脚部中央が認められ、鏡面に付けられ 剑下部に3段の商標 が並ぶ	○	
IRBK 49-302	化粧品	口	椭圆形	椭圆形	S	①クリーク型、②— ③—	3.6	43×3.8	6.3	エンボス 底部「月美人」、脚下部に3段の商標が並	○
IRBK 49-303	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	3.6	5.4	5.9	脚部中央が認められ、脚下部に4段の商標が並ぶ 脚部中央に鏡面のついた耐久用紙(2.2×2.2)、脚部に鏡が認め られ、鏡面に折れ目 剑下部に3段の商標が並ぶ	○
IRBK 49-304	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	3.2	5.2	6.0	脚部中央に鏡面のついた耐久用紙(2.2×2.2)、脚部に鏡が認め られ、鏡面に折れ目 剑下部に3段の商標が並ぶ	○
IRBK 49-305	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	6.4	8.6	3.4	脚部前面に4段の耐久用紙(2.1×1.9)	○
IRBK 49-306	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	5.3	5.9	6.0	エンボス 底部「内面外を中央に二重」下右に配したもの	○
IRBK 49-307	化粧品	白	円	円	S	①クリーク型、②— ③—	6.5	7.0	9.7	裏面鏡面のみ	○
IRBK 49-308	化粧品	透明	透明	透明	S	①化粧水瓶、②ドルツクス ガラス空	1.5	10×1.6	12.1	エンボス 底部「野生空ゴ」、鏡面4ヶ所に各2本の 商標	○
IRBK 49-309	化粧品	透明	扁方形	耐久形	S	①化粧水瓶、②バニッシュム —	1.2	12×5.9	13.7	エンボス 底部「S TO」、内面部に鏡のついた各3ヶ所	○
IRBK 49-310	透明	透明	円	円	S	①油瓶	1.5	4.5	10.8		○
IRBK 49-311	透明	透明	円	円	S	①油瓶	1.5	4.5	10.8		○
IRBK 49-312	化粧品	透明	扁方形	耐久形	S	①化粧水瓶、②—	1.1	19×2.2	6.4	エンボス 底部「(6)」	○
IRBK 49-313	化粧品	透明	円	円	S	①化粧水瓶、②—	1.9	4.5	10.7	鏡面か	○
IRBK 49-314	化粧品	透明	扁方形	耐久形	S	①化粧水瓶、②—	1.5	2.5×8.2	10.7	鏡面か? エンボス底部「1」、脚部中央やラベル脚付印(4.2×2.9) が並ぶ	○
IRBK 49-315	化粧品	透明	扁方形	耐久形	S	①化粧水瓶、②—	1.5	2.8×5.7	8.0	鏡面か? 脚部中央やラベル脚付印(4.2×2.9) が並ぶ、13段の鏡子が並ぶ	○
IRBK 49-316	化粧品	透明	円	円	S	①化粧水瓶、②—	1.9	5.0	9.7	鏡面、エンボス底部「六木 橋 岐阜」	○
IRBK 49-317	化粧品	透明	扁方形	耐久形	S	①化粧水瓶、②—	1.9	5.7×5.9	8.3	鏡面、エンボス底部「(6)」	○
IRBK 49-318	化粧品	透明	円	円	S	①化粧水瓶、②—	1.4	2.6×6.0	7.2	鏡面、エンボス底部「貝 onto T subaku」(御手洗)	○
IRBK 49-319	化粧品	透明	円	円	S	①—	0.6	1.7	3.4	内面部に彩色の付箋物、燕子グラス	○

* 110gの「平」は平版、「S」はスクリュープラ

第3章 近世の遺構と遺物

高崎城は、本丸・二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸・梅ノ木郭・榎郭・西郭などから構成され、西は烏川で8mほどの断崖で区切られている。高崎城は南北730m、東西最大幅で550mを測る城である。

北西部は湾曲する河岸段丘を600mほど利用し、北は河岸段丘から北東方向に約300m屈曲し、東西方向に直線的に340m、東側は南北方向と直線的に730m（一部東側に南端に南北75m、東西35mの張り出しを持つ）、南側は東西方向を直線的に370mと堀に囲まれている。

今回の調査地点は、高崎城二ノ丸南堀と三ノ丸南西側威徳寺の北西部である。

第1節 調査地の歴史

高崎城絵図から高崎城二ノ丸南堀から三ノ丸南西部の土地利用をみてみたい。

①「間部氏当代高崎絵図」（第54図）宝永7年～享保2年（1710～1717）絵図に大田部惣右衛門の名が認められ家臣の屋敷が存在している。南中門の南には普請小屋と文字表記がある。

②「土方氏の御城内絵図」（第55図）で延享年中の頃（1744～1747）のもので、調査地は「天休院」と記載されている。

※威徳寺：天台宗。大河内輝貞（1695～1710）（1717～1747）の時に堂宇を場内に創建し、城主の祈願所とした。輝貞の院号から、この寺の院号が「天休院」となったとされる。

③年代不詳高崎御城之図（第56図）

この絵図は、他の絵図と比べて測量技術が未熟であり、平面形は不正確なものである。

右隅に「高 八萬二千石」と記載されている。この石高になったのは、1779年以後の松平（大河内）輝高の代である。

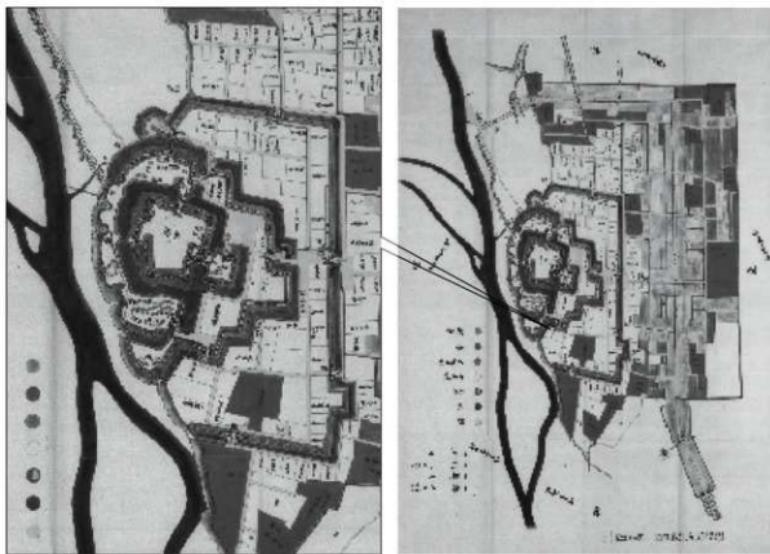
注目されるのは、本丸に駿河大納言（徳川二代秀忠の次男忠長：三代家光の弟）様御住居と記載がある。駿河大納言が高崎城に幽閉されたのは、寛永9・10年（1632・1633）の2年間である。この内容を知っている人が後記している。

また、三ノ丸の利用状況は、徳川公御宮（徳川家康を神として祀っている）がこの絵図の中で唯一詳細な絵が描かれている。徳川公御宮については、北を入口にする板垣に囲われた長方形区画を東西に2分割し、東区画は何もない空間で、西側区画には二重の板垣門を持ってその一番奥に本殿が鎮座している。その南側に系徳寺と書かれている。

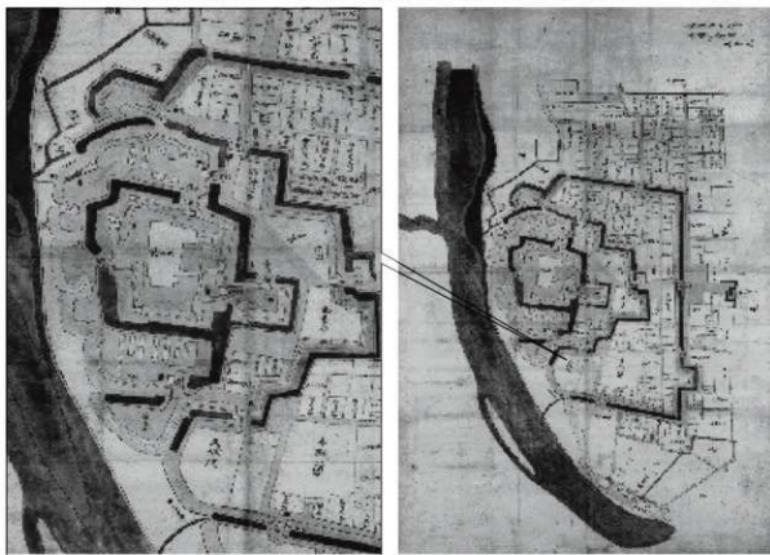
※系徳寺：曹洞宗。天正年間（1573～1592）に直政の伯母系徳院宗貞尼のため箕輪の地に系徳院として創始。慶長3年（1598）に榎森（高崎城榎郭付近）の北に移転。

※四角い垣根に囲まれた中には本殿、玉垣は複数めぐらしがあり、その場合、名称で区別をつけるが神社によっては内側の垣を瑞垣（みずがき）、外側の垣を板垣（いたがき）といったり、一番外側のものを荒垣（あらがき）または外垣といったり、その他、中垣（なかがき）、内垣など、様々な例がある。これらの名称が混用されている場合もあるが、概ね一番内側の垣を「瑞垣」とよぶことは一致している。

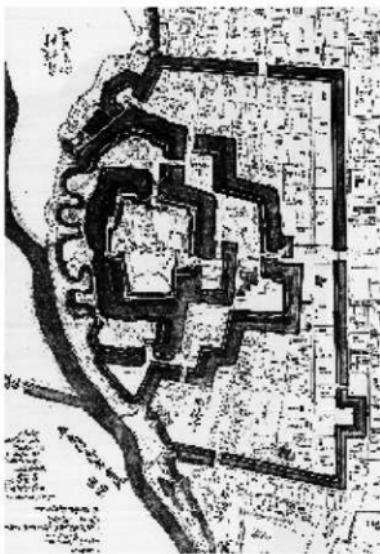
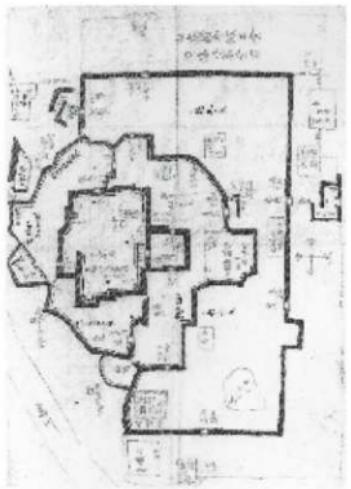
この高崎城絵図は後記されたものが含まれている。一番新しい情報は石高が八萬二千石（1779年以降）の年代根拠があり、高崎城絵図そのものは1779年以後に描かれたもので、その後約200年前の内容を後記したものである。



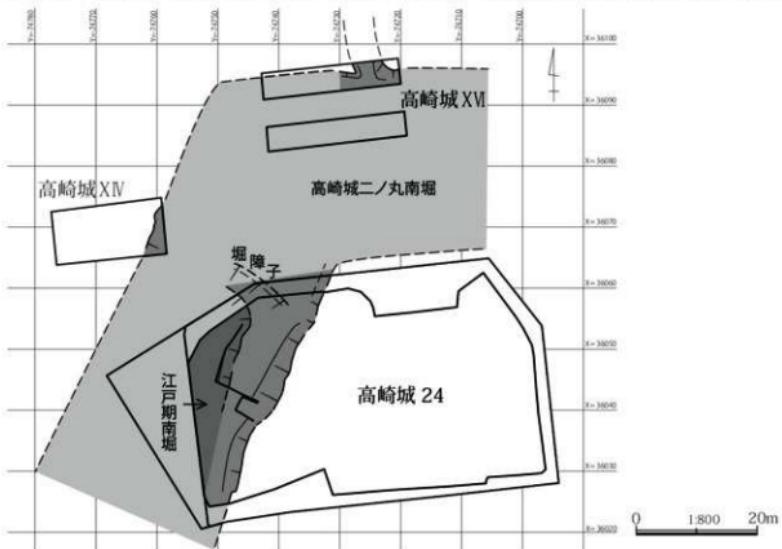
第54図 間部氏当代高崎絵図（福井県 萬慶寺藏）宝永7年～享保2年（1710～1717）



第55図 御城内絵図（延享年中の頃土方氏「高崎街づくり変遷図史」より転載）（1744～1747）



第56図 年次不詳 高崎御城之図(1779年以降) 第57図 「高崎城絵図」より転載(安政3年)(1856)



第58図 近世全体図

この図面で具体的に高崎城三ノ丸という大きな郭を北三ノ丸・南三ノ丸と記述があり、今回の調査地は高崎城南三ノ丸に位置する。

○文化7年6月(1810)御城内外惣絵図(高崎市)には「威徳寺」と描かれている「高崎藩の考古学」18 p

○安政3年(1856)「上野国群馬郡高崎御城内外持場惣絵図(複製)」(高崎市)(第57図)には、二ノ丸南中門の前に「威徳寺」があり、建物の具体的配置図も詳細に描かれている。また、威徳寺の南の土壁に隣接して北西から入る神社と思われる建物が拝殿・幣殿・本殿と設けられている。

「高崎市史史料集1」「高崎城絵図」124 p 参照

*高崎御城内外縮図(高崎市)「威徳寺」書かれ、御堂と建物配置が描かれている。

「高崎藩の考古学」25 p

○慶応年間(1865~1868)の「高崎城絵図」(堤家文書)には「威徳寺」が描かれている。

以上のように、高崎城絵図からみた高崎城南三ノ丸西端の土地利用を紹介した。

第2節 高崎城二ノ丸南堀・南三ノ丸

「高崎城XIV遺跡」調査区の南東コーナー部南北方向に伸びる近世の堀落ち込みを確認している。これは、高崎城二ノ丸南堀の西壁と考えられる。

「高崎城XVI遺跡」の北トレーンチ調査で東西方向に延びる近世の堀落ち込みを確認。これは、高崎城二ノ丸南堀の北側と考えられる。また、幅12 mの溝がこの落ち込みに直行していることも確認している。

今回の「高崎城遺跡24」調査地点では、「高崎城XIV遺跡」の西壁立ち上がりと相対する東壁の立ち上がりを確認している。

二ノ丸南堀の近世末から明治頃の堀の南堀東壁立ち上がりの主軸方位は、およそN-25°-Wである。ただし壁面は左側が膨らむ形で湾曲している。

江戸時代の堀はおよそN-14°-Eで深さ6 mで一段深い堀が掘られている。溝は確認できたのが南北12 m、東西幅は2.5 mで深さは現地表から6 mである。

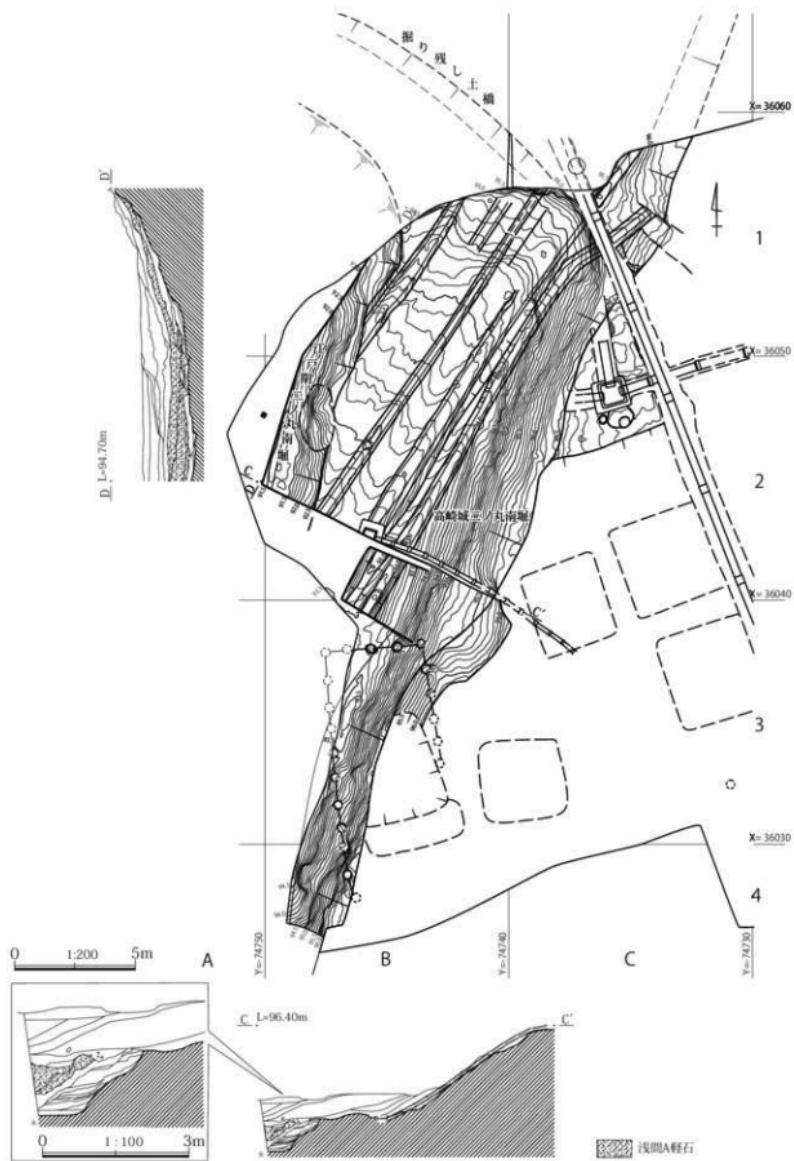
確認された北端は丸く掘り戻を示すような形である。これは高崎城絵図に残る二ノ丸南堀の丁度この位置に掘り残し土橋「堀障子」が存在しているようで、その絵図(第55図)と今回の調査資料は一致した情報を提供したことになる。

明治時代の高崎城内十五連隊入り口の1つである南門の地面からさらに1.4 m以上深く掘られている。堀の中心部を調査していない為、実際の堀底までの深さは確定ではない。この1.4 mのところで一旦テラス状に形成していることも考えられる。

この堀覆土の断面は左壁沿いに平行に突き固めた版築跡が幅1 m~1.2 mで存在している。

その後、掘り直しており、20cmの褐色土層を間層として浅間A軽石の降下堆積層が厚さ20~30 cmの厚さで存在する。この軽石層の直下にも瓦の出土があり、天明3年(1783)7月8日以前の瓦である。

なお、東壁に沿って厚さ5cm前後の違う地層(ローム層・黒色土層・褐色土層)を交互に版築している。版築は堀幅を一旦は1 mほど狭めるため行われたが、実際はもう少し幅広に版築し、最終的に削り込み堀壁角度を40°で立ち上げている。



第59図 二ノ丸南堀全体図

今回発見された部分は、近世に使用されていた堀の中に江戸時代の堀が僅かに確認できたものである。

高崎城 14 次調査と高崎城遺跡 24 次調査の二ノ丸南堀の状況としては、堀幅約 30 m にもなる堀である。ただし、今回調査の堀は、高崎歩兵第十五連隊の時代に東側に若干拡張している可能性があり、正確な数値ではない。

江戸時代だけの堀を考えた場合、堀推定幅は江戸時代堀断面に地表までの立ち上がりを考えた場合 24 m 前後となることが推測できる。

右図 3 点はすべて櫻井一雄家文書である。「高崎市史資料集 1」転載。

高崎城二ノ丸南堀、南中門付近の堀障子を描いた絵図である。

第 60 図は南中門外堀障子の図(櫻井家文書 No. 53)である。

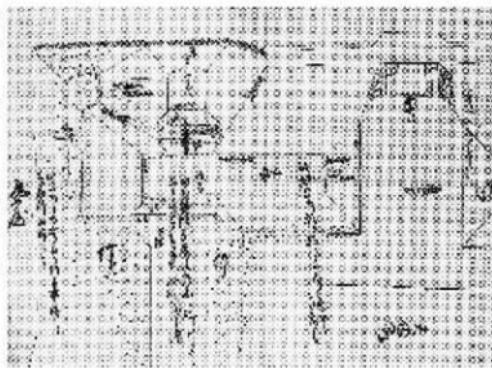
第 61 図は南中御門外御堀障子舛樋損候所絵図(同文書 No. 81)である。

第 62 図 堀障子の図(櫻井家文書 No. 57)である。

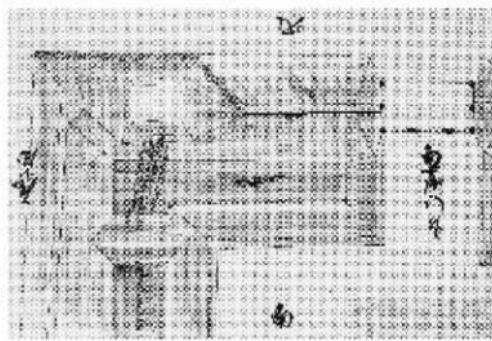
堀障子とは、堀底の一部を掘り残して障壁とした仕切りことで、敵兵が堀底を伝って移動する場合、障子のように立ちはだかって移動を阻止する防護施設である。

『高崎城大意』では「諸所ノ堀、障子崩レテ堀水ノ末、堀留ニ至リテハ乾涸トナリ、今ハ形バカリ残り、此末ニ至リテハ形サヘ失ハシ。」とあり、堀障子は障壁である以外に堀水の流出を食い止める役割があり、堀障子の崩れを警告している。

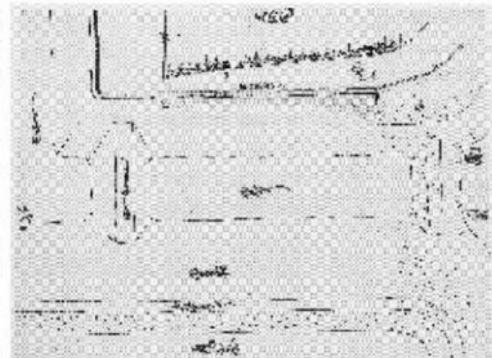
堀障子のことを「堀仕切」ともいわれている。



第 60 図 南中門外堀障子の図(櫻井家文書 No. 53)



第 61 図 南中御門外御堀障子舛樋損候所絵図(同文書 No. 81)



第 62 図 堀障子の図(櫻井家文書 No. 57)

No. 81 南中御門外御堀障子外樋損候所絵図があり、堀障子と直行する外樋を堀底に入れて水の管理をしていたことが判明している。

第 61 図は堀障子外樋が損なったという報告に使った絵図である。

二ノ丸南堀については、年次不詳高崎城絵図の部分図「堀障子の図」(第 62 図)で掘り残し土橋があつたことがわかる。また、堀の端部を同じような掘り残し土橋で綴じていたことが判明した。

調査できたのは僅かな範囲であり、実際は水抜き施設や更に深い溝が存在した可能性はある。

今回発掘調査により発見された南堀のコーナー部の掘り残し土橋「堀障子」は、高崎城絵図に描かれているのは、宝永 7 年 (1710)・享保 3 年～12 年 (1718～1727)・延享年中 (1744～1747) までで、それ以後の絵図には描かれていない。このことは堀の泥さらいを行わなくなり、水堀としていたものと考えられる。

しかし、調査地の南堀の端部西堀は南傾斜が付き水堀となっていないようである。

近世出土遺物は二ノ丸南堀内の出土がほとんどである。

瓦と陶磁器を中心にして出土している。瓦は一度に廃棄された様であり、厚さ 50cm の瓦層ができていた。その中で特徴的なものだけを採集した。

これらの中で明らかに江戸時代の瓦と確認されたのは、堀を埋める土層内に浅間山の噴火で降灰して堆積した火山灰が純粹層で発見されている。これは天明三年 (1783 年) 7 月 8 日に浅間山が噴火した時の火山降下堆積物で通称「浅間 A 軽石」と呼ばれるものであり、この火山灰層の上下層で出土している。

出土遺物（第 63～72 図）

出土遺物は、金属製品・陶磁器・瓦がある。

金属製品としては古銭、建物飾り金具などが出土している。陶磁器は、染付茶碗・皿・急須・蓋、白磁茶碗・鉢、馬の目皿、灯明皿、皿・カワラケ、茶碗、焙烙、擂り鉢、行火、火鉢などがある。その他瓦が出土している。

金属製品（第 63 図）

1 は建物の飾り金具で、長方形銅板に縁飾りし、中央に透かしによる桐紋を持っている。大きさは横 5cm、縱 2.8cm、厚さ 0.1cm、重さ 8.1 g である。表面には細部線刻が施されているが、残存状況が悪く具体的に文様は把握できない。裏面には左右に鋤があったようだが痕跡だけで鋤そのものはない。この鋤で木部に固定したものである。

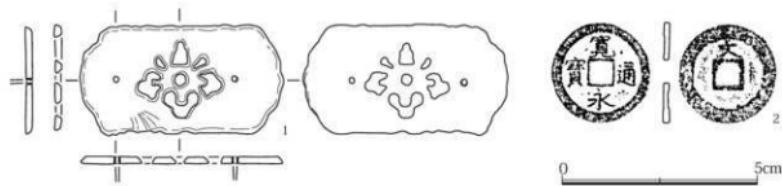
2 は古銭：寛永通宝である。裏面に「文」の字のある文銭である。表の寛と裏の文で「寛文」となり寛文 8 年 (1668) 以降の鑄造で新寛永通宝である。

陶磁器（第 64・65 図）

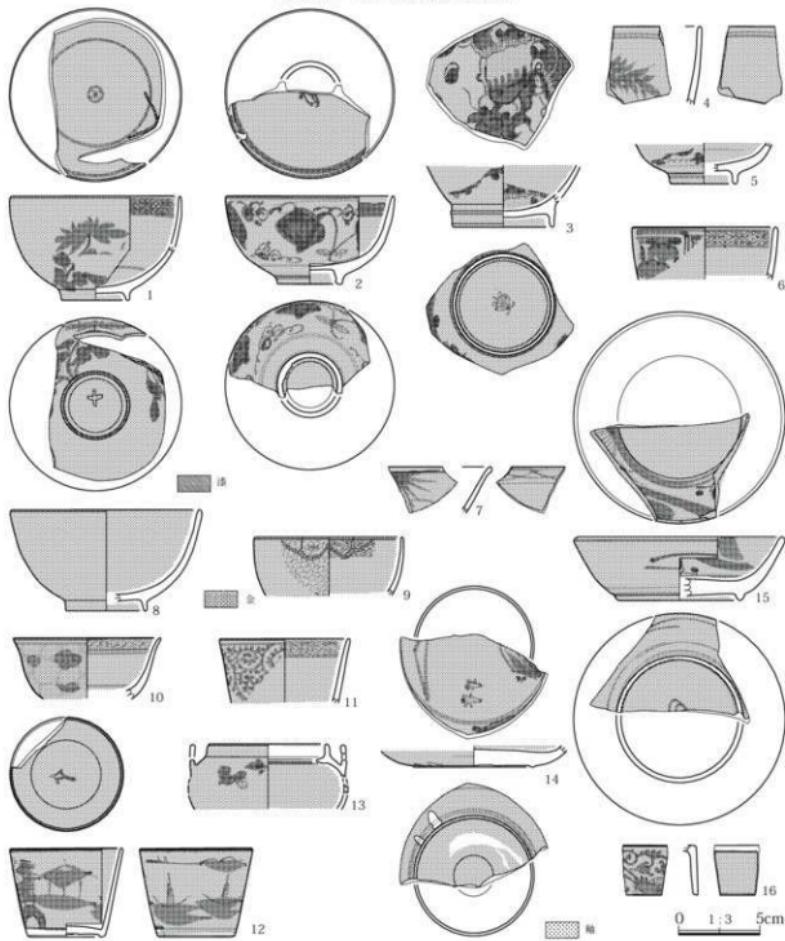
磁器が 1～16・29 の 17 点である。染付の器は 16 点である。(第 64・65 図)

1～9 は茶碗である。1 は見込みに花文の入ったもので、外面は菊紋の染付である。内面口縁に格子文に花文を連続している。この器のもう一つの特徴は、漆継ぎで修復した状況があり、高価なものか思い入れのある茶碗と考えられる。高台に「十」が描かれている。

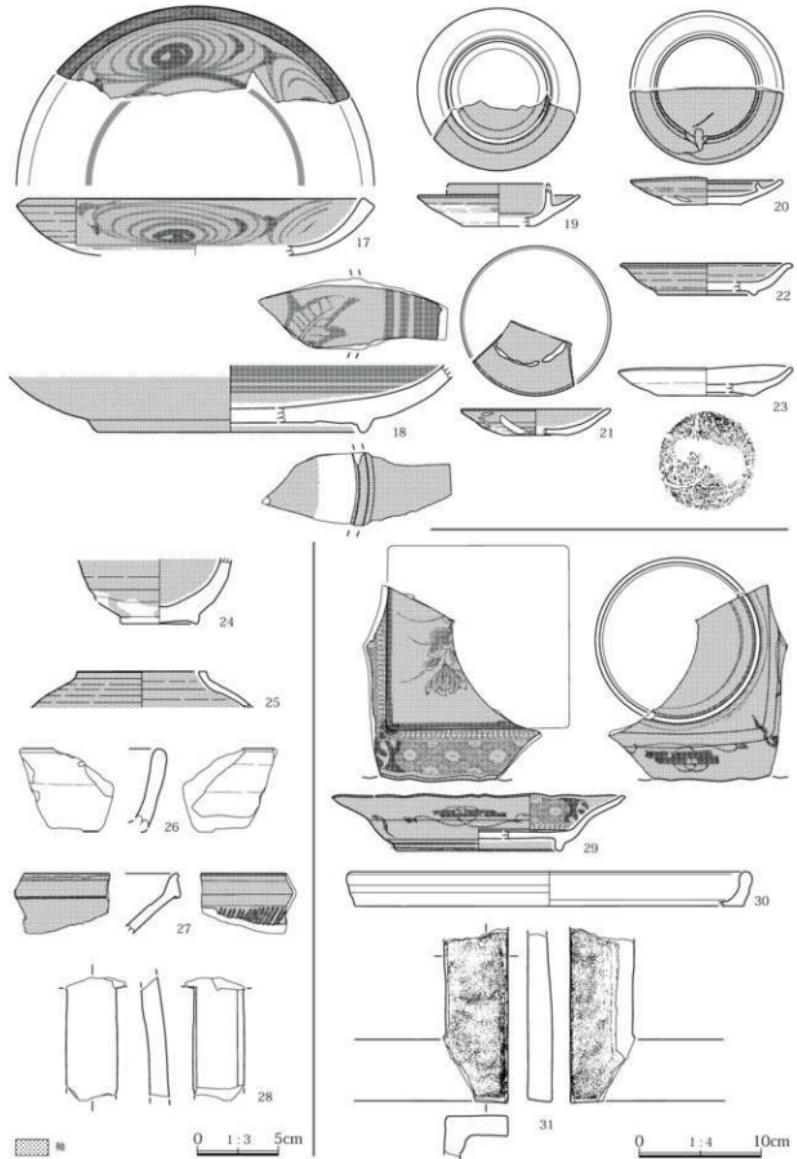
2 はつる植物の文様で大きな葉と思われ、輪郭は線刻されており、3 単位で表現されている。線刻された染付は比較的珍しいかもしれない。見込み中央に文字痕跡がある。



第63図 近世金属製品実測図



第64図 近世磁器実測図



第65図 近世陶磁器実測図

3は茶碗というより鉢である。身込みに力強い龍を描いている。高台中央に「覺」とあり、作家の特定はできなかったが名のある人物の可能性がある。

4は表裏口縁に2本平行線文を外面に葉文を描いている。

5は2と同様なつる植物の文様を描いている。

6は大きな四角い区画文内に文様を充填している。

7は小破片で外面は葉文、内面は口縁部に斜線文を描いている。8は白磁茶碗で無文である。

9は茶碗の口縁部破片であるが、1と同様に破損個所を金継ぎしている。外面は鱗文（みじん唐草文）が全面に施され、内面白縁部に菱形文が連続している。

10は湯呑茶碗である。花文と文花を繋ぐ細線による白い斑紋も描き出している。内面白縁は3条の沈線間を「つ」の字状の連続文を施している。

11・12はそば猪口である。11は外面が蛸唐草文、内面白縁が菱形連続文。12は口唇部に茶色、外面に家・舟・人・木などを筆書している。見込みに「ハイ」が縦に書かれている。

13は急須口縁部片で一方の把手部分と注ぎ口は欠損している。

14・15は皿である。14は見込みに舟2艘が描かれている。15は文様の構成は不明である。高台裏に漢字一文字が描かれているが欠けていて特定はできない。16は蓋で文様は唐草文と鳥文である。

第9表 近世磁器・陶器遺物観察表

編 號	番 号	出土施設	種別・部機	法面、側面 (上部) 有 付、側 面)			第1 手 口	地 成	色 調	器形、成・整形、文様等の特徴	
				1 日 月	2 付 合	3 高 厚					
64.06	1	二ノ丸SM	柴付・茶碗	10.6	4.2	6.4	鋸歯	磁胎:透明胎	白	外面:葉文花、内面:火炎文。対込みに一束(工頭)に格子文に花文の透漉文 裏面:斑紋	1/3
64.06	2	二ノ丸SM	柴付・茶碗	10.6	4.0	5.4	鋸歯	磁胎:透明胎	白	外面:2つを持つ植物 中央の大きな葉は胸割形で3点星彫いた後に染付 内面:2面に葉文花を施す。対込みに文様があるが欠損のため判読不能	1/4
64.06	3	璽土	柴付・茶碗	—	6.2	3.6	鋸歯	磁胎:透明胎	白	外面:葉文花、内面:火炎文。対込みに花文が描かれる	同一底盤
64.06	4	5付塵土	柴付・茶碗	—	—	—	鋸歯	磁胎:透明胎	白	外面:葉文花、内面:火炎文。対込みに葉文花を施す。茶碗を他文	1脚底盤
64.06	5	璽土	柴付・茶碗	—	5.2	2.5	鋸歯	磁胎:透明胎	白	外面:葉文花、内面:火炎文。中心に何か文があるが判読不能	同一底盤
64.06	6	二ノ丸SM	柴付・茶碗	9.0	6.2	3.2	鋸歯	磁胎:透明胎	白	外面:葉文花が描かれており、底盤で認められる。内面:1脚底盤の透漉文	1脚底盤
64.06	7	二ノ丸SM	柴付・茶碗	—	—	—	鋸歯	磁胎:透明胎	白	内面:葉は輪郭線で描かれており、内面:1脚底盤の透漉文	1脚底盤
64.06	8	二ノ丸SM	茶碗	10.8	4.9	5.0	鋸歯	磁胎:透明胎	白	無文	1/5
64.06	9	璽土	柴付・茶碗	10.5	—	—	0.6	磁胎:透明胎	白	金色の透漉文、外面:火炎文。内面:1脚底盤に透漉する葉文	1脚底盤
64.06	10	璽土	湯呑茶碗	9.0	—	—	0.3	磁胎:透明胎	白	内面:火炎文と透漉文が刻まれ、内面:1脚底盤の透漉文が添えられる。その間に「火炎」の文が施されている	1脚底盤
64.06	11	璽土	柴付・茶碗	—	—	—	鋸歯	磁胎:透明胎	白	内面:透漉文と葉文が描かれており、内面:1脚底盤の透漉文	1脚底盤
64.06	12	璽土	柴付・茶碗	6.8	4.3	5.5	鋸歯	磁胎:透明胎	白	内面:火炎文と葉文。外面:火炎文。内面:1脚底盤に透漉する葉文	1脚底盤
64.06	13	二ノ丸SM	柴付・茶碗	6.8	—	—	3.8	磁胎:透明胎	白	内面:火炎文と葉文。外面:火炎文。内面:火炎文と葉文	1脚底盤
64.06	14	璽土	柴付:白	—	7.3	1.2	鋸歯	磁胎:透明胎	白	底盤から出糞し、内面:舟2艘が描かれている。外面:舟2艘が2本分 ある。文様が欠けていて、内面:文様不明	3/5
64.06	15	璽土	柴付:白	13.0	7.8	3.9	鋸歯	磁胎:透明胎	白	内面:文様不明。内面:文様不明。高台裏に文字	1/5
64.06	16	璽土	柴付:白	—	—	3.0	鋸歯	磁胎:透明胎	白	内面:火炎文と葉文が描かれており、内面:火炎文と葉文	焼付
65.05	17	璽土	高台:火印付	22.0	13.0	3.5	砂利	砂利	黄土色:ヨリヨリ白。内面:真鍮の胸割の透漉文(即の丁のような文)を1単位 とし、3カ位位で考えられる。即の丁の後ろには商品	即の丁	
65.05	18	5付塵土	絵繪輪付:白	—	15.8	4.0	砂利	砂利	内面:火炎文と葉文。内面:火炎文と葉文。透漉文は即の丁のような文と文様。高台にも 輪付	即の丁	
65.05	19	7付塵土	絵繪輪付:白	10.0	4.4	2.6	砂利	砂利	表面のカタツムリの模様に、網目模様とし、眞鍮のロウ口(胸割)と切り 替り:ハーフ引 内面:外側:輪付より内側網目模様が白い。	1/3	
65.05	20	璽土	柴付:明治期	9.4	4.2	1.7	砂利	砂利	底盤から出糞し、内面:火炎文と葉文を含む。外側:眞鍮の網目模様から灯心を置 する白い仕上り	1/2	
65.05	21	二ノ丸SM	湯呑:白	9.2	4.0	1.6	砂利	砂利	底盤から出糞し、内面:眞鍮の網目模様。底部へ少割り 内外面:車輪骨面	1/4	
65.05	22	璽土	茶碗:小鉢	10.6	6.0	2.0	砂利	砂利:白色地 模様:白い透漉文	内面:眞鍮の網目模様	即の丁	
65.05	23	璽土	カワラ	10.8	5.6	1.7	砂利	砂利	やや赤色がある。眞鍮の網目模様	即の丁	
65.05	24	5付塵土	茶碗	—	4.8	3.9	砂利	砂利:白	内面:眞鍮の網目模様	即の丁	
65.05	25	二ノ丸SM	絵繪輪付	8.0	—	2.2	砂利	砂利	内面:眞鍮の網目模様	即の丁	
65.05	26	二ノ丸SM	切削内口縁付	—	—	—	砂利	砂利	内面:眞鍮の網目模様	即の丁	
65.05	27	5付塵土	絵繪輪付	—	—	—	砂利	砂利	内面:眞鍮の網目模様	即の丁	
65.05	28	二ノ丸SM	湯呑:火印	—	—	—	砂利	砂利	内面:眞鍮の網目模様	即の丁	
65.05	29	璽土	柴付:白	23.4	13.4	4.7	砂利	砂利:透明胎	内面:火炎文と葉文	1/3	
65.05	30	璽土	切削:白	132.2	—	—	砂利	砂利	内面:火炎文と葉文	即の丁	
65.05	31	璽土	火鉢	—	—	—	砂利	砂利	表面の火鉢で火鉢が白くならず知れ	即の丁	

陶器は 17 ~ 28、30・31 の 14 点である。(第 65 図)

17 は瀬戸焼の皿で江戸後期の量産品である。通称、「馬の目皿」と呼ばれている。

18 は緑釉の鉢である。内面身込みに先端が 3 つに分かれる葉文と腰部から同心円の縞々文様が認められる。色合いは緑色の釉掛けである。特徴は高台置付きまでもが施釉されている。

19・20 は灯明皿である。19 はカワラケと同様な素焼の器で、鉄釉を施釉している。内側の油溜の壁が非常に高いのが特徴である。20 は常滑焼の皿で油溜めの口縁が内傾し、皿口縁より浅くなっている。灯心を設置する切れ口も設けている。

21 は常滑焼の皿で鉄釉を施釉している。体部はヘラ削り調整が顕著である。内外面に重ね焼き痕あり。

22 は志野焼の皿である。

23 はカワラケである。底部はロクロ回転糸切り。

24 は茶碗で底部は削り出し高台である。

25 は短頸壺である。

26 は焰烙：内耳鍋である。内耳部分は欠損。

27 は擂り鉢で内面に鉗目櫛引きが連続する。

28 は行火で縦に透かしを持つ資料の柱部分である。

29 は染付角皿で口縁は波打っている。見込みに花の文様、額縁は菱形文を連続・花をあしらっている。裏面は額縁には幾何学的文様が 4 単位で描かれている。底部は円形付け高台である。

30 は焰烙である。

31 は火鉢である。5 cm の縁取りがある方形火鉢である。

瓦 (第 66 ~ 72 図)

瓦については多くの資料が確認されたが、大きく 2 つに分類することができた。

◎江戸時代の後半から明治にかけての瓦と考えられる A タイプのもの。(第 66 ~ 68 図)

◎江戸時代の瓦と考えられる B タイプのもの。(第 69 ~ 72 図)

A タイプの瓦は、1 ~ 23 のものでこれらの瓦は、全体的に高温で焼かれ色が黒色で表面にキラキラ銀色に光る炭素の破膜が認められる一群である。

B タイプは瓦の厚さが厚いのに対して、A タイプの瓦の厚さは薄い。

A タイプのもう一つ大きな特徴は、刻印が打たれた瓦が存在することである。

刻印は a 軒棟瓦の軒平面の右端や b 棟瓦の前面に押されている。

a は「み」「玉」は○囲み、「藤徳」「藤利」は扇囲みで押されている。

b は「み」「玉」は○囲み、「藤利」「小林」「○改」は扇囲みで押されている。

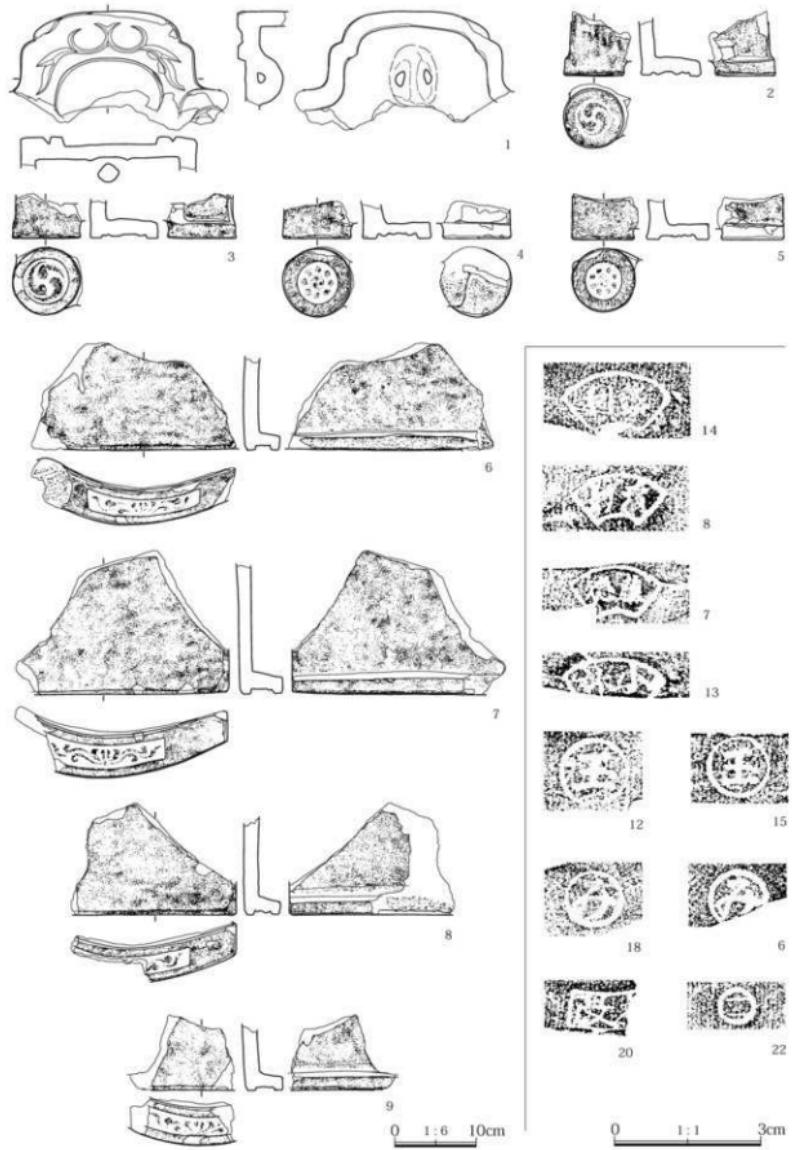
その他、丸瓦は有孔部の脇に○印の「=」の記号が存在している。

A タイプの瓦 (第 66 ~ 68 図)

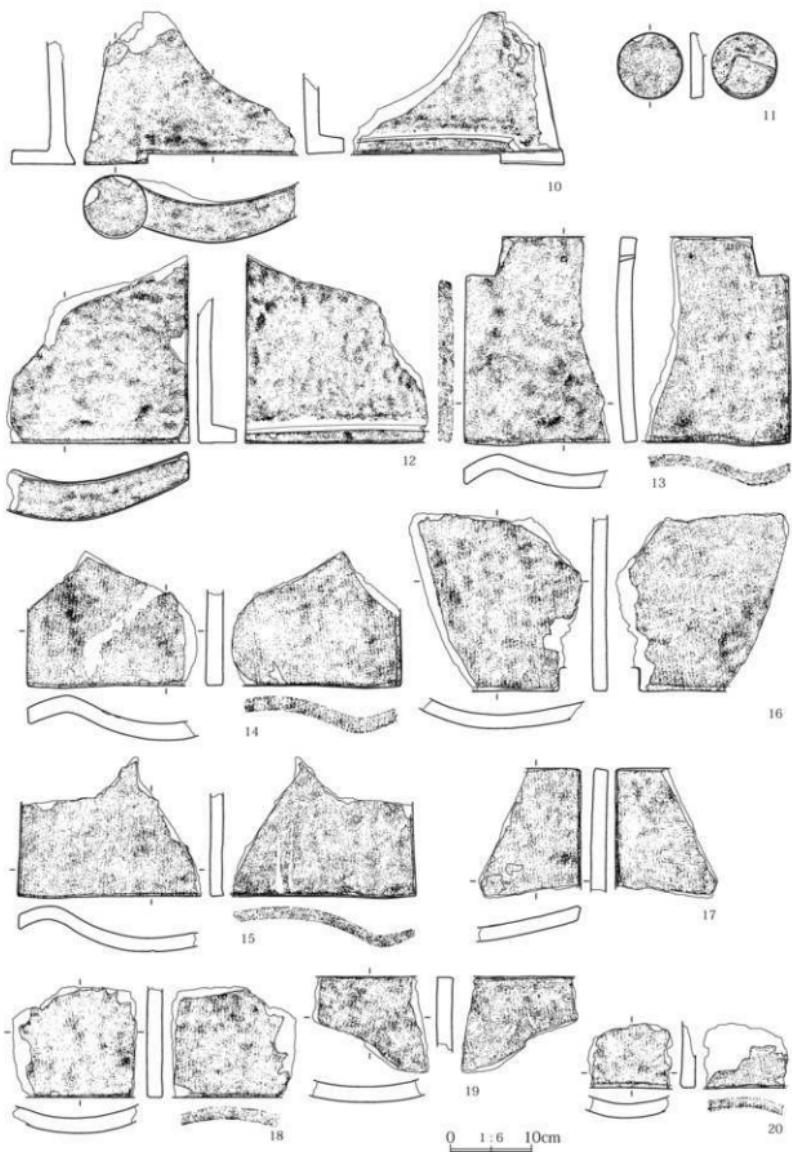
1 は鬼瓦である。中央は梢円線刻の内部は残存部分は無文で、外部は唐草文が彫刻されている。裏面は瓦を固定させる為の縦形突起で横孔が貫通している。

2・3 は軒棟瓦で三ツ巴だけの文様である。

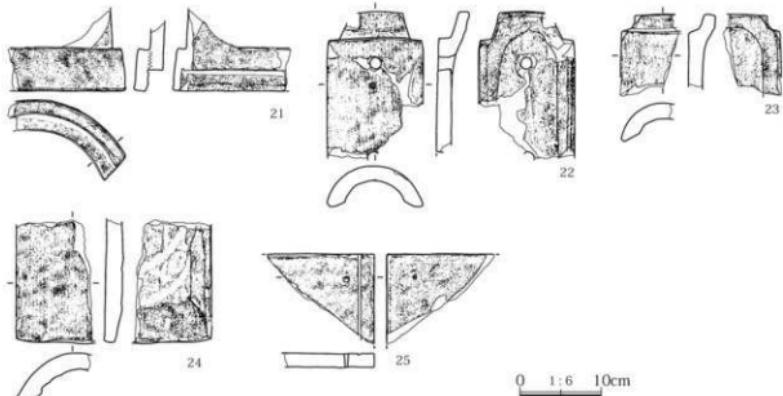
4・5 は軒棟瓦で中央に三ツ巴でその周囲に 8 個の玉を巡らせている。



第66図 近世瓦A群実測図(1)



第67図 近世瓦A群実測図(2)



第68図 近世瓦A群実測図(3)

6~12は軒桟瓦で6~9は唐草文がある。10~12は丸瓦部、軒部も無文である。

13~20は棟瓦である。

21は冠瓦であり、漆喰の付着が認められる。

22~24は丸瓦である。22は瓦を固定できるように円孔を穿っている。

25は平瓦で湾曲していない平らなものである。辺に対して平行な沈線が1本、小穴1穴が穿たれている。

Bタイプの瓦(第69~72図)

江戸時代の瓦である。瓦の厚さはAタイプに対して全体的に厚いものであり、色合いも黒灰色のものである。表面の色調は灰色が主で、質感についてはややザラザラした面を持っている。

鬼瓦(家紋付)(第69図1・2)

鬼瓦は、鬼面の有無にかかわらず棟の末端に付ける雨仕舞いの役割を兼ねた装飾瓦である。

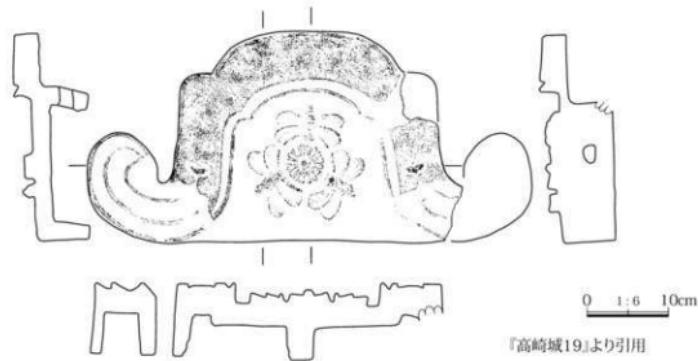
高崎藩主大河内松平家の家紋である「臥蝶に十六菊」(16弁の菊花紋を中心に蝶を3匹配す)が描かれている。これは鬼瓦伝世資料(高崎市蔵)と「高崎城三ノ丸遺跡」、「高崎城遺跡19」の発掘調査出土品が知られている。本品は「高崎城遺跡19」の出土品と同形である。

1は本調査地で出土したもので「高崎城遺跡19」の1号溝出土品と同じモチーフを基本にした手造りの鬼瓦の右側の一部である。端部は3条の大きな波を跳ね上げるもので破損側はハートの陰形が認められる。

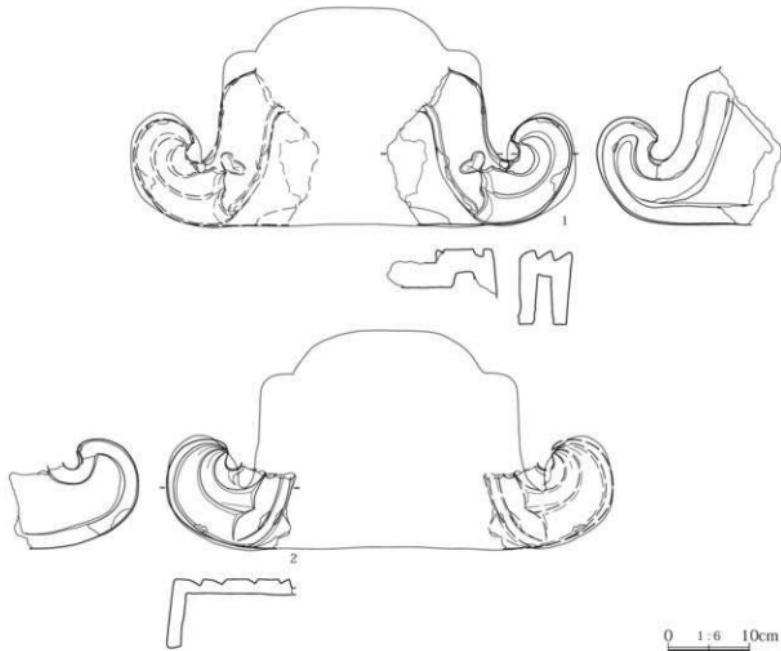
家紋入り鬼瓦は、中心部に存在している「臥蝶に十六菊」大河内松平家家紋部分はすべて剥落している。現存部の大きさは縦19cm、横23cm、である。復元してみると高さ26cm、幅54cm、厚さ9cmである。高さについては19次調査のものよりやや高さが低いものと考える。

2は1と同様に大河内家紋入り鬼瓦の端部破片である。残存部の大きさは縦13.5cm、横11.5cm、厚さは8.5cmである。1よりやや焼きが良く表面が滑らかである。

3は菊丸瓦である。道具瓦の一種である。16弁の菊御紋章の軒丸瓦である。直径6.2cmで中央に直径1cmの隆を中心にして16花弁の文様になっている。厚みは2cm、裏面の整形は上半分が剥落痕



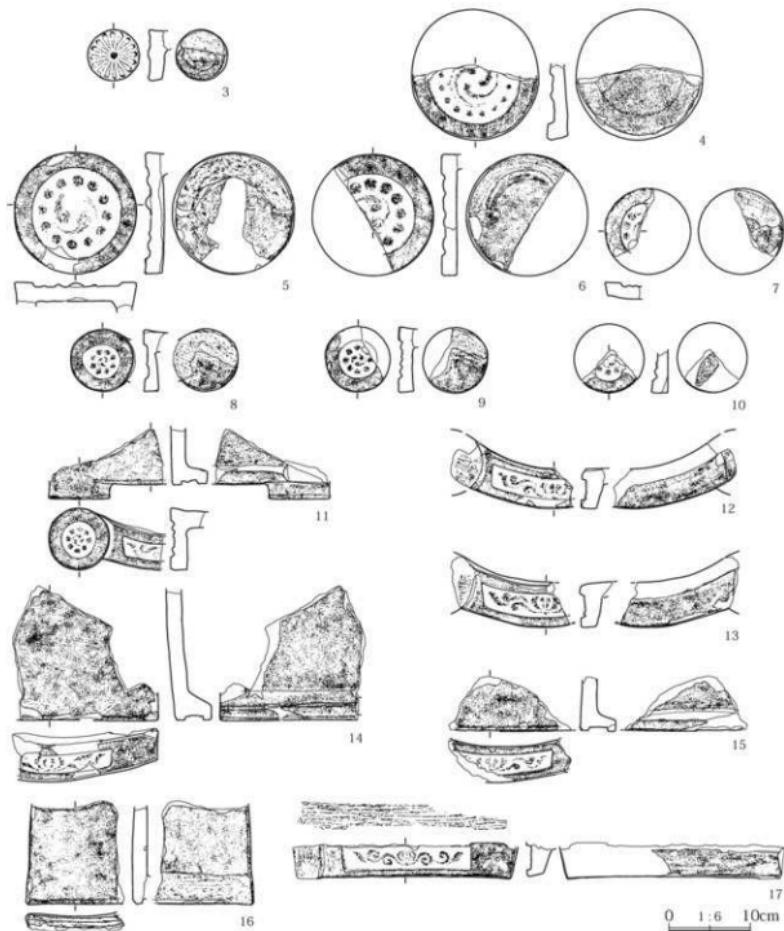
『高崎城19』より引用



第69図 近世瓦B群実測図（1）

跡あり、下半部は縁部に強いナデ調整痕を残している。

4～6は軒丸瓦である。直径はほぼ15cmで、文様は三つ巴を中心にその周りを珠文が12配置されているものが5・6、推定16配置したもののが4である。三つ巴は左廻りが4・6で右廻りが5である。



第70図 近世瓦B群実測図（2）

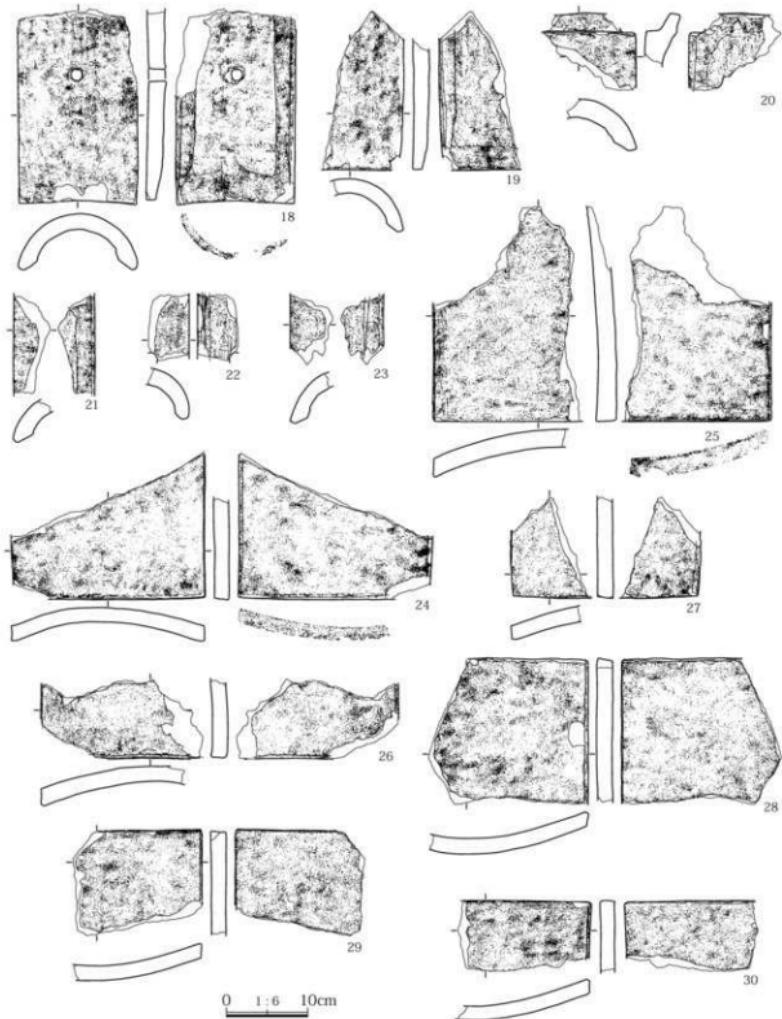
7は軒丸瓦である。8～10は軒棧瓦の軒丸部分である。三つ巴左廻り、8個の珠文が巡る。

11～15・17は軒棧瓦である。11は三つ巴左廻り、8個の珠文が巡る。軒平部には唐草文が型押しされている。

17は平瓦で湾曲を面を持たない特徴的なもので特異な場所に使われたものである。左端に軒丸部剥落あり。

16は軒平瓦である。

18～23は丸瓦である。18は瓦を固定する穴が設けられている。20は差し込み口部である。



第 71 図 近世瓦 B 群実測図（3）

24～27 は熨斗瓦である。

28～35 は棟瓦である。28～31 は右上部である。32～35 は右下部である。

36～38 は袖瓦である。39 は平らな瓦である。36～39 は色調が灰色で 3cm と厚みがあり、ザラザラの表面をもつ一群である。



第72図 近世瓦B群実測図(4)

36は縁線に平行で1cm離れて幅0.8cm、深さ0.5cmの沈線がある。37・39は縁線から3.5cm内側に直径1cmの貫通した穴が穿たれている。なお、37はもう一つの縁線から6.5cm内側にある。

39は縁線から3cm内側に幅0.7cm、深さ0.4cmの平行沈線をもっている。また、先の沈線の施文後に円孔を穿っている。36・37・38は袖瓦で袖部は欠損している。

38は刻印瓦の中に唯一家紋を押したものがある。「武田菱」「四菱」である。瓦職人の中に武田の関係者が存在したものと考える。

いわゆる、隠れ武田衆で高崎城の瓦に武田菱を刻印したものと想はせていたものと考える。

また、武田菱の刻印については、高崎城遺跡第1次から第24次発掘調査で遺物として発見されたのは初めてである。

第10表 近世瓦A群遺物觀察表

種 名	番 号	出土地點	種別・品種	法 規 基 準 (一定定 め) 13 種存			新土・石質	熟成	色調	器形、成・整相、文様等の特徴	出土状況
				1 層 目	2 層 目	3 層 目					
66-04	1	土壌	麻丘	[11.4]	[25.6]	5.5	黒	良好	黒	燒文草 裏面に糊付小口あり	上部のみ
66-04	2	土壌	前糞瓦	[7.9]	[8.2]	1.7	黒	良好	黄	右二つ口 軒丸脚付: 7.4cm	軒丸部分はか少々
66-04	3	土壌	前糞瓦	[15.5]	[8.6]	1.9	黒	良好	灰	左二つ口 軒丸脚付: 8.3cm	軒丸部分はか少々
66-04	4	1 满腹土	前糞瓦	[14.6]	[8.8]	2.5	黒	良好	灰	左二つ口 腰溝付: 8.5cm 脚付: 8.4cm	軒丸部分のみ
66-04	5	1 满腹土	前糞瓦	[5.7]	[8.3]	1.9	黒	良好	灰	二つの腰溝 脚付: 8.5cm 脚付: 8.6cm	軒丸部分のみ
66-04	6	1 满腹土	前糞瓦	[13.2]	[25.1]	1.8	黒	良好	黑	燒文草 「高輪城ノ丸」 No.302 p.2961 同じ想形か小口右の 「の」字に脚付	1/3
66-04	7	1 满腹土	前糞瓦	[11.7]	[25.2]	1.7	黒	良好	黑	燒文草 「高輪城ノ丸」 No.302 p.2961 同じ想形か小口右の 「の」字に脚付	1/3
66-04	8	覆土	前糞瓦	[13.8]	[20.3]	1.8	黒	良好	黑	燒文草 「高輪城ノ丸」 No.302 p.2961 同じ想形か小口右の 「の」字に脚付	1/4
66-04	9	1 满腹土	前糞瓦	[9.3]	[12.8]	1.8	黒	良好	黑	燒文草 「高輪城ノ丸」 No.302 p.2961 同じ想形か小口右の 「の」字に脚付	範例
66-04	10	1 满腹土	手持糞瓦	[11.8]	[26.0]	1.8	黒	良好	黑	表面に網状の凹凸 脚付: 7.9cm	1/3
66-04	11	1 满腹土	手持糞瓦	[11.7]	[8.0]	—	黒	良好	黑	右丸脚付: 8.1cm	軒丸部分のみ
67-04	12	1 满腹土	万十手持糞瓦	[23.2]	[22.4]	1.7	黒	良好	黒	6.140の「足」の跡付あり	2/3
67-04	13	覆土	糞瓦	[2.5]	[17.8]	1.7	黒	良好	黒	6.140の「足」の跡付あり	1/2
67-04	14	覆土	糞瓦	[11.6]	[21.0]	2.0	黒	良好	黒	6.140の「足」の跡付あり	1/3
67-04	15	覆土	糞瓦	[11.3]	[22.6]	1.7	黒	良好	黒	6.140の「足」の跡付あり	1/3
67-04	16	覆土	糞瓦	[21.9]	[21.3]	2.7	黒	良好	黒	網状網目状文	1/2
67-04	17	1 满腹土	糞瓦	[11.6]	[12.6]	1.7	—	やや粗陋	黒	黒 6.140の「足」の跡付あり	範例
67-04	18	1 满腹土	糞瓦	[13.6]	[13.5]	1.8	黒	良好	黒	6.140の「足」の跡付あり	範例
67-04	19	1 满腹土	糞瓦	[11.8]	[14.2]	1.9	黒	良好	黒	6.140の「足」の跡付あり	範例
67-04	20	1 满腹土	糞瓦	[10.8]	[16.9]	1.7	黒	良好	黒	6.140の「足」の跡付あり	範例
66-04	21	1 满腹土	冠瓦	[9.8]	[14.5]	1.7	黒	良好	黒	腰溝の跡付あり	範例
66-04	22	1 满腹土	瓦	[11.8]	[11.8]	1.8	黒	良好	瓦	6.140の「足」の跡付あり	1/2
66-04	23	1 满腹土	瓦	[10.1]	[17.2]	1.9	—	やや粗陋	瓦	6.140の「足」の跡付あり	範例
66-04	24	1 满腹土	瓦	[15.2]	[8.4]	2.1	黒	良好	瓦	6.140の「足」の跡付あり	1/4
66-04	25	覆土	土壌	[11.1]	[11.3]	1.6	黒	良好	瓦	上部に斜面、土壌に丸く柔	範例

第11表 近世瓦B群遺物觀察表

種 類	番 号	生土位置	種別・特徴	法 定			单位面 積(1 m ²)	遺存 状況	出土・石質	地城	色調	遺物、成・整然、文様等の特徴	遺存状況	
				1時 間目	2時 間目	3時 間目								
69-08	I	腐土	兔瓦	[10.0]	[22.7]	9.3	中や粗粒砂	良好	黒	大内内郭平野の原跡に十六丈筒瓦器 ハート田中特徴「高崎城三ノ丸」299p2906「高崎城119」116pと同様の窓跡 第二回と同様の窓跡	廻内			1/4
69-09	2	腐土	兔瓦	[13.5]	[15.8]	8.5	細	良好	黒	十六丈筒瓦器「高崎城119」6.3cm	軒丸部分のみ			
70-03	3	腐土	軒丸瓦	[2.4]	[0.9]	20	一	細	良好	黒	十六丈筒瓦器「高崎城119」6.3cm	軒丸部分のみ		
70-04	4	腐土	軒丸瓦	[2.5]	[11.5]	—	粗	良	黒	十六丈筒瓦器「高崎城119」6.3cm	軒丸部分のみ			
70-05	5	1 深層土	軒丸瓦	[3.3]	15.0	—	粗	良好	黒	右二段 薄底 12.1mm 一間に複数枚、表面剥落部分あり一次 剥離か?	軒丸部分のみ			
70-06	6	腐土	軒丸瓦	[2.1]	[12.3]	—	細	良好	黒	左二段 薄底 12.1mm 一間に複数枚、表面剥落部分あり一次 剥離か?	軒丸部分のみ			
70-07	7	腐土	軒丸瓦	[2.0]	[8.0]	—	粗	良	黒	左二段 薄底 12.1mm 一間に複数枚、表面剥落部分あり一次 剥離か?	軒丸部分のみ			
70-08	8	腐土	軒丸瓦	[2.6]	18.0	—	粗	良好	黒	左二段 薄底 8.1mm 一間に複数枚、表面剥落部分あり一次 剥離か?	軒丸部分のみ			
70-09	9	腐土	軒丸瓦	[2.0]	[7.2]	—	中や粗粒砂	良好	黒	左二段 薄底 8.1mm 一間に複数枚、軒丸部外径: 8.0cm	軒丸部分のみ			
70-10	10	腐土	軒丸瓦	[2.0]	[9.8]	—	粗	良	黒	左二段 薄底 8.1mm 一間に複数枚、軒丸部外径: 8.0cm	軒丸部分のみ			
70-11	11	腐土	軒丸瓦	[1.6]	[14.1]	1.8	粗	良	黒	左二段 薄底 8.1mm 一間に複数枚、軒丸部外径: 8.0cm	軒丸部分のみ			
70-12	12	腐土	軒丸瓦	[3.0]	[15.0]	—	粗	良	黒	左二段 薄底 8.1mm 一間に複数枚、軒丸部外径: 8.0cm	軒丸部分のみ			
70-13	13	腐土	軒丸瓦	[4.5]	[14.7]	—	粗	良	黒	左二段 薄底 8.1mm 一間に複数枚、軒丸部外径: 8.0cm	軒丸部分のみ			
70-14	14	腐土	軒丸瓦	[11.6]	[17.9]	1.9	中や粗粒砂	良好	黒	左二段 薄底 8.1mm 一間に複数枚、軒丸部外径: 8.0cm	軒丸部分のみ			
70-15	15	腐土	軒丸瓦	[6.7]	[15.1]	1.8	粗	良	黒	左二段 薄底 8.1mm 一間に複数枚、軒丸部外径: 8.0cm	軒丸部分のみ			
70-16	16	腐土	手平瓦	[12.7]	[12.1]	1.7	中や粗粒砂	良好	黒	手平瓦	手平手彌			1/5
70-17	17	腐土	手平瓦	[3.1]	[27.8]	—	粗	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		
70-18	18	腐土	丸瓦	[2.4]	14.8	1.9	粗	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		3/4
70-19	19	腐土	丸瓦	[11.9]	99.9	1.8	中や粗粒砂	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/4
70-20	20	腐土	丸瓦	[9.9]	[11.3]	2.2	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/5
70-21	21	腐土	丸瓦	[11.9]	[14.6]	2.0	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内
70-22	22	腐土	丸瓦	[8.1]	[5.0]	2.0	粗	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内
70-23	23	腐土	丸瓦	[8.0]	[5.2]	1.9	粗	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内
70-24	24	腐土	彌型瓦	[18.0]	24.0	1.8	粗	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/3
71-25	25	腐土	彌型瓦	[26.4]	[18.0]	2.1	粗	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/2
71-26	26	腐土	彌型瓦	[9.7]	[20.0]	1.8	粗	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内
71-27	27	腐土	彌型瓦	[12.5]	[9.7]	1.9	粗	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内
71-28	28	腐土	彌型瓦	[18.0]	[19.7]	1.9	粗	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/3
71-29	29	腐土	彌型瓦	[13.9]	[15.8]	1.8	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/5
71-30	30	腐土	彌型瓦	[8.7]	[16.8]	1.8	中や粗粒砂	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/6
72-31	31	腐土	彌型瓦	[11.3]	[10.8]	1.8	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/6
72-32	32	腐土	彌型瓦	[16.0]	[12.1]	1.8	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/6
72-33	33	腐土	彌型瓦	[11.6]	[15.1]	1.8	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/6
72-34	34	腐土	彌型瓦	[11.6]	[15.1]	1.8	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/6
72-35	35	腐土	彌型瓦	[11.6]	[15.1]	1.8	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/6
72-36	36	腐土	彌型瓦	[15.6]	[18.2]	1.8	中や粗粒砂	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/3
72-37	37	腐土	彌型瓦	[16.0]	[14.7]	1.8	中や粗粒砂	良好	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		1/3
72-38	38	腐土	手平瓦	[19.7]	[16.9]	2.0	粗	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内
72-39	39	腐土	手平瓦	[11.6]	[17.6]	2.6	粗	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内
72-40	40	腐土	手平瓦	[13.2]	[11.2]	2.5	中や粗粒砂	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内
72-41	41	腐土	手平瓦	[10.4]	[11.1]	2.5	粗	良	黒	手平瓦	手平瓦又は手平丸か?	手平部分のみ		廻内

第4章 中世 和田城の遺構と遺物

和田城

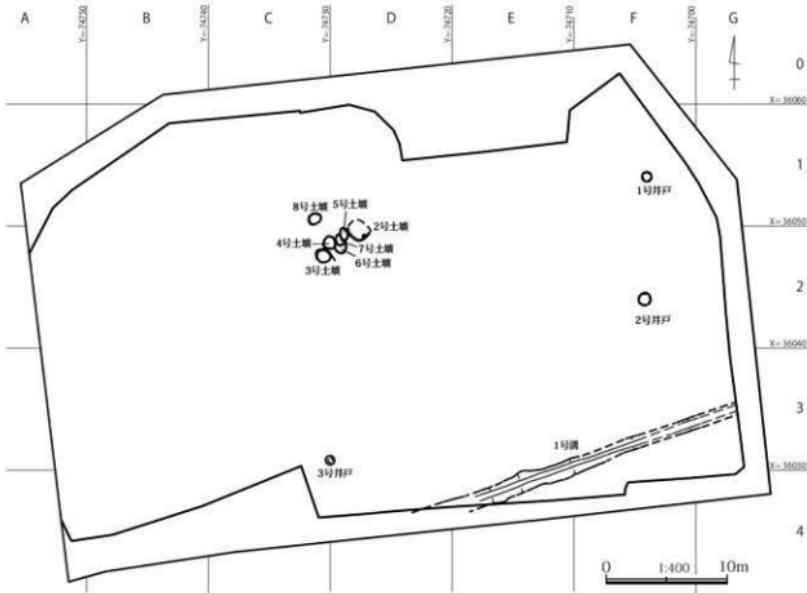
高崎城以前の中世には、和田城があったことが知られている。

『上毛伝説雑記』によれば1418年(応永25年)、『和田記』では1428年(正長元年)に和田城が築城と記載されている。『和田城並びに興禪寺境内絵図』には、「和田城」と記載されている。城郭の縄張りなどの詳細は不明である。

興禪寺は曹洞宗の寺院で、創建は古く治承元年(1177)とされる。旧来の寺院地は後にできる高崎城域に広がっていた可能性があり、高崎城が築かれると三ノ丸の一角に移った。寺には、興禪寺境内古地図が残される。その幅50cmで、16折に畳まれた折り目が残る。絵図の右下に「僧文湖」と記され、開山の「珊瑚文湖」、天文二十一年(1552)に没した長源寺八世「珊瑚文湖」に当たると指摘し、絵図左側に「和田之城」「追手口」とあり、高崎城築城以前に製作されたと解釈する(大江1996)。

絵図の縮尺は、現在の地図に比較すると、概ね5000分の1で表記され、高精度測量をもとに表現された。このため直政が実施した新たに拠点となる城地選定段階あるいは、選定後に作成した「現地測量図」の可能性があると指摘する(大江1996)。

和田城は1598年(慶長3年)の高崎城築城により、和田城の縄張りは高崎城に取り込まれてしまい、まったく記録は残されていない。



中世の遺構（第73図）

和田城に関連した遺構としては、「高崎城遺跡15」、「高崎城遺跡20」、「高崎城遺跡22」、「高崎城遺跡23」などで具体的な縄張りの内容の一部が判明している。

今回の調査では、東西方向の薬研堀、1本を検出した。

また中世土壙群が集中して検出され、その他に井戸3基が検出されている。

1号溝（第74図）

1号溝はD～G-3・4グリッドに位置する。

1号溝は、国道17号の歩道から東方向に20m強入り組んだところから認められ、東西方向の溝で長さ約20mが確認された。主軸方位はN-70°-Eである。

溝断面形から薬研堀であり、堀の幅は確認面で最大1.7m、深さは1.4mである。溝底幅は30cmで底面は平坦である。溝は80度位の角度で60cm立ち上がり、そこから55度の角度で直線的に開いている。遺構確認面が関東ローム層であり、その角度のまま開くとすれば旧地表で幅2.5m以上で深さは2.3mとなる。溝の立ち上がり角度は若干異なっており、南側が63度、北側が58度の角度を持っており、北側に土塁を築いたと考えられる。20m確認された溝の底の標高はすべて91.1mと同じ高さで斜度が全く付けられていない。

また、科学的分析で珪藻分析作業を実施している。（本書第7章 自然科学分析参照）珪藻分析調査結果から、この溝は水が溜まつた様子はないことがわかり、空堀であったことが確認できた。

西端部はやや南に屈曲していることが考えられる。

出土遺物に古墳・奈良・平安時代の遺物は含まれているが、中世の遺物はない。なお、古墳時代にこの地で滑石玉作工房が存在したと推定される滑石資料が大量に含有されていた。

先の調査「高崎城遺跡22・23」の薬研堀の中では、多くの日常雑器が含まれていることから炊事場が近くに存在していたことが考えられる。しかし、この1号溝の周辺では炊事場的な場の機能はなく、明らかに異なった場の機能を持っていることがわかる。

土壙群（第73・75図）

中世土壙群はC・D-1・2グリッドに存在し、7基の土壙が確認された。

これらの中、4～7基の土壙は重複関係にあるが、新旧関係ははっきりしないが、6号土壙が古く次に7号土壙、次に5号土壙と新しくなる。4号土壙は6号土壙より新しい。

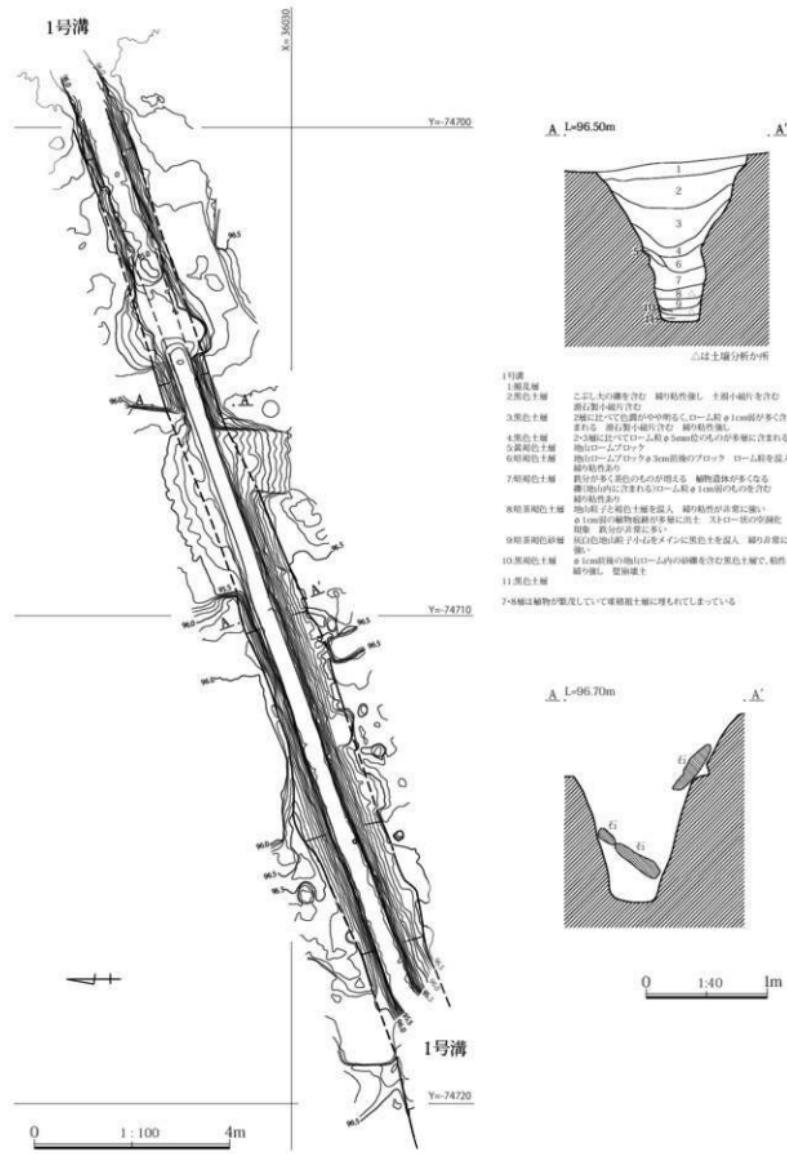
この場の機能として、溝の北20mには中世土壙群が存在しており、現状の土壙群が南西端と考えられ墓地の機能が南東方向に広がっていたことを考えることができる。

2号土壙（第74図）

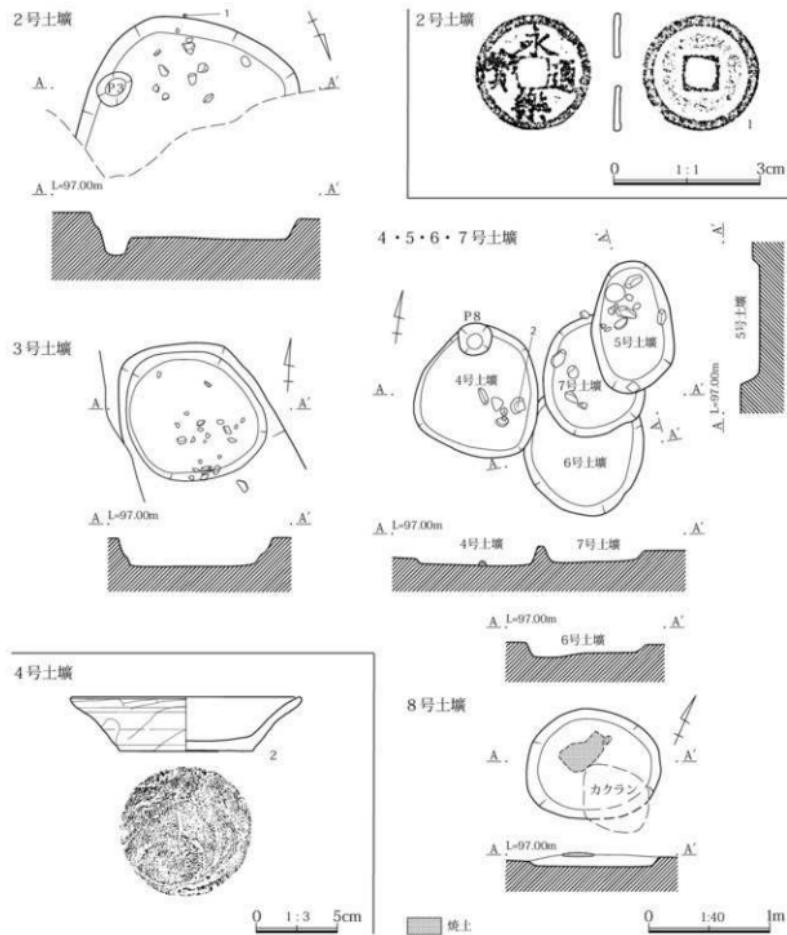
D-1・2グリッドに位置している。平面形は円形、大きさは東西1.8mで北側半分は破壊されている。土壙内には小礫が10点以上存在した。出土遺物として遺構確認時に南壁際から渡来鏡である永樂通宝（初鑄1411年）1枚（第75図1）の出土があった。

3号土壙（第74図）

D-2グリッドに位置している。平面形は不整円形で大きさは、東西1.16m、南北1.06m、深さは遺構確認面から約20cmである。床面はほぼ平坦である。小礫が認められるがこれらは、地山ローム内出土の礫である。出土遺物はない。



第74図 1号溝平面図及び土層断面図



第 75 図 中世土壤群平面及び断面実測図・出土遺物実測図

4号土壤 (第 74 図)

D-2 グリッドに位置している。北端にピット 1 本が存在する。平面形は不整円形で、大きさは東 1.02 西 2m、南北 1.06 m、深さは遺構確認面から約 12cm である。床面はほぼ平坦である。

遺物はカワラケ 1 点が伏せた状態で出土している。カワラケ (第 75 図 2) はほぼ完形品である。

5号土壤 (第 74 図)

C-2 グリッドに位置している。平面形は楕円形で大きさは、東西 70cm、南北 1.06 m、深さは遺構確認面から約 16cm である。覆土には、楕円形の 20cm のものから拳大の石・小礫が床面近くに

10数点存在するが、古墳時代の土師器壇の口縁部欠損品（第99図18）で、体部完形品が伏せた状態で出土している。時期違いではあるがこの土師器壇が唯一の出土遺物である。床面はほぼ平坦である。

6号土壙（第74図）

D-2グリッドに位置している。平面形は不整円形で大きさは、東西98cm、南北1.08m、深さは遺構確認面から約12cmである。床面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

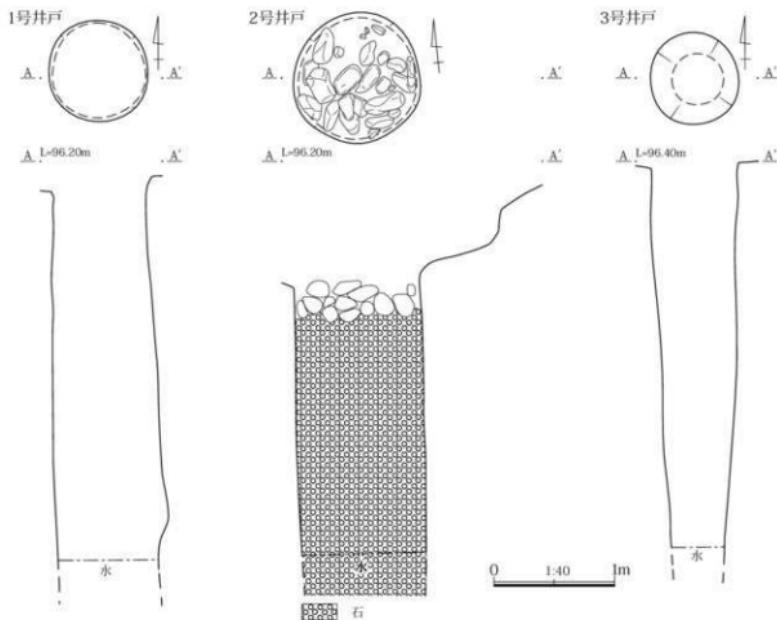
7号土壙（第74図）

D-2グリッドに位置している。平面形は不整円形で大きさは、東西85cm、南北1m、深さは遺構確認面から約14cmである。床面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

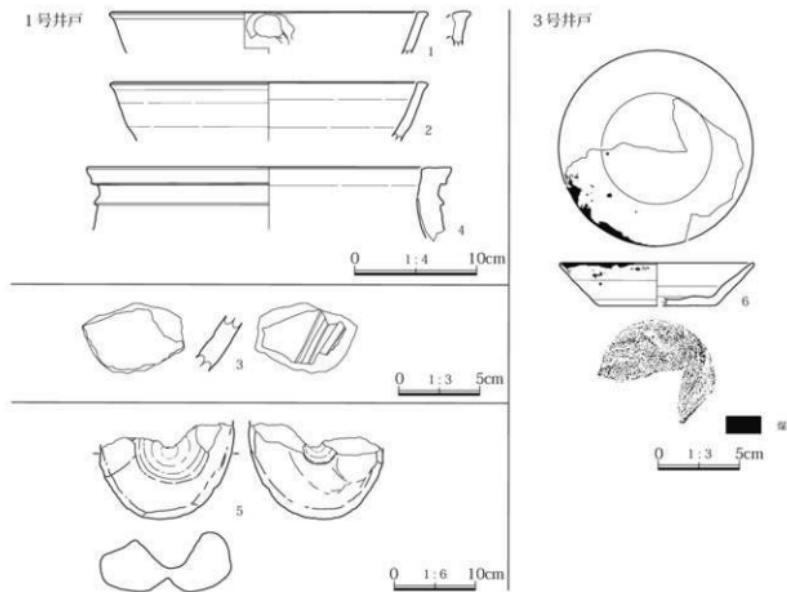
8号土壙（第74図）

C-2グリッドに位置している。平面形は不整円形で大きさは、東西1.1m、南北0.9m、深さは遺構確認面から約6cmである。床面はほぼ平らである。

覆土中褐色土の上に焼土分布範囲が床から10cm浮いたところにあり、南北35cm、東西40cm、厚さ5cmで分布していた。出土遺物はない。



第76図 1～3号井戸平面図及び断面図



第77図 1・3号井戸溝出土遺物実測図

井戸（第76図）

中世と思われる井戸は、合計3基検出された。

なお、3基とも井戸の覆土内に滑石製品（剣形品・白玉等）の他、滑石の破片も多く確認された。これら滑石については、第6章で資料紹介する。

1号井戸（第76図）

本井戸はF-1グリッドに位置している。

平面形は円形で直径90cm、人力で深さ1m程を調査したが、安全面から重機による断ち割り調査に切り替えた。深さは水位が3.15mであり、深さ3.6mまでしか調査できなかった為、底を確認することはできなかった。

出土遺物（第77図）

内耳鍋・擂り鉢などの破片、角閃石安山岩製の凹石1点の出土があった。その他滑石製模造品の剣形品があったが、滑石製品として別の項目で資料紹介する。

5は角閃石安山岩製の円盤を素材にした凹石である。大きさは縦残存11.8cm、横16.6cm、厚さ7.3cm、重さ598gで半分欠損している。表面中央に直径9cmで深さ4.2cmの凹部を有する。裏面中央にも直径4cmで深さ2cmの凹部を有する。

井戸の深い箇所から遺物回収を試みたが遺物はなかった。

2号井戸（第76図）

F-2グリッドに位置している。

平面形は円形で東西1.04m、南北1.08m、人力で深さ1m程を調査したが、安全面から重機による断ち割り調査に切り替えた。深さは、水位が3mであり、深さ3.6mまでしか調査できなかつた為、底を確認することはできなかつた。

覆土には人頭大以上の円礫が確認面から大量に詰め込まれており、60cm以上手掘りにて調査を行うが、井戸の断ち割り調査を行つてみると、上部で確認できた礫から断ち割りした3.6mすべてに礫が詰められていた。

井戸の深い箇所の覆土から遺物回収を試みたが遺物はなかつた。

3号井戸（第76・77図）

C・D-3グリッドに位置している。

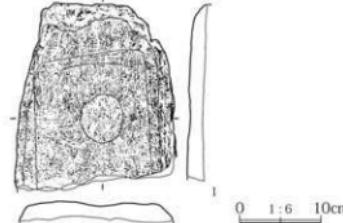
平面形は円形で、大きさは南北72cm、東西76cm、人力で深さ1m程を調査したが、安全面から重機による断ち割り調査に切り替えた。深さは水位が3.2mであり、深さ3.5mまでしか調査できなかつた。開口部から約1m位の深さで直径80cmとなり、深さ3mは垂直に掘られているが、中央から徐々に細くなりはじめ、底部では40cm位の大きさで先窄まりの形となつてゐる。底までは確認できなかつた。カワラケ1点の出土があった。灯明皿として使用されており、口縁には焰の付着がみられる。

井戸の深い箇所の覆土から遺物回収を試みたが遺物はなかつた。

遺構外出土遺物

板碑（第78図）

本資料は表土中からの出土である。この板碑は下半部を欠損、裏面は全体的に剥落している。大きさは、縦23.2cm、横19.7cm、厚さ2.3cmである。



表面には、主尊種子などは認められない。四角い額縁状に線刻が施され、上部のみ2本の沈線があり、その幅は1.0～1.5cmで、左右側は1本の沈線であるが不鮮明であり、幅は14.3cmである。

中央に直径5.5cmの円形で深さ3cmの凹部が作られている。この凹部の左側及び右側に左右方向の擦痕が顕著に認められる。石材は、緑色片岩である。

第78図 板碑実測図

第12表 中世遺物観察表

編號	番号	出土位置	種別・記録	遺量 単位cm (1) 植生 (2) 破壊 (3) 距高			出土・石質	焼成	色調	器形、底・整出し、文様等の特徴	適合状況
				1枝	2枝	3枝					
75.00	1	2.1断層上	鶴見山原	2.4	2.4	0.15	無	—	—	永望通鑑(利謙安重9年=1411年)	定期
75.00	2	2.4断層	カワラケ	14.0	8.2	3.4	無	焼成焼成焼成	暗	ヨウジ整出し、底面4.5cm切り、(1)1枝(2)1枝	3/4
77.00	1	1.0断層上	内田原	(25.6)	(3.5)	無	無	深く焼成焼成	高黄	内田原千利通鑑、ヨウジ整出し、底7.7cm2上枝1側(1枝)	1/48(340件)
77.00	2	1.0断層上	内田原	(25.6)	—	(4.8)	無	深く焼成焼成	高黄	ヨウジ整出し、底7.7cm2上枝1側(1枝)	1/48(340件)
77.00	3	1.0断層上	内田原	—	—	(13.4)	5分半切斜	深く焼成焼成	灰	内田原1枝3本以上あり、焼けなし?	供應品
77.00	4	1.0断層上	内田原	(29.7)	—	(5.1)	相田	焼成焼成焼成	黑	ヨウジ整出し	1/48(340件)
77.00	5	1.0断層上	内田原	111.0	16.6	7.3	内田原山原	—	—	表面凹み直徑9.5cm深さ4cm、裏面凹み直徑4.5cm深さ2cm 表面正面から2部を削成	1/2
77.00	6	3.0断層上	カワラケ	(11.8)	(7.2)	2.6	無	焼成焼成焼成	明赤	1/48(340件)付近	2/5

第5章 平安・奈良・古墳・弥生・縄文時代の遺構と遺物

平安から古墳時代にかけての遺構は、竪穴住居跡9軒、溝1条、土坑7基、柱穴が確認された。

確認された遺構は、調査地全体の6%のエリアでC・D-1・2グリッドとD-F-3・4グリッドの2か所だけであり、その他は国立高崎病院建設時の基礎工事で完全に破壊されているのと、江戸時代の高崎城二ノ丸南堀の掘削で消滅している。

本来は平安時代～古墳時代の集落が全面に広がっていた集落遺跡である。

古代の遺構が残されている場所には、滑石工房の製品・未加工品・製作途中の製品及び破損品・破片・母岩の多くが広く出土している。しかし、これら滑石はすべて工房址で原位置を保ち製作した場所と特定するものではなく、住居内に廃棄・流入したものである。これら滑石については各遺構に直接関連のある資料ではないため、滑石専門の項目（第6章）を設けて報告する。

奈良・平安時代の竪穴住居

1号住居（第81・82図）

1号住居はC・D-1・2グリッドに位置し、7～9号住居と重複関係にある。7号住居と本住居の関係は本住居が新しい。なお、住居の北・東・南壁は確認することが出来ず西壁のみが確認され、本住居には近現代の污水管・污水樹等が多く入り組んでおり、さらに中世土壙墓群が存在し、床面もほとんど破壊されている。

1号住居は西壁と床面が残存するだけで、住居の規模等は不明である。但し、南北方向の床面長は5.6m、東西方向床面長は4.6mで西壁の高さは5cmで西壁下には壁溝は存在しない。

カマド、貯蔵穴等も確認なかった。時期は平安時代10～11世紀である。

出土遺物（第82図）

出土遺物は須恵器壺2点、高台付壺1点、高台付小皿1点、楕1点が確認された。その他、滑石の製品と破片が覆土内から多く出土している。

7号住居（第81・83図）

7号住居はC-1・2グリッドに位置している。1号住居と7・8・9号住居は重複関係にある。

1・8・9号住居に破壊されており、壁はなく床面と南側にA土坑がある。規模は縦60cm、横50cm、深さ11cmである。時期は平安時代11世紀である。

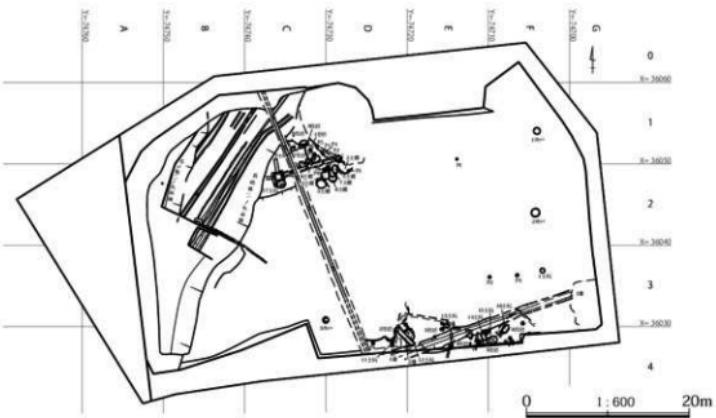
出土遺物は須恵器高台付皿1点、鉄斧1点、鉄製L字状品1点の合計3点の出土である。図化していない土師器甕胴部出土があった。その他、滑石の製品と破片が覆土内から多く出土している。

8号住居（第81・83図）

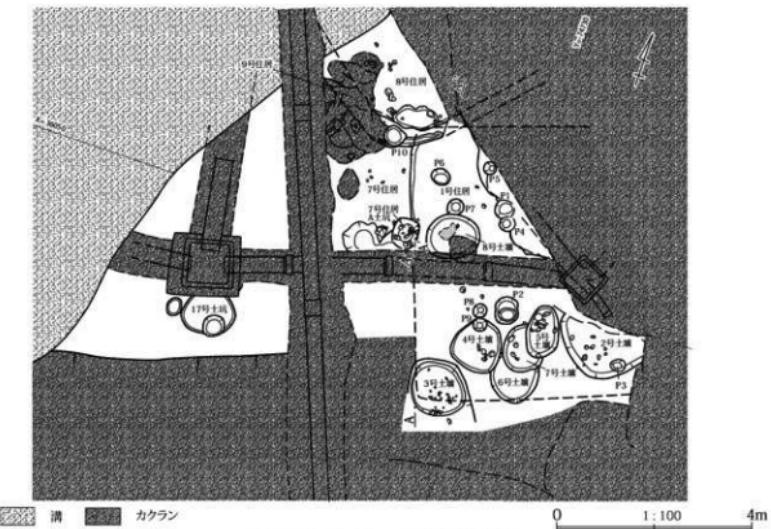
8号住居はC-1グリッドに位置している。9号住居と重複関係があり、本住居が新しく、9号住居が古い。南壁溝と床面の一部のみの検出である。この住居の北西部及び西側が攪乱で壊されている。この攪乱は人為的というよりも雨水などが流れで遺構を壊したと考えられる。時期は平安時代である。

出土遺物は土師器壺・須恵器大甕、羽口2点、楕型鍛治津等6点である。

羽口・楕型鍛治津の出土が認められる事から、近接地或いはこの住居で小鍛冶を実施していたもの



第79図 古墳～平安時代の遺構全体図

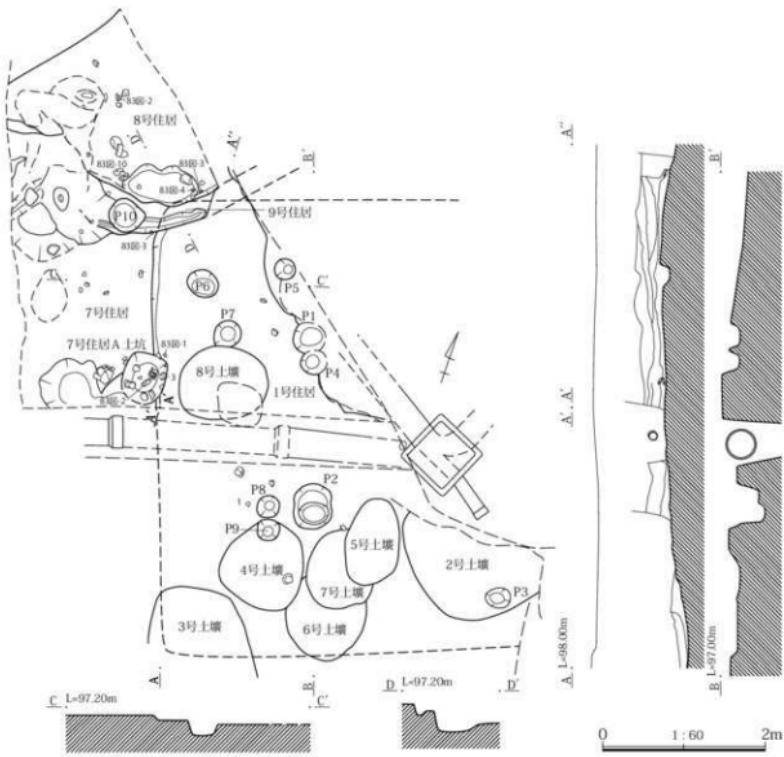


第80図 1・7～9号住居全体図

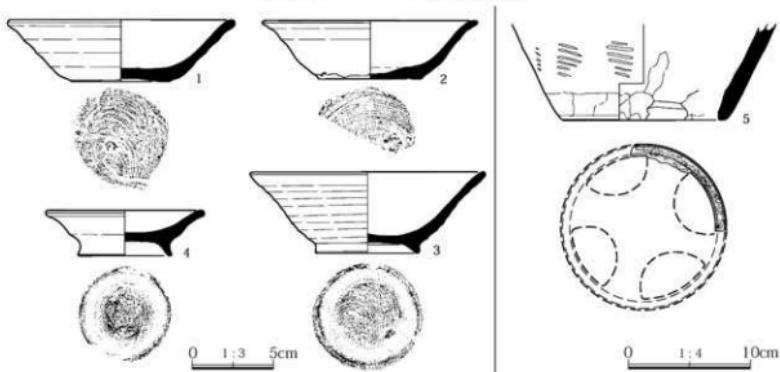
と考えられる。その他、滑石の製品と破片が覆土内から多く出土している。

9号住居（第81・83図）

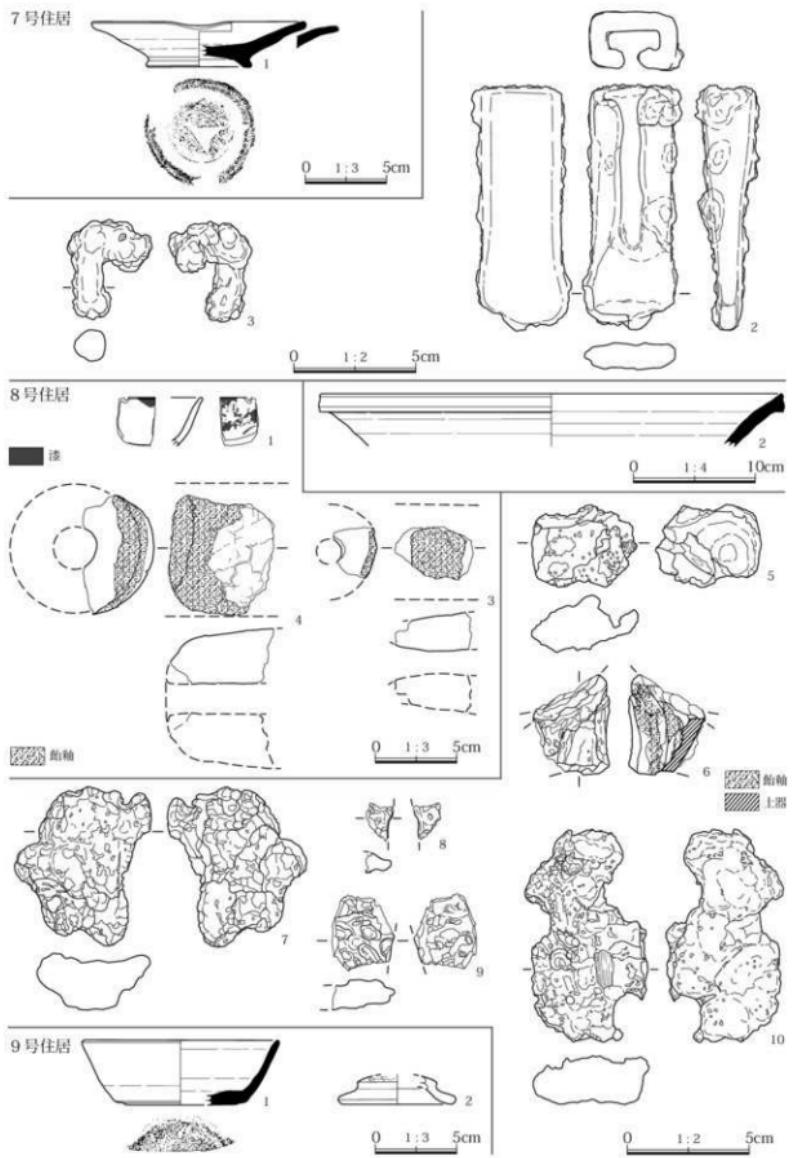
9号住居はC-1グリッドに位置している。8号住居と重複関係であり、本住居が古く、8号住居



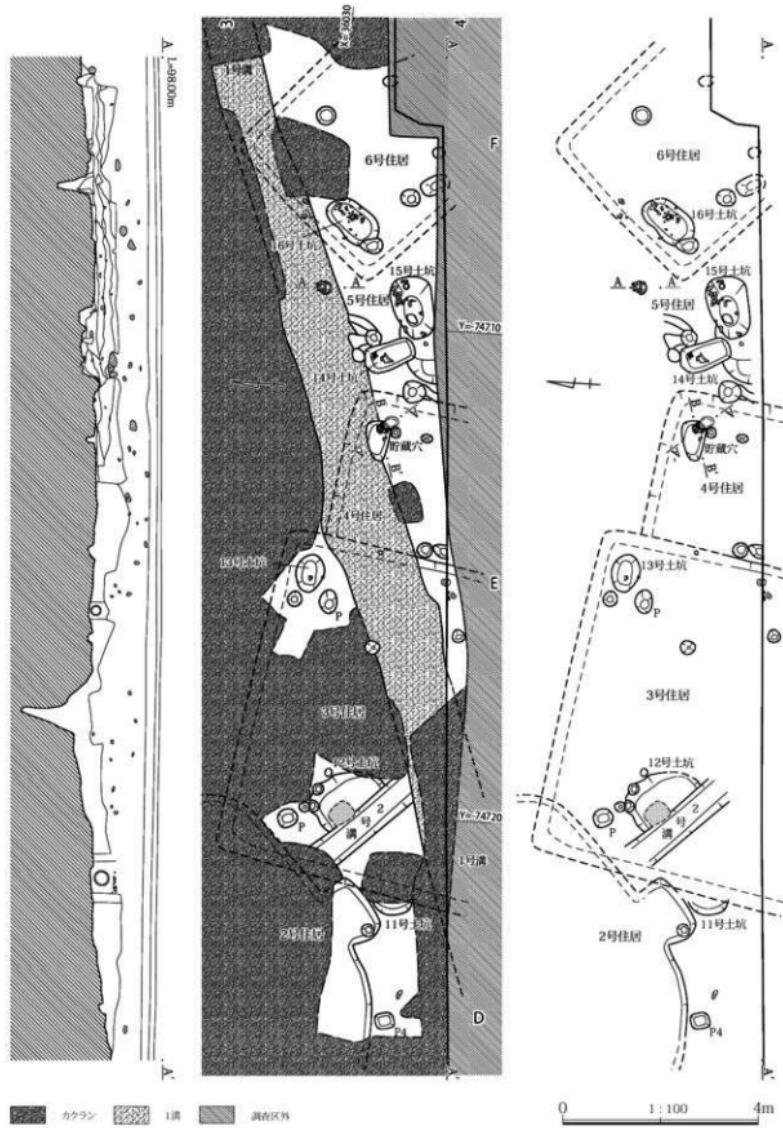
第81図 1・7～9号住居実測図



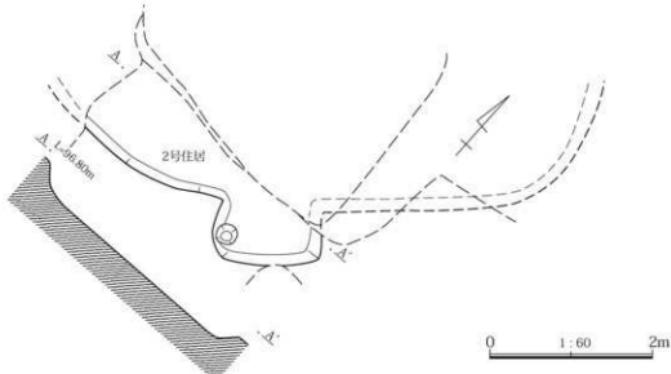
第82図 1号住居出土遺物実測図



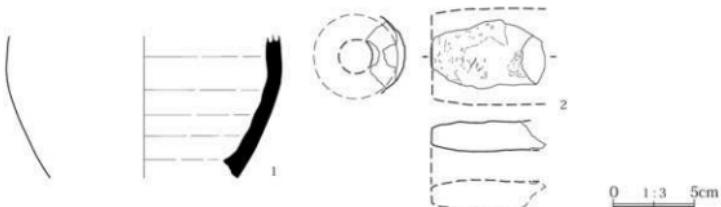
第83図 7・8・9号住居出土遺物実測図



第 84 図 2 ~ 6 号住居周辺全体図



第85図 2号住居・貯蔵穴実測図



第86図 2号住出土遺物実測図

が新しい。

壁溝は幅16cm、深さは12cm、断面は「U」字状である。南壁のみの確認であり、床面から確認面の深さは11cmである。床面は平坦であるが東側・西側が共に攪乱、北側が二ノ丸南堀の掘落ち込みで壊されている。時期は奈良時代8世紀である。

出土遺物は、須恵器壺と高坏脚である。須恵器壺は底部がヘラ削り調整である。

なお、覆土から滑石の製品、破片等が多く出土している。

2号住居（第85・86図）

2号住居はD-3・4グリッドに位置している。

高崎陸軍病院・国立高崎病院の建物の基礎工事により、遺構面が大きく掘削されている。

2号住居南壁の一部を残すのみである。平面形は隅丸方形状を呈すると考えられ、東西は3.3mを残存し、壁高は35cmで床はほぼ平坦である。壁溝は存在しない。

但し、南壁中央に張り出し部を設けているが、住居床面と床面を共有しているため同一住居の施設として考えたい。時期は平安時代10世紀である。東西規模の推定距離は6.5mを測る。

出土遺物は、須恵器壺1点と羽口1点の計2点である。

なお、覆土中に滑石の製品、破片等が多く含まれていた。

3号住居（第87・88図）

3号住居はE-4グリッドに位置している。

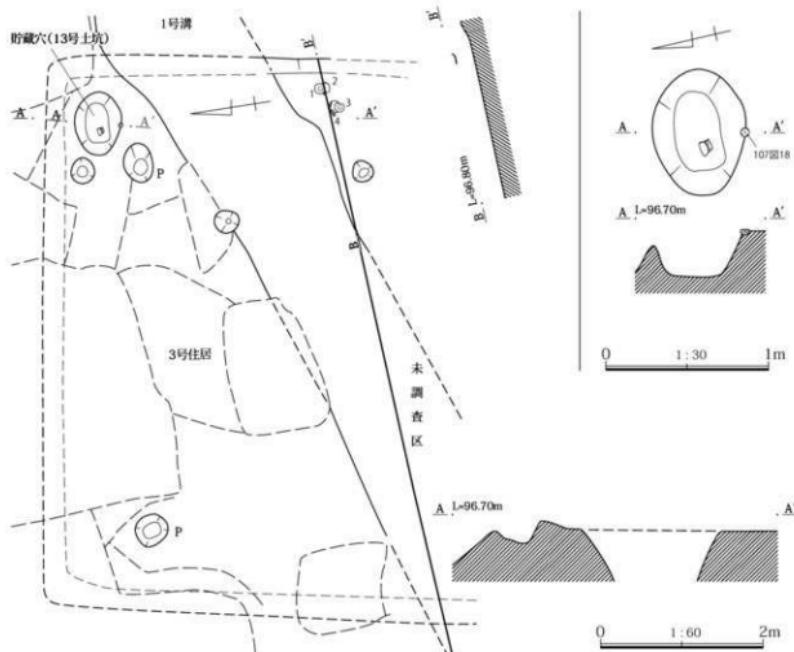
国立高崎病院の建物の基礎工事により、遺構面が大きく掘削されている。東壁だけの検出で、和田城関連の1号溝に破壊され、南側は調査区外となり1号溝北側においても擾乱が多く住居は具体的な平面形を確認することができないが、概ね第87図のような方形の住居形態と考える。壁高は10cm、床面は平坦で、壁溝は存在しない。

北東コーナーに貯蔵穴(13号土坑)を設けている。平面形は楕円形で大きさは東西78cm、南北60cm、深さ28cmである。この貯蔵穴の上部では紡錘車の完形品が1点出土している。また近くでは紡錘車の製作途中のもの1点が出土している。覆土中に滑石の製品、破片等が含まれる。これら紡錘車を含む滑石は、古墳時代の滑石工房の所産が混入したものと考える。

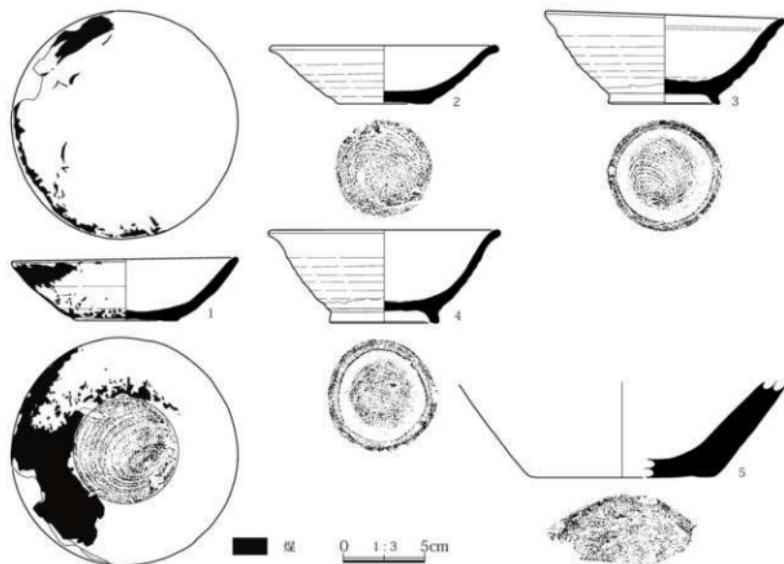
東壁の南側覆土に焼土の粒子が多く認められることから、東側カマドを想定することができる。柱穴は貯蔵穴の南西に1穴があり、平面は楕円形で大きさは東西48cm、南北35cm、深さ30cmである。その他小穴3穴がある。時期は平安時代10世紀頃である。

出土遺物は、東壁際に完形品の須恵器壺・同高台付塊の4点が集中して出土している。

1・2は、須恵器壺、3・4は須恵器高台付塊である。5は須恵器壺底部が1点である。



第87図 3号住居・貯蔵穴実測図



第 88 図 3 号住居出土遺物実測図

古墳時代の竪穴住居

古墳時代の竪穴住居は 4・5・6 号住居の 3 軒が確認され重複関係にあり、5 号住居が一番古く、4・6 号住居が新しい。

これらの遺構は、近世の建物建設による基礎工事で遺構而より、工事が深く行われている。

中世の 1 号溝を境として北側は一部を除き、ほぼ遺構は残っていない。

1 号溝の南側は調査区外となっており幅狭い中で遺構の重複関係がある為、住居の壁を確定することは非常に難しく。

その中の僅かな根拠から住居形態を復元したのである。

なお、覆土中から滑石の製品、破片等が多く出土していたが、これら資料はすべて覆土内出土のものであり、この住居に直接関連のある資料ではないため、滑石の項目で一括して紹介する。

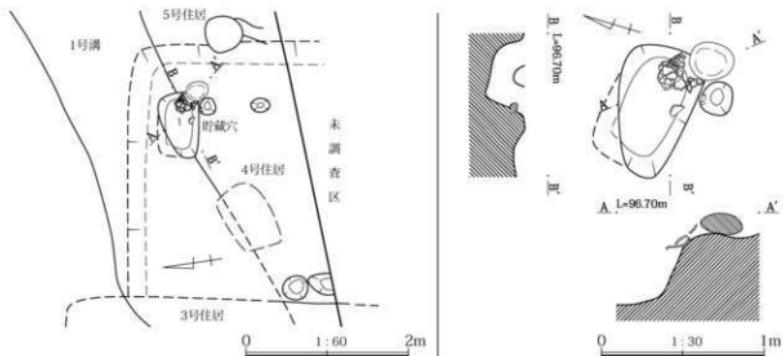
4 号住居（第 89・92 図）

4 号住居は E - 4 グリッドに位置している。1 号溝と未調査区に挟まれた広い所で幅 1.4 m、長さ 3.3 m の三角形の範囲の調査である。

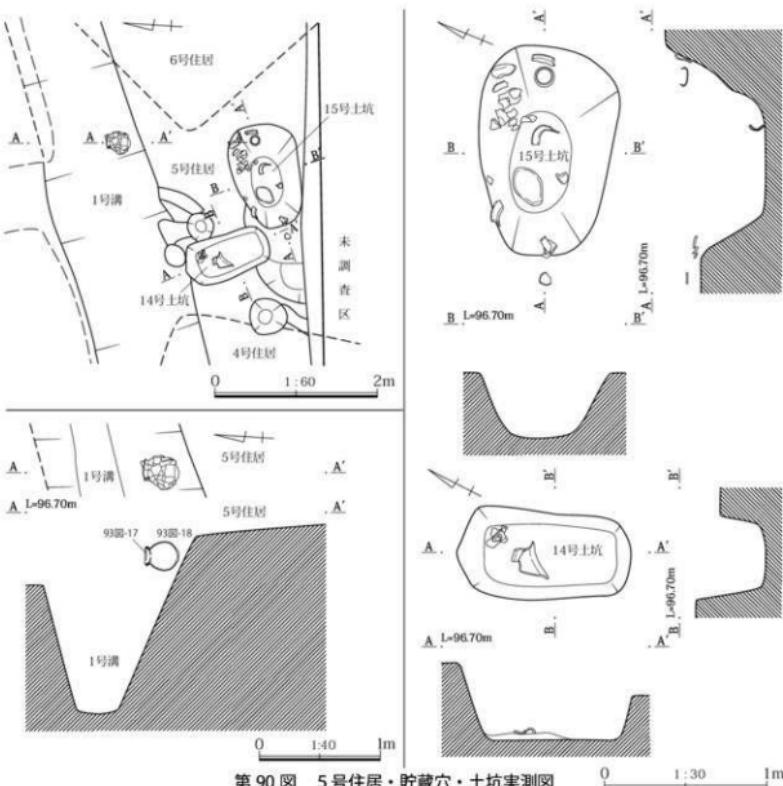
床はほぼ平坦である。小穴は大小 4 か所が認められたが主柱穴ではない。

貯蔵穴は北東コーナーに位置し、1 号溝で北側半分壊されているが、平面形は隅丸長方形で大きさは東西 80cm 南北 50cm、深さ 44cm である。貯蔵穴内からは 1 の土師器櫃の他 2・3・4 の土師器鉢・櫃・壺が出土した。

また、川原石の円礫を貯蔵穴の脇に置き石としている。この円礫は、縦 28cm、横 24cm、厚さ 12cm



第89図 4号住居・貯藏穴実測図



第90図 5号住居・貯藏穴・土坑実測図

である。この石の性格としては、作業台や腰掛石などが考えられる。石の表面を観察したが使用痕などは発見されなかった。住居覆土中から滑石の製品、破片等が含まれている。

時期は古墳時代である。

5号住居（第90・92・93図）

5号住居はE・F-4グリッドに位置している。住居内には土坑が2基存在する。15号土坑の平面形は不正楕円形で、大きさは南北が88cm、東西1.28m、深さ62cmである。5号住居出土遺物は須恵器壺・甕・土師器壺・高環・甕・鉄釘等が出土している。14号土坑の平面形は隅丸長方形で南北98cm、東西56cm、深さ50cmである。本土坑は貯蔵穴とも考えられる。

一部14号土坑覆土の上には、ローム層をブロックで混入した黒色土層が厚さ6~7cmの貼り床となっている。土坑内から土師器壺・甕の出土があった。

時期は古墳時代である。

6号住居（第91・92図）

6号住居はF-3・4グリッドに位置している。

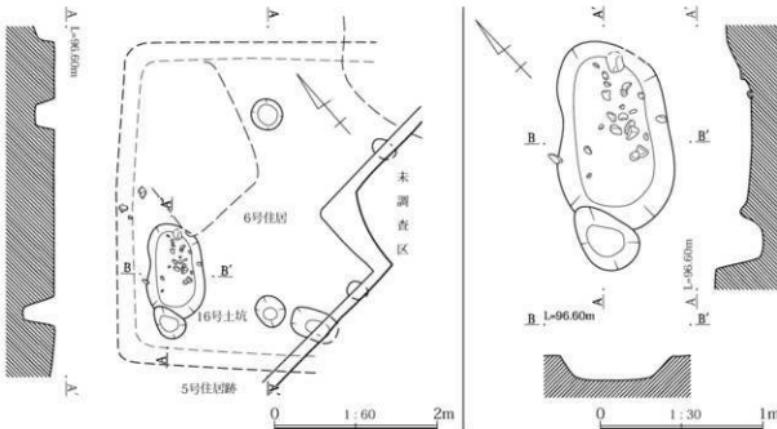
柱穴が2本あるためそれと並行する16号土坑の外側に壁を復元する。この土坑は、形状が楕円形で長軸1.16m、東西7.2cm、深さ16cmである。床は平らである。

柱穴は2本で、柱間は芯芯で2.4mである。その他に小穴は4本存在する。

本住居出土遺物で実測できるものは鉄器以外はなかった。時期は古墳時代である。

土師器壺と同甕の組み合わせについては、出土状況が中世の薬研堀（1号溝）遺構確認面が住居床面であり、その面から35cm下面の薬研堀覆土中の出土である。第93図のように2点とも完形品である。

土器は15甕の口縁に14环を丁度蓋を被せたように載せていた。これは、使用方法の一例を示しているものと考える。环底部中央に2cmの円孔を穿っていることから懸念的な使用が考えられる。

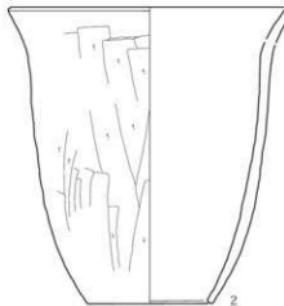


第91図 6号住居・貯蔵穴実測図

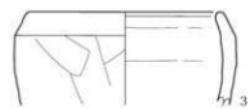
4号住居



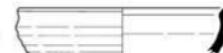
0 1:4 10cm



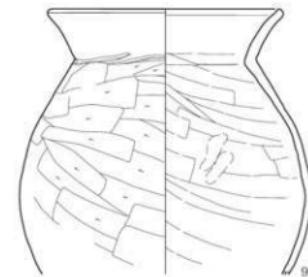
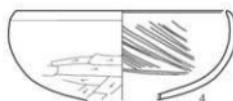
0 1:3 5cm



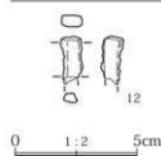
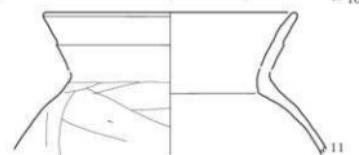
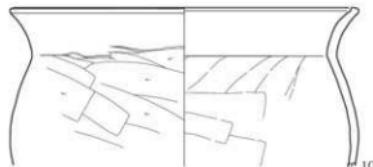
5号住居



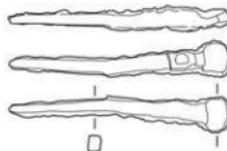
0 1:3 5cm



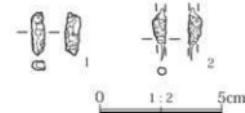
0 1:4 10cm



0 1:2 5cm

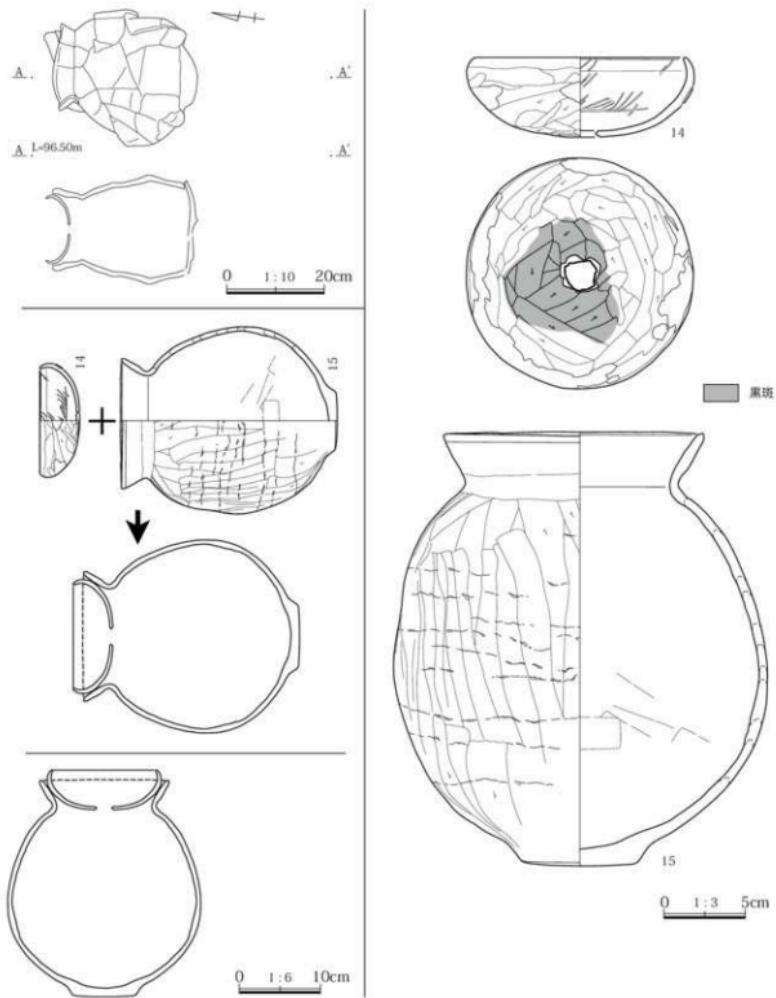


6号住居



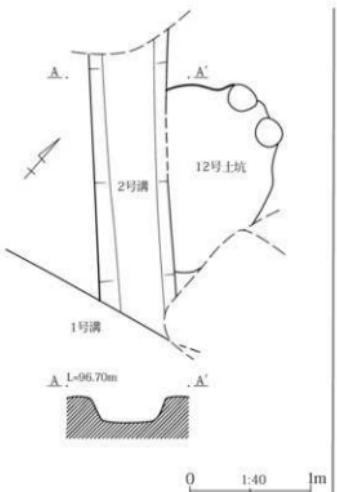
0 1:2 5cm

第92図 4・5・6号住居出土遺物実測図

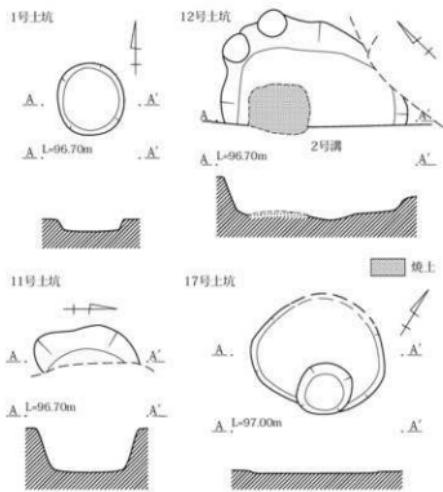


第93図 5号住居出土遺物実測図・組み合わせ土器模式図

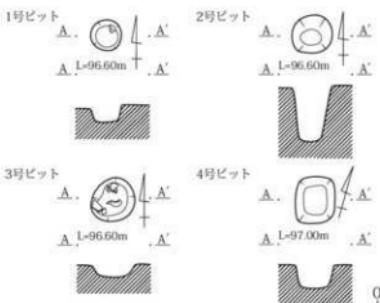
時期違いである中世溝の埋まり切っていないところに壺と甕が組み合わせをそのまままで発見できたのは非常に特異な出土状況である。一つの可能性としては、5号住居にこの組み合わせ状況のまま正位に置かれたものが、大雨等で住居覆土ごと大きく抉れ、溝内部に倒れ込んだものと推測する。多くの土砂と一緒に埋没したことにより、壺と甕が組まれた状況で出土した。溝の埋没状況も住居床面と溝覆土最上部の落差が35cmと少なかったことがこの状況を維持していたものと考える。



第94図 2号溝実測図



第95図 土坑実測図



第96図 ピット実測図・出土遺物実測図

2号溝（第94図）

D-4グリッドに位置している。北側は病院基礎工事により壊されている。南側は幅1.7mの中世の1号溝により壊され、その南側は調査区外となる。この溝は主軸方向はN-43°-Wの走行である。

2・3号住居・12号土坑は重複関係にあるが、2号溝が一番新しい。

規模は、確認長は2.52m、幅は62cm、下場幅40cm、確認面からの深さは18cmである。

断面は「U」字状である。出土遺物はなく、時期は不明である。

土坑（第95図）

本遺跡から発見された土坑は、18基である。しかし、中世土壤墓の2号～8号土壤と最終的に堅

穴住居の関連貯蔵穴・土坑を除いた4基を報告する。4基とも遺物がないため時期は不明である。

1号土坑（第95図）

F-3グリッドに位置する。平面形は円形で直径58cm、深さ8cm床面は皿状である。遺物はない。

11号土坑（第95図）

D-4グリッドに位置する。2号住居張り出し部に5cmと隣接しており、東側を大きく攢乱で壊されている。平面形は円形と考えられ、大きさは最大90cmを測り、実際の直径はもう少し大きく1m位であったと考え、深さは24cmである。遺物はない。

12号土坑（第95図）

D-4グリッドに位置する。2号溝と重複関係にあり、2号溝の方が新しく本土坑の床面下まで壊している。平面形は円形と考えられ、直径1.56m深さ30cmである。土坑床中央から西寄りに焼土層が直径50cm、床から厚さ5cmの分布がある。遺物はない。

17号土坑（第95図）

C-2グリッドに位置する。北側は攢乱で壊されている。平面形は不正円形で大きさは、直径1.1m、深さは5cmで床は平らである。遺物はない。小穴と重複しているが、小穴は48cm、深さ30cmである。遺物はない。

ピット（第96図）

今回の発掘調査で住居内で確認されたもの以外の単独確認されたものを報告する。

P1はE-1グリッドに位置し、平面形は円形で大きさは直径26cm、深さ13cmである。遺物はない。

P2はF-3グリッドに位置し、平面形は円形で大きさは直径32cm、深さ44cmである。遺物はない。

P3はF-3グリッドに位置し、平面形は円形で大きさは直径36cm、深さ12cmである。遺物は柱穴中央に丸底の坩が口縁部を西に向かた状態で横倒しとなっていた。坩の大きさは、口径が13.6cm、器高12cmである。

P4はD-4グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で大きさは南北28cm、東西24cm、深さ15cmである。遺物はない。

P1～4は竪穴住居に伴う柱穴と考えられ、集落の広がりがあったことを想定できる。

奈良・平安時代遺構外遺物（第97図）

1・2は須恵器壺で底部ヘラ削りの奈良時代の遺物である。

3・4は須恵器壺で底部回転糸切りである。

5・6は須恵器壺で、5は台付、6は体部下端を破損している深い壺である。

7・8は須恵器瓶である。

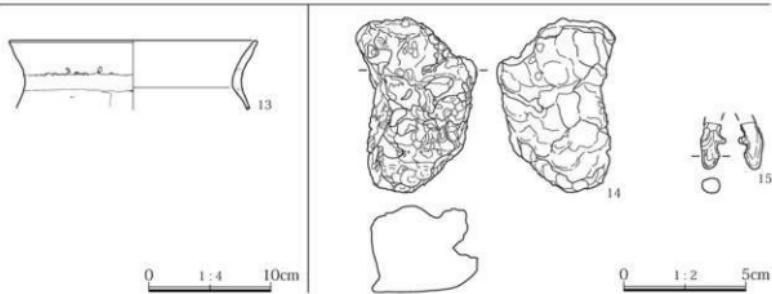
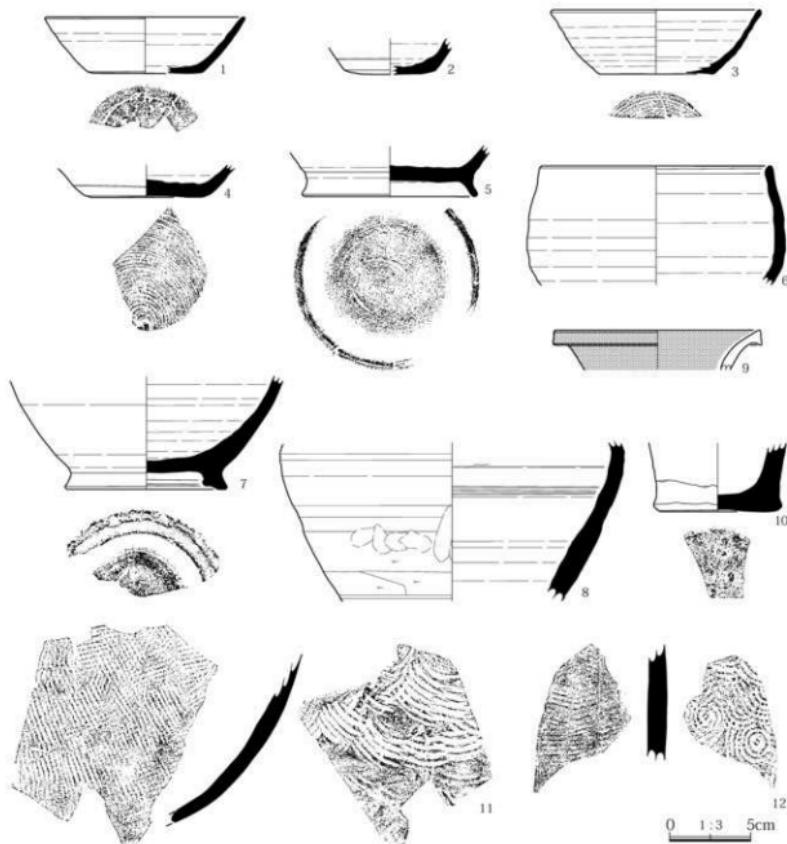
9は灰釉陶器瓶の口縁部破片である。

10は須恵器小瓶で手づくねで仕上げている。

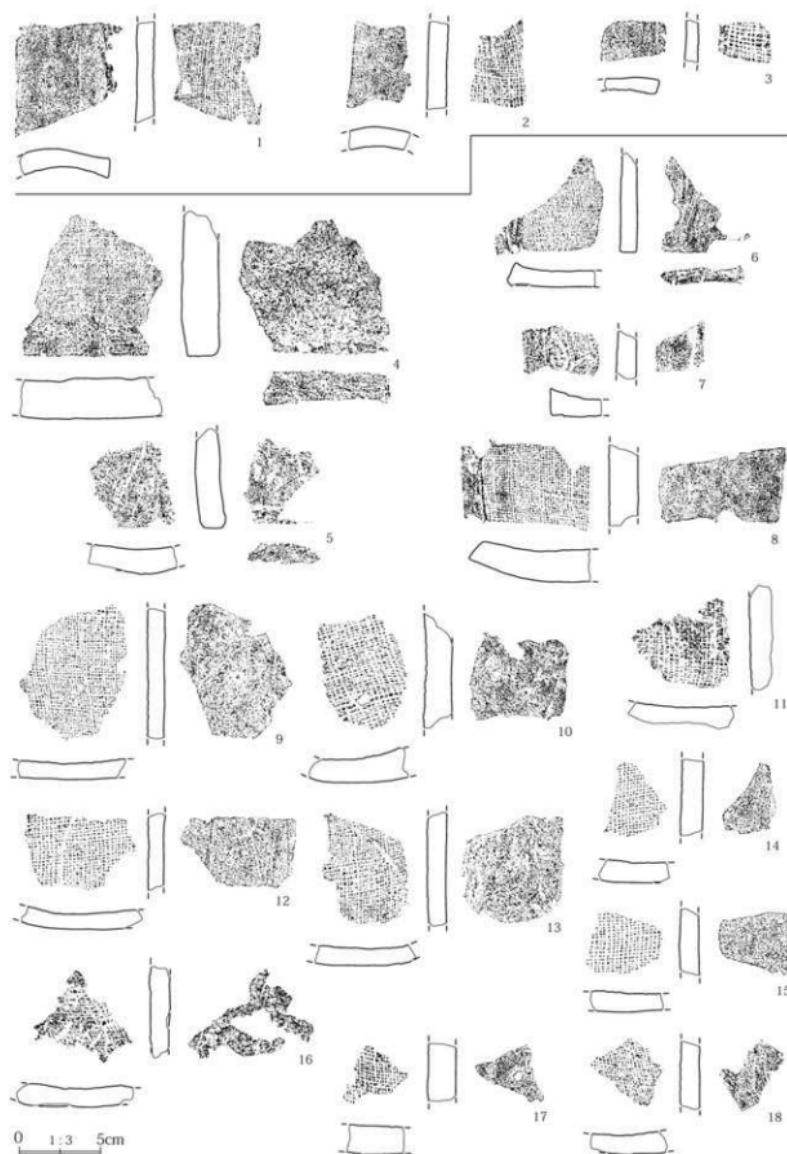
11・12は須恵器大甕破片である。外面は平行タタキ目、内面は青海波のあて具痕跡を残す。

13は土師器甕で口縁部の破片である。口縁部に顕著な輪積み痕跡が残っている。

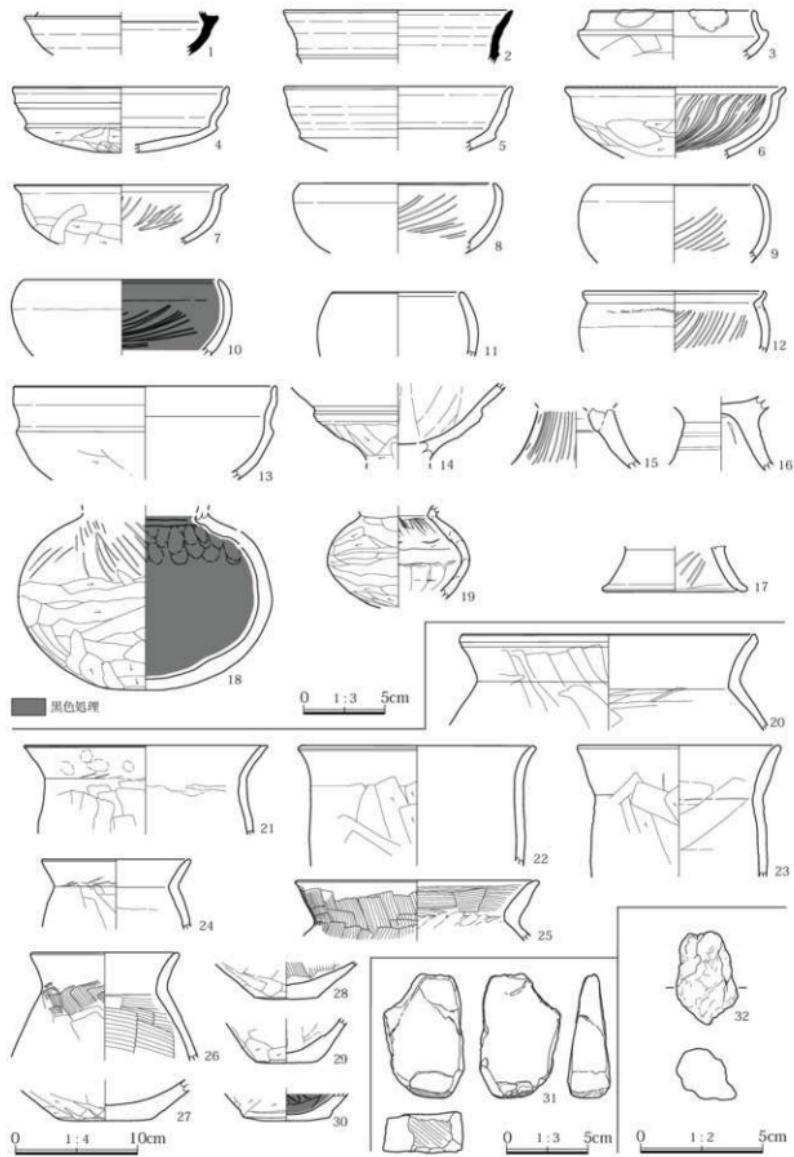
14は椀型鍛冶滓、15は鉄滓である。



第 97 図 奈良・平安時代遺構外出土遺物実測図



第98図 古代瓦実測図



第 99 図 古墳時代遺構外出土遺物実測図 (1)

古代瓦（第 98 図）

古代瓦は 18 点出土した。

1～3 は丸瓦である。4～18 は平瓦である。軒丸・軒平瓦は含まれていない。

古墳時代遺構外遺物（第 99 図）

1・2 は須恵器環で 1 は环身である。

3～8 は土師器環である。6～8 は内面斜め暗文ヘラミガキである。

9～13 は土師器塊である。9・10・12 は斜め暗文ヘラミガキが施されている。10 は内黒処理している。

14～17 は土師器高环である。14 は脚部が欠損、下端はハラ削り、段上はナデ調整、内面はヘラナデ調整である。15 は脚部外面に縦方向の暗文ヘラミガキを施している。

16 は脚部に 2 本の平行沈線を施しており、須恵器の模倣品の可能性がある。17 の内面にもナナメ暗文ヘラミガキが施されている。

18・19 は土師器壺で両方も口縁部を欠損している。18 は中型品で外面上半は斜方向の暗文ヘラミガキ、下半はハラ削り、内面は黒色、頸部下は指頭圧痕。19 は小型品で外面ハラ削り、内面は指ナデ調整である。

20～30 は土師器甕である。20～26 は甕口縁部である。27～30 は底部破片である。

31 は敲石・磨石は不定形で大きさは縦 7.6cm、横 4.8cm、厚さ 2.8cm である。下端部が敲石・磨石となっている。その面の大きさは 2.6cm × 1.8cm と痕跡が顕著に認められる。

32 は粘土塊の焼けたものである。丁度手中で握った状況の大きさで縦 3.9cm、横 2.5cm、厚さ 2.1cm、重さ 11.2 g である。

円筒埴輪（第 100 図）

円筒埴輪の破片が 4 点である。

1・2 は口縁部破片である。3・4 は口唇部下の口縁部片である。

4 点とも表面は縦方向及び斜方向のハケ調整、内面は斜方向、横方向のハケ調整である。

円筒埴輪片が出土している状況から、中世～近世の城郭築造の際に壊されてしまった古墳が周辺に存在していたものと想定される。

古式土師器（第 101 図）

今回の発掘調査では、古墳時代前期（4 世紀）の遺構は発見されていないが、古式土師器が出土している。

1～3 は壺形土器である。1・2 は口縁が短く、3 は口縁が長いタイプである。

1 は口径 12.8cm、頸部径 10.8cm、残存高 3.2cm である。ヘラミガキ調整であるが、2・3 のように内外面ともヘラミガキが顕著ではない。

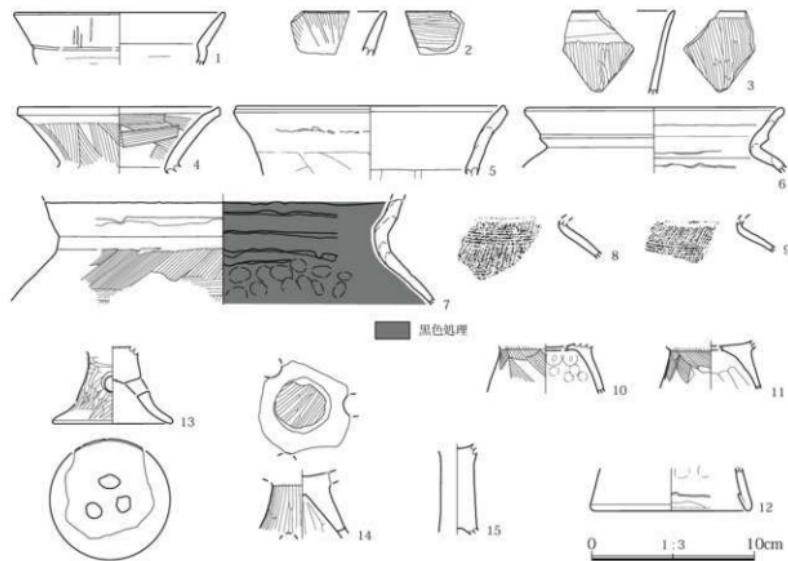
4 は壺形土器で口径 12.3cm、頸部径 7.4cm である。5 は甕口縁部片である。

6 はいわゆる S 字口縁で復元口径は直径 16.3cm である。6 は口径 15.7cm、頸部径 13.2cm である。

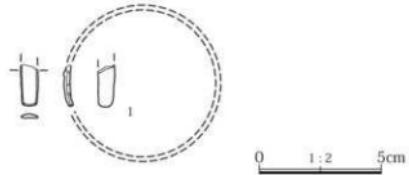
7 は大甕で頸部径 20.4cm、残存高 6.4cm である。口縁部は欠損しているが輪積み部で丁度きれいに



第100図 古墳時代遺構外出土遺物実測図(2)



第101図 古墳時代遺構外出土遺物実測図(3)



第102図 銅釧実測図

剥落しており、この状態で使用されていたと考える。頸部から口縁部迄に 5 回位の輪積み痕跡が認められる。表面の整形はナナメハケ目を連続し、横方向のハケ目が 1 条巡らされている。内面は頸部下側には指頭圧痕が 2 段連続している。

8 ~ 12 は台付甕である。8・9 は S 字甕の頸部から肩部片でハケ目を連続し、横方向のナナメハケ調整を 1・2 条巡らせている。

10 ~ 12 は台部である。10 は高台頸部径が 5.6cm、11 は 5.0cm で 12 は台底部が 1cm 折り返してあり、台径は 9.5cm である。

13 ~ 15 は高坏である。13・14 は、脚には円孔が 3 方透かしてある。外面はヘラミガキである。

13 の环内面底は一定方向に連続ヘラミガキがある。15 は直径 2.1cm、棒状の脚で長さが 5.5cm である。段上はナデ調整、内面はヘラナデ調整である。15 は脚外面にタテ暗文ヘラミガキを施している。

弥生時代（第 102 図）

今回の発掘調査では弥生時代の遺構は確認されなかったが、弥生中期と思われる土器片が 10 点ほど出土した。図化は出来ない小破片であるが、高坏口縁部、甕の底部・胴部破片がある。环部には外外面に、甕類は外面に赤色塗彩が認められる。

遺構外からではあるが弥生時代中期の遺物が出土していることから、周辺に同時代の遺構があるものと考えられる。

1 は銅鉗の破片と考えられ、その大きさは縦 1.7cm、横 0.8cm、厚さ 0.25cm である。内側は平らであり、鉗外側断面は舗鉢状で端部は隅丸である。復元直径は 6.5cm である。

縄文時代

今回の発掘調査では縄文時代の遺構は確認されなかったが、縄文土器破片と石器が出土した。

縄文土器（第 103 図）

1 ~ 17 は中期後半の加曾利 E 式の土器に比定されるものである。

1 ~ 5 は口縁部破片である。

1 ~ 3 は口唇下に沈線を持ち 4・5 は口唇部を欠損、これらは梢円区画文を構成している。

1 は縦方向の櫛描文、2・4 は単節 L R 縄文を施している。

6 ~ 18 は胴部破片である。6 は垂下する 2 本の沈線間を半歳沈管による刺突文を施している。

8 ~ 16 は垂下する平行沈線内を擦り消し縄文を施したものである。8 ~ 13、15・16 は単節 R L 縄文である。

10 は縄文施文部に蛇行沈線文を施したものである。

14 は複節 R L R 縄文を施している。

17 は無節 L 縄文施文である。

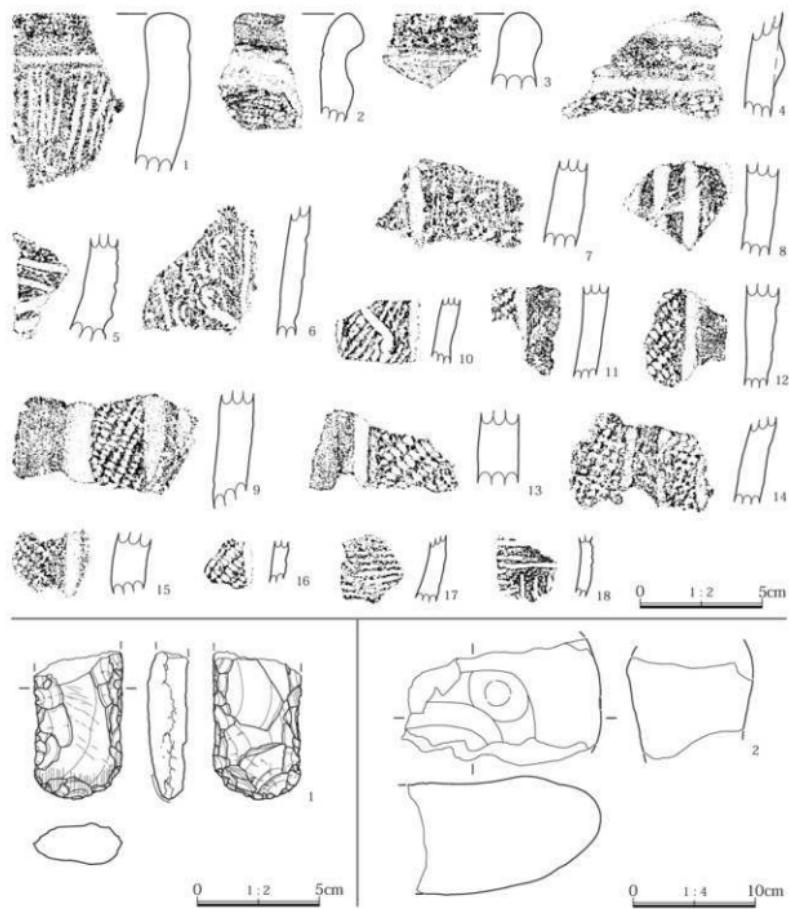
18 は器肉が薄く縦と横の沈線で構成している。時期は不明。

石器（第 103 図）

出土石器は打製石器と礫石器である。

打製石器は打製石斧 1 点・剥片 1 点で礫石器は石皿 1 点で合計 3 点ある。

19 は打製石斧の基部を欠損した先端部の資料で幅の狭いスリムな形状で先端は弧状で受軸に対し



第103図 繩文土器・石器実測図

て同一方向の摩滅痕がある。

20は石皿で多くを欠損している。上面が皿部となっている。

第13表 奈良・平安時代出土遺物観察表

編目	番号	出土位置	種別・部種	法量 単位cm 〔上〕規定 〔下〕測定			形状・石質	焼成	色調	器形、成・整相、文様等の特徴	遺存状況
				〔上〕規 定長 さ	〔下〕測 定幅 さ	〔上〕規 定厚 さ					
82.同	1	2.1.36.2	須磨部杯	(13.5)	6.0	3.8	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭削、系切り	1/2
82.同	2	2.1.36.2	須磨部杯	(12.8)	6.2	3.6	衝	還元燒成	灰(△)・黒	ロクロ整形、底頭削、系切り	1/4
82.同	3	1.1.36.5	須磨部碗	(14.0)	6.2	5.0	衝	還元燒成	灰(△)・黒	ロクロ整形、底頭削、系切り	3/5
82.同	4	1.1.36.7	須磨部 小皿	9.4	5.5	2.8	中空 磨削	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭削、系切り	3/4
82.同	5	1.1.36.7	須磨部瓶	—	13.2	17.8	0.5mm石和灰人 小切削印	還元燒成	灰(△)	底頭削に円孔が2つあると推定 中央にも透孔の可能性あり 底頭開口部ラクラリ	底頭削
83.同	1	7.1.36.8 1	須磨部盆	(12.9)	6.2	2.8	今今相印跡	難焼成	鶴高輪	底頭削、内面(私印切) 高山川原付	2/3
83.同	2	7.1.36.8 4	鉢製品 跡井	10.3	4.1	2.4	鉢	—	—	先史的でやや丸味をもつ 斧を装飾する底部は兩側の刃を 内面に折りたる。底部内面 0.75cm×横2.15cm 重量 140g	完形
83.同	3	7.1.36.6	鉢製品	14.11	16.91	1.3	鉢	—	—	上:白陶器風、無腹内面を呈す 重里 31.2g	破片
83.同	1	8.1.36.1	土器脚	—	—	13.0	衝	良好	須磨内面漆付	上:須磨漆付	上:須磨漆付
83.同	2	8.1.36.7	須磨部器	(37.8)	—	14.20	小切削印跡	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形	上:須磨漆付
83.同	3	8.1.36.1	須磨部	(13.6)	14.80	(2.7)	—	—	—	丸く左側に向。瓶底に沿てている △ 0.75cmの内底	破片
83.同	4	8.1.36.2	須磨部	(17.26)	16.51	14.40	—	—	—	丸く左側に向。瓶底に沿てている △ 0.75cmの内底	破片
83.同	5	8.1.36.1	須磨部	3.4	4.3	2.2	瓶	—	—	須磨店、重量 32.3g	破片
83.同	6	8.1.36.2	須磨部	4.1	3.1	2.7	瓶	—	—	須磨店、重里 70.4g	破片
83.同	7	8.1.36.2	須磨部	6.5	5.6	2.4	瓶	—	—	重里 70.4g	破片
83.同	8	8.1.36.2	須磨部	1.6	1.1	0.8	瓶	—	—	須磨店、重量 0.9g	破片
83.同	9	8.1.36.2	須磨部	3.1	2.6	1.3	瓶	—	—	須磨店、重量 8.8g	破片
83.同	10	8.1.36.4	須磨部	5.0	2.0	0.5	瓶	—	—	表面に本州から引。重里 111.0g	破片
83.同	11	8.1.36.4	須磨部	10.20	9.80	1.50	瓶	—	—	表面に本州から引。重里 111.0g	破片
83.同	12	8.1.36.1	須磨部	(6.7)	10.71	0.71	瓶	—	—	裏面に刻印有。瓶底に沿てている △ 0.75cmの内底	破片
83.同	13	8.1.36.1	須磨部	(12.2)	10.80	1.50	瓶	—	—	裏面に刻印有。瓶底に沿てている △ 0.75cmの内底	破片
83.同	14	8.1.36.1	須磨部	—	9.71	0.71	瓶	—	—	裏面に刻印有。瓶底に沿てている △ 0.75cmの内底	破片
83.同	15	2.1.36.1	須磨部	—	—	—	瓶	—	—	裏面に刻印有。瓶底に沿てている △ 0.75cmの内底	破片
83.同	16	2.1.36.1	須磨部	14.21	17.01	12.45	瓶	—	—	裏面に刻印有。瓶底に沿てている △ 0.75cmの内底	破片
83.同	17	2.1.36.1	須磨部	13.0	6.4	3.9	衝	還元燒成	灰(△)・黒	須磨内面漆付	上:須磨漆付
83.同	18	2.1.36.2	須磨部	13.8	5.6	3.6	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭削、系切り	上:須磨漆付
83.同	19	2.1.36.3	須磨部 台脚	14.7	6.6	5.7	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭削、系切り地在付	上:須磨漆付
83.同	20	3.1.36.4	須磨部 台脚	(12.9)	6.6	5.7	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭削、系切り地在付	4/5
83.同	21	3.1.36.1	須磨部	(10.6)	—	—	衝	還元燒成	灰(△)	底頭削付	須磨漆付
97.同	1	1.1.36.1	須磨部	(12.2)	7.01	3.5	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭ヘラカズリ調整	1/5
97.同	2	1.1.36.1	須磨部	—	(5.6)	(2.2)	衝	還元燒成	灰	ロクロ整形、底頭削、系切り 外面:体落下痕に一連の波線が 内面:内面自然剥離	須磨一 政治確立
97.同	3	1.1.36.1	須磨部	(12.7)	(7.0)	4.0	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭削、系切り	1/5
97.同	4	1.1.36.1	須磨部	(7.5)	(2.0)	—	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭削、系切り	須磨漆付
97.同	5	1.1.36.1	須磨部	—	19.5	13.0	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、底頭削、系切り後凸出付	須磨
97.同	6	1.1.36.1	須磨部	(14.0)	—	17.30	衝	還元燒成	灰	ロクロ整形、外面:内面底座周囲に自然剥離付 体落付	須磨漆付
97.同	7	1.1.36.1	須磨部	—	(9.8)	9.98	衝	還元燒成	黑	ロクロ整形、内面:コナチ、内底:ロクロ凹なり 底頭削引付 周囲自然剥離付	須磨一 武藏崎
97.同	8	1.1.36.1	須磨部	—	—	—	衝	還元燒成	灰	ロクロ整形、内面:コナチ、内底:ロクロ凹なり	須磨漆付
97.同	9	1.1.36.1	須磨部	(12.6)	—	12.45	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、内面:コナチ付	須磨漆付
97.同	10	1.1.36.1	須磨部	(7.4)	—	14.20	衝	還元燒成	灰(△)	ロクロ整形、内面:コナチ付	須磨漆付
97.同	11	1.1.36.1	須磨部	—	—	—	衝	還元燒成	灰(△)	須磨外:内面底座周囲に自然剥離付 内面:平行凹き付 内底:青海波吹付	須磨一 青海波吹
97.同	12	1.1.36.1	須磨部	—	—	—	衝	還元燒成	灰(△)	内面:平行凹き付 内底:青海波吹付	須磨一 青海波吹
97.同	13	1.1.36.1	土器脚	(20.1)	—	15.98	衝	良好	明治期	外面:口縁部コナチ 内面:口縁部コナチ	須磨漆付
97.同	14	1.1.36.1	須磨部	7.1	5.0	3.5	衝	良好	明治期	内面:口縁部コナチ	須磨漆付
97.同	15	1.1.36.1	須磨部	—	—	—	衝	—	内面:口縁部コナチ 重量:165.4g	須磨	

第14表 古代瓦観察表

編目	番号	出土位置	種別・部種	法量 単位cm 〔上〕規定 〔下〕測定			形状・石質	焼成	色調	器形、成・整相、文様等の特徴	遺存状況
				〔上〕規 定長 さ	〔下〕測 定幅 さ	〔上〕規 定厚 さ					
98.同	1	古代瓦 丸瓦	(7.2)	9.41	11.71	衝	良好	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:側面ヘラカズリ	破片
98.同	2	古代瓦 丸瓦	(5.9)	14.10	11.28	衝	中空	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:	破片
98.同	3	古代瓦 丸瓦	(2.7)	13.61	11.28	衝	中空	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:側面ヘラカズリ	破片
98.同	4	4.1.36.6	古代瓦 平瓦	(9.0)	19.51	12.58	中空斜切	良好	灰	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:側面ヘラカズリ	破片
98.同	5	古代瓦 平瓦	(6.2)	26.25	11.88	中空斜切	良好	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:側面ヘラカズリ	破片
98.同	6	古代瓦 平瓦	(6.2)	25.71	11.38	中空斜切	良好	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:側面ヘラカズリ	破片
98.同	7	古代瓦 平瓦	(6.2)	25.71	11.38	中空斜切	良好	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:側面ヘラカズリ	破片
98.同	8	古代瓦 平瓦	(5.9)	25.31	11.38	中空斜切	良好	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:側面ヘラカズリ	破片
98.同	9	1.1.36.1	从脚部取瓦	(12.6)	—	—	衝	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:側面ヘラカズリ	須磨漆付
98.同	10	1.1.36.1	須磨部	(7.4)	—	—	衝	圓渦紋	白(△)	門柱:白(△) 壁面:白(△) 剥離:	須磨漆付
98.同	11	1.1.36.1	須磨部	—	—	—	衝	圓渦紋	白(△)	須磨外:内面底座周囲に自然剥離付 外面:平行凹き付 内面:青海波吹付	須磨一 青海波吹
98.同	12	1.1.36.1	須磨部	—	—	—	衝	圓渦紋	白(△)	外面:平行凹き付 内面:青海波吹付	須磨一 青海波吹
98.同	13	1.1.36.1	土器脚	(20.1)	—	15.98	衝	良好	明治期	外面:口縁部コナチ 内面:口縁部コナチ	須磨漆付
98.同	14	1.1.36.1	須磨部	7.1	5.0	3.5	衝	良好	明治期	内面:口縁部コナチ	須磨漆付
98.同	15	1.1.36.1	須磨部	—	—	—	衝	—	内面:口縁部コナチ 重量:15.5g	須磨	

第15表 古墳時代出土遺物觀察表

神社	番号	出土位置	種別・器種	量目 （上） （下） （中） （右） （左）			出土・右肩	地床	色調	器物、底・整型、文様等の特徴	遺存状況
				500g 未満	500g 以上 未溝	25kg 未溝					
92回	1	4往36.1	土師器 瓢	14.6	4.6	14.0	中や粗鉄粒	良	黄褐色	外側：「土師器コナデ」 陶器へ落成前輪ヘラケツリ 体部に黒斑 内側：「土師器コナデ」 陶器ヘラナデ 陶器下部2.6	3/4
92回	2	4往36.1 5往37.1	土師器 瓢	62.3	(10.2)	24.3	0.4m右斜面 中や粗鉄粒	良	黄褐色	外側：「土師器コナデ」 陶器へ落成前輪ヘラケツリ 内側：「土師器コナデ」 陶器ヘラカズリ 1回転落成前輪ヘラケツリを落す後側面	1回転落成前輪ヘラケツリ
92回	3	4往36.1 5往37.1	土師器 瓢	(11.9)	—	15.7	中や粗鉄粒	良	黄褐色	外側：「土師器コナデ」 陶器ヘラケツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ
92回	4	5往36.1	土師器 瓢	10.0	10.0	4.4	南	深く発達感	黒	外側：「土師器」に一致するシャープな鋲 陶器落成前輪ヘラケツリ	完形
92回	5	5往36.1 15-16往36.1	土師器 瓢	0.28	—	12.0	南	深く発達感	灰	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器落成前輪ヘラケツリ	环状锯齿
92回	6	5往36.1	土師器 瓢	—	—	14.4	東	深く発達感	灰	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器落成前輪ヘラケツリを文部へ頭へ回転して4方向で自然の凹凸 陶器落成孔痕欠損	体部焼成
92回	7	5往36.1 15往37.1	土師器 瓢	(1.7)	(5.5)	5.0	中や粗鉄粒	良	黄褐色	外側：「土師器コナデ」 陶器下部ヘラケツリ	1/5
92回	8	5往36.1 15往37.1	土師器 瓢	—	8.1	14.2	南	鋲	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器下部ヘラケツリ	1/4	
92回	9	15-16往4-5 5往36.1	土師器 瓢	0.88	—	11.8	中や粗鉄粒	良好	暗	外側：「土師器コナデ」 陶器落成前輪ヘラケツリ 内側：「土師器コナデ」 陶器ヘラナナデ	1回転落成前輪ヘラケツリ
92回	10	14-15往36.1	土師器 瓢	(2.7)	—	(13.1)	中や粗鉄粒	良好	暗	外側：「土師器コナデ」 陶器ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ
92回	11	14-15往36.1 36-37往	土師器 瓢	(20.2)	—	(11.7)	粗鉄粒	良	暗	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器下部ヘラケツリ 内側：「土師器コナデ」 陶器ヘラナナデ	1回転落成前輪ヘラケツリ
92回	12	5往36.1	土師器 瓢	(2.0)	0.9	0.5	北	—	—	物置内側の粗面化 重量：1.7kg	壁内
92回	13	5往15-20往 %3	铁製品	9.3	1.5	1.0	致	—	—	断面内側の鋲 重量：1.5kg	ほぼ完形
93回	14	1-2往1	土師器 瓢	13.0	—	4.9	中や粗鉄粒	良好	暗	外側：「土師器コナデ」 陶器ヘラタキツリ 内側：斜鉛粒状鋲 ハラマニキ 陶器落成孔 2mmほどとの落成 陶器下部	一部欠損
93回	15	1-2往1	土師器 瓢	15.8	7.0	26.8	中や粗鉄粒	良好	明るめ	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔あり 陶器落成孔あり	一部欠損
93回	16	6-10往1	土师器 瓢	11.71	0.5	0.4	致	—	—	6-10往1と仕上げ2往1は點打し者による落成 重量:0.8kg	壁内
93回	22	6-10往1	土师器 瓢	12.11	0.6	0.3	致	—	—	6-10往1と仕上げ2往1は點打し者による落成 重量:0.8kg	壁内
93回	16	3-12往1	土师器 瓢	13.4	—	11.9	南	粗	外側：「土師器コナデ」 陶器ヘラタキツリ 南面：「土師器」に一致する鋲 陶器落成孔 1/2	1/2	
93回	17	1-10往1	土师器 瓢	—	—	12.71	南	深く発達感	灰	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器落成孔 12.0kg 陶器落成孔	体部焼成
93回	2	1-2往1	土师器 瓢	(14.0)	—	13.26	南	深く発達感	灰	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器落成孔	1回転落成前輪ヘラケツリ
93回	3	7往2ピット1	土师器 瓢	(16.0)	(11.7)	(3.0)	0.4m右斜面 中や粗鉄粒	良好	暗	外側：「土師器コナデ」 陶器ヘラケツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ
93回	4	4往36.1 3-4往36.1	土师器 瓢	13.2	11.9	4.0	南	良	明るめ	外側：「土師器コナデ」 陶器下部ヘラケツリ	4/5
93回	5	9往1往	土师器 瓢	(1.9)	(12.1)	13.9	南	鋲	外側：「土師器コナデ」 成形後カタツムリ	壁内	
93回	6	1往10往	土师器 瓢	(1.4)	—	14.4	中や粗鉄粒	良好	明るめ	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1/4
93回	7	7往1	土师器 瓢	(1.0)	—	13.9	南	鋲	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	8	1-2往1	土师器 瓢	(1.9)	—	14.3	南	鋲	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	9	1-2往1	土师器 瓢	(1.0)	—	14.8	南	鋲	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	10	1往3往2	土师器 瓢	(1.2)	—	14.6	南	鋲	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	11	1-2往1	土师器 瓢	(7.6)	—	13.9	南	鋲	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	12	1-2往1	土师器 瓢	(1.0)	—	13.8	南	良好	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	13	7-8往10往1	土师器 瓢	(1.6)	(15.8)	(5.8)	0.4m右斜面 中や粗鉄粒	良	明るめ	シャープな鋲頭部感	1回転落成前輪ヘラケツリ
93回	14	9	土师器 瓢	—	—	14.7	南	良	明るめ	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラケツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ
93回	15	1-2往1	土师器 瓢	—	—	13.71	南	鋲	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	16	1-2往1	土师器 瓢	—	—	14.6	南	鋲	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	17	1-2往1	土师器 瓢	—	(8.6)	12.8	南	鋲	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器落成孔文部ヘラケツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	18	1往36.1	土师器 瓢	—	15.7	(10.9)	南	良好	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器落成孔文部ヘラケツリ 下部	陶器へ成形	
93回	19	3往1往	土师器 小型器	—	(8.8)	(6.3)	南	良	外側：「土師器」に一致する鋲 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	20	1-2往1	土师器 瓢	(2.0)	—	17.4	南	良好	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	
93回	21	1-2往1	土师器 瓢	(1.8)	—	17.3	南	良好	外側：「土師器コナデ」 陶器落成孔文部ヘラタキツリ	1回転落成前輪ヘラケツリ	

編號	番号	出土位置	種別・器種	法量 単位(m ³) (1) 検定 (2) 通積			出土・石質	焼成	色調	表面、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
				1回 最高 値	2回 最低 値	平均 値					
99回	Z2	1箇所6	土師器 貴	(19.0)	—	19.0	やや粗粒砂	良	褐	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ	1箇所～ 全体確認
99回	Z3	1箇所5	土師器 貴	(16.0)	—	16.0	φ 10cm石粒混入 やや粗粒砂	良	褐	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ ボディヘラケズリ	1箇所～ 全体確認
99回	Z4	7往ビット	土師器 小型貴	(12.0)	—	12.0	—	良	褐	外面：口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ ボディヘラケズリ	1箇所～ 全体確認
99回	Z5	8往5	土師器 貴	(19.6)	—	18.8	やや粗粒砂	良	褐	外面：側面ヘラケナデ (木) 内面：側面ヘラケナデ (木) 断面直角正彌	1箇所～ 全体確認
99回	Z6	4往2	土師器 貴	(11.8)	—	11.8	やや粗粒砂	良	褐	外面：側面ヘラケナデ 口縁部ヨコナデ 内面：側面ヘラケナデ 口縁部ヨコナデ	1箇所～ 全体確認
99回	Z7	—	土師器 貴	—	(8.0)	(3.4)	—	良好	褐	外面：ヘラケズリ	良好確認
99回	Z8	1箇所7	土師器 貴	—	(5.0)	(3.0)	やや粗粒砂	良好	褐	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ 木目が残る	良好確認
99回	Z9	1箇所7	土師器 貴	—	(5.1)	(3.7)	φ 7cm石粒混入 やや粗粒砂	良好	褐	外面：ヘラケズリ	良好確認
99回	Z10	1箇所7	土師器 貴	—	(7.0)	(2.8)	やや粗粒砂	良	褐	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ 黒色 下部部分は墨石 壁面としている 26×18cmの磨石面が 鏡面に認める	良好確認
99回	Z11	—	石片 石片	7.5	4.8	2.8	—	—	—	—	完形
99回	Z12	1箇所7	粘土塊	3.8	2.5	2.1	粗粒砂	不良	褐	重さ11.2g 手で解った状況	—

第16表 遺構外埴輪観察表

編號	番号	出土位置	種別・器種	法量 単位(m ³) (1) 検定 (2) 通積			出土・石質	焼成	色調	表面、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
				1回 最高 値	2回 最低 値	平均 値					
100回	1	丸土	粘土塊	0.006	0.006	0.006	—	良	黄褐色	外面：オダガ 内面：ヨコナデ	1箇所～ 全体確認
100回	2	3往7	粘土塊	0.006	0.006	0.006	—	良好	黄褐色	外面：織部ハケナデ 内面：ヨコナデ	1箇所～ 全体確認
100回	3	1往7	粘土塊	0.006	0.006	0.006	—	良	黄褐色	外面：ヨコナデ ヨクナデ 内面：ナマヘタ	1往～ 全体確認
100回	4	1往7	粘土塊	0.006	0.006	0.006	—	良	黄褐色	外面：織部ハケナデ 内面：ヨコナデ	1往～ 全体確認

第17表 遺構外古式土師器観察表

編號	番号	出土位置	種別・器種	法量 単位(m ³) (1) 検定 (2) 通積			出土・石質	焼成	色調	表面、成・整形、文様等の特徴	遺存状況
				1回 最高 値	2回 最低 値	平均 値					
101回	1	9往ビット	古式土師器 坛	(0.28)	—	0.28	—	良好	褐	外面：口縁部横筋ヘラキヨキ シャープな筋を有し傾斜へ ナミガキ 内面：口縁部・体部ヘラケズリ	1箇所～ 全体確認
101回	2	1往7	古式土師器 坛	—	—	—	12.7	座	良好	外面：斜面ハケ調整後 脊部ヘラキヨキ	1箇所確認
101回	3	1往7	古式土師器 坛	—	—	—	15.8	座	良好	外面：口縁部横筋ナミガキ その下は織部ヘラキヨキ 内面：口縁部横筋ナミガキ	1箇所確認
101回	4	1往7	古式土師器 坛	(12.3)	—	14.3	やや粗粒砂	良好	褐黃	外面：口縁部横筋ナミガキ その下は織部ヘラキヨキ 内面：口縁部横筋ナミガキ	1箇所確認
101回	5	1往7	古式土師器 黃	(6.2)	—	14.2	やや粗粒砂	良好	褐黃	外面：口縁部横筋ナミガキ その下は輪筋あり	1箇所～ 全体確認
101回	6	3往7	古式土師器 5字壇	(1.7)	—	14.0	やや粗粒砂	良	褐黃	外面：口縁部横筋ナミガキ 内面：口縁部横筋ナミガキ 全体的に粗粒な作り	1箇所～ 全体確認
101回	7	15土7	古式土師器 5字壇	—	—	16.5	座	良好	褐黃	口縁部横筋ナミガキ 下位は斜面調整後 1本の横筋ヘラケ調整 内面：口縁部横筋ナミガキ 底下は直面多めあり 内面黒色	面取1/4
101回	8	1往7	古式土師器 5字壇	—	—	12.3	座	良好	褐黃	外面：底面下は斜面調整後 2本の横筋ヘラケ調整	1箇所～ 全体確認
101回	9	14土7	古式土師器 5字壇	—	—	11.5	座	良好	黑	外面：高台斜面ヘラケ調整後 藏位スリキン調整 内面：斜面直角ヘラケ調整前	1箇所～ 全体確認
101回	10	1往7	古式土師器 5字壇	—	—	13.0	やや粗粒砂	良	褐黃	外面：高台斜面ヘラケ調整後 藏位スリキン調整 内面：斜面直角ヘラケ調整前	1箇所～ 全体確認
101回	11	7往ビット	古式土師器 5字壇	—	—	12.5	座	良好	褐黃	外面：ナミガキ	自下深井
101回	12	1往7	古式土師器 5字壇	—	0.5	12.5	座	良好	褐黃	透孔丸孔、複合化で直面	自下深井
101回	13	1往7	古式土師器 高脚	—	0.2	14.0	座	良好	褐黃	外面：頭部斜粒ヘラケ調整 下部縮、斜面ヘラキヨキ 内面：斜面ヘラケ調整	台脚2/3
101回	14	9往ビット	古式土師器 高脚	—	—	14.0	座	良好	褐黃	透孔丸孔、脚に浮きを度張り付けていたかの頭 内面：斜面斜筋ヘラケ調整	台脚1/2
101回	15	1往7	古式土師器 高脚	15.5	2.31	—	座	良好	褐黃	外面：壁部ハケ調整後 藏位ナミガキ 内面：斜面斜筋ヘラケ調整	棒状脚

第6章 滑石等玉作工房址

調査地点からは玉作り製作にかかる未成品や屑石が多数発見された。周辺には高崎城遺跡第16次調査地点をはじめとし、鳥川沿いに玉作り遺跡が点在している。いずれも滑石製の石製品、玉類（白玉・管玉・勾玉）などの未成品等が発見されており、古墳時代、盛んに滑石製品の製作が行われていた。

本調査は古墳時代中～後期の石製模造品、玉類未成品と加工痕を残した剥片から製作過程を割り出すことができた。また、搬入原石もあり工具痕や褐色土の付着から採取地での作業方法を推定できる根拠も得られた。遺構については奈良・平安時代の集落、中・近世の城郭や寺院、近現代の高崎連隊の増改築工事、国立高崎病院工事等で土の移動・反転があり、古墳時代を含むそれ以前の遺構は消滅し滑石工房址については言及できない。遺物の出土場所は平安期の竪穴建物や土坑覆土、中世の井戸や堀（薬研）覆土、近世の井戸等の埋め土と移動した土の中より発見されている。＊注

本遺跡での玉作り遺物は未成品である石製模造品、玉類のみで、具体的には剣形模造品・円および有孔円板・紡錘車・子持勾玉・勾玉・管玉・平玉・白玉等を確認している。石質は滑石、片岩系（黒色雲母片岩、緑色片岩）の石が多数を占める。希少な石では碧玉、変質流紋岩がある。

調査区内では北と南に滑石等玉作遺物が出土していたので場所を「北地点」と「南地点」として限定区分した。滑石等玉作工房の石材遺物総点数は5,990点で、総重量は11,784.31gである。

遺物の分別は石質と色味からまず分別し様々な工程ごとに配列し検討を加えた。石質は变成岩であることから滑石や片岩といつても色味・境目・質感などでバリエーションが甚だ多く分別で混乱したため、大枠で捉え滑石と片岩系の石質を中心に製品分けして説明する。

*注 基盤層にあたる浅間泥流層は粘着性に富み固く、容易に土と遺物を分離できない。土塊の乾燥、水洗を試行したが分離は出来ない。遺物の採集に当たっては発掘時の振じり鎌で土を薄く削りながら傷で判断し採取した。土塊は適時砕き、かつ乾燥した後筋にかけた。その後、土の水洗を行ったが分離できず5mm以下の小片まで採取は出来ない。あくまでも目視のみでしか採取できない。

南地点概要

2～6号住居および1号溝覆土から出土している。なかでも5号住を中心とした範囲に集中している。点数は3,496点で南北総量の6割弱が南地点出土となる。滑石と片岩系の比率は7割強が滑石となる。遺物には、原石・荒削・剥片・板状品で、形がわかるものは紡錘車・勾玉・剣形模造品・子持勾玉・円および有孔円板・多孔石製品・管玉・平玉・白玉等である。

片岩系の遺物（第104～107図1～41）

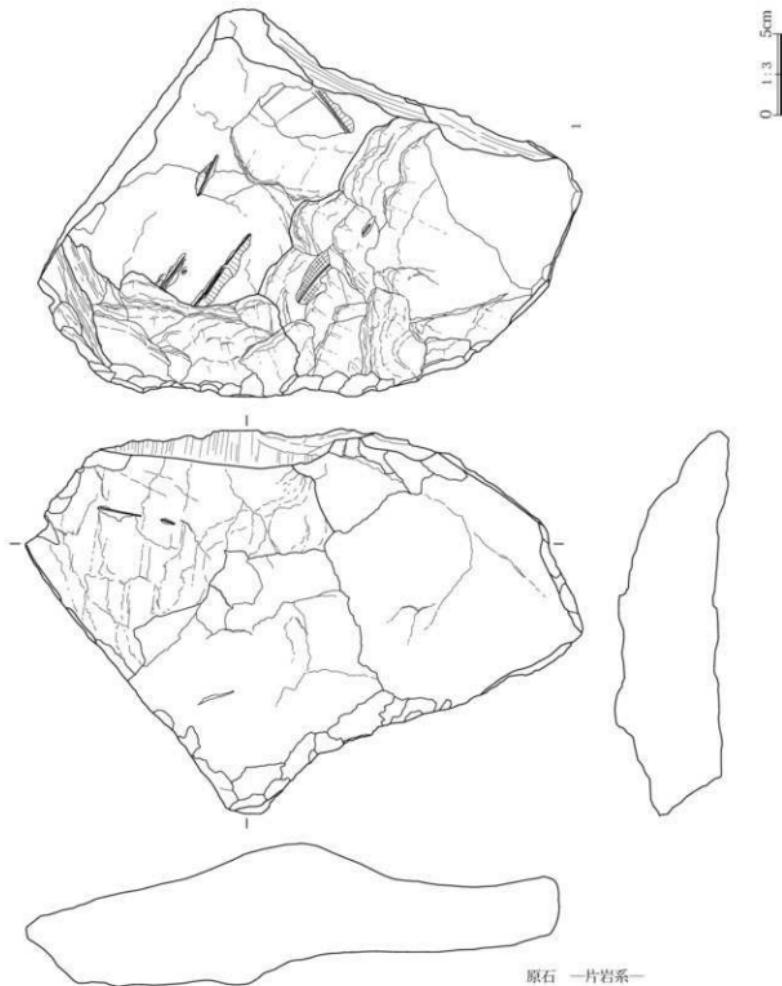
搬入原石、荒削、形削、未成品、屑石などが確認できる。

原石（第104・105図1～3）

原石の形状では転石、板石がある。採取地で金属器等による採石、ローム層中の転石採取として入手し運ばれたものである。

1は節理面から抜き取った板石で、表裏面には鑿の刃先痕があること。側面は敲打による調整と切断が認められ、大きさ、重さ、最大級である。2も同様な板状石で鑿による削痕、刃先痕・切断痕がある。3は全体に褐色土が付着し加工痕は無い。

以上から原石の採取地では露頭の岩脈から「抜き取り」と運びやすい大きさの割りを行っているこ

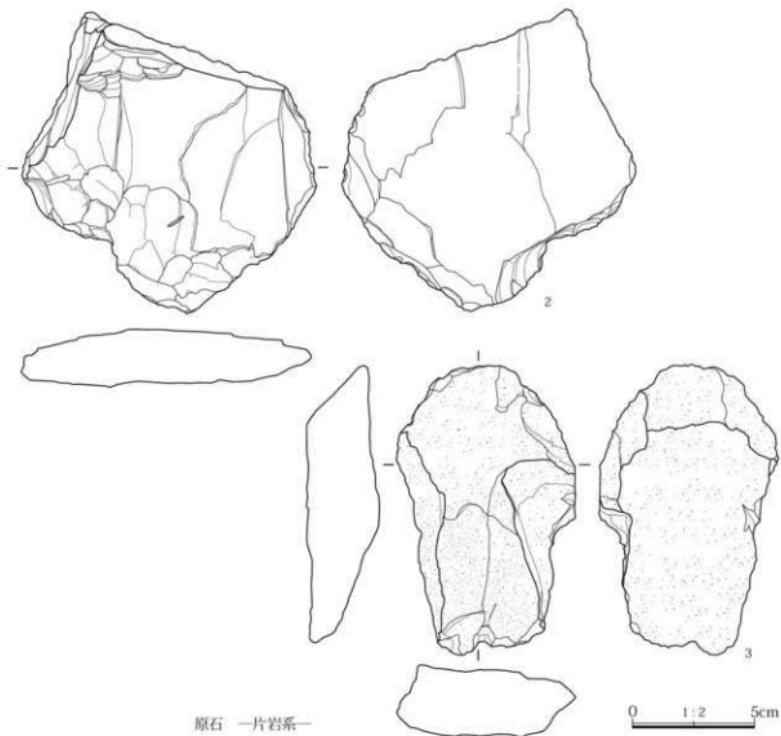


第104図 南地点 原石（片岩系）

と。岩脈（破碎帶）からの採取があることなどが判断される。

荒割・小割の破片（第106図4～15）

4・5は転石を単純に割ったもの。8・12・13・14・15はざらついた表皮や表面を剥がした破片。12・13の接合資料の作業順は、表皮の剥離（接合状態）、小剥離（13）、突起除去の鑿の刺突（12）となる。目的は板状素材の獲得と見られる。剥離時の用具は刃先痕等から見ても同一の金属器（鑿）



第105図 南地点 原石（片岩系）

で行ったもの。14・15の接合資料は表面に縫いの削痕がある。6・9・10・11は荒削剥片に敲打、削痕、擦痕が残り、6・9は形が整えられつつある。

紡錘車製作工程（第107図16～18）

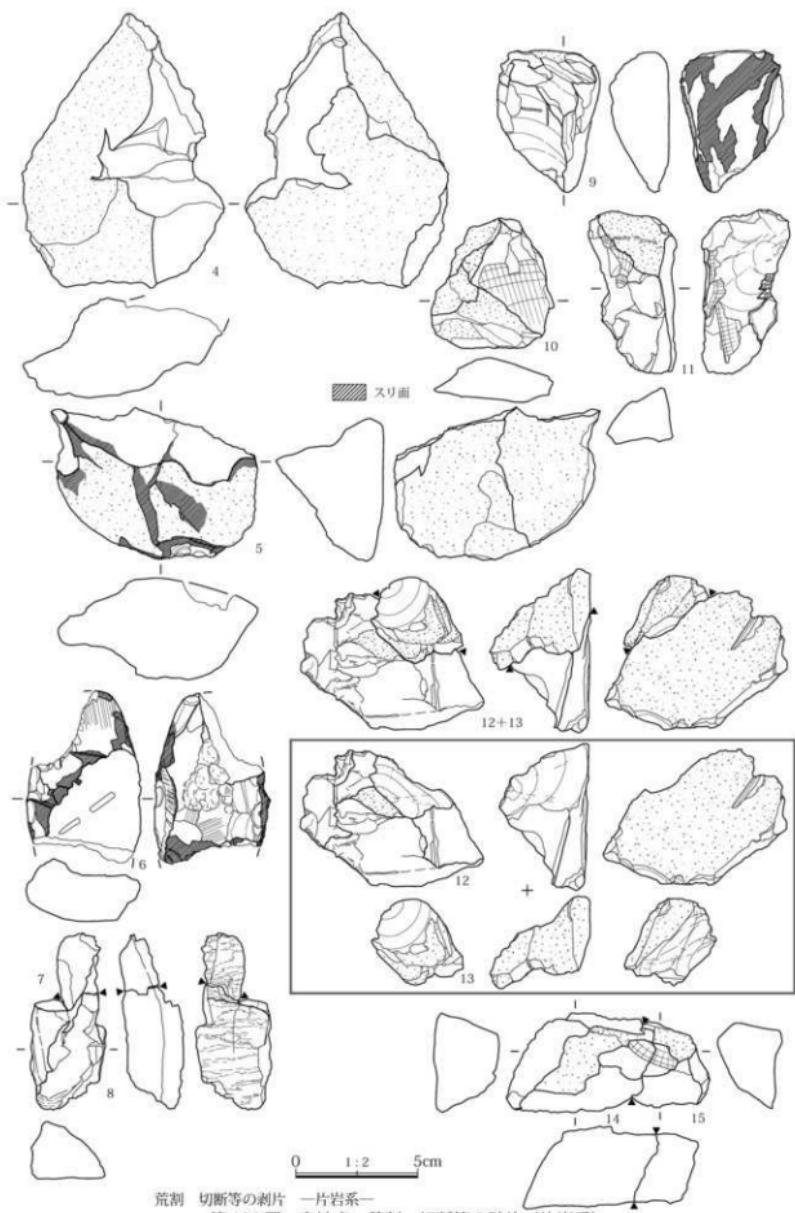
3点のみであるが製作途上の資料である。16は紡錘車の形削り後、切断した残片に削りが行われた破片。下部の切断は板状素材の切断。17は形削り（形彫り）後穿孔まで行った遺物。作業順は、板石に刀子で円形削りが繰り返され、不要部分の折断、加えて穿孔となる。18は穿孔後、砥石により擦り上げの遺物。形は円、断面逆台形に近づきつつある。

勾玉製作工程（第107図19～21）

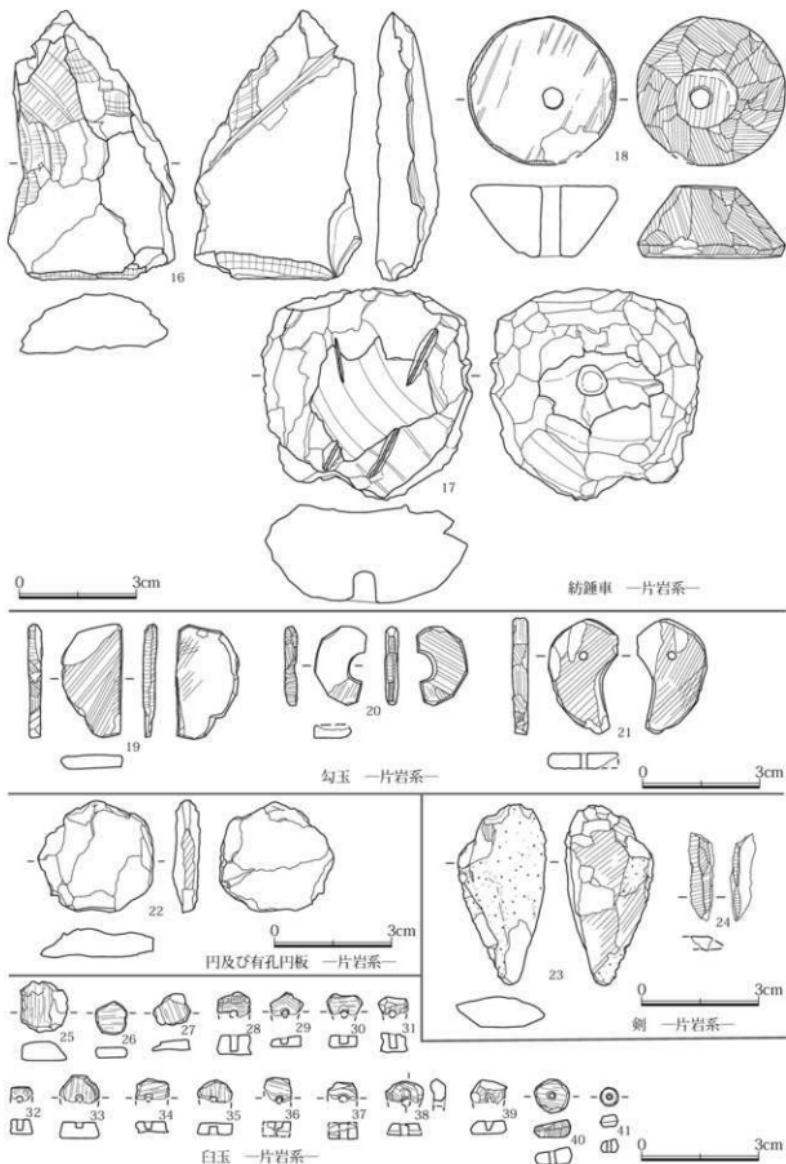
3点と少ないが通常の大きさの勾玉である。工程順は、薄板に擦り上げた板状品を刀子で形削し、側面仕上げ（背部の擦りと腹部の削り）、穿孔と考えられる。19は半月形で腹部の削りは無い。20は腹部の削りまで行われる。

円及び有孔円板製作工程（第107図22）

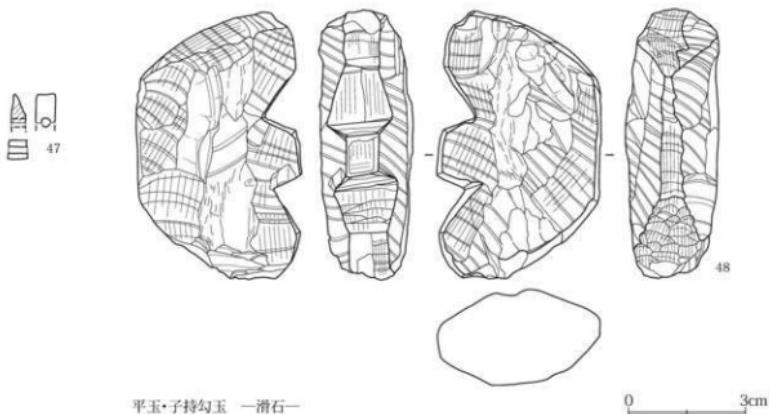
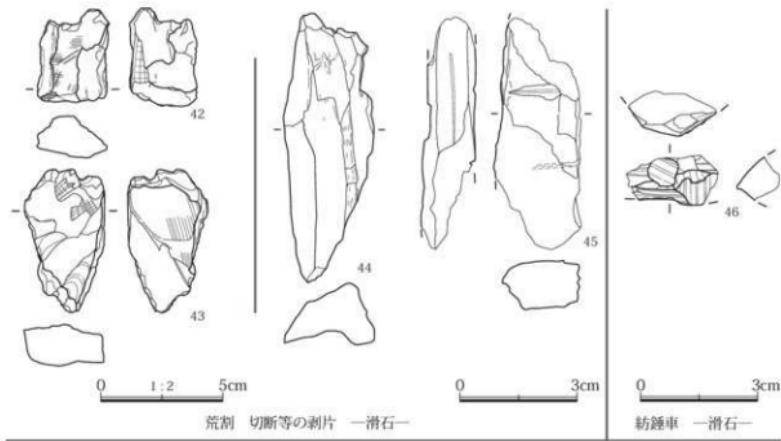
1点のみで、円板形の形削後側面の擦りが入ったもの。



荒割 切断等の剥片 一片岩系
第 106 図 南地点 荒割・切断等の破片 (片岩系)



第 107 図 南地点 紡錘車・勾玉・円及び有孔円板・剣形品・白玉（片岩系）



第108図 南地点 荒割・切断破片・紡錘車・平玉・子持勾玉（滑石）

剣形模造品製作工程（第107図23・24）

2点のみ。23は形削品で一部擦りがある。24は擦り上げ、鎌が認められる破損品。

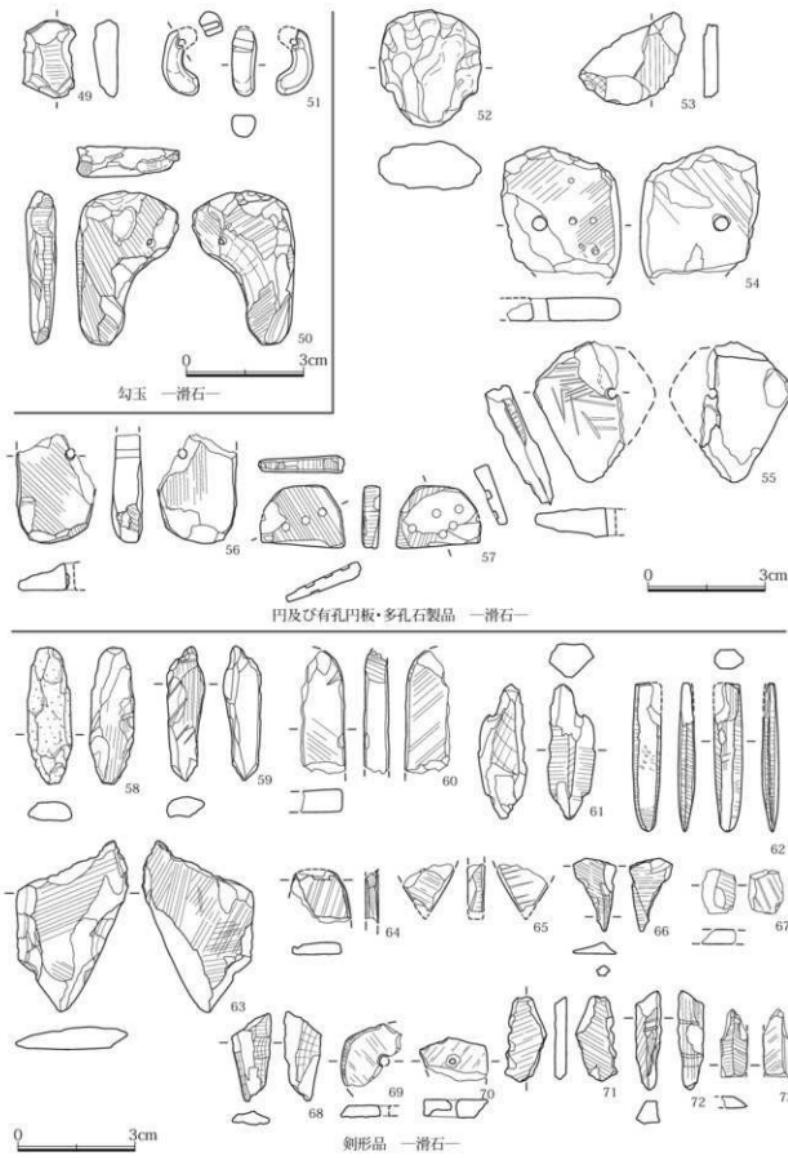
白玉製作工程（第107図25～41）

薄板に擦り上げた板状品を刀子で小割し、四角及び多角形に形削、穿孔、側面仕上げとなる。

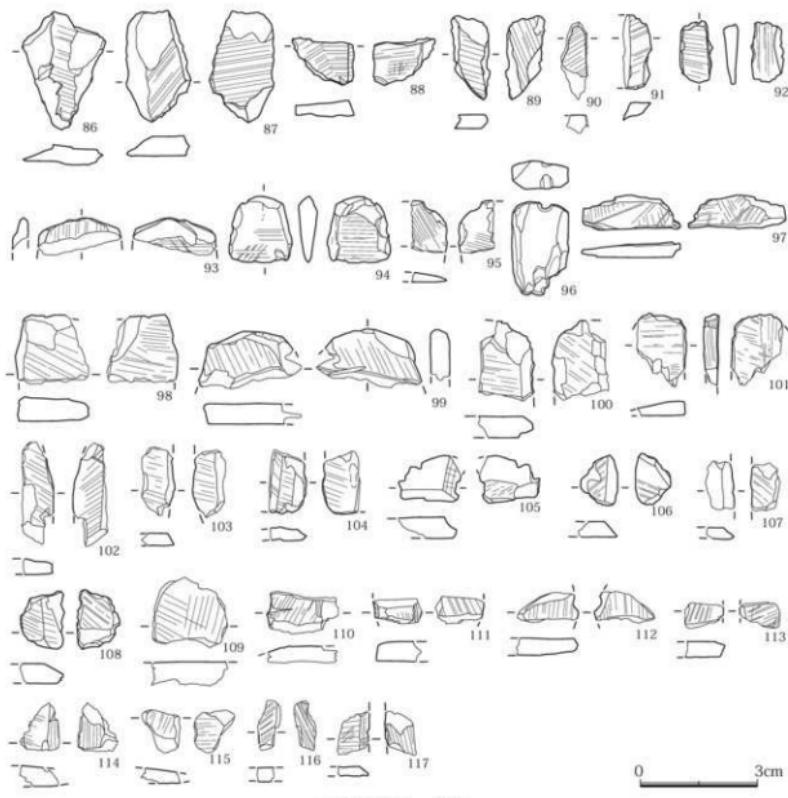
25～27は形削したもの。28～39は穿孔時の破損。40は側面仕上げ、断面より上下両面からの擦りとなり算盤玉様に稜線が残る。41は稜線を残しつつ磨きで完成品。

滑石の遺物（第108～113図42～334）

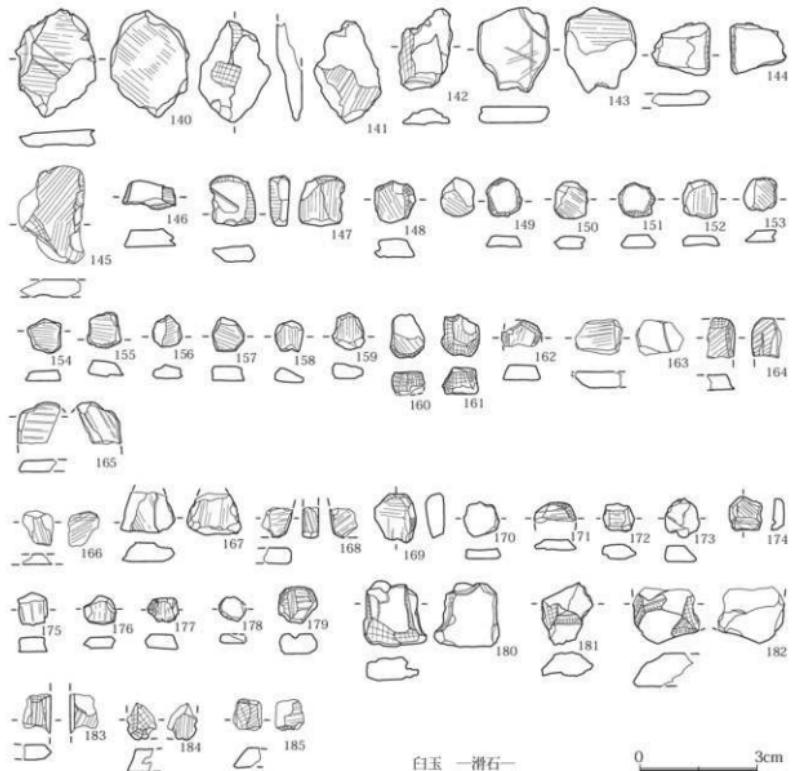
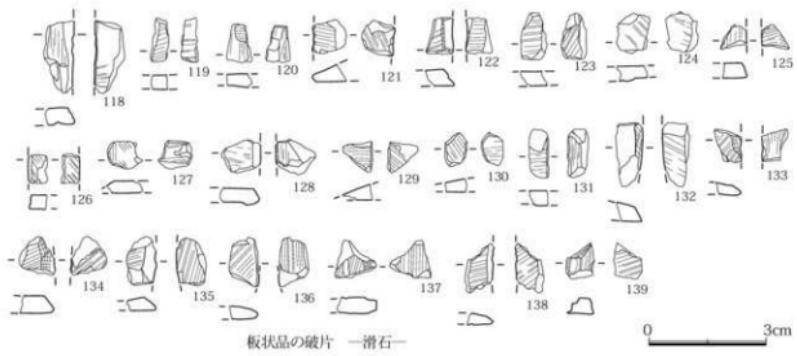
全体的には原石は無く、荒割及び切断品、形削、紡錘車、平玉、子持勾玉、勾玉、円および有孔円



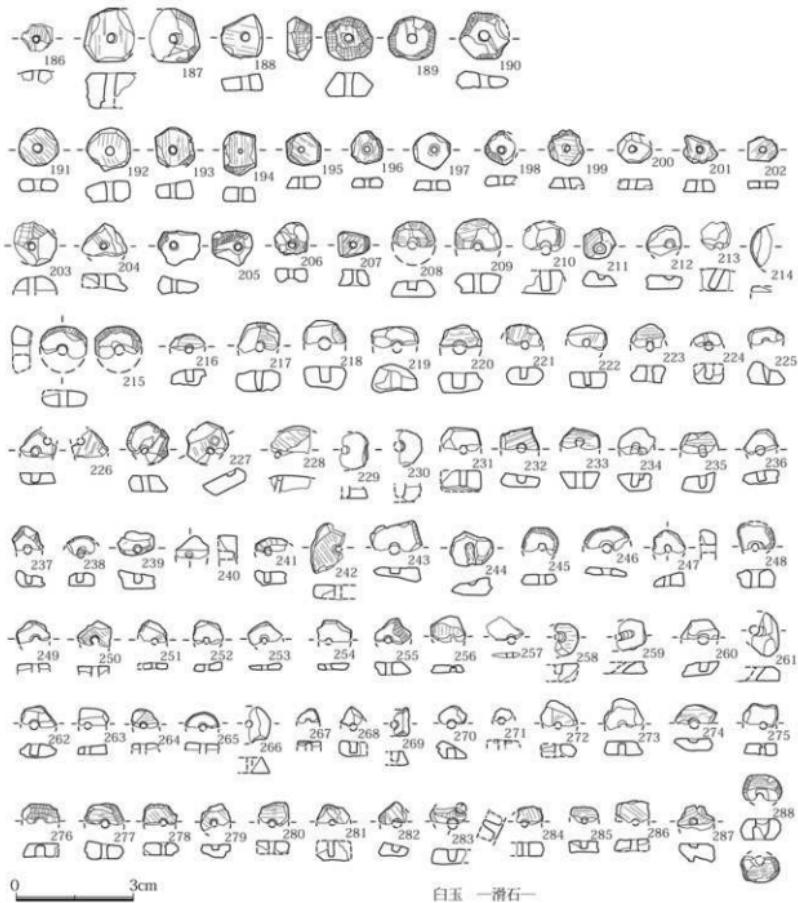
第109図 南地点 勾玉・円及び有孔円板・剣形品(滑石)



第 110 図 南地点 形状不明の模造品・板状品の破片 (滑石)



第 111 図 南地点 板状品の破片・白玉(滑石)



第 112 図 南地点 白玉（滑石）

板、剣形模造品、不明模造品、板状品、白玉等である。

荒削及び切断品（第 108 図 42～45）

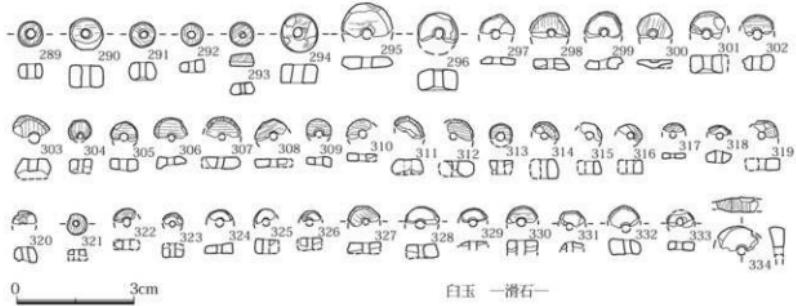
いずれも自然面（節理面）を残した剥片で、後に掠りや削りがある。

紡錘車製作工程（第 108 図 46）

盤や刀子等での削りが行われた断片である。

平玉（第 108 図 47）

石材の穿孔位置が節理面の間で行われていることから平玉と判断した。穿孔時の破損品と考えられる。



第113図 南地点 白玉(滑石)

子持勾玉(第108図48)

長方形の板状品から削り込み、腹部に小さい子持勾玉となる突起がある。背および表裏面に子持はつかない。未穿孔。

勾玉製作工程品(第109図49~51)

49は形割品。50は板状の成品。51は断面丸く削りまで行い、穿孔中に破損したもの。

円及び有孔円盤・多孔石製品製作工程(第109図52~57)

厚みでは様々。52・53は形割。54~56は形が楕円及び四角いものなどがあるが側面仕上げでの破損と考えられる。54は小さい錐での穿孔痕跡がある。57は半円形の石製品に複数の穿孔が表裏面にあり多孔石製品とした。

剣形模造品製作工程(第109図58~73)

全体的に細身が多く、粗雑に造られたもの、丁寧に作られたものなどがある。製作では形割、刃部を形成しないもの、刃部様に擦りや削りをしたもの、穿孔したもの等である。58・59・63は板状品から形割。60・64・65・67・69・70は刃部を形成しない板状のもの。64・69・70は穿孔位置のある頭の部分破片。61・62・66・68・71~73は刃部様に擦りや削り。

不明の模造品(第110図74~85)

全てが板状品をもとに作られたもので、側面加工が認められる一群である。何らかの石製品や玉類の一部を示す破片と判断したものである。

板状品の破片(第111・112図86~139)

板状品で形割時に切り落とした破片を中心とする。両面に擦りがあり、切断痕は少ない。

白玉製作工程(第111・112図140~334)

原則、表裏面が砥石の擦りまたは削りで板状品としたものを細かく切断し、一個作りで製作されて行くものが多い。形割作業では大き目での粗い形割、1cm以下で四角から多角形の切り落とし、穿孔、側面丸仕上げ、最終仕上げの磨き?等の工程順となる。破損を含めた穿孔品で外形をみると多角からさらに削り落としたもの、四角も少ない。六~八角が大多数を占める。

140~145は形割で二個分は探れない。粗く仕上げる形割。144はコの字形に切断し折っている。145は側面の一部を押圧で形割する。146~185は四角及び多角形の形割。160・161・180~182、184は厚みもあり四角、多角への削り込みである。186~202は穿孔完了したもの。203~

288までは穿孔途上の破損。244は穿孔時の固定のプレ。289～294は側面仕上げが完了。289・291・293は側面が膨らむもの、稜線として残るものがある。295～334は側面仕上げ時の破損である。半分で割れたものや節理面で剥がれたものなどがある。

北地点

1・7・8号住居および土坑より出土している。点数は2494点で南北総量の4割強が出土している。滑石と片岩系の比率は7割強が滑石となる。遺物には、原石・荒削・剥片・板状品で、形がわかるものは紡錘車・管玉・勾玉・平玉・円および有孔円板・剣形品・白玉等となる。

片岩系の遺物（第114～116図1～78）

搬入原石、荒削等のものは無く、素材片への分割、形削、肩石などが確認できる。

剥片（第114図1～4）

表裏面は節理面を中心とし、側面には粗い敲打痕等が残る。

工具痕を残す切断品（第114図5～15）

5～7は素材片を得るための分割過程と捉えたものである。表裏面は節理面を中心とし、側面には粗い敲打痕等が残る。8～15は板状加工として鑿等の削痕や砥石利用の擦痕が認められ、その素材を刀子等による切断（切断溝や刃先痕）や手による折断した一群である。中には利用のない肩石も含まれる。11などは厚みのある白玉製作の工程品とも考えられる。

縦長板状品（第114図16～18）

石製品の種類は不明であるが、側面での刀子等の切断や敲打が認められ、幅が18～23mm。

不定形加工品（第114図19）

石製品製作過程とみるかは疑問があるが、突起状に削りを行っている。

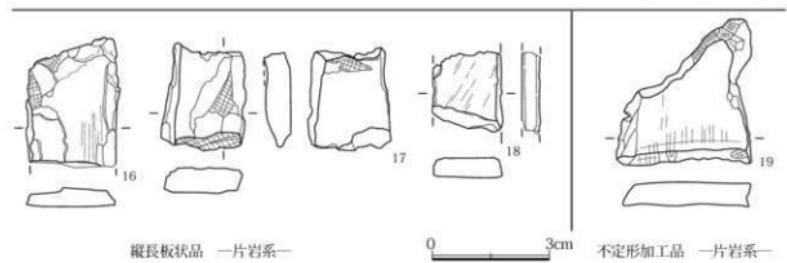
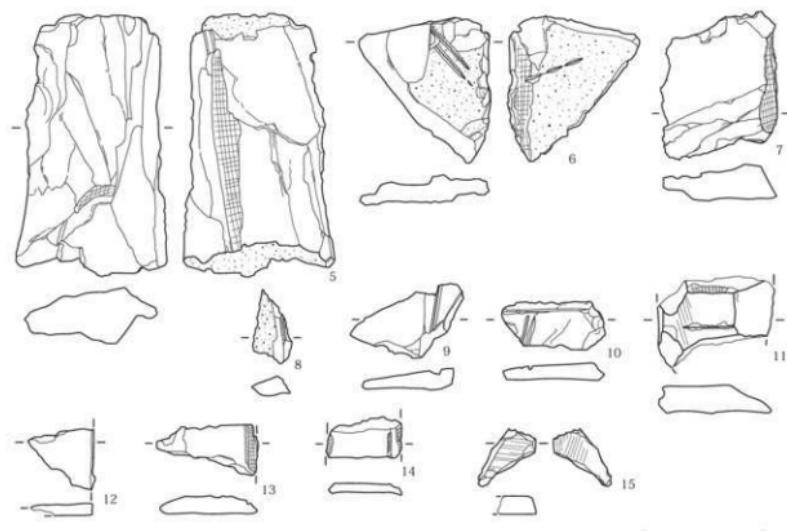
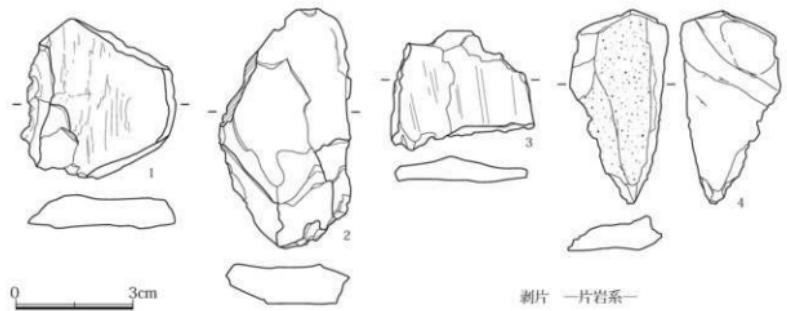
白玉製作工程（第115図20～51）

表裏に鑿等の削痕、砥石による擦りで板状加工されたものを用い、単体、数個分の板状品、同分割品が多数を占める。多角形の形削は2点のみ。

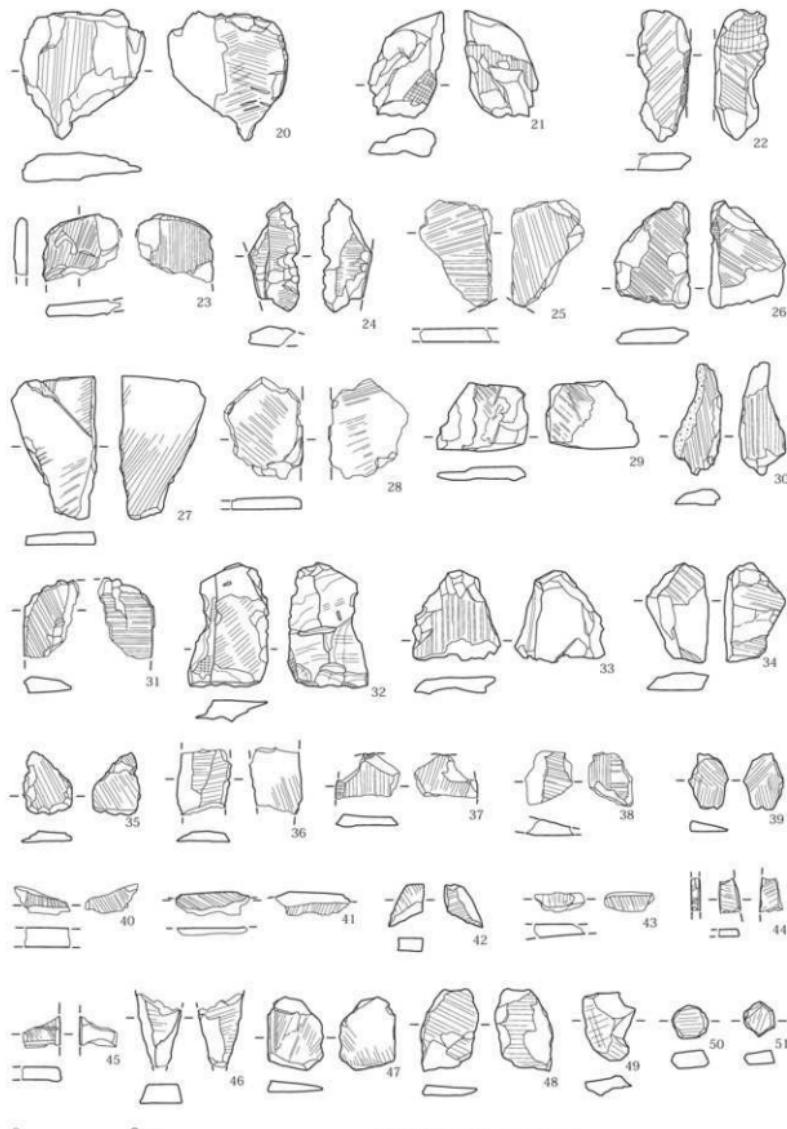
23・37は現状以前に石製品かは分からぬが丸みの形状（擦り）が認められるもの。20は敲打で丸くしたもの。側面の一部に刀子による切断が認められるもの（22～28・32～34・36～38・40～45・47・49）。32は裏面に個割の目印となる当たりが残るもの。縦長の中間にあり分割点は1.5cm間隔となる。22・23は穿孔前の多角形板状品。なお、40～43は肩石で大きさや断面から利用はできない。

管玉製作工程（第116図52～66）

工程順から剥片、多角形柱状品までは管玉に限定できず柳刃状の剣形も考慮が必要か。52は縦長の剥片で上部は打点位置になる。53・54は接合資料の2点で多角形の柱状品から刀子により打撃を加え剥離したものである。53はさらに端部を削り、三面から四面体の方柱状を狙ったものか。55は方柱状品の切（折）断破片。上部三辺に刀子による刻みが残る。56は方柱状製作の破損と見られる。57は六面体の柱状で端部の切り落としたものである。切断箇所には二辺に刀子の刃先痕が残る。58は角柱状から多角形の柱状品としたもので上下に刀子による切断時の刃先痕が残る。管玉の長さは2.04cmで、擦りを加えれば2cmとなる。59・63は多角形柱状で穿孔が加えられたもの。59は穿孔

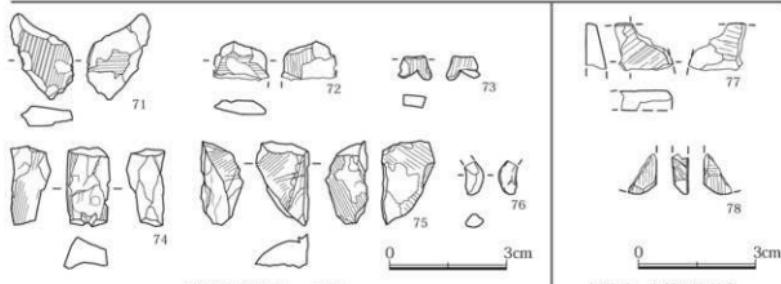
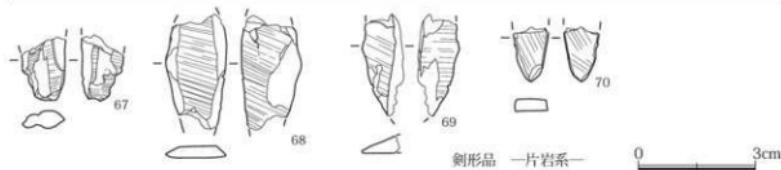
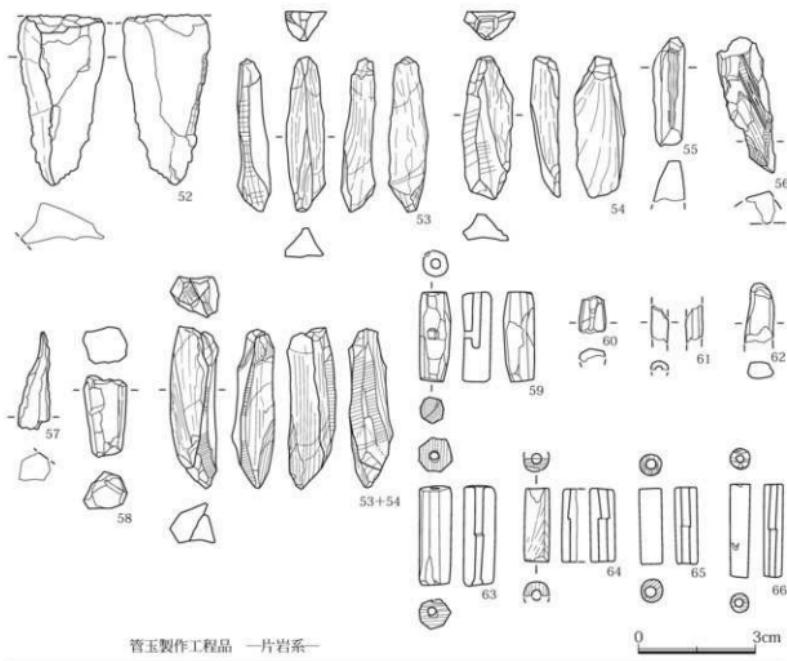


第114図 北地点 剥片・工具痕を残す切断品・縦長板状品・不定形加工品(片岩系)

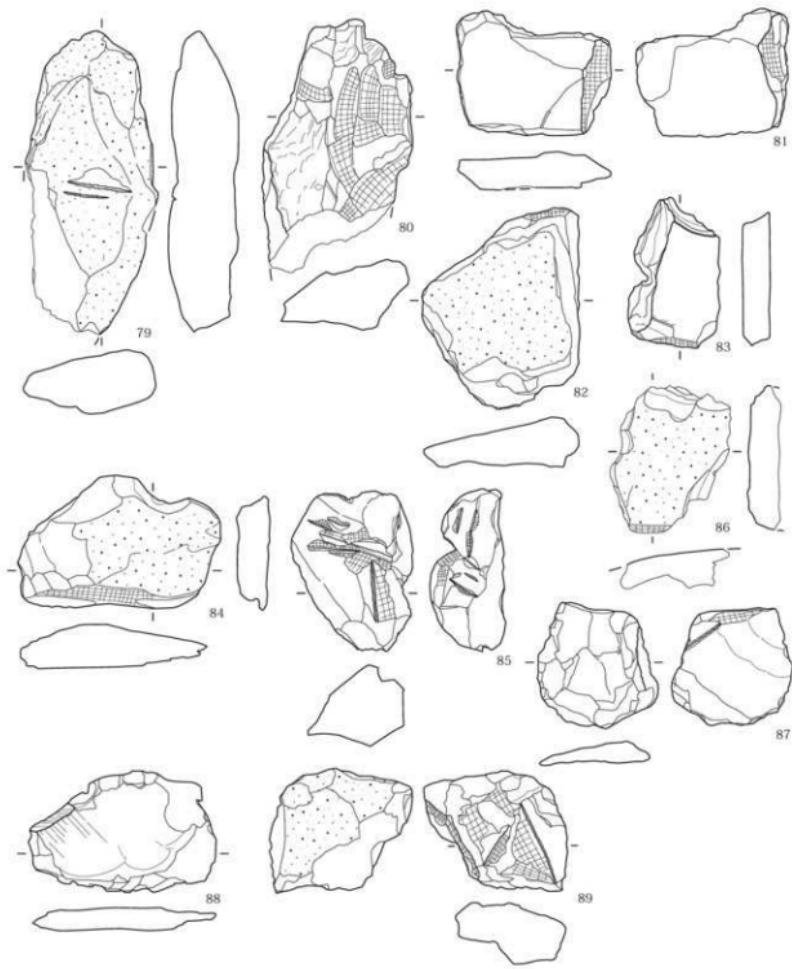


片岩系の白玉製作 一片岩系—

第115図 北地点 白玉製作(片岩系)



第116図 北地点 管玉製作工程・剣形品（片岩系）、板状品・管玉・勾玉（碧玉）、板状品（変質流紋岩）

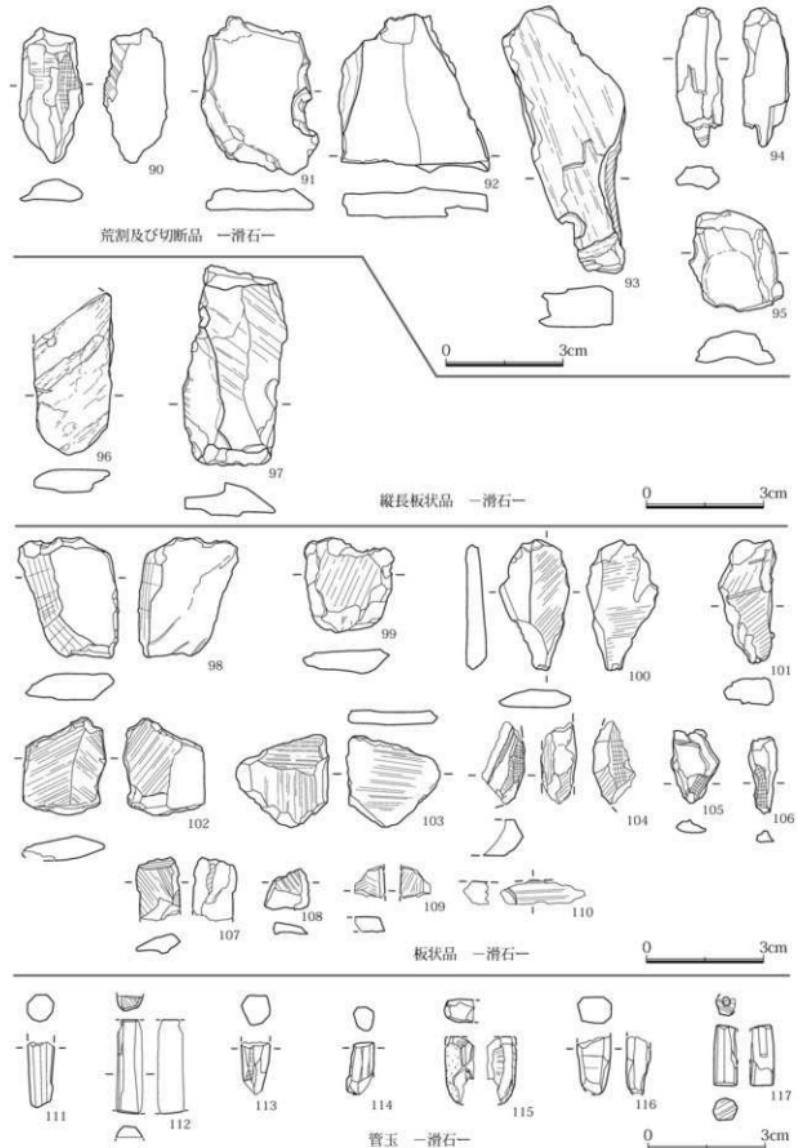


原石・荒割及び切断品 一滑石一

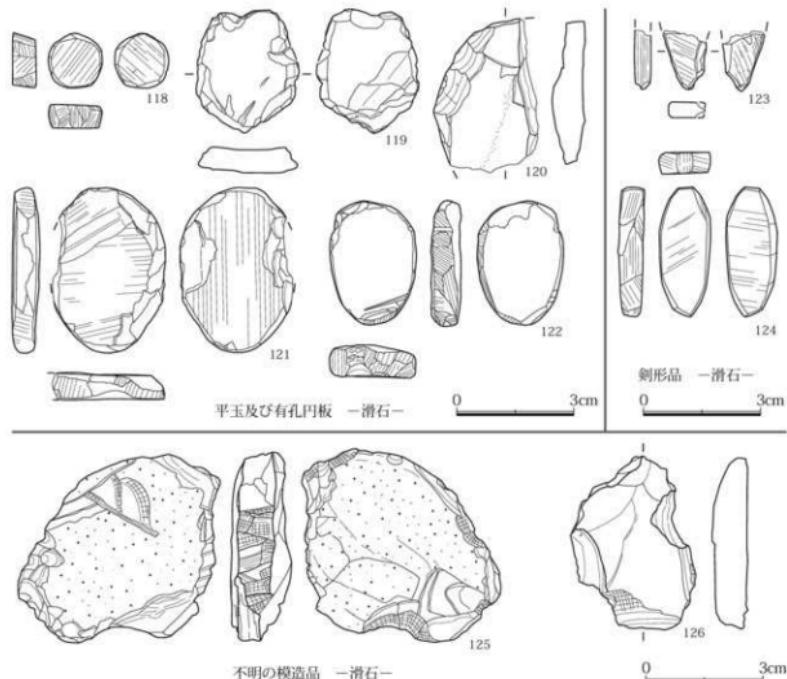
0 3cm

第 117 図 北地点 原石及び荒割・切断品（滑石）

破損したもので、さらに多角形への削りも加えられ破損部も消している。この削りから短い管玉製作に転用か。63は穿孔が完了しているが外面は多角の稜線がまだ残る。60・62は共に多角形の削りの端部。61・64は表面仕上げの磨き時の破損。65・66は表面仕上げが済み擦痕まで消えているが、穿孔面にはまだ細かい擦痕が残る。



第 118 図 北地点 荒削及び切断品・縦長板状品・板状品(滑石)



第 119 図 北地点 平玉及び有孔円板・剣形品・不明の模造品（滑石）

剣形模造品製作工程（第 116 図 67～70）

製作過程を示す明確な資料は少ない。いずれも板状品にしたものから作られる。67～69 刀子で刃部を作ったもの、70 は刃部を作らない。

碧玉製各工程品（第 116 図 71～76）

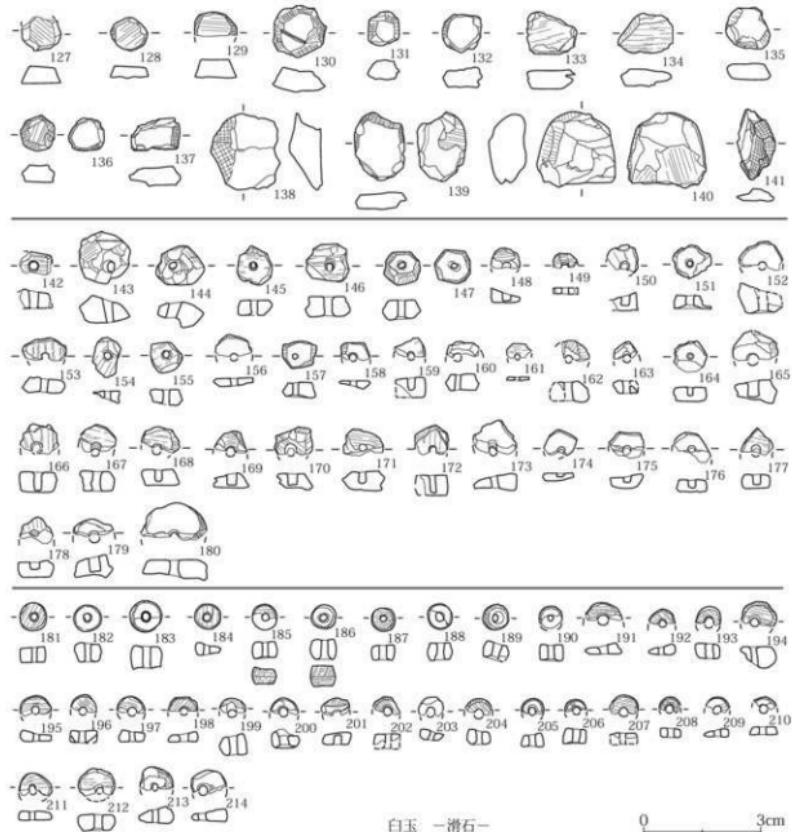
見た目は一般的に言われる碧玉とは異なり、コバルトブルーで僅かに透明感があり石英質に近い質感である。硬さは柔らかめ。成品は管玉、勾玉、白玉？等が推定される。工程では板状品に擦ったもの、管玉の柱状品製作が認められる。71～73 は板状品の破片で表裏ともに擦痕が残る。74～75 は碧玉の方柱状としたものに擦りが加えられたもの。75 は表面に刀子の刃先痕が残る。76 は小型の勾玉と見られ、尾部のもので断面の丸みを付け始める。他に小片 2 点あり。

変質流紋岩製板状工程品（第 116 図 77・78）

色味は白色化したグリーンタフに似たものである。成品は不明だが 2 点とも板状であること、78 は側面に擦りがある。

滑石の遺物（第 117～120 図 79～214）

全体的には原石（元は転石）、荒削及び切断品（石製品の素材剥片）、形割、板状品、管玉、平玉、円板、



第120図 北地点 白玉(滑石)

剣形模造品、不明模造品、白玉等である。

原石 (第117図79)

一部欠損しているが転石で拾われ搬入されたものである。表裏面には金属器の刃先痕が残る。

荒削及び切断品 (第117・118図80~95)

材質から、加工で特に打撃が多いと見られるが、痕跡が不明瞭で道具の特定が難しいことや節理面剥離が頻繁に起こりやすいことから明確に荒削、形削など判断できないものもあり、あえて細分化はしなかった。そのほか素材となるものが多いが屑石も含まれる。

80・85・89は厚みなどからみても不明石製品本体から切断されたものと見られる。盤・刀子での刻みが多い。85は透明感のある材質。

縦長板状品 (第118図96・97)

いずれも薄くしたもので、縦長加工を行ったもの。96は左右を刀子で切断したもの。97は敲打で整えたもの。

板状品（第118図98～110）

表裏面に擦痕が残るものなどをまとめたもの。切断痕などがあり、再加工が始まるものや廃棄されるものなど。

管玉製作工程（第118図111～117）

多角形の柱状品としたもので、四面体の角落としに入ったものとなる。

111・113・115・116は柱状品の端部切断で刀子による刃先痕が確認できる。114は作業中に折れた破損品。112・117は穿孔破損と見られる。

平玉（第119図118）

穿孔前のものと見られ工程を示す破片等は無い。平玉とした理由は石材で最も質の良い部分を使ったことから判断した。

円及び有孔円板製作工程（第119図119～122）

119は円形に加工したもの。120は押圧で半円形を作ったものの破片。121・122は穿孔は無いものの、側面仕上げまで行ったもの。

剣形模造品製作工程（第119図123・124）

板状品から柳刃状に形を成形したものの穿孔は無い。

不明模造品（第119図125・126）

形を成すまでは至っていないもの。2点とも石材は良質。

125は鑿等による削痕などとみられ、側面は刀子による押圧、削りと敲打がある。形状不明。126は側面を強い敲打と押圧を行う。穿孔痕跡か刀子痕跡か区別できない跡が一か所あり。

白玉製作工程（第120図127～214）

127～141は板状を多角形にしたもの。148・149・150は穿孔が完了したもの。145～147・151～180は多角形の穿孔時の破損。181～189は側面仕上げの完了。190～214側面仕上げの破損で半分に折れたものが中心となる。

小まとめ

原石について

原産地での採取方法は、転石採集だけでなく、路頭の岩脈で節理面の亀裂を利用して取り出していくことがわかる。取出しでは、パール状の金属器で、突く、こじ入れるなどして厚い板状を抜き取っていると見られ、さらに扱いやすい大きさの割りが行われている。

石材について

片岩系、滑石、碧玉、変質流紋岩の四種類があり片岩・滑石が大多数を占める。片岩系としたのは黒雲母片岩、緑色片岩等の識別があるが一括して捉えた。四種類の石材は変成岩であり、性質から色々味・柔らかさのパラエティーが多く大枠で捉えることとした。

片岩系は濃緑色、緑、暗緑、暗灰、灰色など多種類。滑石同様に節理の制約を受けるがやや硬めの性質から集めの板・薄めの板として入手できる。

滑石は柔らかいとはいえ、わずかな透明感のある乳白色から褐色、薄紫色、黒色まで幅広くあるこ

と。使い分けとしては、透明感のある乳白色から褐色は節理面の間隔がやや広い傾向にあり、模造品や子持勾玉・有孔円板・平玉等に用いられる。色が付き節理面の間隔が狭まるものは剥離しやすいため、形の粗雑な劍・勾玉・白玉等に使われるが破損の度合いも高くなる。

加工用の金属器について

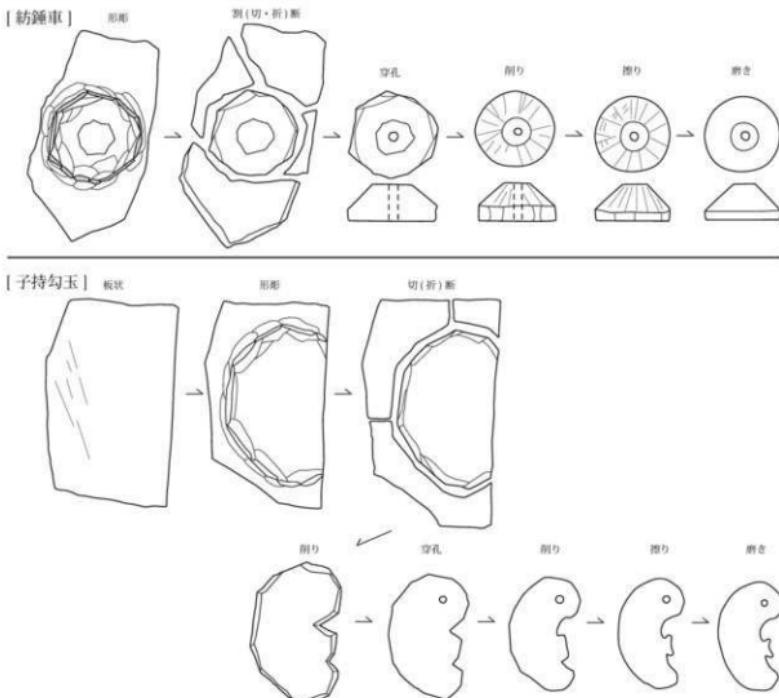
原石が持ち込まれた遺跡での加工は、鑿、刀子による金属器の作業となる。遺物破片から削りや刃先痕を確認できるが、鑿と刀子の区別は難しい。鑿も削るだけでなく、握りを除く柄の部分で敲打(列)も行い、大雑把な形作りにも利用している。刀子は切る・削る・押圧などの作業。刃先は鈍角のものと鋭角が確認される。

形彫り

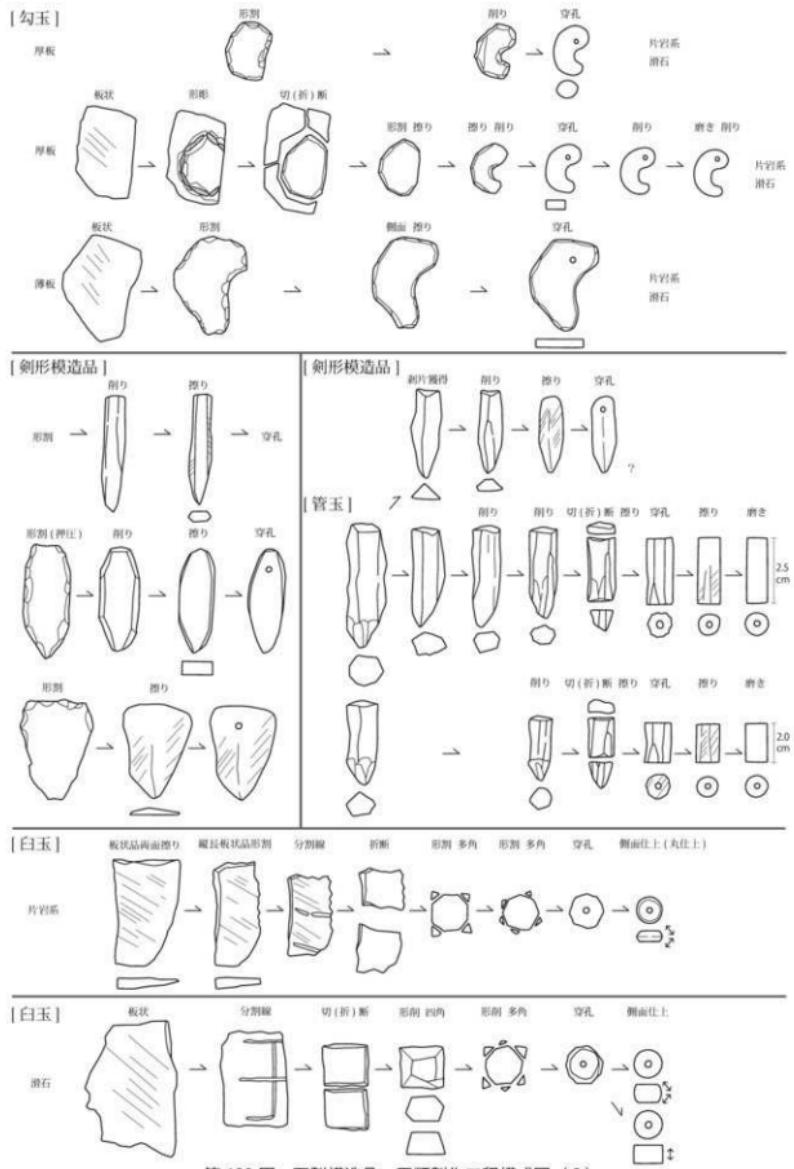
意味としては形割りに近く、紡錘車・子持勾玉など立体的な荒削りと切断溝を持ったものとして区分した。

切断と折断について

どちらも切り離す意味では間違いないが、紡錘車・菅玉・子持勾玉・白玉の場合、切断の溝と手による折断を併用した作業がある。石材の硬さや厚みで異なるが・・・。



第 121 図 石製模造品・玉類製作工程模式図 (1)



第 122 図 石製模造品・玉類製作工程模式図 (2)

第18表 南地点 玉作り遺物観察表

編番	番号	種類	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 mm	孔径 mm	垂重 kg	特徴	出土 位置
104/4	1	原石	黒雲母片岩	暗緑	34.1	23.6	8.7	—	6,050	画面の破損あり。長い平行の刻れがあり、側面の刃状剥離あり。幅6cm×5.5cm、大型の切削。表面は粗面で不規則な斜面を有するのみ(表面は削ぎ落とし)。	南一部欠損
105/5	2	原石	黒雲母片岩	暗緑	12.3	12.1	2.4	—	373.10	側面の削離あり。奥底面に平行の刃状剥離や斜面が複数個あり。上方は切削面。側面は削離面。	南一部欠損
105/6	3	原石	黒雲母片岩	暗緑	11.8	7.4	3.0	—	295.60	未加工の原石。平行の刃状剥離や斜面が複数個あり。側面は削ぎ落とし。	南完
106/6	4	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	11.3	8.5	3.0	—	324.60	直角で丸み、側面は削ぎ落とし。底面は削離。	南一部欠損
106/5	5	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	6.2	8.4	4.3	—	212.80	側面の削離あり。直角で丸みを有する。側面の刃状剥離あり。側面は削ぎ落とし。	南一部欠損
106/6	6	加工された多量品 割石加工	黒雲母片岩	暗緑	7.1	4.7	4.6	—	87.30	画面の破損あり。側面は削離面。側面は削離面。側面は削ぎ落とし。	南
106/7	7	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	7.3	3.1	2.6	—	426.00	側面の削離あり。直角の刃状剥離や斜面が複数個あり。側面は削ぎ落とし。側面は削離面。	南一部欠損
106/8	8	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	5.8	4.2	2.4	—	70.70	直角の刃状剥離の側面。側面は削離面。側面は削ぎ落とし。側面は削離面。	南
106/9	10	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	5.4	5.0	1.8	—	44.60	直角の刃状剥離。側面は削ぎ落とし。側面は削離面。	南
106/10	11	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	6.7	3.6	2.3	—	54.40	直角の刃状剥離。側面は削ぎ落とし。直角で丸みを有する。	南
106/12	12	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	6.2	9.6	4.1	—	150.80	直角の刃状剥離で複数。自然面や削離面を残す。側面による斜面や刃状剥離を行なう。	南
106/13	13	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	5.6	7.6	3.7	—	34.60	側面による削離面。直角を有する。	南
106/14	14	断面の原石	黒雲母片岩	暗緑	4.1	8.3	3.4	—	116.20	側面による削離面。直角を有する。側面は削離面。側面は削ぎ落とし。	南
107/16	16	側面 (裏面)	黒雲母片岩	暗緑	6.9	4.3	1.6	—	133.70	側面の削離あり。直角面を残す。側面は削離面。直角を有する。	南一部欠損
107/17	17	側面 (裏面)	黒雲母片岩	暗緑	5.3	4.3	1.6	—	53.70	側面の削離あり。直角面を残す。側面は削離面。	南
107/18	18	側面 (裏面)	黒雲母片岩	暗緑	5.4	5.4	2.5	—	96.20	側面の削離あり。側面に削離面を残す。側面は2.1~2.5cm、側面の2.0cm前後。直角の削離面。直角を有する。	南
107/19	19	側面 (裏面)	黒雲母片岩	暗緑	2.9	1.5	0.35	—	2.80	表面は削離面。側面は直角の削離面。	南
107/20	20	側面 (裏面)	黒雲母片岩	暗緑	2.0	1.4	0.3	—	1.20	未加工の裏面。直角面を有する。直角は上に側面に直角の削離面。側面は削離面。	南
107/21	21	側面 (裏面)	黒雲母片岩	暗緑	3.0	1.8	0.4	1.9	3.20	表面面積・側面面積・側面を割り込み、背面は側面の削離。	南
107/22	22	円錐及び右円錐 (削離)	黒雲母片岩	暗緑	2.9	3.0	0.7	—	8.50	側面による削離面。	南
107/23	23	側面	褐色片岩	褐色	4.6	2.5	0.7	—	9.80	未加工の裏面。表面は削離面。側面は直角の削離面。	南
107/24	24	側面	黒雲母片岩	黒	2.3	0.74	0.4	—	0.60	側面は削離面。	南
107/25	25	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	黒	1.30	1.16	0.46	—	1.10	表面直角面。外側は斜い多角形。側面の左上げは金属性による切削(削離)。	南
107/26	26	F1.5 (右側面削離面)	黒雲母片岩	黒	0.83	0.83	0.24	—	0.30	表面直角面。外側は斜い多角形。側面の右上げは金属性による切削(削離)。	南
107/27	27	F1.5 (多角面削離面)	黒雲母片岩	黒	0.74	0.89	0.30	—	0.30	側面の削離面。直角面直角面。外側は斜い多角形。側面の右上げは金属性による切削(削離)。	南4/5
107/28	28	(学年時の削離面)	黒雲母片岩	黒	0.62	0.83	0.42	2.5	0.30	学年時の削離面。表面直角面。外側は斜い多角形で、金属性による削離(削り跡)。	南1/2面
107/29	29	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	黒	0.54	0.84	0.29	2.1	0.10	学年時の削離面。表面直角面。直角面は削離面。外側は斜い多角形。側面は削離面。金属性による削離(削り跡)。	南1/2面
107/30	30	F1.5 (右側面削離面)	黒雲母片岩	黒	0.49	0.90	0.29	2.6	0.20	学年時の削離面。表面直角面。直角面は削離面。外側は斜い多角形。側面は削離面。金属性による削離(削り跡)。	南1/2面
107/31	31	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	黒	0.45	0.73	0.43	1.7	0.20	学年時の削離面。表面直角面。直角面は削離面。外側は斜い多角形。側面は削離面。金属性による削離(削り跡)。	南1/2面
107/32	32	(学年時の削離面)	黒雲母片岩	暗緑	0.35	0.54	0.35	1.8	0.10	学年時の削離面。表面直角面。外側は斜い多角形。金属性による削離(削り跡)。	南1/2
107/33	33	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	黒	0.69	0.98	0.31	1.6	0.20	学年時の削離面。表面直角面。直角面は削離面。外側は斜い多角形。金属性による削離(削り跡)。	南1/3
107/34	34	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	暗緑	0.51	0.62	0.23	1.8	0.20	未加工の削離面。表面直角面。直角面は削離面。外側は斜い多角形。金属性による削離(削り跡)。	南1/2
107/35	35	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	暗緑	0.56	0.85	0.25	2.0	0.20	表面直角面。直角面は削離面。外側は斜い多角形。側面は削離面。金属性による削離(削り跡)。	南1/2
107/36	36	(学年時の削離面)	黒雲母片岩	黒	0.54	0.76	0.31	1.8	0.20	学年時の削離面。表面直角面。直角面は削離面。外側は斜い多角形。側面は削離面。金属性による削離(削り跡)。	南1/3
107/37	37	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	黒	0.47	0.74	0.34	2.1	0.10	鏡面の削離面。直角面は削離面。直角面は斜めの削離面。外側は斜い多角形。側面は削離面。金属性による削離(削り跡)。	南1/3
107/38	38	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	暗緑	0.54	0.83	0.30	2.4	0.20	表面直角面。直角面は削離面。直角面は斜めの削離面。外側は斜い多角形。側面は削離面。金属性による削離(削り跡)。	南1/2面
107/39	39	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	暗緑	0.64	0.87	0.23	1.8	0.10	表面直角面。直角面は削離面。外側は斜い多角形。側面は削離面。金属性による削離(削り跡)。	南1/3
107/40	40	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	黒	0.85	0.89	0.41	1.9	0.50	直角面及び斜面削離面。直角面は斜い多角形を有し、直角面は金属性により削離(削り跡)。	南完
107/41	41	F1.5 (左側面削離面)	黒雲母片岩	暗緑	0.47	0.46	0.26	1.9	0.08	表面直角面が削り落とされた状態。側面は鋭敏な斜面を有す。	南完
108/42	42	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	3.8	2.0	1.7	—	21.20	直角面。直角面は削離面。直角面は斜めの削離面。	南
108/43	43	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	5.8	3.5	1.7	—	33.00	直角面の削離面を複数個有する。直角面は斜めの削離面。直角面は斜めの削離面。	南
108/44	44	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	6.87	2.22	1.62	—	24.10	直角面。直角面は削離面。	南
108/45	45	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	5.96	2.31	1.43	—	20.60	直角面。直角面は斜めの削離面。	南
108/46	46	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	1.3	2.4	1.2	—	3.50	直角面が斜め削離面に削り落とされたもの。直角面は斜め削離面。	南
108/47	47	(学年時の削離面)	滑石	ホワイト	0.72	0.48	0.30	2.3	0.20	半円柱の直角面。下上面は斜め削離面。	南
108/48	48	(学年時の削離面)	滑石	ホワイト	6.9	4.2	2.4	—	100.30	直角面と直角面の間に斜めに削離面。直角面は斜め削離面。	南
109/49	49	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	1.96	1.28	0.7	1.0	2.70	直角面は斜め削離面。直角面は斜め削離面。	南
109/51	51	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	3.9	2.6	0.75	2.1	8.40	直角面は削離面。	南
109/52	52	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	11.7	9.0	0.7	2.4	1.00	直角面が斜め削離面に削り落とされたもの。直角面は斜め削離面。	南
109/53	53	直角面(左側面)	滑石	ホワイト	2.99	2.63	1.32	—	13.40	直角面が斜め削離面に削り落とされたもの。直角面は斜め削離面。	南

編番	番号	岩種	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 mm	孔径 mm	单重 kg	特徴	出土 位置	現行状態
109番	53	円板 (瓦面)	滑石	頬灰	2.52	2.64	0.45	—	2.70	表面に擦痕あり、円板は柱間にによる成形、裏面で削りがされたか。	南	—
109番	54	滑石 (穿孔板)	滑石	灰灰	3.36	3.02	0.65	4.2	3.8 × 10.80	穿孔孔の欠陥、板状品。表面は柱間に成形、側面削痕及び削り。孔は不整圓孔。	南	—
109番	55	滑石 (穿孔板)	滑石	頬灰	3.9	2.4	0.8	2.0	6.70	表面磨拭あり、側面の一端に月子による削りあり、端部加工あり。片面穿孔。	南	—
109番	56	滑石 (穿孔板)	滑石	頬灰	2.8	2.0	0.74	1.9	5.50	表面に擦痕、側面は月子による削り成形と擦痕あり。	南	—
109番	57	參孔石板	滑石	頬灰	1.6	2.2	0.47	2.1	2.40	表面只一面あり、側面磨拭。直孔が3個ある。底に3孔あり。孔は四邊せず、文様もありませんか。孔径2.1mmですべて同じ。	南	完
109番	58	神祇品 (瓦面)	滑石	頬灰	3.48	1.15	0.53	—	2.90	神祇状形をなしたものか。表面は柱間に成形。側面の一端に施用時の擦痕と削りがある。	南	完
109番	59	神祇品 (瓦面)	滑石	頬灰	3.44	0.97	0.54	—	2.40	神祇形になったものか。表面は柱間に成形。側面は柱上削りがある。	南	完
109番	60	滑石 (瓦面)	滑石	頬灰	3.12	1.12	0.58	—	4.00	表面に擦痕の跡、側面は月子による削り成形。先端は削りと擦痕あり。	南	—
109番	61	神祇品(瓦面)	滑石	頬灰	3.46	1.16	0.92	—	3.90	ワタリと毛足とヨコ模様の刻りが行われる。	南?	—
109番	62	神祇品 (瓦面)	滑石	頬灰	3.8	0.75	0.54	—	1.00	表面只一面に月子による削り。片端は削りによる。	南	—
109番	63	神祇品 (穿孔板)	緑色片岩	黒	4.3	2.8	0.55	—	8.00	表面磨拭あり。先端は対謫を作り出す削りがある。	南	—
109番	64	滑石	緑縞灰	(1.4)	1.5	0.36	—	1.00	表面に擦痕の跡、側面は柱間に成形。	南	—	
109番	65	神祇品 (瓦面)	滑石	頬灰	1.31	1.20	0.45	—	0.80	側面から削り出されたものが丸み成形。表面只一面に擦痕あり。側面は削り・削痕。	南	—
109番	66	神祇品	滑石	頬灰	1.0	1.1	0.3	—	0.50	表面只一面に擦痕あり。先端は削りと擦痕。	南	—
109番	67	神祇品 (端)	滑石	頬灰	1.13	0.66	0.38	—	0.60	側面は削り・削痕。側面は削り。	南	—
109番	68	神祇品	滑石	頬灰	2.26	0.98	0.39	—	0.90	表面只一面による削りあり。神祇の先端か。削出は難む。	南	—
109番	69	神祇品 (穿孔板)	滑石	頬灰	0.80	1.56	0.32	2.6	0.90	側面から削り出されたものか。表面は擦痕。側面は削痕か。側面は削りでくぼむ。	南	1/37
109番	70	神祇品 (穿孔板)	滑石	頬灰	0.11	1.71	0.4	1.6	1.00	調査所の穴跡あり。板状から削られたもの。表面只一面に擦痕。	南	1/37
109番	71	(109番)状	滑石	緑縞灰	2.2	1.1	0.4	—	1.60	側面は削り・削痕。側面は削り。	南	—
109番	72	神祇品?	滑石	頬灰	2.5	0.7	0.28	—	0.90	表面只一面に擦痕。側面は削り。側面の内端とみると知痕の跡もあるが、既にそれを考慮する。	南	—
109番	73	明治時代 (穿孔板)	滑石	頬灰	1.72	0.67	0.34	—	0.60	調査所の跡あり。	南	—
110番	74	形狀不明の神祇品 (有孔)(端)	滑石	緑縞灰	2.1	0.9	0.32	2.5	1.00	元は有孔円錐か、穿孔跡の跡の形。側面後縫長としたもの。下の側面は削り孔。	南	—
110番	75	形狀不明の神祇品 (有孔)(端)	滑石	頬灰	1.2	0.6	0.48	—	0.50	表面只一面に月子による削り。五面体の柱状品削痕。右側面のみ切りか。	南	—
110番	76	形狀不明の神祇品 (有孔)?	滑石	頬灰	1.52	1.75	0.34	—	0.90	表面只一面に擦痕。側面は削れ。	南	—
110番	77	形狀不明の神祇品 (有孔)?	滑石	頬灰	1.50	0.78	0.47	2.7 ~ 2.8	0.70	調査所の跡あり。表面は削りのままの板状品。穿孔は3ヶ所。内2ヶ所は直孔。直孔は斜め上に向く。	南	—
110番	78	形狀不明の神祇品 (有孔)?	滑石	頬灰	1.50	1.19	0.53	—	1.10	表面只一面に擦痕。側面全周によく削面と押し削り。側面は削りがあり。多孔の穴跡がある。	南	—
110番	79	形狀不明の神祇品 (有孔)?	滑石	頬灰	2.25	1.27	0.63	—	2.10	調査所の跡あり。表面只一面に擦痕を残す。底部は表面削りで局部の作りとなる。	南	—
110番	80	形狀不明の神祇品 (板状)	滑石	頬灰	1.64	0.85	0.38	—	0.80	表面只一面に擦痕。側面は削り。	南	—
110番	81	形狀不明の神祇品 (板状)?	滑石	頬灰	1.67	1.66	0.43	—	1.70	調査所の跡あり。表面只一面に擦痕。側面は削り・削痕。先端とも材られる。左の側面は全周の穴面由来。	南	—
110番	82	形狀不明の神祇品 (板状)?	滑石	緑縞灰	1.41	1.12	0.43	—	1.00	表面只一面に擦痕。側面は削り。刀子による削りと押し削りあり。	南	—
110番	83	形狀不明の神祇品 (板状)?	滑石	頬灰	1.12	1.30	0.56	2.3	1.20	調査所の跡あり。表面只一面に擦痕。側面は削り。左の側面は穿孔の跡由来。	南	—
110番	84	形狀不明の神祇品 (内凹・削り・凹凸)	滑石	頬灰	1.43	1.28	0.62	—	1.20	調査所の跡あり。表面只一面に擦痕。側面は刀子による切削痕あり。右は有孔内凹相当とされる削痕の小孔が2ヶ所に加工された物か。	南	—
110番	85	形狀不明の神祇品 (内凹・削り)	滑石	頬灰	1.60	0.95	0.55	—	1.10	調査所の跡あり。表面只一面に擦痕。	南	—
110番	86	板状品(端)	滑石	緑縞灰	3.0	21	0.6	—	3.20	表面に擦痕。側面は月子による削り痕から、側面は刀子による削りか。右は穿孔。	南	—
110番	87	板状品(端)	滑石	頬灰	2.8	1.7	0.44	—	3.00	表面只一面に擦痕。	南	—
110番	88	板状品(端)	滑石	頬灰	1.2	1.6	0.36	—	0.90	表面只一面に擦痕。右側面は月子による切削。	南	—
110番	89	板状品(端)	滑石	頬灰	2.25	0.95	0.34	—	0.90	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り。	南	—
110番	90	板状品(端)	滑石	頬灰	2.0	0.7	0.57	—	0.80	右側面の跡あり。右側面は刀子による削り。	南	—
110番	91	(空き瓶?)穿孔?	滑石	頬灰	0.77	1.19	0.4	—	0.80	表面に擦痕あり。元は瓶か? 空か?	南	—
110番	92	板状品(端)	滑石	緑縞灰	1.54	0.82	0.35	—	0.60	表面只一面に擦痕。側面は削り。側面は穿孔。	南	—
110番	93	板状品(端)	滑石	頬灰	1.0	21	0.32	—	0.70	右に削りの跡あり。若者は表面が削れ。板状の縫合。	南	—
110番	94	板状品	滑石	頬灰	1.68	1.61	0.47	—	1.50	表面只一面に擦痕。側面は削り。板状の縫合で白玉等の再利用か。	南	完
110番	95	板状品(端)	滑石	緑縞灰	1.23	0.89	0.24	—	0.40	表面只一面に擦痕。側面は削り。	南	—
110番	96	板状品(端)	滑石	頬灰	2.41	1.47	0.67	—	3.50	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り。	南	—
110番	97	板状品(端)	滑石	緑縞灰	0.80	2.46	0.38	—	1.10	表面只一面に擦痕。下面に金属板より削り跡(削り跡)と縫合あり。	南	—
110番	98	板状品の端	滑石	頬灰	1.76	1.85	0.61	—	3.10	調査所の跡あり。表面只一面に擦痕。左側面は刀子による削り跡。	南	—
110番	99	板状品の端	滑石	緑縞灰	1.38	(2.63)	0.45	—	2.40	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り跡。	南	—
110番	100	板状品の端	滑石	頬灰	1.87	1.39	0.57	—	2.30	調査所の跡あり。表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り。	南	—
110番	101	板状品の端	滑石	頬灰	1.85	1.25	0.39	—	1.30	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り。	南	—
110番	102	板状品の端	滑石	緑縞灰	2.58	0.81	0.33	—	0.90	表面只一面に擦痕。	南	—
110番	103	板状品の端	滑石	頬灰	1.74	0.82	0.32	—	0.70	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り跡?	南	—
110番	104	板状品の端	滑石	頬灰	1.56	0.95	0.33	—	0.80	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り跡。	南	—
110番	105	板状品の端	滑石	頬灰	1.07	1.55	0.53	—	1.00	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り跡。	南	—
110番	106	板状品の端	滑石	頬灰	1.27	0.88	0.29	—	0.40	表面只一面に擦痕。	南	—
110番	107	板状品の端	滑石	頬灰	1.18	0.69	0.24	—	0.30	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り跡。	南	—
110番	108	(空き瓶?)	滑石	頬灰	1.46	1.14	0.47	—	1.00	表面只一面に擦痕。右側面は刀子による削り跡?。	南	—

編番	番号	器種	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 mm	孔径 mm	重量 g	特徴	出土位置	現状状態
111.106	169	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.20	0.032	0.44	—	0.80	調査時の破片あり。表面は粗い多角形、側面は刀子による切削(押割)。	南	5号
111.107	170	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.88	0.92	0.24	—	0.30	表面は粗面。外周は粗い多角形、側面仕上げは全周面による切削(押割)。	南	穴
111.108	171	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.48	1.04	0.25	—	0.20	表面は粗面。表面の縁端部。外周は粗い多角形、側面は刀子による切削(押割・削り)。	南	1/2番
111.109	172	臼石 (形割四角)	滑石	暗灰	0.79	0.66	0.32	—	0.20	表面は粗面。外周は四角。側面は刀子による切削(押割)。	南	穴
111.110	173	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.90	0.86	0.40	—	0.40	表面は粗面。外周は多角形、側面は全周面による切削(押割)。	南	ほぼ完
111.111	174	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.88	0.83	0.32	—	0.40	表面は粗面。外周は多角形、側面仕上げは刀子による切削(押割)。表面に切削痕あり。	南	穴
111.112	175	臼石 (形割多角)	滑石	黒	0.76	0.76	0.34	—	0.30	調査時一度欠損。表面は粗面。外周は多角形、側面仕上げは全周面による切削(押割)。	南	ほぼ完
111.113	176	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.76	0.78	0.33	—	0.30	表面は粗面。外周は多角形、側面は刀子による切削(押割)。	南	穴
111.114	177	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.63	0.77	0.31	—	0.20	調査時一度欠損。表面は粗面。外周は多角形、側面は刀子による切削(押割)。	南	1/2番
111.115	178	臼石 (形割多角)	滑石	白	0.56	0.56	0.36	—	0.10	表面は粗面。外周は多角形、側面は刀子による切削(押割)。表面に切削痕あり。	南	—
111.116	179	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.94	0.93	0.44	—	0.70	調査時の破片。表面は粗面。外周は多角形、側面は刀子による切削(押割)。	南	穴
111.117	180	臼石 (形割四角)	滑石	暗灰	1.68	1.62	0.51	—	1.90	表面は粗面。外周は四角。側面は刀子による切削(押割)。	南	穴
111.118	181	臼石 (形割四角?)	滑石	暗灰	1.62	1.26	0.68	—	1.20	表面刀子による切削あり(四角形に切り渡る)。	南	—
111.119	182	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.38	1.66	0.80	—	2.00	手での板状化を利用して外周は多角形状。刀子による削り。	南	穴
111.120	183	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.01	0.69	0.36	—	0.40	表面は粗面。外周は四角で、刀子による削り。	南	—
111.121	184	臼石 (形割多角)	滑石	灰	0.86	0.71	0.54	—	0.40	調査時の破片。表面は粗面。外周は多角形。側面は刀子による切削(削り)。	南	—
111.122	185	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.85	0.74	0.50	—	0.30	調査時の破片。表面は粗面。外周は多角形。側面は刀子による切削(削り)。	南	穴
111.123	186	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.7	0.8	0.37	1.8	0.10	穿孔跡。表面は粗面。外周は多角形。側面は刀子による削り。	南	—
111.124	187	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.39	1.23	0.35	2.6	1.90	穿孔跡。表面は粗面。外周は多角形。側面は刀子による削り(削り・削り)。	南	4/5
111.125	188	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.08	1.05	0.42	2.3	0.80	表面は粗面。外周は多角形。側面は刀子による切削(削れ・削り)。	南	穴
111.126	189	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.07	1.20	0.62	2.3	1.20	調査時の破片。表面は粗面。外周は多角形。側面は刀子による削りで両端に加工。断面は直角形。	南	ほぼ完
111.127	190	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.20	1.14	0.30	2.3	0.60	穿孔中の破片(表面層の削り)。外周は多角形。刀子による切削(削り)。	南	3/4
111.128	191	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.97	1.00	0.26	1.5	0.40	表面は粗面。外周は多角形。刀子による削り。	南	穴
111.129	192	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.03	1.15	0.49	2.0	0.70	調査時の欠損あり。表面は粗面。外周は多角形。刀子による切削(削・削り)。	南	4/5
111.130	193	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.96	0.92	0.46	2.0	0.60	表面は粗面。外周は多面形。刀子による切削(削・削り)。	南	穴
111.131	194	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.12	0.81	0.28	1.5	0.60	表面は粗面。外周は多面形。刀子による切削(削・削り)。	南	穴
111.132	195	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.88	0.78	0.30	1.5	0.30	表面は粗面。外周は多角形。刀子による削り(削り・削り)。	南	穴
111.133	196	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.81	0.77	0.22	1.9	0.20	表面は粗面。外周は多角形。刀子による切削(削・削り)。	南	穴
111.134	197	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.90	0.93	0.25	1.9	0.30	表面は粗面。外周は多角形。刀子による切削(削・削り)。	南	穴
111.135	198	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.90	0.76	0.27	1.5	0.20	表面は粗面。外周は多角形。刀子による切削(削・削り)。	南	穴
111.136	199	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.82	0.84	0.32	1.4	0.30	表面は粗面。外周は多角形。刀子による削り(削・削り)。	南	穴
111.137	200	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.73	0.85	0.26	1.7	0.20	一握り。表面は粗面。外周は多角形。刀子による切削(削・削り)。	南	ほぼ完
111.138	201	臼石 (形割多角)	滑石	黒	0.63	0.88	0.34	1.8	0.20	一握り。表面は粗面。外周は多角形。刀子による切削(削・削り)。	南	穴
111.139	202	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.58	0.77	0.18	1.4	0.08	表面は粗面。外周は多角形。刀子による切削(削・削り)。刀子による削り。	南	穴
111.140	203	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.09	1.05	0.38	2.3	0.50	表面は粗面。外周は多角形。刀子による削り(削・削り)。	南	穴
111.141	204	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.02	0.89	0.34	1.7	0.30	穿孔中の破片。調査時の破片。黄斑真に埋め。外周は多角形。刀子による削り(削・削り)。	南	1/2番
111.142	205	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.84	1.03	0.34	1.7	0.30	穿孔中の破片。表面真に埋め。外周は粗い多角形で刀子による切削(削・削り)。	南	穴
111.143	206	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.84	0.83	0.35	1.6	0.40	調査時の欠損あり。表面真に埋め。外周は粗い多角形で、刀子による削り(削・削り)。	南	5号
111.144	207	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.61	0.8	0.37	1.8	0.20	調査時の欠損あり。表面真に埋め。外周は多角形で刀子による削り(削・削り)。	南	ほぼ完
111.145	208	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.7	1.1	0.4	2.7	0.30	穿孔中の破片。黄斑真に埋め。刀子による削り(削・削り)。	南	穴
111.146	209	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.77	1.18	0.54	2.6	0.60	穿孔時の破片。表面真に埋め。表面は粗面。	南	1/2.7
111.147	210	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.72	1.02	0.62	2.4	0.60	穿孔破片。表面真に埋め。表面は粗い多角形で刀子による切削(削・削り)。	南	1/2番
111.148	211	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.79	1.07	0.36	1.8	0.30	調査時の削りあり。穿孔真に埋め。刀子による削り(削・削り)。	南	1/2
111.149	212	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.70	0.90	0.39	1.7	0.30	穿孔中の破片。黄斑真に埋め。刀子による削り(削・削り)。	南	1/2
111.150	213	臼石 (形割多角)	滑石	黒	0.7	0.74	0.56	2.1	0.40	穿孔中の破片。穿孔真に埋め。表面は粗面。	南	1/4
111.151	214	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	1.03	0.499	0.17	—	0.10	穿孔完了時の剥片。表面は粗面。	南	1/5以下
111.152	215	臼石 (形割多角)	滑石	暗灰	0.82	1.17	0.48	2.5	0.40	調査時の削りあり。穿孔真に埋め。表面真に埋め。表面は粗面で、一握り。表面は粗面。	南	1/2番

編図	番号	器種	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 mm	孔径 mm	重量 g	特徴	出土位置	現状
112106	216	(原)欠損(角)	滑石	暗緑色	0.36	0.79	0.41	1.8	0.10	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形。刀子による切断(斜削)。	南	1/3
112107	217	玉玉	滑石	暗緑	(0.85)	1.05	0.48	1.8	0.40	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形。刀子による切断(斜削)。	南	1/2
112108	218	玉玉	滑石	暗緑	(0.61)	1.05	0.54	2.4	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形。刀子による切断(斜削)。	南	1/2
112109	219	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.57	0.65	0.69	2.2	0.90	穿孔時の破損。表面割れ。一部芯出しあり。	南	1/2 番
112109	220	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.53	1.09	0.48	2.5	0.40	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形。刀子による切断(斜削)。	南	1/2
112109	221	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.50	0.93	0.43	1.8	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形。刀子による切断(斜削)。	南	1/2
112109	222	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	(0.55)	0.98	0.41	1.8	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形。刀子による切断(斜削)。	南	1/3
112109	223	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.48	(0.62)	0.40	(1.5)	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形による芯出し。表面凹り。	南	1/2
112109	224	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.32	0.76	0.43	1.8	0.10	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形による芯出し。表面凹り。	南	1/3
112109	225	(原)欠損(角)	滑石	暗緑色	0.32	0.92	0.53	1.9	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形による芯出し。表面凹り。	南	1/2
112109	226	玉玉	滑石	暗緑	0.63	0.84	0.30	1.6~1.7	0.20	穿孔時の破損。表面凹り。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り。	南	2/3
112109	227	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	1.02	1.00	0.45	2.0~2.0	0.60	一深穴。穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り。	南	4/5
112109	228	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	1.03	0.66	0.40	1.7	0.40	大切。表面に擦痕。多角形で全周部による衝撃。	南	1/4
112109	229	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.60	0.93	0.24	2.3	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り・押し凹り。	南	1/3
112109	230	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.83	0.59	0.40	2.8	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り。	南	1/2
112109	231	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.55	0.99	0.51	1.8	0.50	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り。	南	1/2 番
112109	232	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.50	0.94	0.31	2.5	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り。	南	1/2
112109	233	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.49	1.01	0.39	1.3	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り・押し凹り。	南	1/3
112109	234	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.39	0.91	0.38	2.1~2.3	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り・押し凹り。	南	1/2
112109	235	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.46	0.82	0.38	1.4	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り・押し凹り。	南	1/2 番
112109	236	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.58	0.86	0.29	2.1	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り。	南	1/2
112109	237	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.65	0.78	0.31	1.8	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り・押し凹り。	南	1/2
112109	238	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.44	0.69	0.33	1.7	0.10	穿孔時の破損(芯の凹み)。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り・押し凹り。	南	1/2 番
112109	239	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.56	0.87	0.45	1.9	0.20	穿孔時の破損(芯の凹み)。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り・押し凹り。	南	1/2 番
112109	240	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.60	0.85	0.41	1.6	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による押し割り・押し凹り。	南	1/3
112109	241	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.35	0.76	0.33	1.8	0.10	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部で押し削り。	南	1/3
112109	242	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.26	0.89	0.36	—	0.30	擦痕修理。表面擦痕。多角形で全周部による削り・凹凸不平。画面は全体的によく削りこまれて凹凸が目立つ。	南	1/3?
112109	243	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.75	0.83	0.37	2.3	0.50	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による削りと押し割り。	南	1/2 番
112109	244	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.9	1.06	0.44	—	0.50	表面擦痕による削り。削られた跡は細い多角形で金属面によく引き込まれる。	南	2/3
112109	245	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.75	0.82	0.19	1.5	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。多角形で全周部による削り。	南	1/2 番
112109	246	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.61	1.01	0.25	1.9	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形で削りこまれて凹凸面。	南	1/2 番
112109	247	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.61	0.84	0.32	1.7	0.10	穿孔時の破損。表面擦痕。削られた跡は細い多角形で金属面によく引き込まれる。	南	1/2 番
112109	248	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.62	0.94	0.34	1.8	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形で金属面による削りと削り凹み。	南	1/2
112109	249	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.52	0.80	0.28	1.5	0.10	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形で金属面による削り。	南	1/3
112109	250	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	(0.63)	0.83	0.21	1.9	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。外凹多角形で金属面による削り。	南	1/4
112109	251	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.48	0.71	0.17	1.6	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕。表面擦痕修理。外凹多角形による削りと削り凹み。	南	1/4
112109	252	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.57	0.71	0.21	1.7	0.10	穿孔時の破損。表面擦痕。表面擦痕修理。外凹多角形による削り。	南	1/4
112109	253	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.52	0.82	0.14	1.8	0.08	表面擦痕修理。外凹多角形による削り。	南	1/5
112109	254	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.54	0.90	0.22	1.8	0.10	擦痕の削り。表面擦痕。外凹多角形。外凹多角形で金属面による削り・削り凹み。	南	1/2 番
112109	255	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.61	0.86	0.36	1.8	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕修理。外凹多角形で金属面による削り・削り凹み。	南	1/2
112109	256	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.66	0.62	0.20	1.4	0.10	鋸歯状の削り。穿孔時の欠損。表面擦痕修理。外凹多角形で金属面による削り・削り凹み。	南	1/2 番
112109	257	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.65	0.89	0.16	1.5	0.05	擦痕の削り。表面擦痕修理。外凹多角形で金属面による削り・削り凹み。	南	1/5 以下
112109	258	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.56	0.84	0.30	1.8	0.10	穿孔時の破損。表面擦痕修理。外凹多角形。外凹多角形で金属面による削り。	南	1/2 番
112109	259	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.68	0.80	0.26	1.8	0.20	穿孔時の破損。表面擦痕修理。外凹多角形。外凹多角形で金属面による削り。	南	1/2 番
112109	260	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.47	0.92	0.34	2.2	0.10	穿孔時の破損。表面擦痕修理。外凹多角形で金属面による削り。	南	1/2 番
112109	261	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.65	1.06	0.33	2.3	0.30	穿孔時の破損。表面擦痕修理。外凹多角形で擦痕あり。模造芯の破損か。	南	1/3
112109	262	(原)欠損(角)	滑石	暗緑	0.53	0.88	0.38	2.0	0.20	穿孔内の破損。表面擦痕修理。外凹多角形で金属面による削り。	南	1/2 番

編図	番号	岩種	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 mm	孔径 mm	重量 g	特徴	出土位置
11210	263	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.42	0.72	0.29	1.7	0.08	穿孔時の破損か。表面剥離面粗。背面無孔。外形は多角形か。全斷面による押し割り。	南 1/3番
11210	264	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.47	0.69	0.18	1.8	0.06	穿孔時の傷あり。表面剥離面。表面剥離面粗。	南 1/5
11210	265	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.37	0.81	0.20	1.6	0.10	穿孔時の傷あり。表面剥離面。表面剥離面粗。	南 1/5
11210	266	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.48	0.88	0.36	1.5	0.20	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面無孔。外形細い多角形。全断面による押し割り。	南 1/3
11210	267	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.32	0.55	0.16	1.6	0.03	穿孔時の傷あり。表面剥離面。表面剥離面粗。	南 1/6以下
11210	268	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.48	0.57	0.41	2.2	0.20	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面多角形か。全断面による押し割り。	南 1/5
11210	269	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.42	0.69	0.29	1.6	0.10	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面多角形か。全断面による押し割り。	南 1/3
11210	270	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.47	0.68	0.37	2.3	0.10	穿孔時の傷あり。穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形細い多角形。全断面による押し割り。	南 1/3
11210	271	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.31	0.50	0.03	2.0	0.01	傷(?)の有り。表面剥離面粗。外形不規則。	南 1/10
11210	272	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.65	0.88	0.27	1.7	0.10	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面多角形か。多角形による押し割り。	南 1/2番
11210	273	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.73	0.95	0.28	1.7	0.30	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面は多角形か。前面は多角形か。全断面による押し割り。	南 1/2番
11210	274	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.45	0.97	0.30	1.7	0.10	穿孔時の傷あり。穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形細い多角形で全断面による押し割り。	南 1/3
11210	275	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.57	0.82	0.25	1.5	0.10	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形は細い多角形か。外形は全断面によると押し割り。	南 1/2番
11210	276	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.49	0.87	0.30	2.1	0.20	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形は細い多角形。側面は全断面による押し割り。	南 1/3
11210	277	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.49	0.95	0.38	1.4	0.30	穿孔時の傷あり。穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形細い多角形か。側面は全断面による押し割り。	南 1/2
11210	278	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.50	0.83	0.26	2.0	0.10	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面多角形。側面は全断面による押し割り。	南 1/2番
11210	279	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.78	0.86	0.33	1.8	0.20	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形不規則。側面は全断面による押し割り。	南 1/2番
11210	280	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.59	0.74	0.33	2.1	0.20	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面は細い多角形か。側面は全断面による押し割り。	南 1/2番
11210	281	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.54	0.84	0.44	1.6	0.10	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。側面は多角形か。全断面による押し割り。	南 1/5
11210	282	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.50	0.66	0.24	1.8	0.10	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形は細い多角形で全断面による押し割り。	南 1/2番
11210	283	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.35	0.95	0.38	1.9~1.6	0.20	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形は細い多角形か。側面は全断面によると押し割り。	南 1/5
11210	284	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.43	0.68	0.35	1.8	0.20	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面は細い多角形か。側面は全断面による押し割り。	南 1/3番
11210	285	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.41	0.71	0.30	1.6	0.10	穿孔時の傷あり。穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形は細い多角形か。	南 1/5
11210	286	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.51	0.84	0.23	2.1	0.20	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面は細い多角形か。側面は全断面による押し割り。	南 1/5
11210	287	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.59	0.90	0.36	1.6	0.30	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。外形細い多角形か。側面は全断面による押し割り。	南 1/2
11210	288	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.64	0.96	0.41	2.4	0.40	穿孔時の傷あり。表面剥離面粗。背面は細い多角形で全断面による押し割り。	南 1/2番
11210	289	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.66	0.64	0.34	2.7	0.20	側面穿孔様跡の有り。	南 完
11210	290	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.78	0.81	0.53	2.5	0.50	表面剥離面粗した所。側面剥離面。	南 完
11210	291	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.57	0.60	0.37	2.0	0.20	表面剥離面粗した所。側面剥離面。	南 完
11210	292	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.55	0.53	0.26	1.7	0.10	表面剥離面粗。側面剥離面。	南 完
11210	293	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.59	0.60	0.34	2.8	0.20	表面剥離面粗。側面剥離面。	南 完
11210	294	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.95	0.92	0.45	2.8	0.60	側面穿孔様跡の有り。	南 完
11210	295	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.87	1.24	0.35	2.8	0.50	表面剥離面粗。側面剥離面。	南 1/2?
11210	296	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.75	1.34	0.57	2.9	0.60	側面穿孔様跡の有り。	南 4/5
11210	297	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.46	0.86	0.29	1.8	0.10	表面剥離面粗。側面剥離面。	南 2/3
11210	298	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.62	0.96	0.30	1.6	0.30	側面穿孔様跡。自らより半彎したものの両面に穿孔あり。極小の穿孔か。表面穿孔。	南 1/2
11210	299	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.66	0.88	0.28	1.9	0.20	側面穿孔様跡。表面剥離面。	南 1/2番
11210	300	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.54	0.72	0.24	1.6	0.20	側面穿孔様跡。表面剥離面粗。側面剥離面。	南 2/3
11210	301	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.61	0.88	0.46	1.9	0.30	側面穿孔様跡。表面剥離面粗。側面剥離面。	南 1/2
11210	302	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.47	0.78	0.44	2.3	0.20	側面穿孔様跡。表面剥離面粗。	南 1/2番
11210	303	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.48	0.88	0.43	1.6	0.20	側面穿孔様跡。表面剥離面粗。側面全断面による押し割り及び側面。	南 1/2番
11210	304	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.45	0.53	0.22	2.0	0.09	側面穿孔様跡。表面剥離面。	南 1/3
11210	305	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.48	0.70	0.27	2.5	0.20	側面穿孔様跡。表面剥離面。	南 1/2
11210	306	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.52	0.75	0.27	1.8	0.10	側面穿孔様跡。表面剥離面。	南 1/2番
11210	307	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.48	0.83	0.33	1.6	0.20	側面穿孔様跡。表面剥離面。	南 1/2番
11210	308	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.40	0.80	0.21	1.9	0.10	側面穿孔様跡。表面剥離面。	南 1/3番
11210	309	白玉 (原石欠損角)	滑石	暗灰	0.45	0.64	0.27	2.0	0.20	側面穿孔様跡。表面剥離面。	南 1/3

番号	名前	石材	色調	長さ cm	幅 cm	厚さ mm	孔目 mm	重さ kg	特徴	出土 位置	現状
113-9 310	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.571	0.59	0.24	19	0.09	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/3 前
113-9 311	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.551	0.72	0.35	—	0.10	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/3
113-9 312	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.55	0.63	0.30	—	0.10	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/3
113-9 313	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.36	0.56	0.21	2.1	0.09	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/4
113-9 314	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.52	0.68	0.39	19	0.10	側面仕上げの破損。表面は滑らか。	南	1/3
113-9 315	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.451	0.51	0.31	1.5	—	側面仕上げの破損。表面は滑らか。	南	1/2 前
113-9 316	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.60	0.49	0.34	19	0.09	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/2 前
113-9 317	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.21	0.51	0.18	—	0.05	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/5
113-9 318	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.22	0.51	0.34	—	0.05	側面仕上げの破損。表面に擦れ。表面はわずかに削みあり。	南	1/5
113-9 319	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.45	0.60	0.34	—	0.10	側面仕上げの破損。上下両面摩擦。側面少し削む。	南	1/3
113-9 320	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.32	0.59	0.34	1.6	0.10	側面仕上げの破損。表面は滑らか。側面削らむ。整面。	南	1/3
113-9 321	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.42	0.56	0.20	1.7	0.08	側面仕上げの破損。表面は滑らか。表面削り。底面は削ぎ面。	南	1/3
113-9 322	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.35	0.49	0.23	1.6	0.05	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/3
113-9 323	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.271	0.51	0.30	1.8	0.07	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/3
113-9 324	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.30	0.58	0.20	1.9	0.05	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/4
113-9 325	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.35	0.58	0.31	1.8	0.08	側面仕上げの破損。表面は滑らか。側面少し削む。	南	1/4
113-9 326	F15. (頭付上:下)	滑石	黒	0.28	0.49	0.17	1.4	0.04	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/5
113-9 327	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.48	0.78	0.26	1.6	0.10	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/3
113-9 328	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.30	0.81	0.34	1.4	0.10	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/2 前
113-9 329	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.36	0.64	0.14	1.7	0.05	側面仕上げの削り。側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/6 以下
113-9 330	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.44	0.73	0.29	2.2	0.10	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削り。表面削り。底面削り。	南	1/2 前
113-9 331	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.68	0.62	0.22	1.5	0.08	側面仕上げの削り。側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面削り。	南	1/5
113-9 332	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.52	0.77	0.39	1.6	0.30	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/3
113-9 333	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.38	0.64	0.24	1.7	0.08	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/4
113-9 334	F15. (頭付上:下)	滑石	暗灰	0.62	0.99	0.33	2.6	0.30	側面仕上げの破損。表面は滑らか。底面は削ぎ面。	南	1/5

第19表 北地点 玉作り遺物觀察表

種類	番号	形態	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 mm	高 mm	参考書	特徴	出土位置	現状状況
114種	1	角形	緑色片岩	緑色	4.01	3.77	0.78	—	17.20	調査時のあり、吉良面山古墳。側面は削除か？裏面に打痕有り。	北	—
114種	2	角形	緑色片岩	緑色	6.17	3.92	2.98	—	24.50	調査時のあり、吉良面山古墳。側面は削除も考えられるか。1ヶ所削除するより切削あり。	北	—
114種	3	角形	黒雲母片岩	黒	3.68	2.98	0.64	—	7.50	調査時のあり、吉良面山古墳。側面は削除も考えられるか、1ヶ所削除するより切削あり。	北	—
114種	4	角形	緑色片岩	緑色	4.93	2.70	0.91	—	11.30	調査時のあり、吉良面山古墳。	北	ばば丸
114種	5	角形	緑色片岩 (切削加工)	緑色	6.65	4.84	1.35	—	40.00	吉良面山古墳剥離。劈裂の跡りをもつ。裏面は墨と切削(鋸)あり。	北	完
114種	6	角形	緑色片岩	緑色	3.75	3.31	0.83	—	9.70	吉良面山古墳剥離。劈裂の跡りをもつ。裏面は墨と切削(鋸)あり。	北	完
114種	7	角形	黒雲母片岩	黒	3.82	3.02	0.92	—	10.50	劈裂による切削あり。その他の打痕もあり。緑谷の切り口。	東	—
114種	8	角形	黒雲母片岩	黒	1.85	0.98	0.44	—	—	吉良面山古墳剥離。右側面は少しきず。裏面は墨と切削(鋸)。	東	—
114種	9	角形	黒雲母片岩	黒	1.65	2.75	0.52	—	22.00	吉良面山古墳の裏面。表面一部が斜めに削るの面と削除面があり。裏面は墨と切削(鋸)。	東	—
114種	10	角形	黒雲母片岩	黒	1.30	2.60	0.47	—	1.90	劈裂による片面の削除をしたもの。裏面は墨でなく、裏面の刃先端が削除してある。他、切削は所々、所々、所々に同じ削除面あり。	東	—
114種	11	角形	黒雲母片岩	黒	2.30	3.01	0.72	—	6.40	吉良面山古墳剥離。上下と黒雲母片岩により切断(鋸)・削・削。白い円形の跡みがある。	東	—
114種	12	角形	黒雲母片岩	黒	1.51	1.65	0.39	—	1.10	吉良面山古墳剥離。右・上の側面は刀子等による切断(鋸)。緑谷の切り口。	北	—
114種	13	角形	黒雲母片岩	黒	1.30	2.60	0.46	—	1.70	裏面は削除面。裏面も同様。表面に切削痕が凹面にある。緑谷の切り口。	北	—
114種	14	角形	黒雲母片岩	黒	1.00	1.88	0.32	—	0.80	裏面切削痕が右側あり。裏面は削ったものか。裏面の内側加工でT字孔にも利用か。	北	—
114種	15	角形	黒雲母片岩	黒	1.40	1.50	0.47	—	1.09	裏面切削あり。裏面加工の横穴。	北	—
114種	16	角形	黒雲母片岩	黒	3.35	2.36	0.57	—	5.90	前より裏面の左側を削除したものの、裏面は削除面で下削面は刀子等による切断(鋸)・削。	東	—
114種	17	角形	黒雲母片岩	黒	2.62	2.12	0.66	—	5.90	調査時のあり、吉良面山古墳の裏面が一部に劈裂の跡りをもつ。裏面は墨と切削(鋸)。	東	—
114種	18	角形	黒雲母片岩	黒	2.05	1.82	0.48	—	3.40	吉良面山古墳剥離。左・右・上部は刀子等による切断。上下は削削?とみられる。	北	—
114種	19	不規則形 (裏面削除)	黒雲母片岩	黒	3.68	3.50	0.61	—	10.50	調査時のあり、表面は削除面。本体の裏面。上の側面は削除の後刀子等による切り落し。下削面は刀子等による削面。	北	—
114種	20	F型	黒雲母片岩	緑色	3.41	3.15	0.70	—	8.50	調査時のあり、不規則。吉良面山古墳剥離。裏面は削除面。裏面刀子等による切り落し(削)・削削。	北	—

編図	番号	器種	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 cm	孔 mm	重量 g	特徴	出土位置	現状状態
115.96	21	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	2.74	1.73	0.70	—	4.10	板状品を利用したので表面艶めのり立。裏面は削り痕がある。側面は割り込みに丸みがつく。刀身は直角底面。	五	—
115.97	22	刀身 (板状刃断面片)	緑色片岩	黒	3.33	1.36	0.42	—	2.60	側面時の曲面。表面斜面擦痕。縦長側面を刀子等による切断(押圧)で削り出されたもの。	五	—
115.98	23	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	暗緑灰	1.77	1.87	0.34	—	1.60	側面時の曲面あり。表面斜面擦痕。上面の側面は刀子による剪切。下端部は側面削りの跡。	五	—
115.99	24	刀身 (板状刃断面片)	緑色片岩	暗緑灰	2.84	1.34	0.50	—	1.60	刀子利用も。表面斜面擦痕。刀子等による切断(押圧)。板状刃断面で切られたもの。	五	—
115.100	25	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	1.76	1.84	0.35	—	2.60	側面時の曲面。表面斜面擦痕。裏面には刀子等の刃摩耗もあるが新しい欠陥が多い。	五	—
115.101	26	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	2.73	1.88	0.45	—	3.40	板状品底部の凹面。直角面擦痕。右側面は全周辺の切断溝の削除ったか下端の側面は削れ。	五	—
115.102	27	刀身 (板状刃断面片)	緑色片岩	暗緑灰	3.65	2.17	0.35	—	3.60	板状品底部の切断品。表面斜面擦痕。右側面は折れ。	五	—
115.103	28	刀身 (板状刃断面片)	緑色片岩	黒	2.58	1.98	0.33	—	2.20	側面時の曲面。表面斜面擦痕。右側面は刀子等による切断。	五	—
115.104	29	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	1.71	2.31	0.38	—	2.30	側面時の曲面。表面斜面擦痕。右側面は刀子等による切断あり。裏面には刃先磨耗跡。前面は削れ。	五	—
115.105	30	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	緑	2.83	1.18	0.39	—	1.40	側面時の曲面。表面斜面擦痕。裏面には刃先磨耗。右側面は削れ。	五	—
115.106	31	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	暗緑灰	1.96	1.46	0.42	—	1.40	側面時の曲面あり。板状品底部の切断品。表面斜面擦痕。裏面には刃先磨耗。右側面は削れ。	五	—
115.107	32	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	3.14	2.06	0.61	—	4.60	正面は削れ。背面は刀子による切削がある。裏面は刃磨耗のみだが、切断溝があり。刃先を分けて1.5mm。	五	元
115.108	33	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	2.31	2.26	0.51	—	3.20	側面時の曲面。表面斜面擦痕。右側面は刀子等による切断があり。側面が削れ。	五	完
115.109	34	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	2.50	1.56	0.40	—	2.20	側面時の曲面。表面斜面擦痕。左側面は刀子で切断し削れ。上端は刃削り面。	五	体被災
115.110	35	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	1.64	1.20	0.26	—	0.70	表面斜面擦痕。	五	完
115.111	36	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	1.58	1.38	0.27	—	0.90	正面表面は削れ。側面は刀子での切断(押圧)。	五	完
115.112	37	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	暗緑灰	1.00	0.62	0.29	—	0.60	側面時の曲面。裏面は板状品底部の切断品。表面斜面擦痕あり。側面の一辺に刀子による切断(削り)あり。裏面は削れ。	五	—
115.113	38	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	暗緑灰	0.87	1.16	0.39	—	0.80	板状品底部の切断品。表面斜面擦痕。削面。刀子による切断(押圧)及び削れ。	五	—
115.114	39	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	1.39	1.00	0.23	—	0.40	板状品底部の切断品。表面斜面擦痕。削面。	五	—
115.115	40	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	0.78	0.94	0.42	—	0.40	板状品の切断品。裏面表面擦痕。刀子による切断(削り)。	五	—
115.116	41	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	0.62	1.99	0.38	—	0.40	板状品の切断品。裏面表面擦痕。刀子による切断(削り)。	五	—
115.117	42	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	1.09	0.10	0.34	—	0.30	板状品の切断品。裏面表面擦痕。削面。	五	—
115.118	43	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	0.55	1.26	0.24	—	0.30	板状品の切断品。裏面表面擦痕。刀子による切断(削り)。	五	—
115.119	44	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	0.84	0.52	0.20	—	0.20	板状品の切断品。裏面表面擦痕。刀子による切断(削り)。	五	—
115.120	45	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	0.74	0.98	0.38	—	0.40	側面時の曲面。裏面は板状品底部の切断品。表面斜面擦痕。刀子による切断(削り)。	五	—
115.121	46	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	暗緑灰	1.76	1.06	0.45	—	1.10	側面の加工面。裏面斜面擦痕。	五	—
115.122	47	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	1.94	1.42	0.28	—	0.90	板状品の切断品。裏面表面擦痕。刀子による切断(削り)。	五	—
115.123	48	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	2.08	1.47	0.27	—	1.30	板状品底部の切断品。裏面表面擦痕。削面。	五	—
115.124	49	刀身 (板状刃断面片)	黒雲母片岩	黒	1.72	1.29	0.48	—	1.20	板状品の切断品。裏面表面擦痕。刀子による切断(削り)。	五	—
115.125	50	刀身 (多面形)	黒雲母片岩	黒	0.82	6.68	0.39	—	0.50	未穿孔。板状の加工面。裏面斜面擦痕。側面は刀子による切断(削り)。	五	完
115.126	51	刀身 (多面形)	黒雲母片岩	黒	0.84	0.82	0.31	—	0.30	未穿孔。板状の加工面。裏面斜面擦痕。刀子による切断(削り)。	五	完
115.127	52	刀身 (多面形)	黒雲母片岩	暗緑灰	4.32	2.23	1.16	—	10.10	側面時の曲面あり。裏面斜面で一辺削りとしたり。全周辺による削面(削面)を削り落す。斜辺の横斜面削除。	五	完
115.128	53	刀身 (多面形)	黒雲母片岩	暗緑灰	3.94	0.82	1.01	—	3.40	刀を削り落す。斜面削り。	五	完
115.129	54	刀身 (多面形)	黒雲母片岩	暗緑灰	3.63	1.28	0.67	—	3.80	内柱から刀子により裏面削り落としたもの。表面の2面は削面で残す。欠損は小さな切欠きに削る。	五	完
115.130	55	刀身 (多面形)	黒雲母片岩	暗緑灰	4.10	1.16	1.03	—	7.20	裏面削りを5面柱の内柱削除としている。表面の2面は削面で残す。欠損は小さな切欠きに削る。	五	完
115.131	56	刀身 (多面形)	黒雲母片岩	暗緑灰	2.8	0.68	1.05	—	3.00	内柱削り成形刀で削る。上端に刀子により万字彫り。	五	完
115.132	57	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	暗緑灰	3.54	1.16	0.75	—	4.10	未穿孔全面削り。内柱削りで削る。裏面にもむずかしく削面あり。全周辺による削面(削面)を削り落す。斜辺の横斜面削除。	五	—
115.133	58	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	暗緑灰	2.51	0.85	0.79	—	1.80	8 x 8 mmの内柱削りの内を削ったのみ。下面は削面と繋ぐ。3面と結合。	五	完
115.134	59	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	暗緑灰	2.04	1.22	0.99	—	3.90	1 x 1 mmの内柱削り。横木。基本の形は裏面に削りがあるのが内柱削りである。下端は刀子による刃削りがある。	五	完
115.135	60	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	黒	2.29	0.79	0.72	—	2.20	内柱削りの横木。外柱の内柱削りで削る。無穿孔の面中央に小さい削面(削面)があり。壁際の削面は削り落す。	五	ほぼ完
115.136	61	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	黒	0.96	0.66	0.26	—	0.30	内柱削りを衛生的内柱削りとしている。表面の2面は削面で削る。無穿孔の面中央に小さい削面(削面)があり。壁際の削面は削り落す。	五	破壊
115.137	62	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	黒	0.92	0.42	0.22	—	0.10	表面削りの跡まで行う削り落すもの。	五	破壊
115.138	63	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	黒	1.52	0.7	0.45	—	0.70	内柱削り削りによる萬字彫りが削られたもの。削れは新しい。	五	破壊
115.139	64	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	黒	2.49	0.75	0.78	—	2.90	表面削りによる多面体。上下面削り。裏面穿孔。	五	完
115.140	65	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	黒	1.86	0.63	0.34	—	0.70	内部多面体仕上げ。外柱の内柱削りで削る。無穿孔の面中央に小さい削面(削面)があり。壁際の削面は削り落す。	五	1/2
115.141	66	刀身 (内柱削り)	黒雲母片岩	黒	1.96	0.55	0.53	—	1.00	削面が渋る表面削り。上下面削り。裏面穿孔。	五	完

編番	番号	器種	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 cm	孔 mm	重量 kg	特徴	出土位置	既往採集
116.06	66	青玉 (成品)	黒雲母片岩	黒	2.43	0.52	0.51	2.2	1.10	表面が消え直角研ぎ、下部断面・帶面わずかにあり。直面守刀。	2± 瓦	完
116.06	67	碧玉 (成品)	緑色片岩	緑色	1.59	1.21	0.49	—	0.90	直面品から加工して新たに、表面直角研ぎ。直面押注で形をつくる。削光の上に時短削り。	瓦	—
116.06	68	碧玉 (成品)	緑色片岩	緑色	2.91	1.54	0.29	—	2.10	直面品の上に欠け。直面が直角研ぎ。直面押注あり。刃面は削光のち刀子による削りを行なう。	瓦	—
116.06	69	碧玉 (成品)	黒雲母片岩	暗緑	2.54	1.02	0.44	—	1.00	直面からの加工残り。側面が直角研ぎ。	北	國宝
116.06	70	碧玉 (成品)	黒雲母片岩	黒	1.37	0.89	0.34	—	0.60	直面加工の跡。直面直角研ぎ。直面押注あり。削光の上端？	瓦	破片
116.06	71	板状的	碧玉	コバルト グリーン	2.22	1.60	0.49	—	1.40	直面直角研ぎ。直面に擦る。	瓦	—
116.06	72	板状的	碧玉	コバルト グリーン	1.03	1.45	0.38	—	0.60	直面直角研ぎあり。	瓦	—
116.06	73	板状的	碧玉	コバルト グリーン	0.62	0.82	0.30	—	0.20	直面直角研ぎあり。側面の一部直角研ぎ。	瓦	—
116.06	74	青玉 (直角研ぎ成品)	碧玉	コバルト グリーン	2.01	1.11	0.84	—	2.70	四角形の直角研ぎ。直面側面の直角研ぎは削りきれないが、直面中心に残る。上下端は切欠き。	瓦	—
116.06	75	青玉 (直角研ぎ成品)	碧玉	コバルト グリーン	2.15	1.37	0.96	—	3.80	四面に直角研ぎあり。直面端に刀子による直角研ぎがある。	瓦	—
116.06	76	青玉 (直角研ぎ成品)	碧玉	コバルト グリーン	0.80	0.40	0.27	—	0.10	直面は直角研ぎ。直面外には擦る。側面内側は削い直角研ぎ。	瓦	—
116.06	77	板状的	青玉	翠綠色	1.26	1.50	0.45	—	0.80	直面直角研ぎあり。側面の一部直角研ぎあり。78と同一鍔内。	瓦	—
116.06	78	板状的 (直角研ぎ成品)	青玉	翠綠色	1.05	0.78	0.41	—	0.30	直面直角研ぎあり。側面の一部直角研ぎあり。77と同一鍔内。	瓦	—
116.06	79	原石	滑石	透明	7.74	3.44	1.80	—	56.60	直角研ぎの他、円盤のままの中央に彫刻の跡の当たり直角研ぎ。直面側面の直角研ぎは削りきれない。	瓦	—
116.07	80	直角的	滑石	透明	6.05	3.81	1.82	—	42.70	直角研ぎの直角研ぎ。直面直角研ぎの直角面には刀子による削り。	瓦	4/5
116.07	81	板状切削研磨片	滑石	透明	3.01	3.95	0.99	—	16.40	直角研ぎの他あり。直面直角研磨片。削光は刀による削りと刮削。	瓦	ほぼ完
116.07	82	板状切削研磨片	滑石	透明	5.20	4.03	1.20	—	30.80	直角研ぎの他あり。直面直角研磨片。直面端に刀子による削りと刮削。削光は刀による削り。	瓦	完
116.07	83	板状切削研磨片	滑石	透明	3.78	2.29	0.65	—	8.60	直角研ぎの他あり。直面直角研磨片のままで。直面は刀子による削りと刮削。	瓦	ほぼ完
116.07	84	板状切削研磨片	滑石	透明	5.22	3.42	1.16	—	25.00	直面直角研磨片。直面は刀子による削りと刮削(直角研ぎ)。	瓦	完
116.07	85	板状切削研磨片	滑石	透明	4.17	3.05	2.00	—	29.30	直角研ぎの直角研ぎならびに直角研磨片のものとも考えられる。直削りは刀子による削りか。直面端に刀子による削りか。刮削。直面端に直角研磨片。	瓦	完
116.07	86	板状切削研磨片	滑石	透明	3.74	3.12	0.92	—	14.10	直角研ぎの他あり。直面直角研磨片のままで。直面は削光をもじり。直面に刀子による削りと刮削(直角研ぎ)。	瓦	ほぼ完
116.07	87	板状切削研磨片	滑石	透明	3.21	3.12	0.58	—	6.80	直面直角研磨片。直面端に直角研磨片。直面端に刀子による削りと刮削。	瓦	—
116.07	88	板状切削研磨片	緑色片岩	黒	3.09	4.81	0.63	—	12.50	直角研ぎの他あり。直面直角研磨片。直面は削光も考えられる。	瓦	—
116.07	89	模造直角研磨片	滑石	透明	3.29	3.64	1.56	—	22.40	直角研ぎの他あり。直面直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.07	90	板状切削研磨片	滑石	透明	3.37	1.57	0.69	—	4.00	直面直角研磨片。刀子削による削りがある。直面に直角研磨片。	瓦	—
116.07	91	板状切削研磨片	滑石	透明	4.01	3.05	5.06	—	10.20	直面は、直角研ぎの他あり。削光があるものの、直角研磨片のままで。直面は刀子による削りか。	瓦	完
116.08	92	板状切削研磨片	滑石	透明	3.98	3.83	0.83	—	16.60	直角研ぎの他あり。直面直角研磨片。直面は削光か?	瓦	—
116.08	93	板状切削研磨片	滑石	透明	6.84	3.19	0.98	—	22.60	直角研ぎの他あり。直面直角研磨片。直面の一部(右)に削面がある。	瓦	—
116.08	94	板状切削研磨片	滑石	透明	3.47	1.11	0.60	—	3.20	直面研ぎのままで直角をもつ削り。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.08	95	板状切削研磨片	滑石	透明	2.63	2.50	0.82	—	5.80	直角研ぎのままで直角をもつ削り。直面直角研磨片。	瓦	—
116.08	96	縦長直角研磨片 (直角)	滑石	透明	4.14	2.05	0.54	—	6.00	調査用の直角研磨片。直面より後方の直角としたもの。上に右側面は刀子による削りか。左側面は削光か?	瓦	—
116.08	97	縦長直角研磨片 (直角)	滑石	透明	5.05	2.54	0.75	—	13.30	直角研ぎの直角研磨片。直面より後方の直角としたもの。直面直角研磨片のままで。直面は削光か?	瓦	—
116.08	98	直角研磨片	滑石	透明	3.21	2.47	0.66	—	7.60	直角研ぎの直角研磨片。直面は直角研ぎで削り。直面端は削成のもの。	瓦	—
116.08	99	直角研磨片	滑石	透明	2.62	2.24	0.65	—	4.50	直角研ぎで削り。直面は直角研ぎで削り。直面端は削成のもの。	瓦	—
116.08	100	直角研磨片	滑石	透明	3.52	1.78	0.43	—	3.20	直角研ぎの直角研磨片。直面は直角研ぎで削り。直面端は刀子による削りか。	瓦	—
116.08	101	直角研磨片	滑石	透明	3.17	1.50	0.72	—	4.50	直角研ぎの直角研磨片。直面は刀子による直角研ぎ(直角研磨片)。	瓦	—
116.08	102	直角研磨片	滑石	透明	2.52	2.08	0.53	—	3.70	直面直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.08	103	直角研磨片	滑石	透明	2.12	1.18	0.84	—	1.80	直角研ぎの直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.08	104	板状直角研磨片	滑石	透明	1.87	1.13	0.42	—	0.90	直角研ぎの直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.08	105	直角研磨片	滑石	透明	1.92	0.78	0.31	—	0.50	直角研ぎの直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.08	106	板状直角研磨片 (直角研磨片)	滑石	透明	2.34	2.34	0.46	—	3.10	直角研ぎの直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.08	107	直角研磨片 (直角研磨片)	滑石	透明	1.52	1.12	0.47	—	1.00	直角研ぎの直角研磨片。直面直角研磨片。直面端は刀子による削り。	瓦	—
116.08	108	直角研磨片	滑石	透明	0.99	1.13	0.26	—	0.20	直角研ぎの直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.08	109	板状研磨片	滑石	透明	0.82	0.74	0.37	—	0.30	直角研ぎの直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	—
116.08	110	直角研磨片	滑石	透明	2.13	0.62	0.53	—	0.70	直角研ぎの直角研磨片。直面は刀子による削り。	瓦	ほぼ完
116.08	111	青玉 (多角研磨片上)	滑石	翠綠色	1.66	0.63	0.62	—	1.00	直角研ぎで取りこむ。直面は直角研ぎで削り。直面端は削りか。	瓦	完
116.08	112	青玉 (多角研磨片上)	滑石	翠綠色	2.38	0.64	0.29	—	0.80	直角研ぎの直角研磨片。直面直角研磨片の直面端は刀子による削り。	瓦	—
116.08	113	青玉 (多角研磨片上)	滑石	翠綠色	1.32	0.76	0.37	—	1.00	直角研ぎで削りによる直角研ぎが並んだもの。上端に直角研ぎの直角研磨片。	瓦	完
116.08	114	青玉 (多角研磨片上)	滑石	翠綠色	1.34	0.59	0.62	—	0.80	角柱状で削りによる直角研ぎが並んだもの。上端に直角研ぎの直角研磨片。	瓦	完
116.08	115	青玉 (多角研磨片上)	滑石	黒	1.66	0.76	0.57	—	0.90	直角研ぎで削りをする。上端は直角研ぎ(直角研磨片)。	瓦	破片
116.08	116	青玉 (多角研磨片上)	滑石	黒	1.49	0.82	0.65	—	1.20	直角研ぎで削りによる直角研ぎ。直面直角研磨片の直面端は刀子による削り。	瓦	國宝
116.08	117	青玉 (多角研磨片上)	滑石	翠綠色	1.5	0.59	0.52	—	0.80	直角研ぎの直角研磨片。直面直角研磨片の直面端は刀子による削り。	瓦	2/3
116.08	118	青玉 (多角研磨片上)	滑石	透明	1.4	1.4	0.56	—	2.10	直角研ぎの直角研磨片。直面直角研磨片の直面端は刀子による削り。	瓦	國宝
116.08	119	青玉 (直角研磨片)	滑石	透明	3.15	2.61	0.55	—	7.10	直角研ぎの直角研磨片。直面直角研磨片の直面端は刀子による削り。	瓦	完
116.08	120	青玉 (直角研磨片)	滑石	透明	3.90	2.67	0.86	—	12.10	直角研ぎの直角研磨片。直面直角研磨片の直面端は刀子による削り。	瓦	—
116.08	121	青玉 (直角研磨片)	滑石	透明	4.2	2.9	0.37	—	14.00	直角研ぎの直角研磨片。直面直角研磨片の直面端は刀子による削り。	瓦	—

編番	番号	器種	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 cm	孔 mm	重量 g	特徴		出玉 位置	現状状態	
										前面	背面			
119番 122	円瓶	滑石	暗緑色	3.2	2.2	0.8	—	9.10	前面の右内側から表面は微細なくわいし、わずかに彫るよう彫りあり。 背面は両面研磨、手元は直交する斜面と直面。	丸	—			
119番 123	柄豆皿	滑石	暗緑色 (1.51)	1.06	0.41	—	—	0.90	表面共通研磨、前面は刀子による切削(押削)と彫刻、側面は外周部。	丸	—			
119番 124	柄豆皿	滑石	暗緑色	3.3	1.4	0.61	—	4.50	表面共通研磨、前面は刀子による切削(押削)と彫刻、側面は外周部。	丸	—			
119番 125	不明造形	滑石	暗緑	4.94	5.02	1.55	—	54.80	調査時の傷あり。表面共通研磨あり。背面は丸を鏤く彫る。両面は刀子等による彫りの跡。前後面は直角で、側面は直角で、底面は斜面。	丸	完			
119番 126	不明造形	滑石	暗緑	4.46	3.25	0.95	—	17.70	表面共通研磨、側面は斜面で仕上げる。	丸	完			
120番 127	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	0.89	0.96	0.49	—	0.60	末乳孔。傾斜加工して、側面は斜面の切り込み、上下面は圓盤。	丸	完			
120番 128	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	0.82	0.88	0.31	—	0.30	調査時の傷あり。表面共通研磨あり。背面多角形。側面は刀子による押圧で彫刻がある。	丸	ほぼ完			
120番 129	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	0.62	1.04	0.43	—	0.40	調査時の傷あり。表面共通研磨あり。側面は刀子による押圧の切りと彫り。	丸	1/2			
120番 130	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	1.21	1.32	0.53	—	1.30	表面共通研磨。側面は刀子による切り込みで切削(削り・割り)。	丸	完			
120番 131	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	0.85	0.82	0.42	—	0.40	調査時の傷あり。表面共通研磨。側面は刀子の両面から切削(削り・割り)。	丸	完			
120番 132	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	0.97	0.96	0.52	—	0.70	調査時の欠損あり。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り・割り)。	丸	ほぼ完			
120番 133	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	1.06	1.24	0.45	—	0.90	調査時の傷あり。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り・割り)。	丸	ほぼ完			
120番 134	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	0.82	1.36	0.38	—	0.70	表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	完			
120番 135	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	1.00	1.11	0.36	—	0.60	表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	完			
120番 136	F15	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	0.88	0.83	0.41	—	0.50	表面共通研磨。側面は刀子による両面より切削(削り・割り)。	丸	完		
120番 137	F15	(圓盤・四角)	滑石	暗緑	0.81	1.24	0.45	—	0.70	表面は四角形。側面は彫刻あり。内凹面に刀子による切削面あり(押削)。 (削り)、円孔あり。	丸	—		
120番 138	F15	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	1.91	1.79	0.83	—	3.10	表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	完		
120番 139	F15	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	1.76	1.29	0.41	—	1.40	表面共通研磨。表面共通研磨で仕上げる。側面は刀子による切削(削り)と押削(押す)。	丸	完		
120番 140	F15	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	1.90	1.96	1.01	—	5.20	調査時の傷あり。表面共通研磨。側面は刀子による切削。さらに彫りが付加する。	丸	ほぼ完		
120番 141	F15	(圓盤・多角形)	滑石	暗緑	1.75	0.97	0.30	—	0.50	調査時の傷あり。表面刀子等の削りのままで。切削時の缺けなし。	丸	—		
120番 142	F15	(穿孔・四角)	滑石	暗緑	0.69	0.95	0.38	17	0.20	穿孔時の彫削痕。側面は削り等。上下面挖削。	2号 下風	掘削		
120番 143	F15	(穿孔・多角形)	滑石	黒	1.33	1.28	0.67	21	0.10	穿孔時の彫削。側面は刀子による切削(削り)。	丸	ほぼ完		
120番 144	F15	(穿孔・多角形)	滑石	黒	1.00	0.30	0.58	26	0.80	全面穿孔で彫削。抜孔の加工で、側面は刀子の先端から彫削される。	丸	ほぼ完		
120番 145	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.97	0.91	0.38	19 15	0.40	穿孔後の削りのままで。表面共通研磨。側面は刀子による彫削で擦りはない。	丸	完		
120番 146	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.94	1.10	0.47	24	0.60	穿孔後の削りのままで。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	完		
120番 147	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.82	0.91	0.37	18	0.50	穿孔後の削りのままで。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。一澤内面に2カ所行う。	丸	完		
120番 148	F15	(穿孔・多角形)	滑石	黒	0.56	0.77	0.34	16	0.20	穿孔内の彫削。板状の加工で側面の削りは削りいい。	丸	掘削		
120番 149	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.34	0.59	0.20	12	0.10	穿孔時の彫削痕。板状の加工。	丸	完		
120番 150	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.72	0.70	0.42	18	0.20	穿孔時の彫削痕。板状の加工。	丸	完		
120番 151	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.81	0.98	0.30	18	0.30	穿孔後の削りのままで。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	完		
120番 152	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.68	1.12	0.57	25	0.50	穿孔時の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	1/2 番		
120番 153	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.59	1.10	0.34	18	0.30	穿孔時の彫削痕。側面は刀子による彫削(削り)。	丸	1/2 番		
120番 154	F15	(穿孔・多角形)	滑石	白玉	0.99	0.76	0.28	19	0.20	調査時の欠損。穿孔の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による彫削(削り)。	丸	1/2 番		
120番 155	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.73	0.76	0.40	17	0.30	表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	完		
120番 156	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.51	0.83	0.24	18	0.10	穿孔時の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	1/3		
120番 157	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.65	0.84	0.34	16	0.20	穿孔時の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	2/3		
120番 158	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.59	1.04	0.34	18	0.30	穿孔時の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による彫削(削り)。	丸	2/3		
120番 159	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.53	0.89	0.45	20	0.20	穿孔時の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	1/3		
120番 160	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.35	0.63	0.32	20	0.04	穿孔時の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	1/6		
120番 161	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.40	0.82	0.35	16	0.10	穿孔時の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	1/5		
120番 162	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.44	0.74	0.47	24	0.10	穿孔時の彫削痕に接着剤。表面共通研磨。側面もみがきづある。	丸	1/4		
120番 163	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.41	0.57	0.30	19	0.07	穿孔内の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	1/4 番		
120番 164	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.75	0.81	0.34	17	0.30	穿孔中の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子による切削(削り)。	丸	完		
120番 165	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.74	1.13	0.62	18	0.60	穿孔中の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子等により切削(削り)。	丸	1/2		
120番 166	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.74	0.94	0.42	22	0.30	穿孔中の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子等により切削(削り)。	丸	1/2		
120番 167	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.69	0.82	0.43	18	0.30	穿孔中の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子等により切削(削り)。	丸	1/2		
120番 168	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.69	0.94	0.42	19	0.30	穿孔中の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子等により切削(削り)。	丸	1/2		
120番 169	F15	(穿孔・多角形)	滑石	暗緑	0.53	0.74	0.33	20	0.20	穿孔中の彫削痕。表面共通研磨。側面は刀子等による切削(削り)。	丸	1/2		

編号	番号	岩種	石材	色調	長 cm	幅 cm	厚 cm	孔 mm	重量 g	特徴	出玉 位置	現状
120-00	170	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.72	0.97	2.7	2.7	0.30	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面は刀子による切削(割り・削り)。	丸	1/2
120-00	171	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.63	1.05	0.46	2.0	0.40	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り)。	丸	1/2
120-00	172	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.76	0.84	0.40	1.9	0.30	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(割り・削り)。	丸	1/2
120-00	173	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.80	1.08	0.38	2.1	0.30	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り)。	丸	1/2
120-00	174	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.65	0.84	0.22	1.7	0.10	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り)。	丸	1/2
120-00	175	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.65	0.9	0.30	2.0	0.20	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り)。	丸	1/2
120-00	176	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.82	0.96	0.29	2.0	0.20	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り・割り)。	丸	1/2
120-00	177	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.70	0.82	0.33	2.2	0.20	穿孔時の破損。穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り・削り)。	丸	1/2
120-00	178	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.66	0.83	0.44	2.1	0.20	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り・削り)。	丸	1/2番
120-00	179	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.43	0.94	0.53	2.2	0.20	穿孔時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り)。	丸	1/2
120-00	180	F1系 (穿孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.58	1.66	0.49	2.2	0.80	調査時の破損。表面凹凸感強。側面刀子による切削(削り)。	丸	3/4
120-00	181	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰色	0.7	0.7	0.37	2.3	0.30	断面鋸歯状様に走る溝があり。	丸	丸
120-00	182	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.68	0.70	0.45	1.8	0.40	表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹凸で少し削らむ。	丸	丸
120-00	183	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.76	0.78	0.54	2.3	0.40	表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹で少し削らむ。	丸	丸
120-00	184	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.63	0.62	0.24	2.0	0.10	表面凹凸感強。表面斜面をそのまま利用。断面凹で少し削らむ。	丸	丸
120-00	185	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.62	0.63	0.42	2.0	0.20	表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹をもつ。	丸	丸
120-00	186	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.60	0.65	0.44	2.3	0.20	表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹で削みあり。	丸	丸
120-00	187	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.59	0.56	0.40	2.0	0.20	調査時の欠けあり。表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹で少し削らむ。	丸	丸
120-00	188	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.64	0.66	0.34	1.6	0.20	調査時の欠けあり。表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹で少し削らむ。	丸	ぼば丸
120-00	189	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.64	0.65	0.42	2.4	0.20	調査時の欠けあり。表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹で少し削らむ。	丸	ぼば丸
120-00	190	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.54	0.56	0.39	1.6	0.10	調査での剥れあり。表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹で少し削らむ。	丸	ぼば丸
120-00	191	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.49	0.68	0.27	2.4	0.10	側面の剥離跡。表面凹凸感強。表面斜面。側面剥離。側面剥離。	丸	1/3
120-00	192	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.34	0.65	0.19	1.8	0.09	調査内の削れあり。側面剥離時の確認。調査時の削れあり。表面斜面剥離あり。側面剥離。側面剥離。	丸	1/2
120-00	193	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.43	0.64	0.4	2.3	0.20	調査時の剥離跡。表面凹凸感強。側面凹凸感強。断面凹で少し削らむ。	丸	2/3
120-00	194	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.60	0.89	0.48	1.9	0.30	調査時の剥離跡。表面凹凸感強。側面凹凸感強。側面剥離。側面剥離。側面で目隠しを構えている。	丸	1/2
120-00	195	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.49	0.76	0.25	1.9	0.10	側面の剥離。表面凹凸感強。表面斜面。表面凹凸感強。側面剥離。	丸	1/2番
120-00	196	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.37	0.65	0.26	2.0	0.10	調査時の欠けあり。側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。側面剥離。断面で目隠しを構えている。	丸	1/2番
120-00	197	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.41	0.68	0.28	1.6	0.10	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。側面剥離。断面で目隠しあり。	丸	1/2
120-00	198	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.36	0.73	0.22	2.1	0.10	側面丸みの剥り時欠陥。表面丸み剥離。側面剥離。断面で目隠しを構えている。	丸	1/2
120-00	199	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.36	0.68	0.44	1.6	0.10	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。側面剥離。丸隠れ。	丸	1/2
120-00	200	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.34	0.69	0.40	2.0	0.10	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。側面剥離。側面剥離。丸隠れ。	丸	1/2番
120-00	201	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.48	0.71	0.37	1.8	0.10	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。側面剥離。断面で目隠しあり。	丸	1/2番
120-00	202	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.38	0.67	0.24	2.2	0.05	側面丸みの剥り時欠陥。表面剥離。裏面斜面。側面剥離。側面で目隠しを構えている。	丸	1/3
120-00	203	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.47	0.60	0.26	1.7	0.08	側面丸みの剥り時欠陥。表面剥離。裏面斜面。側面で目隠しを構えている。	丸	1/3
120-00	204	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.39	0.64	0.34	2.2	0.10	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。側面剥離。側面で目隠しを構えている。	丸	1/2番
120-00	205	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.39	0.59	0.30	2.2	0.08	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。裏面斜面。側面剥離。	丸	1/2番
120-00	206	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.26	0.56	0.37	1.9	0.10	側面丸みの剥り時欠陥。表面剥離。裏面斜面。側面剥離。	丸	1/3
120-00	207	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.45	0.65	0.28	1.6	0.08	側面丸みの剥り時欠陥。表面剥離。裏面斜面。側面で目隠しを構えている。	丸	1/3
120-00	208	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.33	0.53	0.20	2.0	0.04	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。側面剥離。裏面斜面。側面で目隠しを構えている。	丸	1/4
120-00	209	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.38	0.51	0.18	1.9	0.04	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。裏面斜面。裏面斜面。側面剥離。	丸	1/4
120-00	210	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.21	0.53	0.21	—	0.04	調査時の欠陥あり。側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。裏面斜面。側面剥離。	丸	1/4
120-00	211	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.57	0.64	0.20	1.9	0.10	調査時の欠陥あり。側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。裏面斜面。側面剥離。	丸	1/3
120-00	212	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.65	0.92	0.37	1.8	0.30	調査時の欠陥あり。側面丸みの剥り時欠陥。裏面斜面。裏面斜面。側面剥離。裏面斜面。	丸	1/2
120-00	213	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.55	0.84	0.40	1.8	0.20	穿孔時の破損。表面凹凸感強。裏面斜面。	丸	1/2
120-00	214	F1系 (無孔縫隙多角形)	滑石	暗灰	0.56	0.87	0.31	2.2	0.20	側面丸みの剥り時欠陥。表面凹凸感強。側面剥離。	丸	1/2番

第7章 高崎城遺跡24の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高崎城跡は、烏川左岸台地上に位置する。高崎城は、和田氏の没落によって1590年に廃城となつた和田城の跡地に1598に築城された。第24次調査区では、東西方向の堀を確認している。

本報告では、1号溝の環境を珪藻分析することで検討する。

1. 試料

試料は、1号溝の8層・10層（第74回土層断面図△印の土壤サンプル採集）の計2点である。いずれも黒褐色を呈した砂混じりシルトである。

2. 分析方法

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot(2000)、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1985～1991)、Desikachariy(1987)などを参考にした。

3. 結果の表示方法

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示した（表1）。

堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上産出した試料について珪藻化石群集変遷図を作成した（図1）。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、基本的に1%以上（産出種数により変更）の産出率を示す分類群についてのみ表示した（図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%未満の種を、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す）。表示する分類群は、分析試料全体で産出率の合計が1%以上の分類群である。また、図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示した。

4. 結果

分析結果を表1、図1に示す。珪藻分析を行った試料のいずれからも珪藻が産出した。10層およ

表1. 珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	1号溝8層	1号溝10層
	塩分	pH	流水			
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	5	3
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	2	1
<i>Achnanthes montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	Ri,T	7	13
<i>Achnanthes</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	2
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwaites) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-
<i>Frustulia vulgaris</i> var. <i>capitata</i> Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	O,U		1
<i>Frustulia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1
<i>Geissleria ignota</i> (Krasske) Lange-Bertalot et Metzeltin	Ogh-ind	ind	ind	RB	4	2
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	38	30
<i>Hantzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	O,U	5	2
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	34	27
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	7	4
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	3	2
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	7	-
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	11	4
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	3	12
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	2
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	2
海水生種					0	0
海水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	0
淡水～汽水生種					7	4
淡水生種					131	105
珪藻化石総数					138	109

凡例

塩分・pH・流水に対する適応性

H: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 C.R.: 流水に対する適応性

Euh:	海水生種	al-bi: 貧塩不定性種	1bi: 真淡水種
Euh Meh:	海水生種・汽水生種	al-bi: 好塩好淡水種	1pb: 好淡水種
Meh:	汽水生種	ind: pH不定性種	ind: 流水不定性種
Ogh: il:	貧塩好酸性種	ac-il: 好酸性種	rbh: 好流水性種
Ogh: ind:	貧塩不定性種	ac-bi: 真酸性種	r-bi: 真淡水種
Ogh: hoh:	貧塩嫌塩性種	unk: pH不明種	unk: 流水不明種
Ogh: unk:	貧塩不可知種		

環境指標種

A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種

D1: 海水質干涸指標種 D2: 汽水質干涸指標種

E1: 海水泥質干涸指標種 E2: 汽水泥質干涸指標種 F: 淡水流生種群 (以上は小林, 1988)

G: 淡水流遊走種群 H: 河川浮遊性種群 I: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種

L: 下流性河川指標種 M: 溪流遊走性種 N: 溪流泥沼湿地指標種 O: 泥沼湿地付生種群

P: 沼澤原指標種 Q: 沼澤指標種 (以上は安藤, 1990)

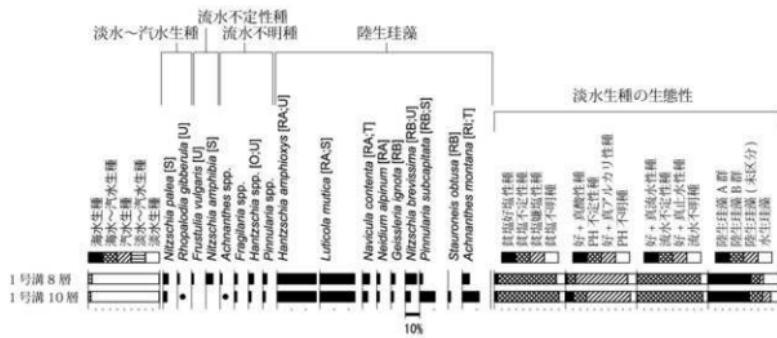
S: 好汚潤性種 T: 好清水性種 U: 広適応性種 (以上は Asai,K. & Watanabe,T. 1995)

RE: 陸生珪藻 (RA群 RB群、伊藤・堀内, 1991)

び8層の産状はほぼ同様の傾向を示す。

1号溝10層からは109個体、8層からは138個体が産出した。この個体数は、堆積物中の絶対量としては少ない。保存状態は、壊れている殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した分類群は、淡水生種を主とし、低率に淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。

淡水生の群集の生態性 (珪藻の3つの適応性: 水中の塩分・pH・流水に対する適応性) について整理してみると、塩分に対する適応性は貧塩不定性種が優占する。pHに対する適応性は、好アル



海水～汽水～淡水産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基準。淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基準として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

環境指標種

A: 外洋指標種 C1: 海洋根場指標種 C2: 水藻根場指標種 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 海水砂質干潟指標種 E1: 海水買賣干潟指標種 F: 淡水底生種群(以上は小杉, 1986) G: 淡水浮遊種群 H: 中下流河川指標種 K: 中～下流河川指標種 L: 最下流河川指標種 M: 湖沼浮遊種 N: 湖沼底生種 O: 湖沼底付着種 P: 高潮露原指標種 Q: 除滅指標種群(以上は安藤, 1990)
S: 好汚濁性種 T: 好淡水性種 U: 広適性種(以上はAsai & Watanabe, 1995) RL: 陸生珪藻(RAA群, RB群, 伊藤・堀内, 1991)

図 1 1号溝における主要珪藻化石群集の層位分布

カリ性種が優占するが、好酸性種とPH不定性種もそれぞれ10%、20%程度産出する。流水に対する適応性では、流水不定性種が優占する。なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育可能な種群(陸生珪藻)が存在する。本試料では、陸生珪藻が80%程度産出している。特徴的に産出した種は、淡水～汽水生種のNitzschia palea、淡水生種で陸生珪藻のAchnanthes montana、Hantzschia amphioxys、Pinnularia subcapitata、Luticola mutica等である。

5. 考察

1号溝の10層および8層から特徴的に産出した種は、淡水～汽水生種のNitzschia palea、淡水生種で陸生珪藻のAchnanthes montana、Hantzschia amphioxys、Pinnularia subcapitata、Luticola mutica等である。

特徴的に産出した種の生態性をみると、淡水～汽水生種としたNitzschia paleaは、好汚濁性種(Asai & Watanabe, 1995)とされ、水中の塩類濃度が高まった後背湿地や特に人为的な影響で汚濁した水域に特徴的に認められる種である。また、陸生珪藻のAchnanthes montana、Hantzschia amphioxys、Pinnularia subcapitata、Luticola mutica等は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壤の表層部など大気に接触した環境に生活する一群(小杉、1986)である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えることのできる群集とされ、これらの種群が優占(70～80%以上)する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されていた環境が推定できるとしている(伊藤・堀内, 1989, 1991)。

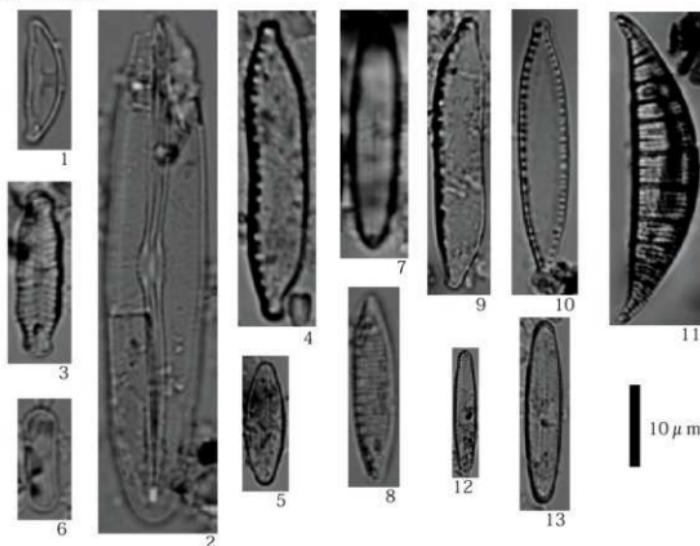
以上の特徴種の生態性と群集の構成から、10層および8層の堆積時の環境は、水の影響が少なく、通常は大気に晒された好気的な環境下にあったものと推定される。

和田城跡に関する遺構では、北に 100m ほど離れた第 23 次調査区でも 1 号溝が検出されている。第 23 次調査区の 1 号溝でも溝底の堆積物で珪藻分析を実施しており、水の出入りの少ない有機汚濁が進んだ湿地の環境と推定されている(パリノ・サーヴェイ株式会社、2016)。この結果から、1 号溝の場所によって環境が異なっていたことが推定される。

引用文献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42(1990), 73 ~ 88, aNN, Tohoku Geogr. Assoc.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35 ~ 47.
- Desikachari, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.
- Horst Lange-Bertalot., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski,A.,Horst Lange Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925 pgs.
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III . Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 一陸生珪藻の細分一, 日本珪藻学会第 10 回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用, 日本珪藻学誌, 6, 23-44.
- 小杉正人, 1988, 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 第四紀研究, 27,(I), 1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9, p. 250.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae. Süsswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae. Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae. Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991a, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2016, 高崎城遺跡 23 の自然科学分析、「高崎城遺跡 23 一創価学会(新)高崎平和会館建設に伴う発掘調査」, 高崎市文化財調査報告書第 354 集, 高崎市教育委員会・創価学会・株式会社測研, 158-178.

图版 I 硅藻化石



1. *Amphora montana* Krasske (1号溝；10層)
2. *Frustulia vulgaris* (Thwaites) De Toni (1号溝；8層)
3. *Geissleria ignota* (Krasske) Lange-Bertalot et Metzeltein (1号溝；8層)
4. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (1号溝；10層)
5. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann (1号溝；10層)
6. *Navicula contenta* Grunow (1号溝；8層)
7. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (1号溝；8層)
8. *Nitzschia amphibia* Grunow (1号溝；8層)
9. *Nitzschia brevissima* Grunow (1号溝；8層)
10. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W.Smith (1号溝；8層)
11. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) Mueller (1号溝；8層)
12. *Pinnularia subcapitata* Gregory (1号溝；10層)
13. *Stauroneis obtusa* Lagerst (1号溝；8層)

第8章　まとめ

『高崎城遺跡24』は、縄文時代から近現代の高崎陸軍病院にかけての複合遺跡である。

高崎城は、歩兵第十五連隊があったところで、その南西部の一隅に高崎陸軍病院が所在していた。今回はこの高崎陸軍病院のあったところの発掘調査である。

近現代

昭和9年作製の歩兵第十五連隊関連施設配置図には、高崎陸軍病院の建物配置がある。高崎陸軍病院の資料は「高崎陸軍病院史」に建物平面図およびその利用内容が残されている。

また、高崎陸軍病院は昭和12年の敗戦に伴い名称が国立高崎病院となるが、昭和24年の米軍の空中写真（図版1）で、高崎陸軍病院の施設をそのまま引き継いでいる。

今回の発掘調査で、高崎陸軍病院の施設の基礎等は新しく立て直された病院の基礎により大きく壊され、病院遺構の痕跡を認めることは出来なかった。

高崎陸軍病院時から国立高崎病院に至るまでの病院から出る各種不用品（遺物）、歩兵第十五連隊関連不用品（遺物）が出土している。

特に注目されたのは、高崎陸軍病院の給食食器の変遷が確認されたことである。

当初は金属食器アルマイド製（アルミニウムの表面を酸化アルミニウムの膜で覆ったもの）を使用していたが、軍事統制下で金属を供出する一方、その代用食器として磁器食器に代わっている。これを統制食器（国民食器）といい、国の施策として「生産者別標示記号（統制番号）」を生産者に割り与え、製品の生産から販売までを統制するものであった。

今回、この統制番号が確認されたのは岐阜、瀬戸、信楽、肥前の4か所がある。岐阜は「岐」、瀬戸「瀬」、信楽「信」、肥前「肥」の一字を使い、次に数字が組み合わされている。

岐阜県内の例でみてみたい。岐阜県陶磁器工業組合連合会には、この統制番号の生産者名が記された一覧表が残されており、記号番号・町名・代表者名（会社工場名）を確認することができる。

病院や会社などは給食制度を導入していたことから、金属製給食食器をすべて統制食器に替えることになった。この給食食器は生産者に発注するが、その際口縁部に緑色の2重線を付けたものとなり、病院や会社の発注元の「ロゴ」を印刷している。

高崎陸軍病院の病院章「ロゴ」は、第25図のようにロゴの変化をみることができる。

最初は市販の磁器にロゴだけを青色で印刷した初期的対応の食器から始まり、この時のロゴは線描のものであった。その後ロゴは同じ形で二重線内を緑色に塗ったものが印刷されている。その後、赤色・オレンジ色のロゴに変化している。この時には、ロゴが洗練された形最終形態に変化している。

その後、磁器食器から樹脂製（ペークライト製）の食器に変更しているが、この食器にも側面や底面にもこの同一「ロゴ」を型押ししている。戦後はある程度このロゴ付き食器を使っていたが、食器の蓋に手書きで「国高病」国立高崎病院の略号をナイフで彫ったものがみつかっている。

その後、このペークライト製の食器もロゴは付けられていないものに変更になっている。

時代背景を見てみると昭和11年に高崎陸軍病院になり、昭和14年に第二次世界大戦に突入、昭和20年8月の終戦を迎える。同年12月に高崎陸軍病院は、国立高崎病院と変更になる。この僅か10数年という時間を今回出土した給食食器群は教えてくれている。

この病院章のロゴについては、現在に記録としてどの資料にも残されていないものである。今回の

発掘調査がなかったならばこのマークが高崎陸軍病院の病院章であることを確認できなかったわけである。高崎陸軍病院に病院章「ロゴ」が存在していたことを確認できたことは最大の成果であった。

病院の給食食器の他にも様々な出土物が存在した。日常雑器の陶磁器・ガラス製品・歯ブラシについても、昭和初期から戦後にかけての資料であるため報告した。

出土遺物の中には、中島飛行機株式会社の社章のある湯呑蓋が発見されている。これに関連して弁当用のお茶容器にロゴがあったが、「高」の字を中心にして飛行機が5機取り囲む中島飛行機と同じような形であり、高崎飛行場のロゴと考えられた。高崎商工会議所が高崎乗附地内に飛行場を誘致し、高崎飛行場の記念品として弁当とともに付けられたお茶容器であったと考えられた。

歩兵十五連隊関連遺物として陶製の手榴弾(練習用)1点、ライフルの弾頭2点、ビニール製のシール7枚、陸軍関係統制食器多数などが出土している。

煉瓦は南堀の埋め土に煉瓦層として存在していた。煉瓦層の中からは「上敷免製」の刻印が押された日本煉瓦製造株式会社(埼玉県深谷市)製の煉瓦の出土があった。この「日本煉瓦製造株式会社」は日本で初めての官営の大規模な工場で操業は明治38年である。その他、耐火煉瓦の出土があるが煉瓦裏面に小さな格子圧痕の付くものがあるが、これは岡山県の「三石耐火煉瓦株式会社」製や、北海道の「昭和窯業」製であり、全国各地から煉瓦を集めていたことがわかった。

日用雑器である湯呑茶碗・湯呑茶碗蓋・飯茶碗・皿・碗などが多く出土している。絵付けされた絵柄については、縁起の良い「海老・鶴・松竹梅・花類」などが好まれている。その他同時期に好まれたものとして「富士山・菊」などがある。富士山柄は岐阜の統制番号食器に多くみられる。

また、終戦後輸出品として洋食器などが作られるようになり、生産会社もロゴについては、アルファベッド表記のものにしている。

その他、電球のソケット・コンセント付きソケットなども素材が磁器となっており、統制食器と同じく素材に制限を受けていたことが伺える。

ガラス製品(ガラス製食器とガラス瓶類)が大量に発見されている。

ガラス瓶類は、医薬品瓶・薬品瓶類・目薬瓶・医療検査用品・靴墨瓶・整髪料瓶・衛生薬品瓶・飲料瓶・歯磨き粉瓶・文具(墨汁瓶・インク瓶・糊瓶)・食品瓶・美容関連瓶などが検出されている。

高崎陸軍病院であったことから、「☆陸軍」のエンボス加工の入った瓶の出土があったこと、多くのバイアル瓶、色々な薬品瓶が出土している。

今回の調査で瓶は、同一器種・大きさ・模様・エンボス加工については代表的なもの1点を抽出して写真で報告するものである。

U.S.A.のバイアル瓶やピール瓶があることから敗戦後の国立高崎病院期の資料と考える。

男性用整髪料のボマードが多く出土している。入院患者が頭髪の身嗜みに気を使っていることがわかる。また、靴磨き瓶があり、革靴のお手入れに気を使っていることがわかる。

女性用クリーム・化粧水瓶が多く出土している。看護師さん等が勤務されており、肌荒れ防止のクリーム・化粧水であったと考える。

入院患者の生活用具で毎日使う、歯磨き粉と歯ブラシが出土している。

文具としてインク瓶・万年筆の出土がある。医師によるカルテを書く為か、患者が手紙を書くものはわからないが、インク瓶の出土は多い。

飲料瓶は、シャンパンサイダー、オレンジジュースなど一般の飲み物の他、ビール・焼酎・ウイス

キーなどの酒瓶が確認されている。これは、病院内で飲まれたか、酒保のものを捨てたかは不明である。

その他、調味料瓶は醤油・塩・ごま塩・味の素・マヨネーズ・トマト瓶が認められる。量的に小サイズのものであり、給食に使う厨房用のものではなく、個人用のものと考える。

食品瓶があるが、雲丹・佃煮海苔・ぶりかけなどご飯の友となるものの出土があった。

ガラスは同じ器種であるが、無色透明のガラスや薄いグリーン、茶色等の色ガラスが存在している。この時期は物資が貴重でガラスも例外ではなく、色々なガラスを溶かして瓶をつくっている。そのため、透明ガラスに色物のガラスが混入すれば色の付いたガラスが出来る。

古い瓶は気泡が入っているのと瓶の表面が平らではなく、歪みがあるのと内面底部が厚みが歪んでいるのが特徴といえる。

ガラス瓶と同一規格で陶器も存在する。化粧品瓶の中にはガラス瓶と同じ形の磁器で作られた瓶もある。これは番号の付いた統制食器で、ガラス瓶の生産にガラスの原材料が滞った時期も存在した可能性がある。

※ウランガラス瓶

ウランガラスとは、極微量のウランを着色材として加えたガラスで、コップ・花瓶・アクセサリーなどが作られている。

ウランガラスかどうかを確認するには、暗闇でガラス製品に紫外線（ブラックライト）を当てると螢光色に発光する性格のものがウランガラスである。

日本でもウランガラスは大正時代から昭和初期までは多く作られていた。日本でウランを産出するのは岡山県（旧上齋原村）人形峠である。日本では第二次世界大戦前で製造を中止している。

今回の瓶類にも暗闇でブラックライトで検証したところ、ウランガラス瓶を確認している。

今回の資料の中で紫外線に反応したものは、2・65・81・100・138・142・151・154・157・161・162・163・172・185・188・189・191・192・193・217・225・226・232・240・241・311の25点である。ガラスの色は無色透明・青透明・緑透明がある。

用途で見てみると2・65・81・100・138・142は薬品瓶、151・154・157は不明瓶、161・162・163・172・185・188・189・191・192・193は飲料瓶である。225・226・232・240・241は食品瓶、217はインク瓶、311は化粧品瓶であり、使用している用途に関係ないことがわかる。

これらの瓶類は本来工芸品のウランガラスとしての作品ではなく、ガラスを再生する中でウランガラスと通常ガラスが混じった再生ガラス瓶と考える。紫外線に反応した色については様々であり、反応が微妙なものもあり、再生ガラスであることが裏付けられる。

高崎城二ノ丸南堀から出土した近代現代の遺物は、昭和11年の高崎陸軍病院の時代には埋められていないが、高崎陸軍病院の絵図にはその堀の位置に7号病棟が存在している。敗戦の昭和20年には堀が埋められており、出土した今回の遺物群は、概ね昭和20年直前から戦後の国立高崎病院の遺物群であることを報告した。

ただし、今回報告する中に新しい遺物が混入している可能性があるが、堀内に深さ1m位にコンクリート道路面が確認できる。このコンクリート上の土は国立高崎病院をコンクリート製建造物に建替えられた時の地表の上に客土したものであり、新しい遺物はこの客土内出土と考えていただきたい。

近世

高崎城の二ノ丸南堀は、発掘調査により明らかになったが歩兵十五連隊が入ることになって二ノ丸

南堀は堀の位置、高さ・幅を一部改修していることが判明した。

また、堀の覆土内には天明3年の浅間山噴火に伴ない降下した軽石層が厚く堆積している。その軽石層の上下に瓦や近世の焼き物の出土が確認されている。軽石層は天明3年(1783)7月8日の時間の判明したもので、出土した遺物に対して同じ時間軸で考えることができる。極めて貴重な遺物群である。

江戸時代の二ノ丸南堀は堀の南西部に僅かな個所が確認されたのみであり、本当の二ノ丸南堀の東立ち上がりという一部分を調査をしただけである。

南堀には障子堀が存在していることを絵図で確認することが出来るが、その痕跡を調査区北西端において確認でき、絵図という記録資料を発掘調査で検証できた成果といえる。

中世

中世遺構としては、1号溝・井戸・墓壙群が検証された。

1号溝は幅1.7m、深さ2m、長さ20mの薬研堀である。「高崎城遺跡22」「高崎城遺跡23」にも薬研堀は認められるものの今回の薬研堀は、それらの堀とは連結するものではなく東西に走る単独のものである。22次・23次調査は堀の中に多くの日常雑器の遺物を含む出土状況であり、周辺で炊事機能が備わっていたことが理解できる。

今回の1号溝の南側は調査区外であり、北側は大きく攪乱されている。その様な中でも北側には渡来銭である「永樂通宝」を出土する中世土壙群が分布しており、この地が墓域的な要素が想定できる。

平安・奈良・古墳時代

住居の重複関係をみると非常に密度の濃い状況を示しており、高崎城二ノ丸南堀と高崎陸軍病院の関係の建物の建て替えが行われていたため古代の遺構面が94%以上破壊されていた。

平安・奈良・古墳時代の遺構は重複関係が多く、竪穴住居の密度が高いもので集落遺跡が長年にわたり存在し続けていることがわかる。

遺構確認面がローム層であり、竪穴式住居は9軒と少ないが、竪穴式住居の床下まで開発が進んでいて実際どの程度の集落が営まれていたかは不明である。出土した須恵器・土師器・灰釉陶器・瓦など大量の出土遺物があり、多くの竪穴住居が存在していた集落遺跡であったことが想像できる。

古代瓦については、高崎城全体から密度の多い少ないはあるが、本調査でも出土があったが18点と少ない。瓦分布の密度としては、「高崎城遺跡23」が一番で本調査地点の北約100mの場所に廢寺の存在の可能性が高く「赤坂廃寺」の存在を指摘したところである。

古墳時代から平安時代の竪穴住居、中世の薬研堀の中から、滑石製品の白玉、剣形など破損品、破片などの出土が多量にあり、滑石工房址であることが把握された。

古墳時代の滑石等玉作工房址について

今回の発掘調査で、滑石等遺物総数5,990点を数える滑石等玉作工房址と考える遺跡を調査した。

群馬県には多くの滑石工房址が存在している。この滑石工房址の検討は、寺村光晴氏の「古代玉作の研究」(1974)で4つの条件が提言され、それ以降、数多くの滑石工房址を調査しているが、調査者はその条件に当てはめて研究している。

ただし、本遺跡で問題になったのは、最初の条件である竪穴住居を滑石工房址として考えられている点である。竪穴住居は工房址そのものではなく、あくまでも滑石が覆土出土であるという点で大きな疑問を持つこととなった。

現在、滑石玉作工房址は群馬県内としては、「三波川変成帶」の北側の鍋川に隣接した個所に 20 数遺跡が存在し、全体としては 33 遺跡が確認されている。

諸先輩たちが今まで調査研究してきた滑石工房址について再検討が必要と考える。

今まででは、四角い竪穴住居を調査することが発掘調査であった。しかし、火山灰降下エリアでは、黒井峯遺跡を代表として当時の地面が、100%残っている点で遺跡における社会復元が大きく見直されている。

竪穴住居の中から多くの滑石が出土した場合、滑石の遺物分布をみてその集中個所を作業個所として滑石工房址が認識されてきた。住居内に作業用ピットという遺構が存在するということも検討しているが具体的に確認されたものはないよう思う。工房とすれば多量の大小・極小の廃棄品（剥片）擦り削りの粉・末粉、等々の事実確認が必要であり、覆土遺物分布と竪穴住居の床直遺物に密着・圧着等の観察が必要である。

しかし、竪穴住居の覆土出土の状況を平面的分布と水平分布をみてみると床直遺物はほぼない状況である。このことは竪穴住居が埋まる途中に住居周辺で行っていた滑石工房址から出たものを竪穴住居に廃棄、あるいは雨等で流入したものであり、竪穴住居内で滑石玉作製作工房を実施していたわけではないことが理解できる。

竪穴住居の廃棄と住居覆土中の未成品廃棄は、次元を異にする内容であり、覆土遺物と床直遺物はイコールとはなり得ないのである。

竪穴住居の年代は、床直出土土器の年代で確定するが、覆土中出土の滑石工房遺物は、あくまでも出土土器の年代を最古と考えるものであり、滑石工房址や滑石製品の年代を決定づけるものではない。

例えば 4 世紀初めの古式土師器を出土する住居内に覆土出土の滑石工房遺物が存在した場合、その竪穴住居が埋没過程の窪んだ状況で、6 世紀初頭の滑石工房址から出たゴミを廃棄したならば、約 200 年誤差が生まれることになる。

また、北側滑石工房址の滑石破片・製品は奈良・平安時代の住居覆土出土であり、これを奈良・平安時代の滑石工房址とはいえない。これは古墳時代の滑石工房の周辺に後の住居が掘られたことによる二次的・三次的な覆土に包含されて出土したものと考える。

住居出土の滑石群はその竪穴住居の周辺の地表における野外工房や地表に直接建築する平地式建物で滑石工房を行ったと考えられ、竪穴住居が滑石工房址とする寺村氏の学説には異なる見解である。

群馬県では、竪穴住居の埋まり切っていない様子を黒井峯遺跡・中筋遺跡・西組遺跡・金井下新田遺跡・金井東裏遺跡などで検証している。竪穴住居の埋まり切っていない窪地は、畑畦や畑の耕起、ゴミ捨て場、道など人工的な要因で使用されている。

また、竪穴住居が土屋根である中筋型竪穴住居が確認され、住居の崩壊過程までもが判明している。

竪穴住居の覆土の最下層に土屋根層の黒色土層を認識する状況に至っている。

現在、従来の研究にはなかった竪穴住居に新たな見解が加わり、竪穴住居覆土についても大きな研究の転換点となっている。

また、竪穴住居が滑石工房址と考えないもう一つの理由は採光であり、竪穴住居内は非常に暗く細

かい仕事をするには、最悪の環境で野天や平地式建物のような採光が十分とれる環境が必要である。

以上のことから滑石玉作工房址を見直すことが必要であり、ここでは竪穴住居を工房址そのものとする考え方による問題提起するものである。

次に滑石工房址にみる滑石母岩のあり方であるが、今まで 10cm 位の拳大のものが各遺跡から発見されている。本遺跡から発見された滑石母岩は、長軸 34.1cm、幅 3.6cm、厚さ 8.7cm、重さ 6.05kg の露頭から採集されたもので、上面は褐色の節理面が残っているが下面は側面からの剥離が数回行われている原石が持ち込まれている。本遺跡内において剥離行為が行われたかはわからないが、今までの滑石工房遺跡の中では最大の母岩である。今まででは、10cm 前後の大きさを選別、あるいは加工して製作址に搬入したと漠然と考えられてきた。今回の母岩は良質の滑石であったことから、あえてその大きさの母岩を滑石工房地内で運び入れたものと考えたい。

滑石については、第 6 章で報告しているが、開発を免れた 2か所の古代の遺構覆土が残るエリアが、滑石工房と係るところである。便宜的に北地点と南地点に分けられるが、この 2か所は攪乱で分断されているだけで、実際は連続していたものと考える。

石材には滑石と片岩系（黒雲母片岩・緑色片岩）・変質流紋岩・碧玉などを利用している。石質を考えるには、出土石器の色調をカラー写真で報告しないと石材の違いを表現できないため、本報告書ではカラー写真により報告した。

また、今まで報告された滑石工房の滑石については、大きくスベスベの石ということで滑石という石材で報告されているが、片岩系の石材も含めて報告している遺跡も存在しているかもしれない。

母岩からの荒削、荒削からの素材剥片、素材からの切断、板状素材作成、板状石材研磨、剣形品・白玉・円板品・勾玉・子持勾玉・紡錘車など石材によって作業内容が違っている。（第 121 図）参照。

作業の場としては、①搬入原石荒削・表皮除去・大きい板状品剥離作業、②材質の吟味の板状剥片作成作業、③形削完成作業、④穴あけ・研磨仕上げ作業の大きく 4 つの作業工程がある。石材ごとにこの作業工程があり、場所は移動しながら実施していると考えられる。

これら、滑石の製作址の時期は、5 号住居出土の須恵器環の年代が T K 208 を最古と考えて、それ以降の 5 世紀後半から 6 世紀にかけての年代観を考えたい。

本調査区から北西へ約 20 m の所に所在する高崎城遺跡第 16 次調査地点では、滑石製の白玉・管玉・勾玉など玉類の制作工房が確認されている。このことから、鳥川治いには滑石製の石製模造品制作工房が点在していて、高崎城遺跡内は一大滑石工房址群となっていたようである。以前調査された滑石は片岩系のものも含めて滑石と呼んでいる可能性もある。

今回、滑石の実測図で表現に困ったものがある。鉄製工具で削った面を削った方向・飛びカンナ状の痕跡について、明確な表現をした前例が見当たらなく、今回は擦痕とは区別するため方向を「縦線」カンナ状を「横線」として格子状の表現とした。

今回は本遺跡の滑石等工房にかかる滑石製品について事実報告と滑石工房についての問題点を指摘した。

戦前から戦後にかけての資料としては一級品であることは言うまでもなく、滑石等玉作工房についても数々の問題定義を行っており、今後『高崎城遺跡 24』はこれらの基礎資料となるものと考える。

（大塚 昌彦）

参考文献

- 『高崎城遺跡』の第1次から第23次発掘調査報告書は表2に掲載しているのでそれを参照
- 高崎市市史編さん室 1996『新編 高崎市史 資料編3 中世1』高崎市
- 高崎市市史編さん室 1999『新編 高崎市史 資料編1 原始古代1』高崎市
- 高崎市市史編さん室 2000『新編 高崎市史 資料編2 原始古代2』高崎市
- 高崎市市史編さん室 2000『新編 高崎市史 資料編11 近代現代3』高崎市
- 高崎市市史編さん室 2002『新編 高崎市史 資料編5 近世1』高崎市
- 高崎市市史編さん室 2003『新編 高崎市史 通史編1 原始古代』高崎市
- 高崎市市史編さん室 2004『新編 高崎市史 通史編3 近世』高崎市
- 高崎市市史編さん室 2004『新編 高崎市史 通史編4 近代・現代』高崎市
- 群馬県文化事業振興会 1970『上野高崎城大意』『群馬県史料集』別巻(1) 古城誌編
- 山崎一 1978『群馬県の古城跡の研究』下巻 群馬県文化事業振興会
- 水野信太郎 1999『日本城瓦史の研究』財團法人 法政大学出版局
- 高崎市 2006『高崎城絵図—櫻井一雄家文書を中心にして』高崎市史資料集1
- 清水豊 2005『高崎藩の考古学—近世城郭、城下町を読み解く』かみつけの里博物館
- 矢島浩 2013『上野国分寺瓦に込められた祈り—住谷コレクションを中心とした古代瓦』かみつけの里博物館
- 石守晃 2013『新町戸崎遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第573集
- 和歌山県教育委員会 2012『道成寺調査報告書』
- 中村茂 2001『歩兵第十五連隊第二兵舎の建築年代について』高崎市史研究13号
- 高崎市史編さん委員会
- 清水豊他 2015『高崎城遺跡22』高崎市教育委員会
- 大塚昌彦他 2016『高崎城遺跡23』高崎市教育委員会・創価学会・株式会社測研
- 川野辺寛 昭和43年『威徳寺』高崎市 p.231
- 国井喜太郎「国民生活用品と美的問題」『工藝ニュース』10巻8号
- 国井喜太郎「国民生活用品展覧會に就いて」『工藝ニュース』10巻6号
- 国井喜太郎「国民生活用品調査資料・集団用食器について」『工藝ニュース』
- 財團法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター 2009年『せともの百年史 -中部地方出土の近代当時 瀬戸・美濃窯の近代3』財團法人瀬戸市文化振興財團埋蔵文化財センター
- 萩谷茂行 2013『統制経済下における陶磁器製品製造、流通の一考察 ーいわゆる「統制番号」に関する検証ー』『瑞浪市歴史資料集』第2集 瑞浪市陶磁資料館
- 滑石工房跡
- 寺村光晴 1966『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 寺村光晴 1974『下總国の玉作遺跡』雄山閣
- 寺村光晴 1966『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館
- 坂井隆 1989『八寸大道上遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 西田健彦 1997『西大室丸山遺跡』群馬県教育委員会
- 常深尚 2003『松原Ⅲ遺跡』玉村町埋蔵文化財発掘調査報告書第57集 群馬県佐波郡玉村町教育委員会
- 小安和順 1989『甘楽条里遺跡』甘楽町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 甘楽町教育委員会
- 真下高幸 1981『温丹遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 梅澤重昭 1964『笛遺跡・鶴川流域における滑石製品出土遺跡の研究』(遺構編)群馬県立博物館研究報告1
- 梅澤重昭 1966『笛遺跡・鶴川流域における滑石製品出土遺跡の研究』(遺物編)群馬県立博物館研究報告2
- 前原豊 1994『発掘者』「2つの石製模造品石材・北関東における古墳時代後期の石製模造品石材の在り方」305 発掘者談話会
- 清水豊 2017『石製模造品からみるぐんまの古墳時代』第26回特別展 かみつけの里博物館
- 蘿原祐一 1955『研究紀要3』『臼玉研究私論』(公財)木原文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 深澤敦人 2001『考古聚英』(群馬県の石製品・石製模造品製作所について)梅澤重昭先生退官記念論文集
- 深澤敦人 1994『行力春名社遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第183集 群馬県教育委員会・(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 鹿沼栄輔 1990『滑石製模造品の製作について』『長根羽田倉遺跡』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第99集 群馬県教育委員会・(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 前原豊 1978『滑石製模造品開闢』『F1竹沼遺跡』群馬県藤岡市教育委員会

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988『田端遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財調査事業団調査報告第9集 群馬県教育委員会
女屋和志雄 1988『第Ⅷ章 館出土の滑石製模造品』『三ツ寺I遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財調査事業団調査報告第8集
群馬県教育委員会・~~群馬県埋蔵文化財調査事業団~~
女屋和志雄 1989『船橋遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財調査事業団調査報告第12集 群馬県教育委員会・~~群馬県埋蔵文化財調査事業団~~
女屋和志雄 1986『下佐野遺跡』上越新幹線関係埋蔵文化財調査事業団調査報告第6集 群馬県教育委員会・~~群馬県埋蔵文化財調査事業団~~
徳江秀夫 1990『新保田中村前遺跡I』~~群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第107集~~ 群馬県教育委員会・~~群馬県埋蔵文化財調査事業団~~

写 真 図 版

写真図版 目次

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 図版 1 高崎城周辺 昭和 24 年米軍撮影空中写真 | 図版 10 1号溝発掘作業状況（東から） |
| 図版 2 昭和 24 年高崎陸軍病院（米軍撮影） | 甕に环で蓋した状態で溝に横位で出土 |
| 高崎城遺跡 24 全景写真 | 甕に环で蓋した状態で溝に横位で出土 |
| 図版 3 調査地東側全景（西から） | 甕に环で蓋した状態で溝に横位で出土 |
| 1号溝周辺遺構集中区全景（航空写真） | 甕に环で蓋した状態で溝に横位で出土 |
| 図版 4 調査地西側全景・高崎城二ノ丸南堀（航空写真） | 甕の内部土を断ち割り観察 |
| 調査地西側全景・高崎城二ノ丸南堀（北から・航空写真） | |
| 図版 5 高崎陸軍歩兵 15 連隊西門出入口 | 図版 11 1・7・8・9号住全景 |
| 高崎陸軍歩兵 15 連隊西門出入口（北から） | 1号住居東半分・中世土壤群（東から） |
| 高崎陸軍歩兵 15 連隊西門出入口（北東から） | 1・7・8・9号住全景 |
| 門扉東石 2か所（東から） | 1号住居焼土層 |
| 門扉東石 2か所（南西から） | 1号溝・2～6号住居全景垂直写真 |
| 門扉東石 | 2号住居土層断面 |
| 南堀道跡（南から） | 2号住居 |
| 南堀壁下の道後（北から） | 図版 12 2・3号住居 |
| 図版 6 排水土管とコンクリート枠 | 3号住居遺物出土状況 |
| 地下埋設管 | 3号住居 1溝南側 |
| 南堀南北土層断面（コンクリート面は旧地表面） | 3号住居 1溝北側 |
| 病院で食べられた貝類（ハマグリ・シジミ） | 3号住居防護壁出土状況 |
| 高崎陸軍病院建物煉瓦壁（イギリス積） | 4・5号住居 |
| 南堀出土のガラス瓶頸 | 4・5号住居 |
| 南堀出土の陸軍食器・高崎陸軍病院食器 | 4号住居貯蔵穴 |
| 図版 7 高崎城二ノ丸南堀（明治以降・江戸期）（南から） | 図版 13 4号住居防護壁出土瓶 |
| 高崎城二ノ丸南堀振り廻し土槽土層断面（南から） | 4号住居・1号溝 |
| 高崎城二ノ丸南堀（明治以降・江戸期）（北から） | 5号住居作業用堅坑 |
| 高崎城二ノ丸南堀土層断面 | 5号住居貼り床断面 |
| 堀切路面を小石・煉瓦片で補修 | 14・15号土坑 |
| 図版 8 高崎城二ノ丸南堀（轍が認められる） | 14号土坑 |
| 深い溝が江戸期の高崎城二ノ丸南堀 | 15号土坑 |
| 江戸期の高崎城二ノ丸南堀 | 図版 14 15号土坑遺物出土状況 |
| 浅間 A 軽石下の瓦出土状況 | 15号土坑遺物出土状況 |
| 江戸期の高崎城二ノ丸南堀土層断面 | 5号住居 |
| 江戸期の高崎城二ノ丸南堀土層断面 | 6号住居 |
| 江戸期の高崎城二ノ丸南堀江戸期の軒平瓦 | 6号住居・16号土坑 |
| 図版 9 1号溝完掘（西から） | 7号住居遺物出土状況 |
| 1号溝・4～6号住居全景（西から） | 8・9号住居全景 |
| 1号溝土層断面（西から） | 図版 15 5号住居柱穴 |
| 1号溝土層断面（東から） | 1号住居覆土内滑石破片包含層状況 |
| 1号溝完掘状況（西から） | 平瓦出土状況 |
| | 楕形鍛冶津出土状況 |

羽口出土状況	図版 38 煉瓦（1）
9号住居遺物出土状況	図版 39 煉瓦（2）
鉄斧出土状況	図版 40 煉瓦（3）図版 41 医薬品瓶
1号ビット	図版 42 医薬品瓶
2号ビット	図版 43 ガラス食器・靴墨・整髪料瓶他
3号ビット	図版 44 医薬品・他瓶
図版 16 1号土坑	図版 45 飲料瓶・仁丹瓶・目薬瓶
2号土壤遺物出土状況	図版 46 飲料瓶
2号土壤完掘	図版 47 医療検査用品・歯磨き粉容器・インク瓶・糊瓶
中世土壤群	図版 48 調味料・食品瓶
中世土壤群	図版 49 美容クリーム瓶
1号住居・中世土壤群	図版 50 美容クリーム・化粧水・椿油潤透瓶・陶磁器瓶
2号土壤出土「永楽通宝」	図版 51 近世出土遺物
3号土壤	図版 52 近世瓦 A・B
図版 17 4~7号土壤全量	図版 53 近世瓦 B
4~7号土壤	中世出土遺物
8号土壤	図版 54 1号住居出土遺物
8号土壤	7号住居出土遺物
金属製食器	8号住居出土遺物
図版 18 高崎陸軍病院給食食器 湯呑茶碗 丌	9号住居出土遺物
図版 19 高崎陸軍病院給食食器 丌	2号住居出土遺物
図版 20 高崎陸軍病院給食食器 蓋	3号住居出土遺物
図版 21 高崎陸軍病院給食食器 盆	図版 55 4号住居出土遺物
図版 22 高崎陸軍病院給食食器 小皿 小鉢	5号住居出土遺物
図版 23 ベークライト給食食器	6号住居出土遺物
図版 24 陸軍食器	3号ビット出土遺物
図版 25 統制番号付き食器	図版 56 平安時代出土遺物
図版 26 特殊遺物	古代瓦
図版 27 湯呑蓋・小鉢蓋	図版 57 古墳時代出土遺物
火鉢	図版 58 古墳時代出土遺物（埴輪）
図版 28 湯呑茶碗	弥生時代出土遺物
図版 29 急須	古式土師器
酒器蓋	縄文時代出土遺物
酒器便利	図版 59 南地点 滑石工房址出土遺物（1）
図版 30 丌（身・蓋）	図版 60 南地点 滑石工房址出土遺物（2）
図版 31 飯茶碗・小鉢	図版 61 南地点 滑石工房址出土遺物（3）
図版 32 鉢・皿	図版 62 南地点 滑石工房址出土遺物（4）
図版 33 蓋物・その他陶磁器	図版 63 南地点 滑石工房址出土遺物（5）
図版 34 洋食器	図版 64 北地点 滑石工房址出土遺物（1）
電気開係磁器製品	図版 65 北地点 滑石工房址出土遺物（2）
図版 35 兵営内酒保関連及び周辺店舗名入り食器	図版 66 北地点 滑石工房址出土遺物（3）
図版 36 歯ブラシ	図版 67 北地点 滑石工房址出土遺物（4）
図版 37 歯ブラシ 石製スレート瓦	

4

高崎城周辺 昭和24年米軍撮影空中写真

(国土地理院 所有 米軍撮影 昭和24年(1949)1月5日 整理番号 USA コース番号 R511-No2 写真番号 44)

図版 2



昭和 24 年高崎陸軍病院（米軍撮影）



高崎城遺跡 24 全景写真

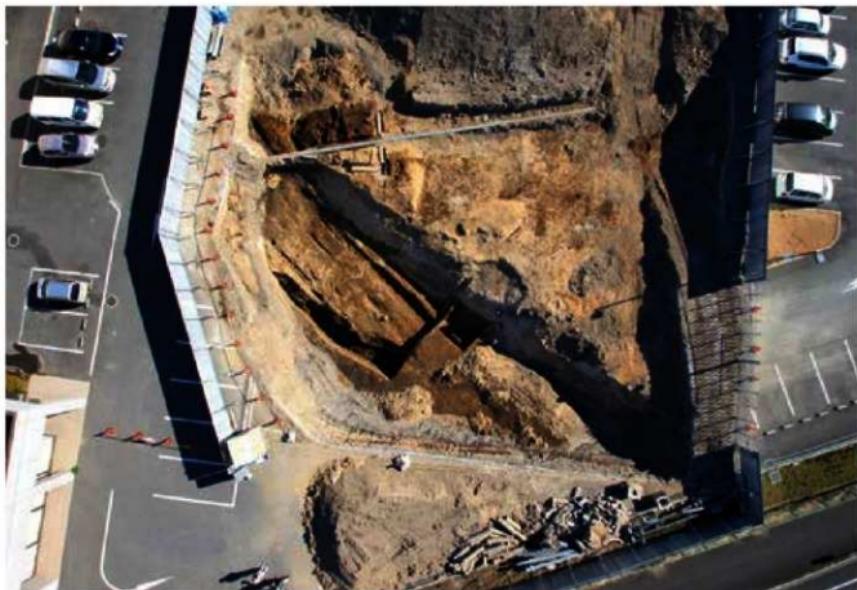


調査地東側全景（西から）



1号溝周辺遺構集中区全景（航空写真）

図版 4



調査地西側全景・高崎城二ノ丸南堀（航空写真）



調査地西側全景・高崎城二ノ丸南堀（北から・航空写真）



高崎陸軍歩兵 15 連隊西門出入口



高崎陸軍歩兵 15 連隊西門出入口（北から）



歩兵第十五連隊西門出入口（北東から）



門扉東石 2 か所（東から）



門扉東石 2 か所（南西から）



門扉東石

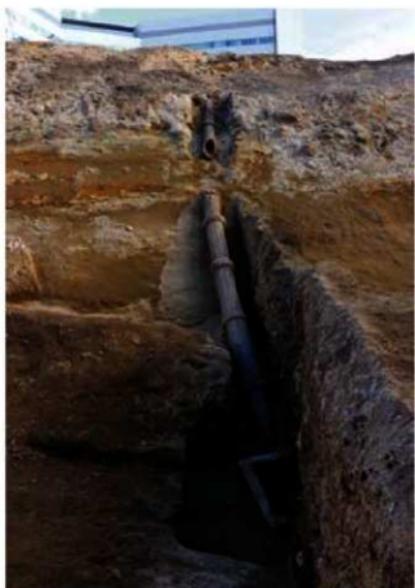


南堀道跡（南から）



南堀壁下の道跡（北から）

図版 6





高崎城二ノ丸南堀（明治以降・江戸期）（南から）



高崎城二ノ丸南堀掘り残し土橋土層断面（南から）



高崎城二ノ丸南堀（明治以降・江戸期）（北から）



高崎城二ノ丸南堀土層断面



堀切路面を小石・煉瓦片で補修

図版 8



高崎城二ノ丸南堀（籠が認められる）



深い溝が江戸期の高崎城二ノ丸南堀



江戸期の高崎城二ノ丸南堀



浅間 A 軽石下の瓦出土状況



江戸期の高崎城二ノ丸南堀土層断面



江戸期の高崎城二ノ丸南堀土層断面



江戸期の高崎城二ノ丸南堀江戸期の軒平瓦



1号溝完掘（西から）



1号溝・4～6号住居全景（西から）



1号溝土層断面（西から）



1号溝土層断面（東から）



1号溝完掘状況（西から）

図版 10



1号溝発掘作業状況（東から）



甕に蓋で蓋した状態で溝に横位で出土



甕に蓋で蓋した状態で溝に横位で出土



甕に蓋で蓋した状態で溝に横位で出土



甕に蓋で蓋した状態で溝に横位で出土



甕の内部土を截ち割り観察



1・7・8・9号住居全景



1号住居東半分・中世土壤群（東から）



1・7・8・9号住居全景



1号住居焼土層



1溝・2～6号住居全景航空写真



2号住居土層断面



2号住居

図版 12



2・3号住居



3号住居遺物出土状況



3号住居1溝南側



3号住居1溝北側



3号住居紡錘車出土状況



4・5号住居



4・5号住居



4号住居貯藏穴



4号住居貯蔵穴出土瓶



4号住居・1号溝



5号住居(東から)



5号住居貼り床断面



14・15号土坑



14号土坑



15号土坑

図版 14



15号土坑遺物出土状況



15号土坑遺物出土状況



5号住居（北から）



6号住居（西から）



6号住居（北から）



6号住居・16号土坑



7号住居遺物出土状況



8・9号住居全景



図版 16



1号土坑



2号土壤遺物出土状況



2号土壤完掘



中世土壤群



中世土壤群



1号住居・中世土壤群



2号土壤出土「永楽通宝」



3号土壤



4~7号土壤全景



4~7号土壤



8号土壤



8号土壤



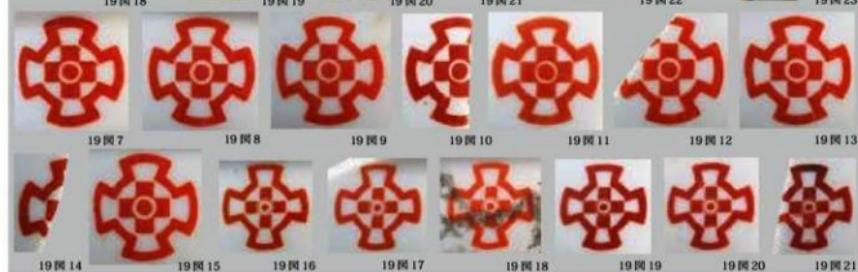
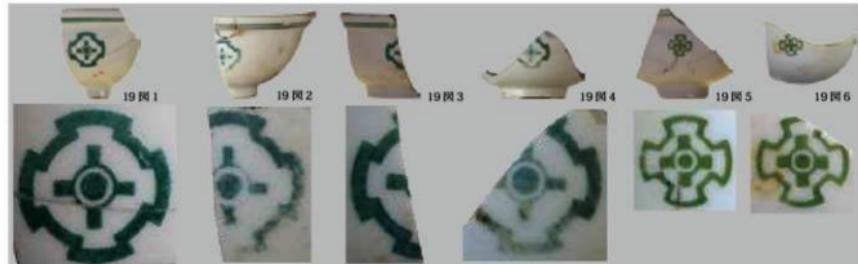
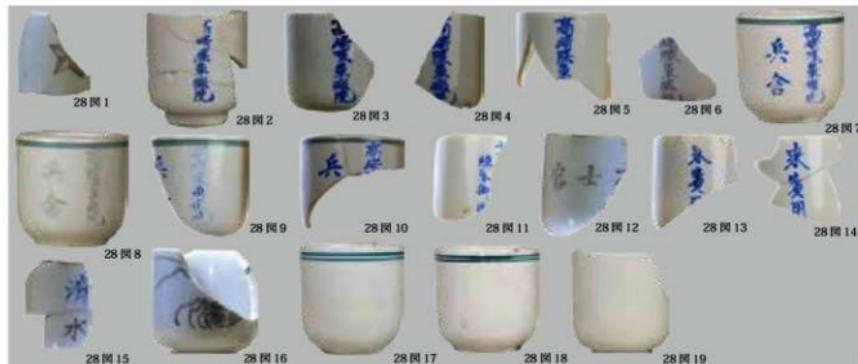
第18図1

第18図2

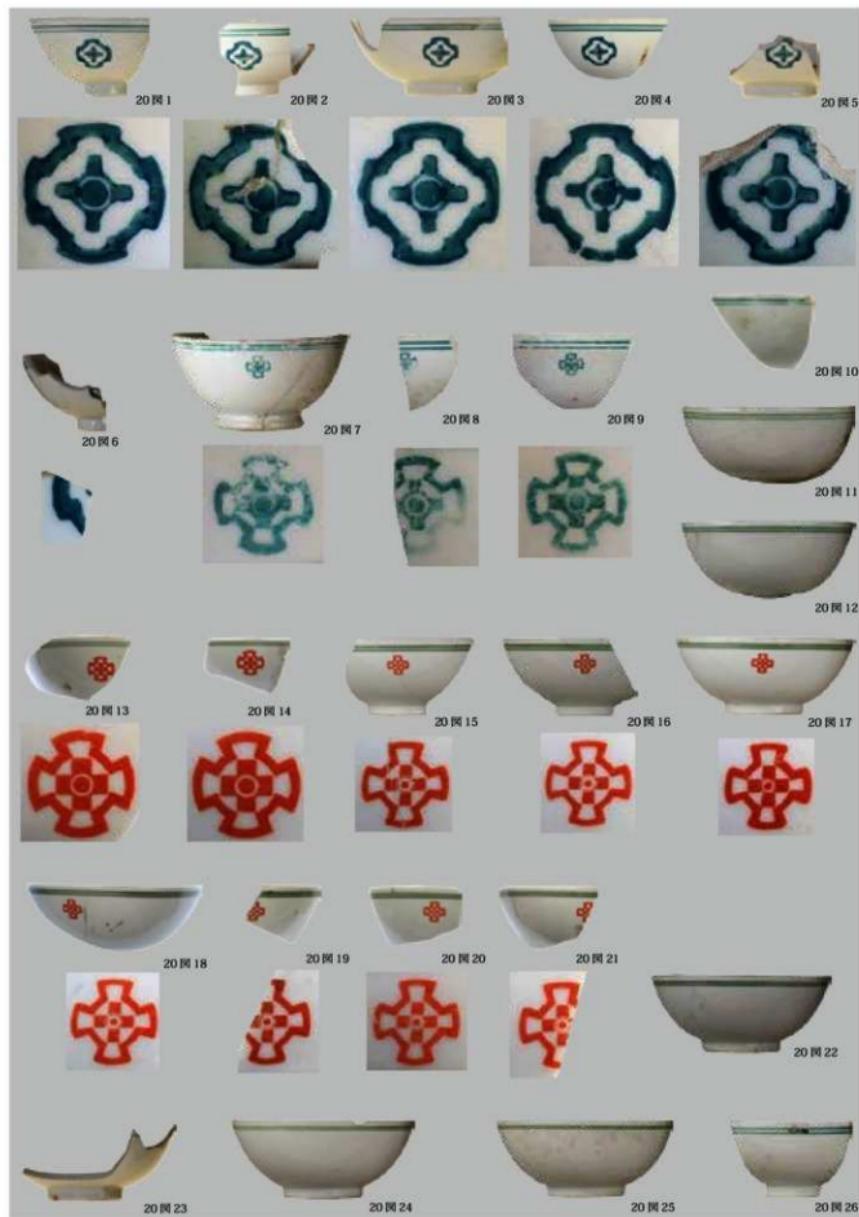
第18図3

金属製食器

図版 18

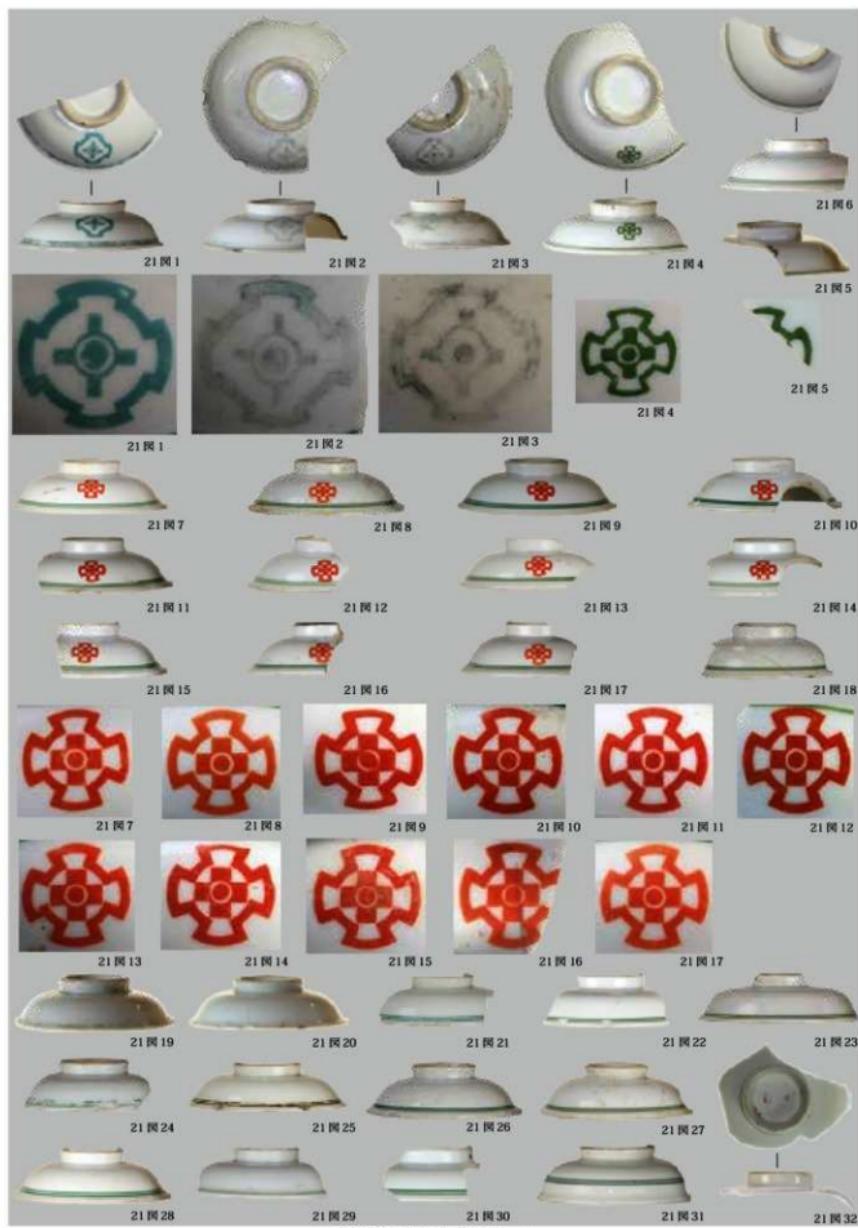


高崎陸軍病院給食器 湯呑茶碗 共

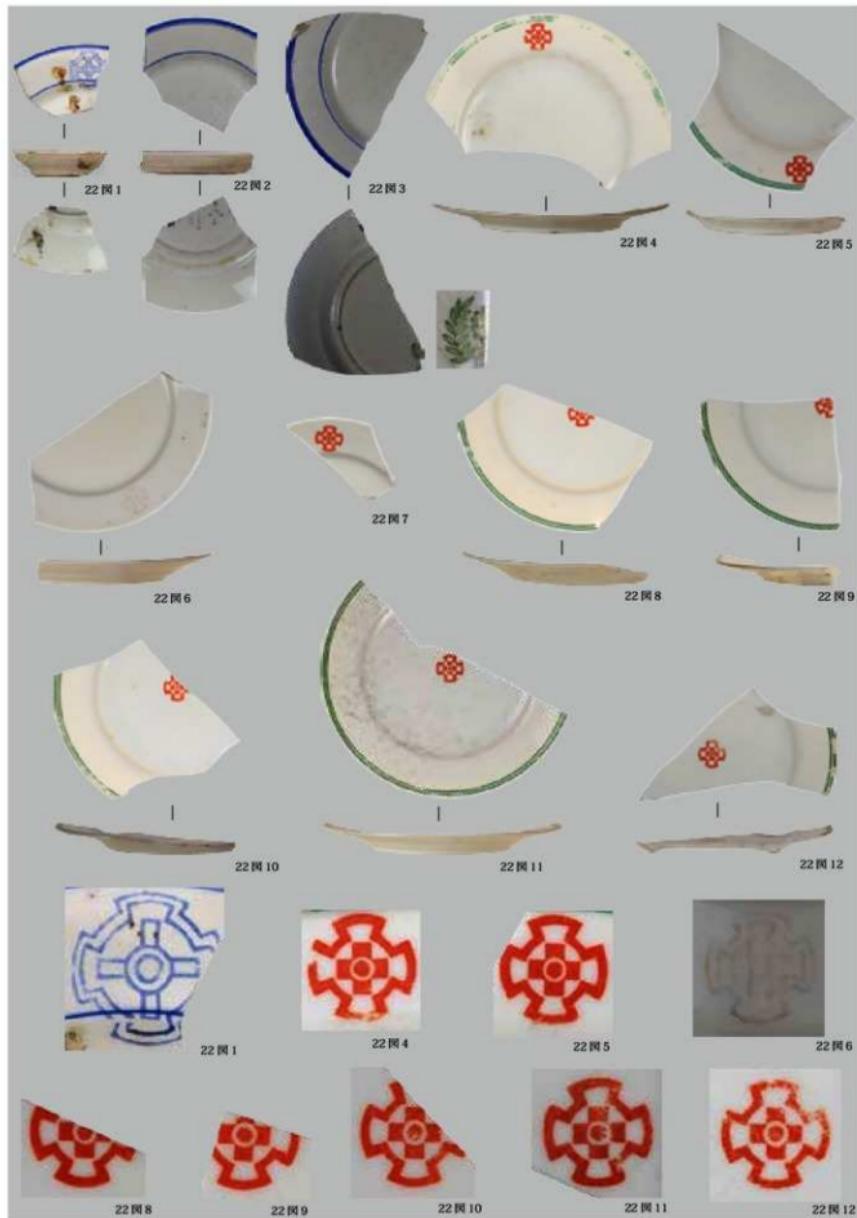


高崎陸軍病院給食食器 共

図版 20

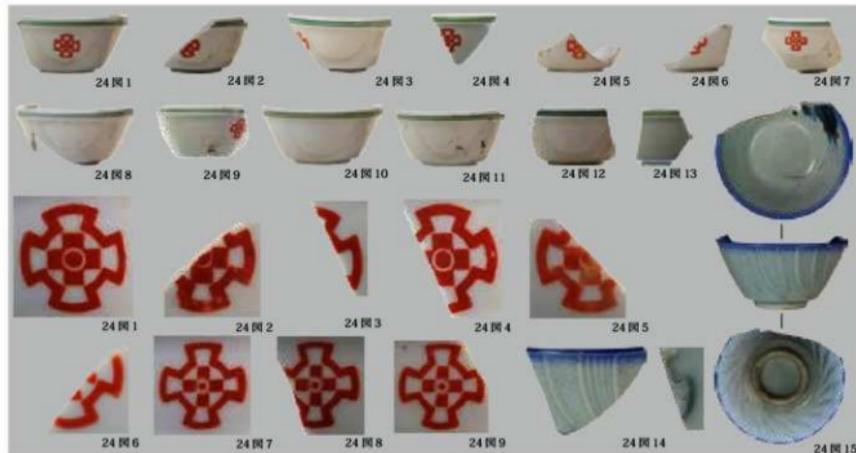
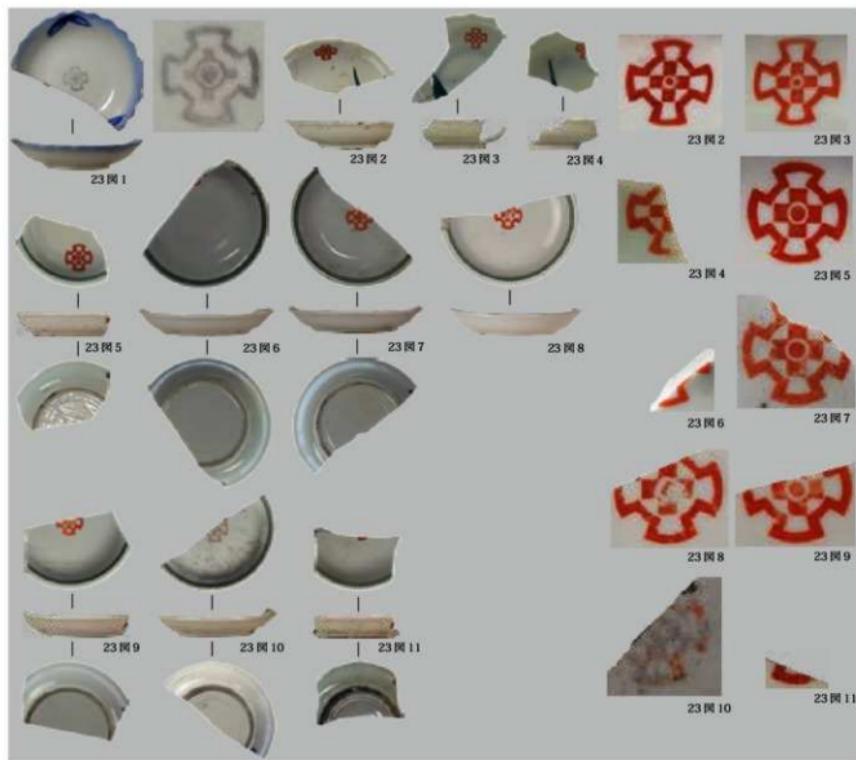


高崎陸軍病院給食器 蓋



高崎陸軍病院給食食器 三

図版 22



高崎陸軍病院給食器 小皿・小鉢



ペークライト給食食器

図版 24



陸軍食器



統制番号付き食器

图版 26



特殊遗物

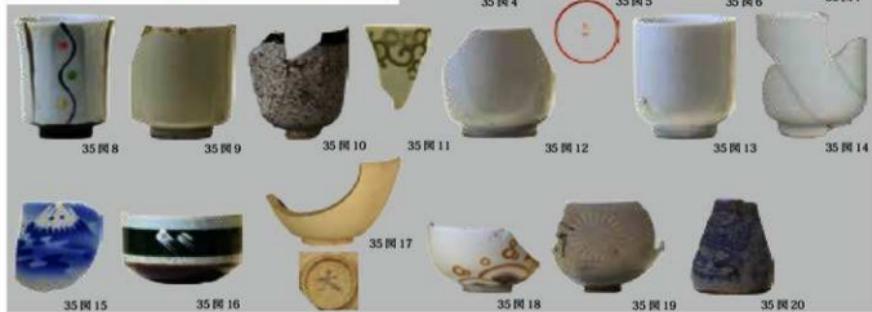


湯呑蓋・小鉢蓋



火鉢

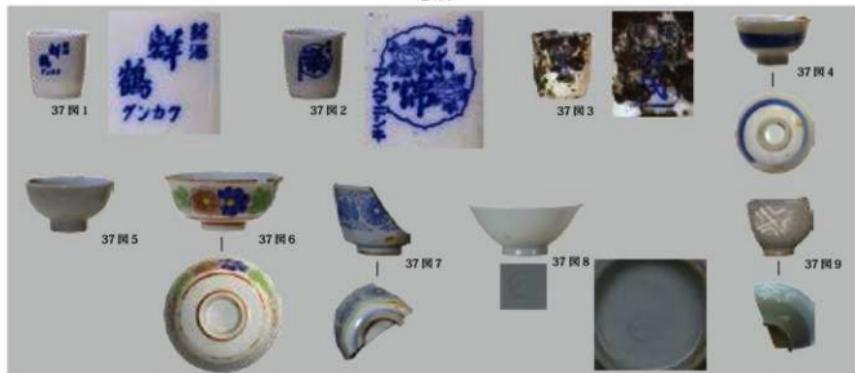
図版 28



湯呑茶碗



急須



酒器盃



酒器徳利

図版 30



井(身・蓋)



飯茶碗・小鉢

図版 32





蓋物・その他陶磁器

図版 34



洋食器



電気関係器製品



兵営内酒保関連及び周辺店舗名入り食器

図版 36

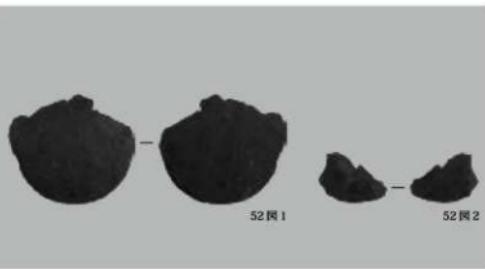


歯ブラシ



47图17

47图20



52图1

52图2

石製スレート瓦



46图1

46图2

46图3

46图4

46图5

46图6

46图7

46图8

46图9



47图10

47图11

47图12

47图13

47图14

47图15

47图16

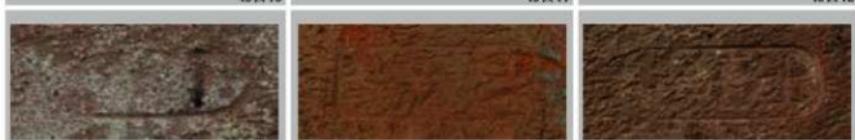
47图17

歯ブラシ

図版 38



煉瓦 (1)



煉瓦（2）

図版 40





医薬品瓶

図版 42



医薬品瓶



ガラス食器・靴墨・整髪料瓶他

図版 44



医薬品・他瓶



飲料瓶・仁丹瓶・目薬瓶



飲料瓶



医療検査用品・歯磨き粉瓶・インク瓶・糊瓶

図版 48



調味料・食品瓶



美容クリーム瓶

図版 50



美容クリーム・化粧水・椿油関連瓶



陶磁器瓶集成



近世出土遺物

図版 52



近世瓦 A・B

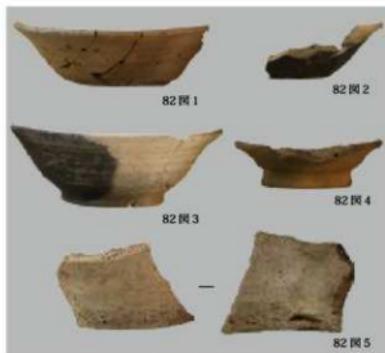


近世瓦 B

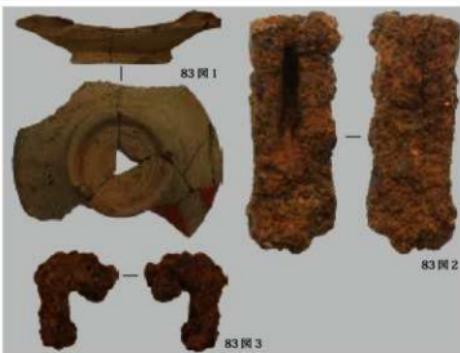


中世出土遺物

图版 54



1号住居出土遗物



7号住居出土遗物



8号住居出土遗物



9号住居出土遗物



88号住居出土遗物



2号住居出土遗物

3号住居出土遗物



4号住居出土遺物



93图14



92图1

92图2

92图3

92图4

92图5

92图6

92图7

92图8



92图9

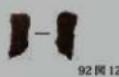


93图15

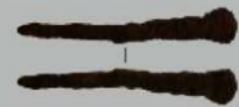


92图10

92图11

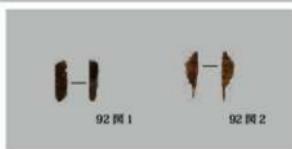


92图12



92图13

5号住居出土遺物



92图1

92图2

6号住居出土遺物



96图1

3号ピット出土遺物

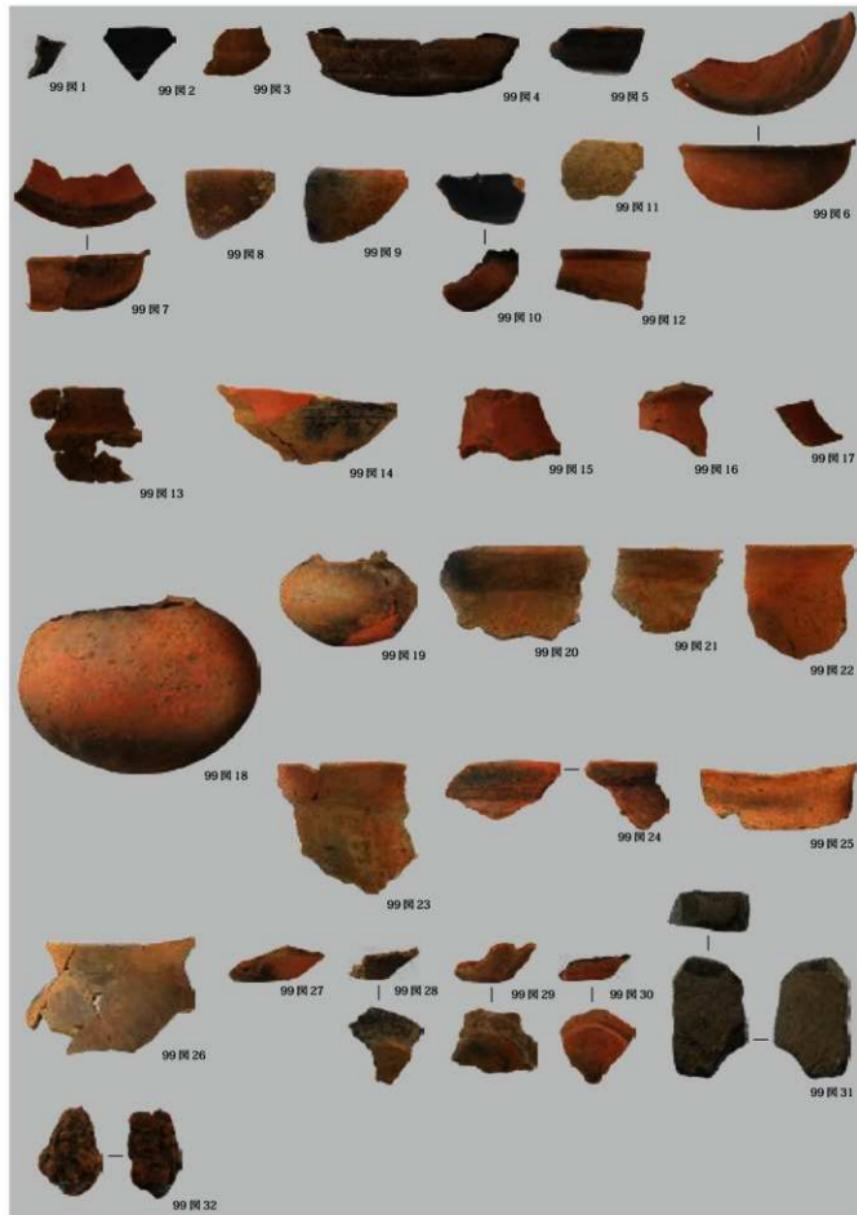
図版 56



平安時代出土遺物

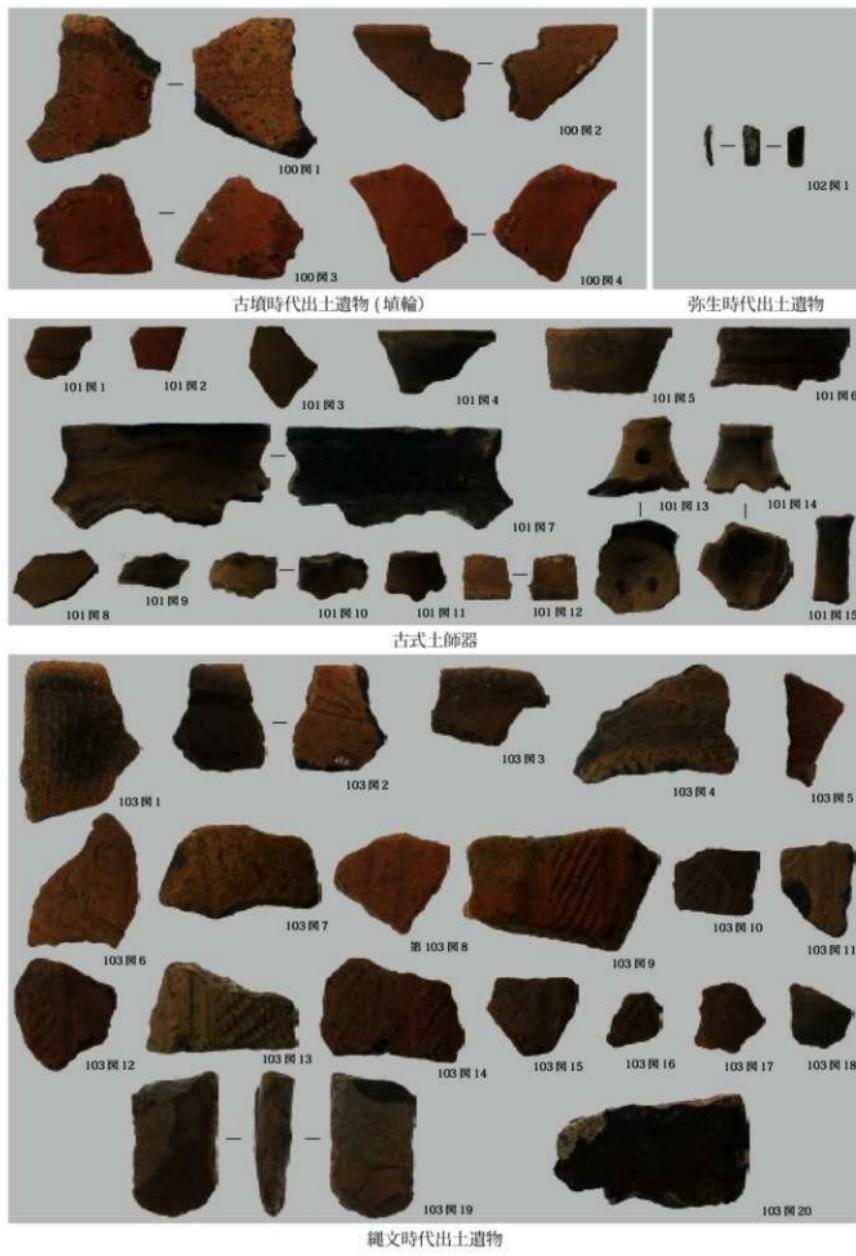


古代瓦



古墳時代出土遺物

図版 58





ノミの痕跡 拡大

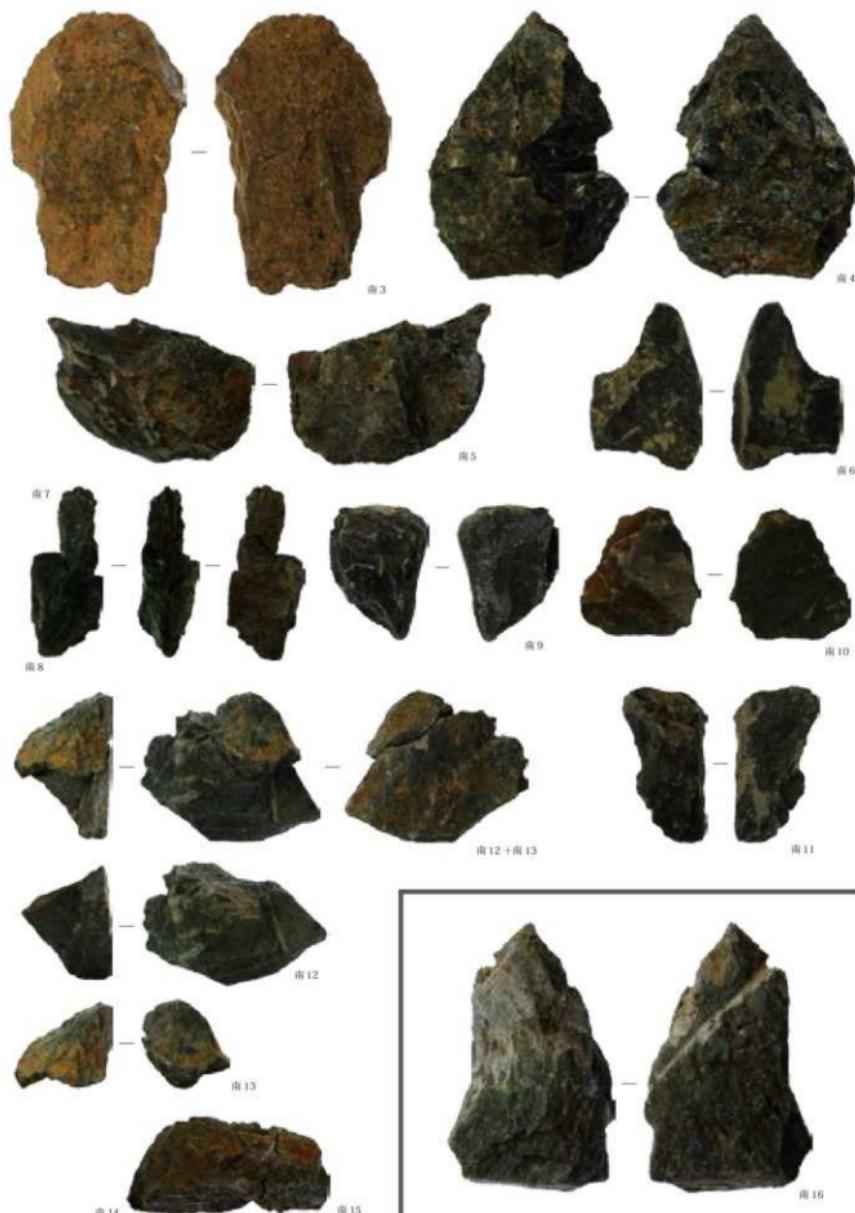


切断 拡大



南地点 滑石工房址出土遺物 (1)

図版 60



南地点 滑石工房址出土遺物 (2)

(1 / 2)

(4 / 5)



図版 62



南地点 滑石工房址出土遺物(4)



南地点 滑石工房址出土遺物(5)





北地点 滑石工房址出土遺物 (2)



北地点 滑石工房址出土遺物(3)



北地点 滑石工房址出土遺物(4)

発掘調査報告書抄録

ふりがな	たかさきじょういせき にじゅうよん							
書名	高崎城遺跡 24							
副書名	独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う発掘調査 高崎陸軍病院・高崎城二ノ丸南堀・和田城・古墳時代滑石玉作工房址							
卷次	第24集							
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 390 集							
編著者名	大塚 昌彦 石井 克己 高橋 敦							
編集機関	株式会社 潤研（文化財研究室）							
所在地	〒370-3517 群馬県高崎市河間町 712-2							
発行年月日	2017年(平成29年)12月20日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所収遺跡名	市町村	遺跡番号					
高崎城遺跡 24	群馬県高崎市高 木山下町 36番地	102020	688	36°32'20"	139°00'10"	2016.11.15 ～2017.2.21	2,266	病院施設建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高崎城遺跡 24	病院	近現代	高崎陸軍病院	軍事統制下の高崎 陸軍病院給食器・ 統制食器・各種陶 磁器・各種ガラス 瓶・ライフル弾殻	高崎陸軍病院の給食食器に高崎陸軍病院のロ ゴが付けられていた。統制食器。ベークライト 給食食器にも国立高崎病院のロゴがつけら れていた。			
	城	近世	高崎城二ノ丸 南堀	陶磁器・瓦	二ノ丸南堀の一部。掘り残し土橋（堀障子遺 構）。			
	城	中世	和田城の溝・ 井戸3基・ 土壙墓群	陶磁器・カワラケ 古銭（永楽通宝）	和田城の墓研磨。			
	集落	平安奈良	堅穴住居 5軒	土師器环・甕 須恵器环・高台付 塊・古代瓦	堅穴住居は床下まで削平されており、残存度 は悪い。			
		弥生		銅鏡・赤色塗彩土器				
		縄文		中期土器・打製石 斧・石皿				

高崎市文化財調査報告書 第390集

高崎城遺跡24

独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う発掘調査

—高崎陸軍病院・高崎城二ノ丸南堀・和田城・古墳時代滑石玉作工房址—

平成29年12月20日 印刷

平成29年12月20日 発行

編集・発行／株式会社 澄 研（文化財研究室）

〒370-3517 群馬県高崎市引間町712-2

TEL 027-372-6464

印刷／朝日印刷工業株式会社